柏北部東地区
埋蔵文化財発掘調査報告書14

― 柏市花前Ⅰ遺跡・駒形遺跡・富士見遺跡
原畑遺跡・寺下前遺跡 ―
縄文時代以降編

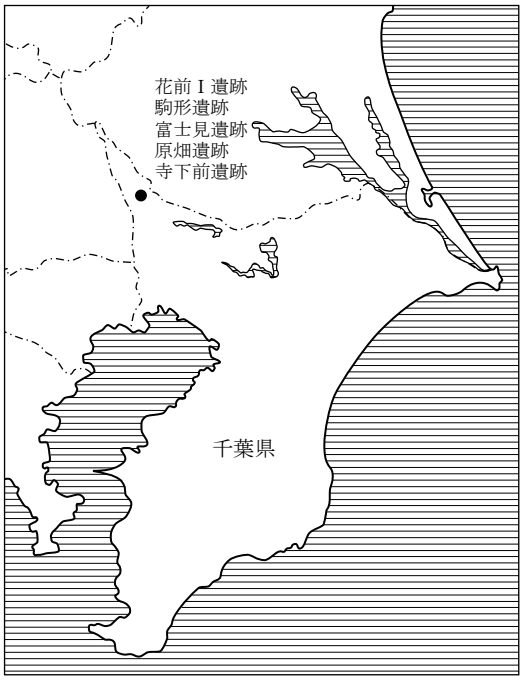
平成30年11月

独立行政法人　都 市 再 生 機 構
公益財団法人　千葉県教育振興財団

柏北部東地区
埋蔵文化財発掘調査報告書14

― 柏市花前Ⅰ遺跡・駒形遺跡・富士見遺跡
原畑遺跡・寺下前遺跡 ―

縄文時代以降編



序　　文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告書第774集として、独立行政法人都市再生機構の柏北部東地区土地区画整理事業に伴って実施した柏市花前Ⅰ遺跡・駒形遺跡・富士見遺跡・原畑遺跡・寺下前遺跡の５遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回報告するのは、上記５遺跡の縄文時代以降の調査成果です。花前Ⅰ遺跡では平安時代の掘立柱建物群、駒形遺跡・富士見遺跡・原畑遺跡では縄文時代の集落にかかわる資料を得ることができるなど、各遺跡からこの地域の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な成果が得られております。

刊行にあたり、本書が学術資料として、また、埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願ってやみません。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成30年11月

公益財団法人　千葉県教育振興財団
理　事　長　平　林　秀　介

凡　　例

1　本書は、独立行政法人都市再生機構による柏北部東地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本書に収録したのは下記の５遺跡の上層の調査成果である。

花前Ⅰ遺跡　　柏市船戸字花前1219－1ほか　（遺跡コード217－040）
駒形遺跡　　柏市小青田字ヤゴ山441ほか　（遺跡コード217－024）
富士見遺跡　　柏市小青田字立山210－2ほか（遺跡コード217－026）
原畑遺跡　　柏市大室265－1ほか　　（遺跡コード217－021）
寺下前遺跡　　柏市大室前畑450－2ほか　　（遺跡コード217－022）

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査および整理作業の期間、担当者などについては第１章に記載した。

5　本書の執筆は平井真紀子が担当した。編集は平井・糸川道行が行った。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構および柏市教育委員会の御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第１図　国土地理院1/25,000地形図「流山」（N1－54－25－1－2）・「守谷」（N1－54－25－1－1）

8　図版１の遺跡周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和48年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した座標は日本測地系に基づく平面直角座標（国家標準直角座標第Ⅸ系）で、図面の方位はすべて座標北である。

10　遺物に付した番号は、平面図・写真図版に共通して使用した。原則として遺構ごとの通し番号を付している。

主要な遺物の出土位置は平面図･断面図に示した。図中に凡例を掲載したものを除いて､土器は「●」､石器は「△」､土製品は「○」､金属製品は「★」で示した。縄文時代の繊維土器は､土器断面に「●」を付した。

11　挿図に使用した線、スクリーントーンの用例は、図中に凡例を掲載したものを除いて、次のとおりである。

硬化面　　焼土範囲　　貝ブロック　　粘土

12　表類については、第１章に関わるものを除いて、第７章　まとめの前に一括して掲載した。

本　文　目　次

序　文
凡　例
第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査の概要…… 1
　　１　調査の経緯と経過…… 1
　　２　調査・整理の方法と概要…… 4
　第２節　遺跡の位置と環境…… 4
　　１　遺跡の位置と地理的環境…… 4
　　２　周辺の遺跡…… 4
第２章　花前Ｉ遺跡…… 11
　第１節　遺跡の概要…… 11
　第２節　縄文時代…… 12
　　１　竪穴住居…… 12
　　２　遺構外出土遺物…… 37
　第３節　奈良・平安時代…… 43
　　１　掘立柱建物…… 43
　　２　土坑…… 48
　　３　ピット…… 60
　　４　溝状遺構…… 63
　第４節　近世…… 66
　　１　鍛冶工房…… 66
　　２　土坑…… 66
　　３　炉…… 67
　　４　柵列…… 67
　　５　ピット…… 67
　　６　道路状遺構…… 67
　　７　遺物…… 70
第３章　駒形遺跡…… 73
　第１節　遺跡の概要…… 73
　第２節　縄文時代…… 74
　　１　竪穴住居…… 74
　　２　炉…… 76
　　３　土坑…… 76
　　４　ピット…… 78
　　５　遺構外出土遺物…… 80

第４章　富士見遺跡…… 82
第１節　遺跡の概要…… 82
第２節　縄文時代…… 82
１　竪穴住居…… 82
２　土坑…… 96
３　遺構外出土遺物…… 101
第３節　中・近世以降…… 101
第５章　原畑遺跡…… 104
第１節　遺跡の概要…… 104
第２節　縄文時代…… 104
１　竪穴住居…… 104
２　土坑…… 108
３　遺構外出土遺物…… 108
第３節　中・近世以降…… 111
１　遺構…… 111
２　遺物…… 115
第６章　寺下前遺跡…… 116
第１節　遺跡の概要…… 116
第２節　中・近世以降…… 116
１　遺構…… 116
２　遺物…… 119
第７章　まとめ…… 127
第１節　縄文時代の集落…… 127
第２節　奈良・平安時代以降…… 128
１　奈良・平安時代の遺構…… 128
２　中・近世の遺構…… 131
報告書抄録…… 巻末

挿図目次

第１図　遺跡位置と周辺遺跡・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第２図　柏北部東地区遺跡群位置図・・・・・・・・・ 3
第３図　グリッド分割図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第４図　花前Ⅰ遺跡遺構分布図・・・・・・・・・・・・・ 11
第５図　(1)SI－001①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
第６図　(1)SI－001②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
第７図　(1)SI－001③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
第８図　(1)SI－001④・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
第９図　(1)SI－001⑤・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
第10図　(1)SI－001⑥・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
第11図　(1)SI－001⑦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
第12図　(1)SI－002①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第13図　(1)SI－002②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
第14図　(1)SI－002③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第15図　(1)SI－002④・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
第16図　(1)SI－003①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
第17図　(1)SI－003②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第18図　(1)SI－003③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
第19図　(1)SI－004①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
第20図　(1)SI－004②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第21図　(3)SI－001①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
第22図　(3)SI－001②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
第23図　(3)SI－002①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第24図　(3)SI－002②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
第25図　(3)SI－003・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
第26図　遺構外出土縄文時代遺物①・・・・・・・・・ 38
第27図　遺構外出土縄文時代遺物②・・・・・・・・・ 39
第28図　遺構外出土縄文時代遺物③・・・・・・・・・ 40
第29図　遺構外出土縄文時代遺物④・・・・・・・・・ 42
第30図　(1)SB－001、(1)SB－002、
　　(1)SK－019、(1)SK－031 ・・・・・・・・・ 44
第31図　(1)SB－003～(1)SB－007
　　・(1)P－3 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
第32図　(1)SB－004～(1)SB－007
　　・(1)P－3 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
第33図　掘立柱建物群周辺遺物出土状況・・・・・ 50
第34図　(1)SB－001～(1)SB－004
　　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
第35図　(1)SB－005～(1)SB－007
　　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
第36図　土坑群①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
第37図　土坑群②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
第38図　土坑群③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
第39図　(1)SK－022、(1)SK－023、
　　(1)SK－028～(1)SK－030、
　　(1)P－15 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第40図　土坑・ピット・溝出土遺物・・・・・・・・・ 62
第41図　遺構外出土奈良・平安時代遺物①・・・ 64
第42図　遺構外出土奈良・平安時代遺物②・・・ 66
第43図　(3)SX－001 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68
第44図　(3)SK－001～(3)SK－008 ・・・・・・・・・ 69
第45図　(3)SA－001、(3)SD－001 ・・・・・・・・・ 70
第46図　土製品・石製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
第47図　中・近世遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
第48図　駒形遺跡(41)・(42)調査位置図・・・・・・ 73
第49図　駒形遺跡遺構分布図・・・・・・・・・・・・・・ 74
第50図　SI－122・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
第51図　SK－162～ SK－171・・・・・・・・・・・・・・ 77
第52図　SK－172、SK－173、P－10～ P－14　79
第53図　P－ 1 ～ P－ 9・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 80
第54図　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81
第55図　富士見遺跡調査範囲・調査区位置図・・ 83
第56図　富士見遺跡遺構分布図・・・・・・・・・・・・・ 84
第57図　SI－121①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
第58図　SI－121②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
第59図　SI－134・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
第60図　SI－135・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88
第61図　SI－136①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
第62図　SI－136②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90
第63図　SI－137・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90

第64図　SI－138①…… 91
第65図　SI－138②…… 92
第66図　SI－139…… 93
第67図　SI－140①…… 94
第68図　SI－140②…… 95
第69図　SI－141①…… 97
第70図　SI－141②…… 98
第71図　SK－449～SK－454、SK－457 …… 99
第72図　SK－455、SK－456、土坑出土遺物・ 100
第73図　遺構外出土遺物…… 102
第74図　SD－001 …… 103
第75図　原畑遺跡遺構分布図・調査区位置図 105
第76図　SI－022①…… 106
第77図　SI－022②…… 107
第78図　SI－023・小山台(88)SI001 …… 109
第79図　SK－009、SK－010 …… 109
第80図　遺構外出土縄文時代遺物①…… 110
第81図　遺構外出土縄文時代遺物②…… 111
第82図　SD－001～SD－005…… 112
第83図　野馬土手、野馬堀１・２…… 113
第84図　野馬土手、野馬堀１…… 114
第85図　中・近世遺物ほか…… 115
第86図　寺下前遺跡遺構分布図…… 117
第87図　土坑①…… 118
第88図　土坑②…… 119
第89図　溝類…… 120
第90図　遺構外出土縄文土器・土製品…… 121
第91図　花前Ⅰ遺跡縄文時代遺構分布図…… 129
第92図　花前Ⅰ遺跡奈良・平安時代
遺構分布図…… 129
第93図　駒形遺跡・富士見遺跡周辺の縄文時代
遺構分布図…… 130

表　目　次

第１表　発掘調査歴…… 5
第２表　遺構一覧…… 5～7
第３表　周辺の主な遺跡…… 8
第４表　貝種組成表…… 123
第５表　貝類計測表…… 124
第６表　花前Ⅰ遺跡製鉄関連遺物
計測表…… 125・126
第７表　花前Ⅰ遺跡銭貨計測表…… 126

図　版　目　次

図版１　遺跡周辺航空写真
花前Ⅰ遺跡
図版２　全景、掘立柱建物群
図版３　縄文時代竪穴住居（１）
図版４　縄文時代竪穴住居（２）、平安時代
掘立柱建物、土坑（１）
図版５　土坑（２）
図版６　土坑（３）、近世炉跡、溝類
図版７　縄文土器（１）
図版８　縄文土器（２）
図版９　縄文土器（３）
図版10　縄文土器（４）
図版11　縄文土器（５）
図版12　縄文土器（６）
図版13　縄文土器（７）
図版14　縄文土器（８）、土製品
図版15　縄文時代石器
図版16　奈良・平安時代土器（１）

図版17　奈良・平安時代土器（２）、金属製品、
土製品、中・近世遺物
駒形遺跡　縄文時代石器

駒形遺跡

図版18　縄文時代竪穴住居、土坑（１）
図版19　土坑（２）、ピット
図版20　縄文土器

富士見遺跡

図版21　縄文時代竪穴住居（１）
図版22　縄文時代竪穴住居（２）、土坑、
道路状遺構
図版23　縄文土器（１）
図版24　縄文土器（２）
図版25　縄文土器（３）
図版26　縄文土器（４）
図版27　縄文土器（５）
図版28　縄文時代石器、その他石器

原畑遺跡

図版29　縄文時代竪穴住居、土坑、近世溝、
野馬土手、トレンチ
図版30　縄文土器（１）
図版31　縄文土器（２）
図版32　縄文土器（３）、石器、中・近世遺物

寺下前遺跡

図版33　土坑、溝状遺構、台地整形
図版34　出土遺物

第１章　はじめに

第１節　調査の概要（第１～３図、第１・２表）

１　調査の経緯と経過

独立行政法人都市再生機構は、常磐新線（つくばエクスプレス）建設に関連して「柏北部東地区土地区画整理事業」を計画した。柏市北部に位置する事業予定地内には、花前Ⅰ遺跡・花前Ⅱ遺跡・花前Ⅲ遺跡・矢船Ⅰ遺跡・矢船Ⅱ遺跡・館林Ⅱ遺跡・富士見遺跡・駒形遺跡・大松遺跡・原畑遺跡・小山台遺跡・寺下前遺跡・宮前遺跡・八反目台遺跡の14遺跡（以下、柏北部東遺跡群とする）が所在する。千葉県教育委員会は都市再生機構とその取り扱いについて協議した結果、現状換地等により現状保存が可能な部分を除き記録保存の措置を講ずることとし、公益財団法人千葉県教育振興財団が委託を受けて発掘調査を実施することとなった。その後、平成26年に事業の見直しが行われて、事業区域が縮小され、寺下前遺跡・八反目台遺跡については事業区域外になった。

本事業に伴い、平成29年度までに13冊の発掘調査報告書を刊行している。今回は下記の５遺跡の上層の調査成果を報告する。

花前Ⅰ遺跡（１）～（３）
駒形遺跡（41）～（42）
富士見遺跡（51）～（59）
原畑遺跡（24）～（29）
寺下前遺跡（３）

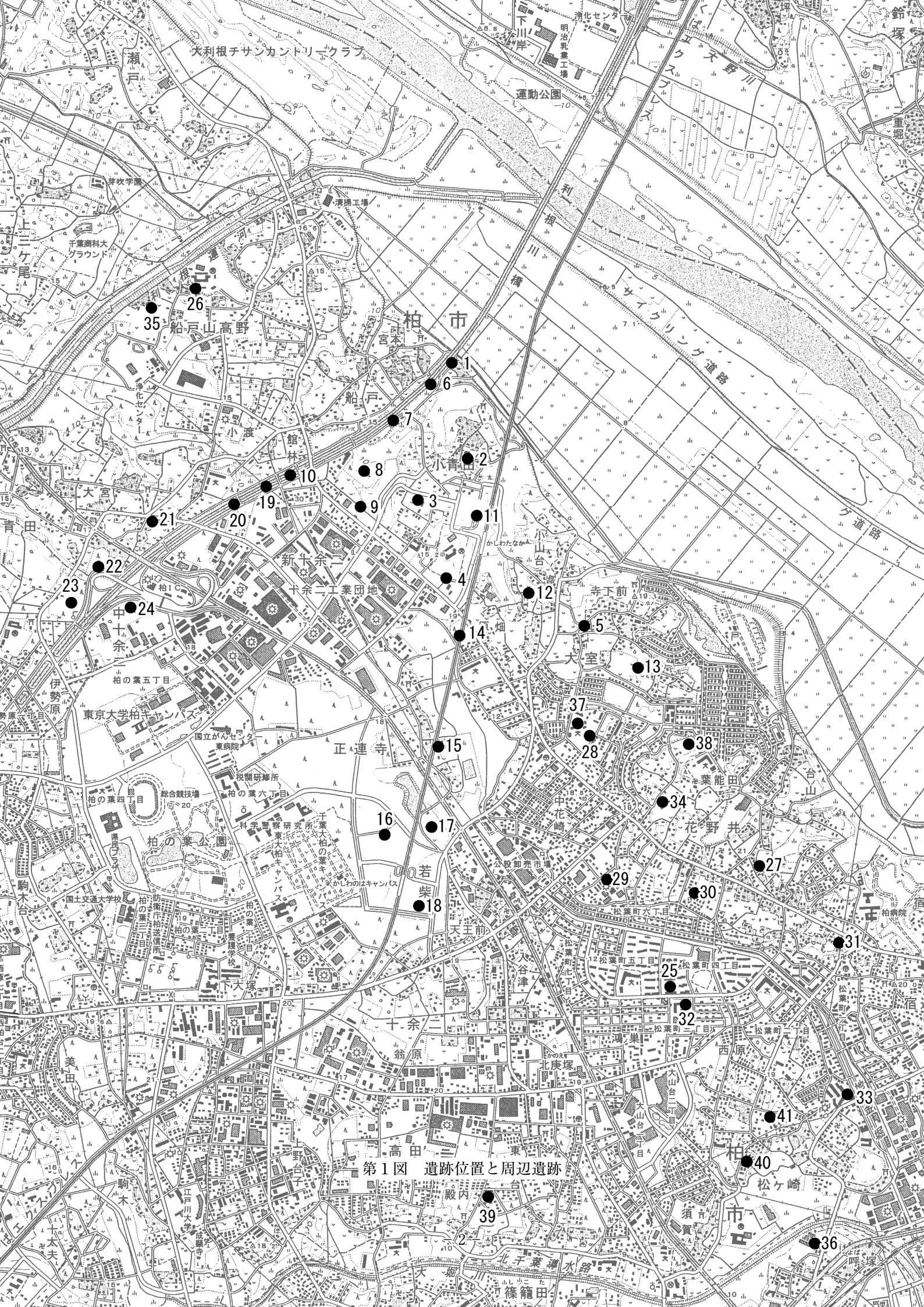
各遺跡の調査期間および担当者は第１表に示した。また、整理の期間・担当者は下記のとおりである。

平成29年度

センター長	上守秀明	
整理課長	田井知二	
担当職員	文化財主事　平井真紀子	
内　　容	花前Ⅰ遺跡（１）～（３）	記録整理～原稿執筆
	駒形遺跡（41）～（42）	記録整理～原稿執筆
	富士見遺跡（51）～（59）	記録整理～原稿執筆
	原畑遺跡（24）～（29）	記録整理～原稿執筆
	寺下前遺跡（３）	記録整理～原稿執筆

平成30年度

センター長	島立　桂	
整理課長	田島　新	
担当職員	上席文化財主事　糸川道行	
内　　容	花前Ⅰ遺跡（１）～（３）	編集・刊行
	駒形遺跡（41）～（42）	編集・刊行
	富士見遺跡（51）～（59）	編集・刊行



第１図　遺跡位置と周辺遺跡

第２図　柏北部東地区遺跡群位置図

原畑遺跡（24）～（29）　　編集・刊行

寺下前遺跡（３）　　編集・刊行

２　調査・整理の方法と概要

発掘調査の開始に当たり、柏北部東地区の調査対象区域全体に公共座標（旧座標　国家標準直角座標第Ⅸ系）を基準とした方眼網を設定した。方眼は40m×40mの区画を大グリッドとし、さらにその大グリッド内を４m×４mに分割し、100個の小グリッドに細分した。大グリッドは西から東へA、B、C、・・・、北から南へ１、２、３、・・・と記号を付け、両者を組み合わせてA1、B2、・・・と呼称した。小グリッドは北西隅を起点として西から東へ00、01、02、・・・、北から南へ00、10、20、・・・と番号を付け、南東隅が99となる（第３図）。これを大グリッドの名称と組み合わせて、例えばY2－84のように表記し、遺構・遺物の位置はこの方眼網に基づいて記録した。

発掘調査はまず上層の確認調査・本調査を行い、続けて下層の確認調査・本調査を実施した。

上層の調査は対象面積の10％を原則にトレンチを設定し、確認調査を行って遺構および遺物の分布状況を把握した上で、本調査範囲を決定して本調査を実施した。遺構の調査は表土除去後、覆土の土層観察用のベルトを設定して掘り下げ、土層断面図や平面図などの記録を作成した。上層の本調査終了後、調査対象面積の２％を原則にグリッドを設定して下層の確認調査を実施した。その結果、一定の石器の分布を認めたものについては、本調査範囲を決定して本調査を実施し、発掘調査を完了した。

遺構番号は調査次ごとに新たに付され、同じ番号の遺構が複数存在するため、花前Ⅰ遺跡・寺下前遺跡については調査次数を示すかっこ付きの算用数字を遺構番号の前に加え、区別した。駒形遺跡・富士見遺跡・原畑遺跡については、既報告書で遺構の種類別に通し番号を振り直しており、その続きの番号とした。また、本書で報告する遺構の略号については、竪穴住居がSI、陥穴・土坑がSK、溝状・道路状遺構などがSD、その他の遺構（遺物集中地点など）をSXとした。なお、溝状・道路状遺構のうち調査次をまたぐものは、調査次ごとに異なる遺構番号を付けた。それらについて新たな遺構番号を付けていないが、本文ではひとつの遺構としてまとめて記述している。

第２節　遺跡の位置と環境（第１・２図、第３表、図版１）

１　遺跡の位置と地理的環境

千葉県北部に展開する広大な洪積台地は「下総台地」と呼称され、大小の河川の浸食により形成された小支谷が入りくみ、複雑な地形をなしている。柏北部東地区遺跡群は、その北西部にあたる柏市北部に位置し、現在の利根川・江戸川水域を介して埼玉・茨城両県に接している。

周辺は、利根川東遷以前は小貝川に合流する古常陸川水系となり、古鬼怒湾に属する古常陸川湾奥部の柏・我孫子低地の北西端にあたり、縄文海進の盛期には古常陸川湾の干潟が形成されていたと考えられる。遺跡群の立地する台地は、北東側は柏・我孫子低地の支谷群、南西は手賀沼・印旛沼低地の支谷である地金堀に挟まれている。

00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10	11								
20		22							
30			33						
40				44					
50					55				
60						66			
70							77		
80								88	
90									99

0　　40m

第３図　グリッド分割図

２　周辺の遺跡

周辺遺跡については、これまで柏北部東地区の報告書が13冊刊行さ

第１表　発掘調査歴

花前Ⅰ遺跡

調査年度	調査地点	調査期間	調査研究部長・(センター長)	課　長	担当者	住　　所	調査対象面積㎡	確認調査面積㎡		本調査面積㎡	
								上層	下層	上層	下層
平成24年度	1	24.04.05-24.06.20	関口達彦	白井久美子	岸本雅人	柏市船戸字花前1219-1ほか	1,762	210	84	1,762	-
平成26年度	2	26.09.09-26.10.16	伊藤智樹	白井久美子	雨宮龍太郎	柏市船戸字花前1214の一部ほか	2,611	546	56	-	-
平成27年度	3	27.12.01-28.01.19	(小久貫隆史)	今泉　潔	白鳥　章			-	-	1,308	-

駒形遺跡

調査年度	調査地点	調査期間	調査研究部長・(センター長)	課　長	担当者	住　　所	調査対象面積㎡	確認調査面積㎡		本調査面積㎡	
								上層	下層	上層	下層
平成26年度	41	26.05.07-26.05.23	伊藤智樹	白井久美子	岸本雅人	柏市小青田字ヤゴ山441の一部	298	298	12	170	0
平成28年度	42	28.08.01-28.08.26	(上守秀明)	蜂屋孝之	及川淳一	柏市小青田字ヤゴ山438の一部ほか	310	310	12	18	0

富士見遺跡

調査年度	調査地点	調査期間	調査研究部長・(センター長)	課　長	担当者	住　　所	調査対象面積㎡	確認調査面積㎡		本調査面積㎡	
								上層	下層	上層	下層
平成23年度	51	23.04.13-23.04.14	及川淳一	橋本勝雄	関口　亮	柏市小青田字立山210-2の一部	122	12	0	0	0
	52	23.06.28-23.07.01			関口　亮	柏市小青田字立山174-1の一部ほか	772	76	12	0	0
	53	23.07.04-23.07.29			関口　亮	柏市小青田字立山225-2ほか	1,448	182	40	148	0
	54	23.08.01-23.08.05			関口　亮	柏市小青田字立山174-6の一部ほか	568	52	12	0	0
	55	23.11.17-23.12.02			関口　亮	柏市小青田字立山175-1の一部ほか	112	112	14	0	55
平成24年度	56	24.05.07-24.05.11	関口達彦	(白井久美子)	山﨑清美	柏市船戸字富士見1387ほか	182	18	4	0	0
平成26年度	57	27.01.19-27.03.10	伊藤智樹	(白井久美子)	岸本雅人	柏市小青田字駒形365-2の一部ほか	707	550	32	475	0
	57-2	27.03.11-27.03.13			岸本雅人	柏市小青田字立山214の一部ほか	249	249	8	0	0
平成27年度	58	27.06.01-27.06.17	(小久貫隆史)	(今泉　潔)	香取正彦	柏市小青田字立山218-2の一部ほか	222	222	12	24	0
	59	28.01.21-28.02.04			白鳥　章	柏市小青田字立山223-1の一部ほか	205	205	12	24	0

原畑遺跡

調査年度	調査地点	調査期間	調査研究部長・(センター長)	課　長	担当者	住　　所	調査対象面積㎡	確認調査面積㎡		本調査面積㎡	
								上層	下層	上層	下層
平成24年度	24	24.09.18-24.10.05	関口達彦	白井久美子	岸本雅人	柏市大室265-1ほか	366	44	16	0	0
平成26年度	25	26.07.01-26.08.18	伊藤智樹	白井久美子	宮　重行	柏市大室字原畑269-1の一部ほか	1,590	280	76	0	0
	26	27.01.29-27.02.27			雨宮龍太郎	柏市小青田字小船新田66の一部ほか	2,445	254	60	0	0
平成27年度	27	28.01.12-28.03.10	(小久貫隆史)	今泉　潔	及川淳一 白鳥　章 矢本節朗	柏市大室字原畑無番地の一部ほか	473	473	28	0	473
平成28年度	28	28.06.24-28.06.30	(上守秀明)	蜂屋孝之	及川淳一	柏市大室字原畑285の一部ほか	17	-	0	17	0
	29	28.08.16-28.09.09			白鳥　章	柏市大室字前畑地先	205	205	-	205	174

寺下前遺跡

調査年度	調査地点	調査期間	(センター長)	課　長	担当者	住　　所	調査対象面積㎡	確認調査面積㎡		本調査面積㎡	
								上層	下層	上層	下層
平成27年度	3	27.06.26-27.08.20	小久貫隆史	今泉　潔	沖松信隆	柏市大室字前畑450-2ほか	427	427	17	427	-

第２表　遺構一覧

花前Ⅰ遺跡(第１次～第３次)

遺構名		旧遺構番号		遺構種別	位置	時期
(1)	SI－001			竪穴住居	Y2－70	縄文
(1)	SI－002			竪穴住居	Y2－74	縄文
(1)	SI－003			竪穴住居	Y3－15	縄文
(1)	SI－004			竪穴住居	Y3－23	縄文
(3)	SI－001			竪穴住居	AA2－50	縄文
(3)	SI－002			竪穴住居	Z2－48	縄文
(3)	SI－003			竪穴住居	Z2－24	縄文
(1)	SB－001			掘立柱建物	Y3－15	奈良・平安
(1)	SB－002			掘立柱建物	Y3－13	奈良・平安
(1)	SB－003			掘立柱建物	Y2－73	奈良・平安
(1)	SB－004			掘立柱建物	Y2－73	奈良・平安
(1)	SB－005			掘立柱建物	Y2－63	奈良・平安
(1)	SB－006			掘立柱建物	Y2－71	奈良・平安
(1)	SB－007			掘立柱建物	Y2－65	奈良・平安
(1)	SK－001			土坑	Z3－85	奈良・平安
(1)	SK－002			土坑	Z3－75	奈良・平安

遺構名		旧遺構番号		遺構種別	位置	時期
(1)	SK－003			土坑	Z3－75	奈良・平安
(1)	SK－004			土坑	Z3－84	奈良・平安
(1)	SK－005			土坑	Z3－73	奈良・平安
(1)	SK－006			土坑	Z3－64	奈良・平安
(1)	SK－007			土坑	Z3－74	奈良・平安
(1)	SK－008			土坑	Z3－73	奈良・平安
(1)	SK－009			土坑	Z3－64	奈良・平安
(1)	SK－010			土坑	Z3－73	奈良・平安
(1)	SK－011			土坑	Z3－73	奈良・平安
(1)	SK－012			土坑	Z3－72	奈良・平安
(1)	SK－013			土坑	Z3－65	奈良・平安
(1)	SK－014			土坑	Z3－64	奈良・平安
(1)	SK－015			土坑	Z3－62	奈良・平安
(1)	SK－016	(1)	SK－018	土坑	Y2－80	奈良・平安
(1)	SK－017	(1)	SK－021	土坑	Y2－91	奈良・平安
(1)	SK－018	(1)	SK－022	土坑	Y2－81	奈良・平安

遺構名		旧遺構番号		遺構種別	位置	時期
(1)	SK－019	(1)	SK－026	土坑	Y3－26	奈良・平安
(1)	SK－020	(1)	SK－027	土坑	Y3－85	奈良・平安
(1)	SK－021	(1)	SK－028	土坑	Y3－84	奈良・平安
(1)	SK－022	(1)	SK－029	土坑	Y2－77	奈良・平安
(1)	SK－023	(1)	SK－030	土坑	Y2－87	奈良・平安
(1)	SK－024	(1)	SK－032	土坑	Y2－63	奈良・平安
(1)	SK－025	(1)	SK－034	土坑	Y2－65	奈良・平安
(1)	SK－026	(1)	SK－037	土坑	Y2－62	奈良・平安
(1)	SK－027	(1)	SK－038	土坑	Y2－71	奈良・平安
(1)	SK－028	(1)	SK－039	土坑	Y2－90	奈良・平安
(1)	SK－029	(1)	SK－040	土坑	Y2－80	奈良・平安
(1)	SK－030	(1)	SK－041	土坑	Y2－80	奈良・平安
(1)	SK－031	(1)	SB－001 P-1	土坑	Y3－14	奈良・平安
(1)	SK－032	(1)	SK－016	土坑	Y2－90	奈良・平安
(1)	SK－033	(1)	SK－017	土坑	Y2－90	奈良・平安
(1)	SK－034	(1)	SK－020	土坑	Y2－91	奈良・平安
(1)	SK－035	(1)	SK－031	土坑	Y3－00	奈良・平安
(1)	SK－036	(1)	SX－001	土坑	Y2－90	奈良・平安
(1)	P－1	(1)	P－001	ピット	Y2－90	奈良・平安
						(1)P-2は欠番(SB-006のP8)
(1)	P－3	(1)	P－003	ピット	Y2－81	奈良・平安
(1)	P－4	(1)	P－007	ピット	Y2－72	奈良・平安
(1)	P－5	(1)	P－011	ピット	Y2－92	奈良・平安
(1)	P－6	(1)	P－012	ピット	Y2－80	奈良・平安
(1)	P－7	(1)	P－013	ピット	Y2－81	奈良・平安
(1)	P－8	(1)	P－014	ピット	Y2－92	奈良・平安
(1)	P－9	(1)	P－030	ピット	Y2－93	奈良・平安
(1)	P－10	(1)	P－031	ピット	Y2－83	奈良・平安
(1)	P－11	(1)	P－045	ピット	Y2－75	奈良・平安
(1)	P－12	(1)	P－047	ピット	Y2－75	奈良・平安
(1)	P－13	(1)	P－048	ピット	Y2－73	奈良・平安
(1)	P－14	(1)	P－049	ピット	Y2－73	奈良・平安
(1)	P－15	(1)	P－050	ピット	Y2－98	奈良・平安
(1)	P－16	(1)	P－051	ピット	Y2－65	奈良・平安
(1)	P－17	(1)	P－052	ピット	Y2－75	奈良・平安
(1)	P－18	(1)	P－058	ピット	Y2－82	奈良・平安
(1)	P－19	(1)	P－059	ピット	Y2－72	奈良・平安
(1)	P－20	(1)	P－060	ピット	Y2－72	奈良・平安
(1)	P－21	(1)	P－061	ピット	Y2－72	奈良・平安
(1)	P－22	(1)	P－062	ピット	Y2－72	奈良・平安
(1)	P－23	(1)	P－063	ピット	Y2－72	奈良・平安
(1)	SD－001	(1)	SX-002	溝	Z3－63	奈良・平安
(3)	SK－001			土坑	Z2－24	近世
(3)	SK－002			炉	Z2－33	近世
(3)	SK－003			炉	Z2－45	近世
(3)	SK－004			炉	Z2－56	近世
(3)	SK－005			炉	Z2－21	近世
(3)	SK－006			炉	Z2－21	近世
(3)	SK－007			炉	Z2－22	近世
(3)	SK－008			炉	Z2－56	近世
	SA－001	(3)	P－025	柵列	Z2－16	近世
		(3)	P－026	柵列	Z2－16	近世
		(3)	P－027	柵列	Z2－15	近世
		(3)	P－028	柵列	Z2－15	近世
(3)	P－1			ピット	Z2－44	近世
(3)	P－2			ピット	Z2－44	近世
(3)	P－3			ピット	Z2－44	近世
(3)	P－4			ピット	Z2－44	近世
(3)	P－5			ピット	Z2－43	近世
(3)	P－6			ピット	Z2－43	近世
(3)	P－7			ピット	Z2－33	近世
(3)	P－8			ピット	Z2－33	近世
(3)	P－9			ピット	Z2－34	近世
(3)	P－10			ピット	Z2－33	近世
(3)	P－11			ピット	Z2－33	近世
(3)	P－12			ピット	Z2－33	近世
(3)	P－13			ピット	Z2－34	近世

遺構名		旧遺構番号		遺構種別	位置	時期
(3)	P－14			ピット	Z2－34	近世
(3)	P－15			ピット	Z2－34	近世
(3)	P－16			ピット	Z2－33	近世
(3)	P－17			ピット	Z2－23	近世
(3)	P－18			ピット	Z2－23	近世
(3)	P－19			ピット	Z2－23	近世
(3)	P－20			ピット	Z2－23	近世
(3)	P－21			ピット	Z2－43	近世
(3)	P－22			ピット	Z2－23	近世
(3)	P－23			ピット	Z2－43	近世
(3)	P－24			ピット	Z2－24	近世
(3)	P－29			ピット	Z2－14	近世
(3)	P－30			ピット	Z2－13	近世
(3)	P－31			ピット	Z2－34	近世
(3)	P－32			ピット	Z2－34	近世
(3)	P－33			ピット	Z2－34	近世
(3)	SD－001			道路状遺構	Z1－82	近世
(3)	SX－001			鍛冶工房	Z2－24	近世

駒形遺跡(第41次～第42次)

遺構名		旧遺構番号		遺構種別	位置	時期
	SI－122	(42)	SI－001	竪穴住居	DD11－38	縄文
	SK－162	(41)	SK－001	炉	DD12－34	縄文
	SK－163	(41)	SK－002	炉	DD12－43	縄文
	SK－164	(41)	SK－003	炉	DD12－44	縄文
	SK－165	(41)	SK－004	炉	DD12－43	縄文
	SK－166	(41)	SK－005	炉	DD12－34	縄文
	SK－167	(41)	SK－006	炉	DD12－34	縄文
	SK－168	(41)	SK－007	炉	DD12－34	縄文
	SK－169	(41)	SK－008	土坑	DD12－44	縄文
	SK－170	(41)	SK－009	炉	DD12－43	縄文
	SK－171	(41)	SK－010	土坑	DD12－17	縄文
	SK－172	(41)	SK－011	土坑	DD12－18	縄文
	SK－173	(41)	SK－012	土坑	DD12－17	縄文
	P－1	(41)	P－001	ピット	DD12－35	縄文
	P－2	(41)	P－002	ピット	DD12－35	縄文
	P－3	(41)	P－003	ピット	DD12－25	縄文
	P－4	(41)	P－004	ピット	DD12－26	縄文
	P－5	(41)	P－005	ピット	DD12－26	縄文
	P－6	(41)	P－006	ピット	DD12－26	縄文
	P－7	(41)	P－007	ピット	DD12－26	縄文
	P－8	(41)	P－008	ピット	DD12－26	縄文
	P－9	(41)	P－009	ピット	DD12－26	縄文
	P－10	(41)	P－010	ピット	DD12－27	縄文
	P－11	(41)	P－011	ピット	DD12－18	縄文
	P－12	(41)	P－012	ピット	DD12－18	縄文
	P－13	(41)	P－013	ピット	DD12－18	縄文
	P－14	(41)	P－014	ピット	DD12－18	縄文

富士見遺跡(第51次～第59次)

遺構名		旧遺構番号		遺構種別	位置	時期
	SI－121	(57)	SK－002	竪穴住居	V18－67	縄文
		(57)	SK－008		V18－66	
		(57)	P－001		V18－67	
		(57)	P－002		V18－67	
		(57)	P－003		V18－67	
		(57)	P－004		V18－67	
		(57)	P－005		V18－67	
		(57)	P－006		V18－67	
		(57)	P－008		V18－67	
		(57)	P－009		V18－67	
		(57)	P－010		V18－67	
		(57)	P－011		V18－67	
		(57)	P－012		V18－67	
		(57)	P－013		V18－66	
	SI－134	(57)	SI－004	竪穴住居	V18－35	縄文

遺構名		旧遺構番号		遺構種別	位置	時期
	SI－135	(57)	SI－003	竪穴住居	V18－47	縄文
	SI－136	(57)	SI－002	竪穴住居	V18－39	縄文
	SI－137	(57)	SK－001	竪穴住居	W18－40	縄文
	SI－138	(57)	SI－001	竪穴住居	W18－50	縄文
	SI－139	(57)	SI－005	竪穴住居	W18－58	縄文
	SI－140	(58)(59)	SI－001	竪穴住居	W19－67	縄文
	SI－141	(53)	SI－001	竪穴住居	X19－73	縄文
	SK－449	(57)	SK－006	土坑	V18－16	縄文
	SK－450	(57)	SK－005	土坑	V18－16	縄文
	SK－451	(57)	SK－004	土坑	V18－17	縄文
	SK－452	(57)	SK－003	土坑	V18－28	縄文
	SK－453	(57)	SK－007	土坑	W18－50	縄文
	SK－454	(59)	SK－001	土坑	W19－56	縄文
	SK－455	(58)	SK－002	土坑	W19－66	縄文
	SK－456	(58)	SK－001	土坑	W19－66	縄文
	SK－457	(53)	SK－001	土坑	W20－05	縄文
	SD－001	(57)	SD－001	道路状遺構	V18－77	中・近世

原畑遺跡（第24次～第29次）

遺構名		旧遺構番号		遺構種別	位置	時期
	SI－022	(28)	SI－001	竪穴住居	EE37－68	縄文
	SI－023	(29)	SI－001	竪穴住居	GG40－13	縄文
	SK－009	(27)	SK－001	土坑	GG38－82	縄文
	SK－010	(29)	SK－001	土坑	GG39－01	縄文
	SD－001	(27)	SD－001	溝状遺構	FF37－86	近世
	SD－002	(27)	SD－002	溝状遺構	FF37－24	近世
	SD－003	(27)	SD－003	溝状遺構	FF37－45	近世
	SD－004	(27)	SD－004	溝状遺構	FF38－18	近世
	SD－005	(29)	SD－001	道路状遺構	GG39－92	近世
	野馬土手	(24)	野馬土手	野馬土手	AA35－95	近世
		(26)	野馬土手	野馬土手	CC32－95	近世
	野馬堀１	(24)	野馬堀１	野馬堀	AA35－95	近世
		(26)	野馬堀１	野馬堀	CC32－96	近世
	野馬堀２	(24)	野馬堀２	野馬堀	AA36－06	近世

寺下前遺跡（第３次）

遺構名		旧遺構番号		遺構種別	位置	時期
(3)	SK－001			土坑	NN35－18	中・近世
(3)	SK－002			地下式坑	NN34－59	中・近世
(3)	SK－003			土坑	NN34－79	中・近世
(3)	SK－004			地下式坑	NN34－78	中・近世
(3)	SK－005			土坑	NN34－59	中・近世
(3)	SK－006			地下式坑	NN34－39	中・近世
(3)	SD－001			溝状遺構	OO32－80	中・近世
(3)	SX－001			台地整形	OO32－80	中・近世

れ、詳しく報告されているので参照していただきたい。時代別概要については『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書１』、縄文時代前期を主とした概要については『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書２』・『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書３』で既述しているため、詳細はそちらに譲る。また、各遺跡の時代性を考慮して、ここでは縄文時代早期から後期の遺跡、古墳時代中期から後期の遺跡、奈良～平安時代の遺跡に絞って記述したい。

縄文時代早期の遺跡については、花前Ⅱ遺跡（６）・中山新田Ⅲ遺跡（23）・駒形遺跡（２）から炉穴が確認され、花前Ⅲ遺跡（７）では撚糸文系縄文土器の包含層・炉穴、水砂Ⅱ遺跡（20）では土坑が発見された。早期後葉の条痕文系土器群の時期になると、山神宮裏遺跡（26）で竪穴住居が発見され、駒形遺跡では集石土坑と集落が発見された。寺下前遺跡（５）・聖人塚遺跡（24）・中山新田Ⅰ遺跡（21）・原遺跡（27）・小山台遺跡（12）・大割遺跡（16）・田中小遺跡（28）でも、条痕文系の時期とみられる炉穴・土坑・ピット群などが発見されている。

縄文時代前期になると集落が増加し、とくに黒浜式期の遺跡が多い。柏北部東地区では、駒形遺跡・富士見遺跡（３）・大松遺跡（11）・原畑遺跡（４）・小山台遺跡・矢船Ⅰ遺跡（８）・矢船Ⅱ遺跡（９）で黒浜式期前後の集落が相次いで発見されている。とくに富士見遺跡では前期に属する竪穴住居が100軒以上も発見されている。このことから周辺の遺跡と合わせて柏北部東地区が前期の拠点的な集落遺跡をもつ地域といえる。

ちなみに地区の周辺でも花前Ⅰ遺跡（１）では黒浜式期から浮島式期の竪穴住居、花前Ⅱ遺跡・花前Ⅲ遺跡では諸磯式期の竪穴住居、山神宮裏遺跡では黒浜式期の竪穴住居、中山新田Ⅲ遺跡では黒浜式期の土坑が発見された。

柏北部東地区の南方の遺跡で黒浜式期の竪穴住居が発見された遺跡をあげると、農協前遺跡（14）・屋敷内遺跡（15）・大割遺跡・須賀井遺跡（17）・原山遺跡（18）・上前留遺跡（29）・香取神社遺跡（30）がある。また、田中小遺跡で前期の竪穴住居・土坑及び貝塚、寺前遺跡（34）・鴻ノ巣遺跡（25）・松ヶ崎Ⅱ遺跡（33）で黒浜式期の竪穴住居と貝塚、原遺跡で黒浜式期から浮島式期の土坑群、北柏遺跡（32）・宿連寺遺跡（31）で

第３表　周辺の主な遺跡

番号	遺　　跡　　名	水系	文　献	番号	遺　　跡　　名	水系	文　献
1	花前Ⅰ遺跡	A	2･17	22	中山新田Ⅱ遺跡	B	2
2	駒形遺跡	A	6･9･12･17	23	中山新田Ⅲ遺跡	B	2
3	富士見遺跡	A	10･11･12･17･47	24	聖人塚遺跡	B	4
4	原畑遺跡	A	7･49･ 50	25	鴻ノ巣遺跡	B	52
5	寺下前遺跡	A	15･17	26	山神宮裏遺跡	B	58
6	花前Ⅱ遺跡(花前Ⅱ-2遺跡)	A	3･15	27	原遺跡	A	32･35
7	花前Ⅲ遺跡(花前Ⅱ-1遺跡)	A	3･15･17	28	田中小遺跡	A	33･37･41･44･48
8	矢船Ⅰ遺跡	A	3･15･17	29	上前留遺跡	C	26･30･39
9	矢船Ⅱ遺跡	A	15･17	30	香取神社遺跡	C	38
10	館林Ⅱ遺跡	B	1･15･17	31	宿連寺遺跡	C	42
11	大松遺跡	A	5･8･13･17	32	北柏遺跡	C	54
12	小山台遺跡	A	14･16･17･48	33	松ヶ崎Ⅱ遺跡	C	59
13	八反目台遺跡	A	15･17	34	寺前遺跡	A	24
14	農協前遺跡	C	19･22	35	高砂遺跡	B	60
15	屋敷内遺跡	C		36	呼塚遺跡	C	25･29･31･34･40･43･46･50
16	大割遺跡	C	20･22	37	田中中学校敷地遺跡	A	28
17	須賀井遺跡	C	20	38	尾井戸遺跡	A	56
18	原山遺跡	C	18･21	39	殿内遺跡	C	57
19	館林遺跡	B	1	40	松ヶ崎見崎遺跡	C	23
20	水砂Ⅱ遺跡	B	1・27･ 36	41	松ヶ崎泉遺跡	C	23･45
21	中山新田Ⅰ遺跡	B	4・37				

※水系は次のとおりとした。
古常陸川湾奥部：柏我孫子低地(水系Ａ)及び三ケ尾低地(水系Ｂ)　手賀印旛沼湾奥部：手賀沼低地(水系Ｃ)
水系の区分は、(財)千葉県文化財センター　1999『千葉県文化財センター　研究紀要　19』による

前期の竪穴住居と貝塚が発見された。

縄文時代中期の遺跡は前期に比べて減少するものの、柏北部東地区では、小山台遺跡・大松遺跡など大規模な集落遺跡がみられる。ともに阿玉台式期～加曽利Ｅ式期を主体とする集落で、両遺跡とも環状集落が発見されている。また、寺下前遺跡では阿玉台式期の集落、原畑遺跡では加曽利Ｅ式期の集落が発見された。

水砂Ⅱ遺跡・中山新田Ⅰ遺跡・中山新田Ⅱ遺跡（22）・田中小遺跡では、阿玉台式期の集落が発見され、聖人塚遺跡でも阿玉台式期の集落及び勝坂式期～中峠式期の集落が発見された。また、高砂遺跡（35）では、五領ケ台式期または阿玉台式期の陥穴が発見され、原遺跡では加曽利Ｅ式期の集落が発見された。

縄文時代後期の遺跡はさらに減少する。柏北部東地区の遺跡群では後期の土器が少量出土しているが、集落は発見されていない。周辺の遺跡では、花前Ⅰ遺跡・花前Ⅱ遺跡・中山新田Ⅰ遺跡で、堀之内式期の竪穴住居が発見されている。

次に古墳時代中期についてみると、柏北部東地区の遺跡では、矢船Ⅰ遺跡・矢船Ⅱ遺跡・花前Ⅲ遺跡・富士見遺跡・寺下前遺跡・原畑遺跡・駒形遺跡で中期の竪穴住居が発見された。このうち矢船Ⅱ遺跡・富士見遺跡では10軒前後の竪穴住居が見つかっている。

古墳時代中期の竪穴住居は、柏北部東地区南方の田中小遺跡･田中中学校敷地遺跡(37)･尾井戸遺跡(38)･鴻ノ巣遺跡でも発見された。また、さらに南方の大堀川流域の呼塚遺跡（36）は弥生時代後期から古墳時代中期まで続く集落遺跡である。同じく大堀川流域の松ヶ崎見崎遺跡（40)･殿内遺跡（39）でも竪穴住居が発見された。

古墳時代後期の遺跡は少ない。柏北部東地区では大松遺跡・八反目台遺跡（13）で竪穴住居が各１軒発見されたのみである。なお、前者の竪穴住居は一部が駒形遺跡にまたがっている。周辺の遺跡では、花前Ⅱ遺跡・花前Ⅲ遺跡・水砂Ⅱ遺跡・田中小遺跡・尾井戸遺跡で竪穴住居が発見されたが、尾井戸遺跡を除いて大きな集落を形成していない。

奈良・平安時代の遺跡は、今回報告する花前Ⅰ遺跡で掘立柱建物・土坑が発見されたが、昭和52年に調査した部分に続くもので、既報告地区からは竪穴住居も発見されている。谷を挟んで南西に隣接する花前Ⅱ遺跡は製鉄工房を含む平安時代の集落である。柏北部東地区の遺跡で竪穴住居が発見されたのは、大松遺跡・駒形遺跡であるが、単独または数軒の発見であり、非常に少ない。

周辺の遺跡で奈良・平安時代の竪穴住居や集落等が発見されたのは、館林遺跡（19）・水砂Ⅱ遺跡・中山新田Ⅱ遺跡・中山新田Ⅲ遺跡・聖人塚遺跡・尾井戸遺跡・北柏遺跡・鴻ノ巣遺跡・呼塚遺跡・松ヶ崎泉遺跡（41）である。このうち水砂Ⅱ遺跡では小鍛冶跡、鴻ノ巣遺跡では製鉄関連の竪穴住居、松ヶ崎泉遺跡でも鍛冶炉のある竪穴住居が発見された。平安時代の遺跡には、製鉄関連の遺構を含む遺跡が目立つ。

近世以降の遺構として、今回花前Ⅰ遺跡から鍛冶遺構が発見された。花前Ⅱ－1遺跡では田中藩の第25代代官だった増田半兵衛の本屋敷跡が確認されており、関連性が窺われる。

第３表　周辺の主な遺跡　参考文献

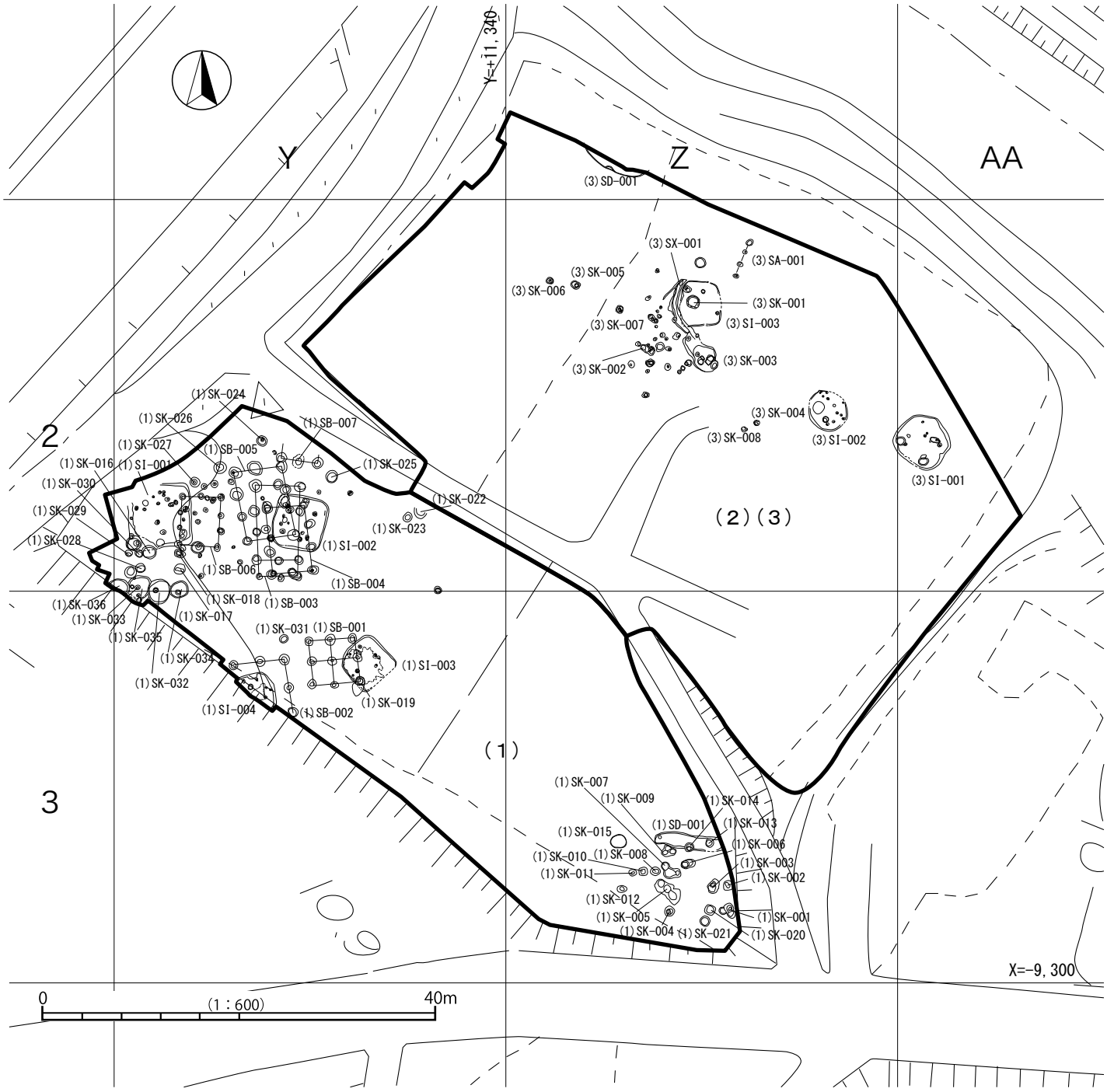
1　鈴木定明・田中　豪ほか　1982『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－館林・水砂・花前Ⅱ－1－』（財）千葉県文化財センター
2　田中　豪・郷堀英司ほか　1984『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・中山新田Ⅲ－』（財）千葉県文化財センター
3　郷堀英司・田井知二ほか　1985『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－花前Ⅱ－1・花前Ⅱ－2・矢船－』（財）千葉県文化財センター
4　田村　隆・原田昌幸ほか　1986『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－元割・聖人塚・中山新田Ⅰ－』（財）千葉県文化財センター
5　落合章雄　2008『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書１－柏市大松遺跡－旧石器時代編』（財）千葉県教育振興財団
6　上守秀明　2009『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書２－柏市駒形遺跡－縄文時代以降編１』（財）千葉県教育振興財団
7　上守秀明ほか　2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書３－柏市原畑遺跡－縄文時代以降編１』（財）千葉県教育振興財団
8　西川博孝・西山太郎ほか　2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書４－柏市大松遺跡－縄文時代以降編１』（財）千葉県教育振興財団
9　上守秀明ほか　2013『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書５－柏市駒形遺跡－縄文時代以降編２』（公財）千葉県教育振興財団
10　大野康男ほか　2014『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書６－柏市富士見遺跡－縄文時代以降編１』（公財）千葉県教育振興財団
11　森本和男・山口典子ほか　2015『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書７－柏市富士見遺跡－縄文時代以降編２』（公財）千葉県教育振興財団
12　新田浩三　2015『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書８－柏市富士見遺跡・原畑遺跡・駒形遺跡－旧石器時代編』（公財）千葉県教育振興財団
13　山口典子ほか　2016『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書９－柏市大松遺跡－縄文時代以降編２』（公財）千葉県教育振興財団
14　新田浩三　2017『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書10－柏市小山台遺跡－旧石器時代編』（公財）千葉県教育振興財団
15　白鳥　章・山口典子ほか　2017『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書11－柏市花前Ⅱ遺跡・花前Ⅲ遺跡・矢船Ⅰ遺跡・矢船Ⅱ遺跡・館林Ⅱ遺跡・寺下前遺跡・八反目台遺跡－縄文時代以降編』（公財）千葉県教育振興財団

16　小林清隆･城田義友　2018『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書12－柏市小山台遺跡Ａ区－縄文時代以降編』(公財)千葉県教育振興財団
17　新田浩三・山岡磨由子　2018『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書13－柏市矢船Ⅰ遺跡・矢船Ⅱ遺跡・駒形遺跡・富士見遺跡・原畑遺跡・花前Ⅰ遺跡・花前Ⅲ遺跡・寺下前遺跡・大松遺跡・小山台遺跡・八反目台遺跡・館林Ⅱ遺跡－旧石器時代編』（公財）千葉県教育振興財団
18　新田浩三　2009『柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書２－柏市原山遺跡－旧石器時代編』（財）千葉県教育振興財団
19　島立　桂　2011『柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書３－柏市農協前遺跡－旧石器時代編』（財）千葉県教育振興財団
20　落合章雄･島立　桂　2012『柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書４－柏市大割遺跡･須賀井遺跡－旧石器時代編』（財）千葉県教育振興財団
21　四柳　隆ほか　2013『柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書５－柏市原山遺跡－縄文時代以降編』（公財）千葉県教育振興財団
22　山田貴久・落合章雄　2015『柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書６－柏市大割遺跡・農協前遺跡－縄文時代以降編』千葉県教育委員会
23　井上文男　1992『柏市埋蔵文化財調査報告書20』柏市教育委員会
24　井上文男　1992『柏市埋蔵文化財調査報告書22』柏市教育委員会
25　間宮正光ほか　1995『柏市埋蔵文化財調査報告書29』柏市教育委員会
26　井上文男・枝川　旬　1996『柏市埋蔵文化財調査報告書31』柏市教育委員会
27　枝川　旬ほか　1997『柏市埋蔵文化財調査報告書33』柏市教育委員会
28　井上文男ほか　2001『柏市埋蔵文化財調査報告書44』柏市教育委員会
29　井上文男　2003『柏市埋蔵文化財調査報告書50』柏市教育委員会
30　井上文男・間宮正光　2006『柏市埋蔵文化財調査報告書54』柏市教育委員会
31　斎藤武士ほか　2008『柏市埋蔵文化財調査報告書62』柏市教育委員会
32　白崎智隆ほか　2010『柏市埋蔵文化財調査報告書67』柏市教育委員会
33　井上文男・間宮正光　2011『柏市埋蔵文化財調査報告書68』柏市教育委員会
34　齋藤　洋・野村浩史ほか　2012『柏市埋蔵文化財調査報告書71』柏市教育委員会
35　渡辺健二ほか　2013『柏市埋蔵文化財調査報告書74』柏市教育委員会
36　中原幹彦ほか　1988『昭和62年度　市内遺跡発掘調査報告書』柏市教育委員会
37　枝川　旬ほか　1989『昭和63年度　市内遺跡発掘調査報告書』柏市教育委員会
38　井上文男・中原幹彦　1991『平成２年度　市内遺跡発掘調査報告書』柏市教育委員会
39　井上文男　1992『平成３年度　市内遺跡発掘調査報告書』柏市教育委員会
40　井上文男ほか　1994『平成５年度　市内遺跡発掘調査報告書』柏市教育委員会
41　吉田　敬・井上文男　1998『平成８年度　市内遺跡発掘調査報告書』柏市教育委員会
42　吉田　敬ほか　1998『平成９年度　市内遺跡発掘調査報告書』柏市教育委員会
43　井上文男・吉田　敬　2002『平成12年度　市内遺跡発掘調査報告書』柏市教育委員会
44　井上文男・吉田　敬　2003『平成13年度　市内遺跡発掘調査報告書』柏市教育委員会
45　井上文男・渡辺健二ほか　2007『平成17年度　市内遺跡発掘調査報告書』柏市教育委員会
46　渡辺健二・高城大輔ほか　2008『平成18年度　市内遺跡発掘調査報告書』柏市教育委員会
47　渡辺健二・高城大輔ほか　2009『平成19年度　市内遺跡発掘調査報告書』柏市教育委員会
48　井上文男ほか　2011『平成21年度　市内遺跡発掘調査報告書』柏市教育委員会
49　井上文男ほか　2011『平成22年度　市内遺跡発掘調査報告書』柏市教育委員会
50　井上文男・高城大輔　2012『平成23年度　市内遺跡発掘調査報告書』柏市教育委員会
51　高城大輔・井上文男　2014『平成24年度　市内遺跡発掘調査報告書』柏市教育委員会
52　高城大輔・井上文男　2015『平成25年度　市内遺跡発掘調査報告書』柏市教育委員会
53　高城大輔・井上文男　2016『平成26年度　市内遺跡発掘調査報告書』柏市教育委員会
54　安藤文一・矢戸三男ほか　1973『北柏遺跡』北柏遺跡発掘調査団
55　古内　茂・矢戸三男ほか　1974『柏市鴻ノ巣遺跡』（財）千葉県都市公社
56　松本　茂ほか　1980『尾井戸遺跡』尾井戸遺跡調査団
57　矢野慎一ほか　1981『殿内遺跡調査報告書』殿内遺跡調査団
58　古宮隆信ほか　1983『山神宮裏遺跡・高野台遺跡』柏市教育委員会
59　枝川　旬ほか　1983『松ヶ崎（Ⅱ）遺跡発掘調査報告』山武考古学研究所
60　寺嶋和秀ほか　1983『千葉県柏市　高砂遺跡　林台遺跡』柏市教育委員会

第２章　花前Ⅰ遺跡

第１節　遺跡の概要（第４図、図版１）

花前Ⅰ遺跡は、利根川右岸の標高約16mの台地上に立地する。南西には、本遺跡との関連が強い花前Ⅱ遺跡が浅い谷を挟んで対峙している。花前Ⅰ遺跡の西側半分は、昭和52年度に常磐自動車道建設に伴う調査が行われ、縄文時代前期の竪穴住居11軒、後期の竪穴住居２軒、土坑4基、奈良・平安時代の竪穴住居



第４図　花前Ⅰ遺跡遺構分布図

25軒、掘立柱建物11棟、土坑２基、地下式坑４基、溝状遺構１条が報告されている（田中　豪・郷堀英司ほか　1984『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ-花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・中山新田Ⅲ-』（財）千葉県文化財センター）。

今回の調査は３次にわたり実施され、縄文時代の竪穴住居７軒、奈良・平安時代の掘立柱建物７棟、土坑36基、ピット23基、溝状遺構１条、近世の鍛冶工房１軒、鍛冶炉７基、土坑１基、柵列１条、道路状遺構１条が検出された。遺構や遺物の分布には偏りが見られ、遺跡北東側の（２）・（３）調査区には奈良・平安時代の遺構は検出されなかった。

第２節　縄文時代

１　竪穴住居

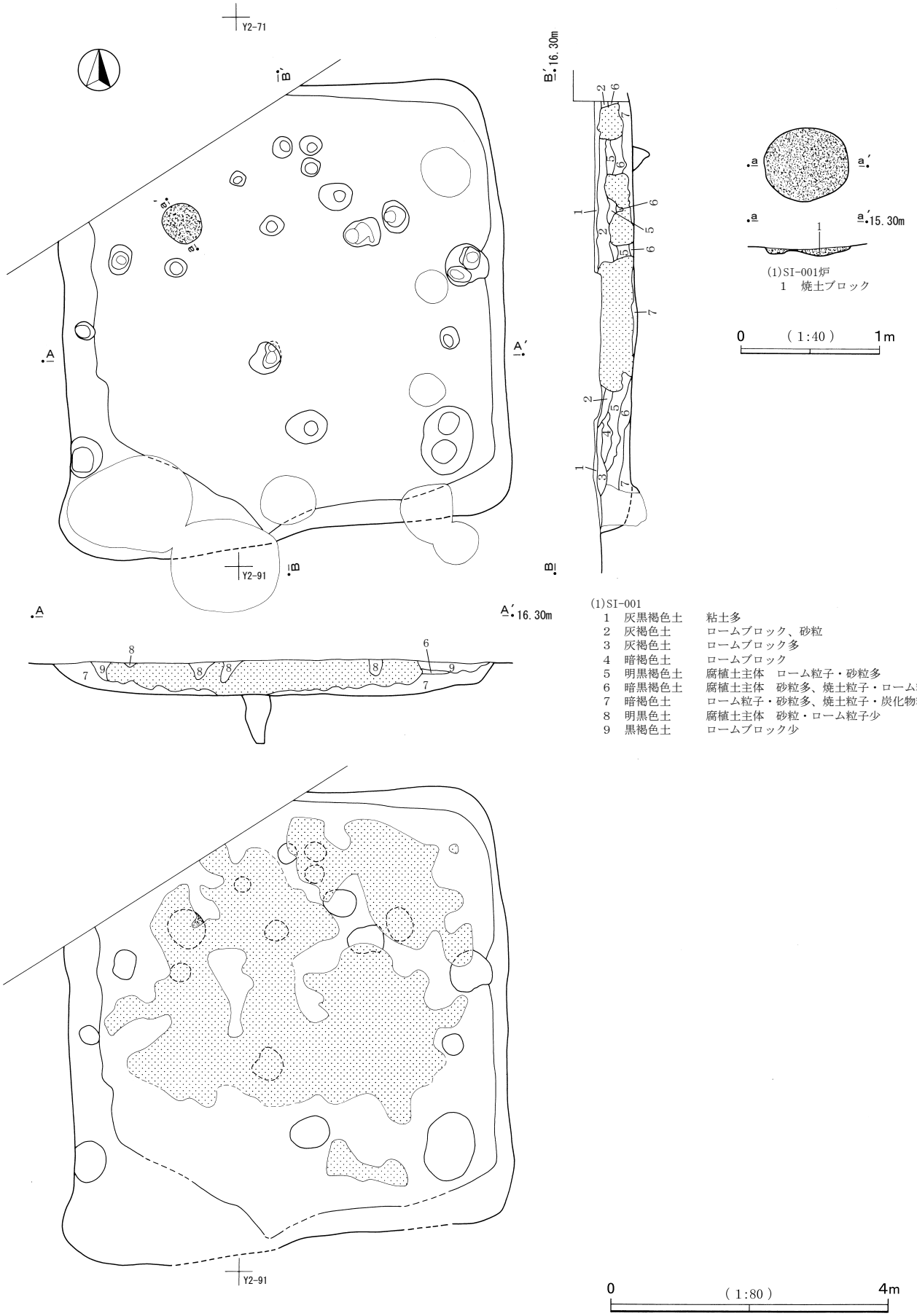
(1)SI－001（第５～11図、図版３・７・９・10・15、第４・５表）

Y2－70付近に位置する。北西隅は調査区外となる。また、南西隅は(1)SK－016と(1)P－7により壊されている。平面形は方形で、規模は6.48m×6.44m、確認面からの深さは43cmである。炉は北西に位置し、規模は60cm×53cm、深さ10cmである。ピットは17基で、床面からの深さは11cm～74cmとばらつきがある。中央付近に位置するピットが最も深く74cm、西壁や炉の周囲にあるピットは比較的浅い。住居廃絶後に遺構内貝層が形成され、現状では複雑に入り組んだブロック状となっている。最大で50cmの厚みがあった。貝種はマガキが最も多く、サルボオ、ハマグリがこれに次ぐ。床面中央からは猪の下顎骨も出土している。

出土土器は黒浜式を主体とし、浮島式、興津式、諸磯式がこれに次ぐ。わずかながら撚糸文系、条痕文系、加曽利Ｅ式もみられる。本竪穴住居の時期は黒浜式の比較的新しい段階である。１～14は結節沈線もしくは連続刺突文が施されるものである。１～３は結節沈線により菱形文が描かれる。１は４単位の波状口縁で、波頂部下に結節沈線が１条垂下し、それを起点として文様が展開する。隣り合う波頂部下の文様は異なっており、一方は弧線、もう一方は菱形文で、あるいは交互に展開するのかもしれない。補修孔が２対みられる。２は１と同一個体の可能性がある。３の口縁部には横位の結節沈線が２条巡り、その下に菱形文が描かれている。４は連続刺突文により鋸歯状文を描出、５は平行沈線を菱形状に施した後、口縁に連続刺突文を加えている。11は結節沈線で区画された無文部に円形刺突文がみられる。

15～19は平行沈線文により文様が描かれるものである。15は胴部が強く屈曲する波状口縁の深鉢で、波頂部に円孔をもつ。平行沈線によって菱形文が描かれ、口縁部と屈曲部に波状沈線が巡る。18は15の胴部と思われる。16・17は同一個体と思われ、斜位の平行沈線文と口縁部に波状沈線が巡る。19は平縁の深鉢で、平行沈線により菱形文が施された後、口縁部に２条、胴部中位と下位に１条ずつ結節沈線が施される。20～47は沈線文の土器である。20は連弧文、23は鋸歯状の沈線文が描かれる。24は口径11.5cmと推定される波状口縁の小型の深鉢で、鋸歯状の沈線文が２段施され、胴部下位に結節沈線が巡る。菱形文を意識した文様かもしれない。25～31・33～37・44・45は葉脈文、32・38～41は斜格子状の沈線文、42・43は櫛歯状工具によるコンパス文が施されている。

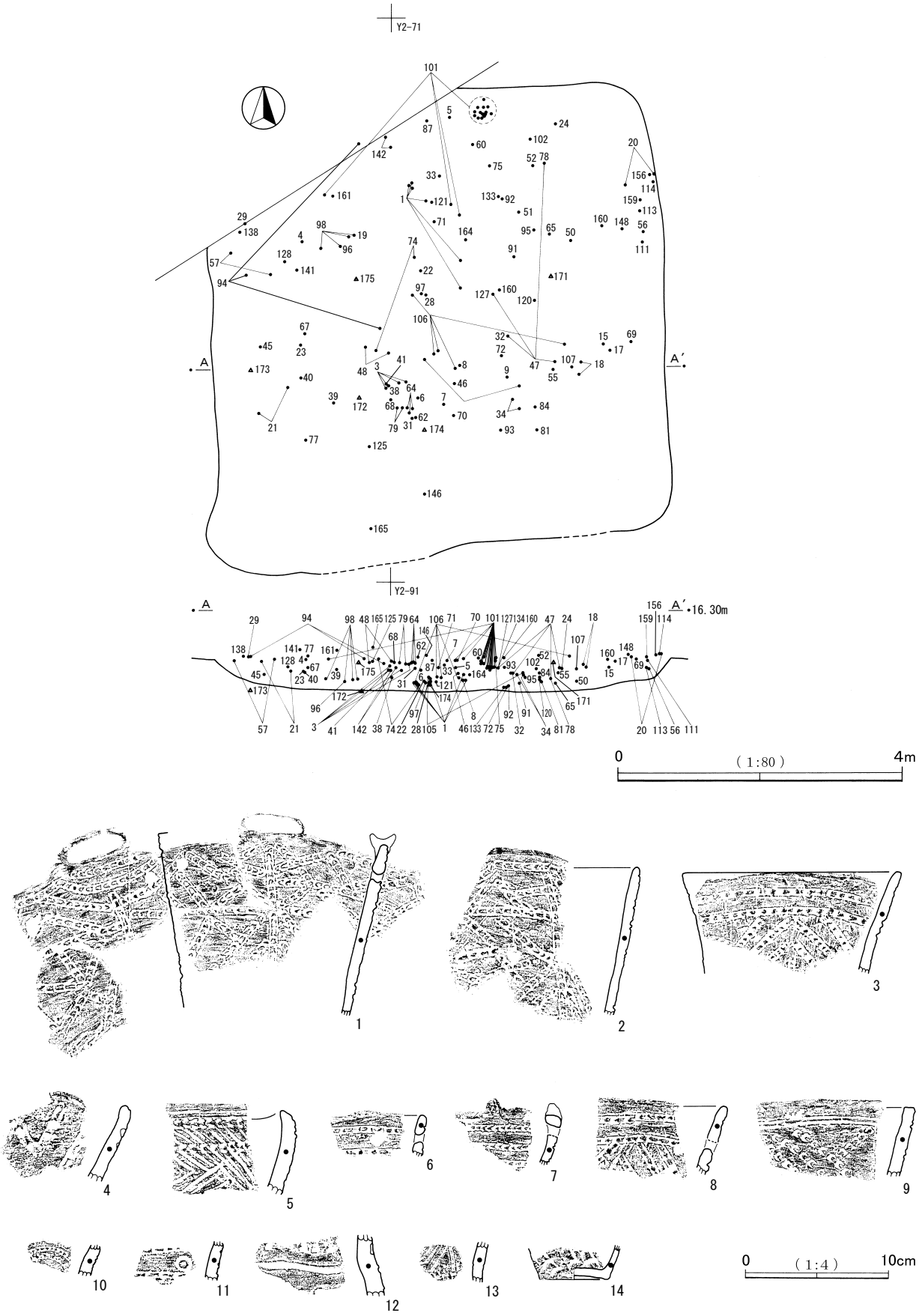
48～85は縄文を地文とし、沈線文や刺突文が加えられる。48は附加条第１種（軸縄LRにｒ１本・軸縄RLにｒ１本附加）を地文とし、口縁部に平行沈線が２条巡る。49はRLを地文とする。50は口縁部に３条の結節沈線が巡り、胴部に附加条第２種（軸縄ＬにＬ２本附加）が施される。51は波状口縁で、口縁に沿って結節沈線が２条巡る。波頂部には２個の円形圧痕がみられる。地文は附加条第２種（軸縄ＲにＬ１本



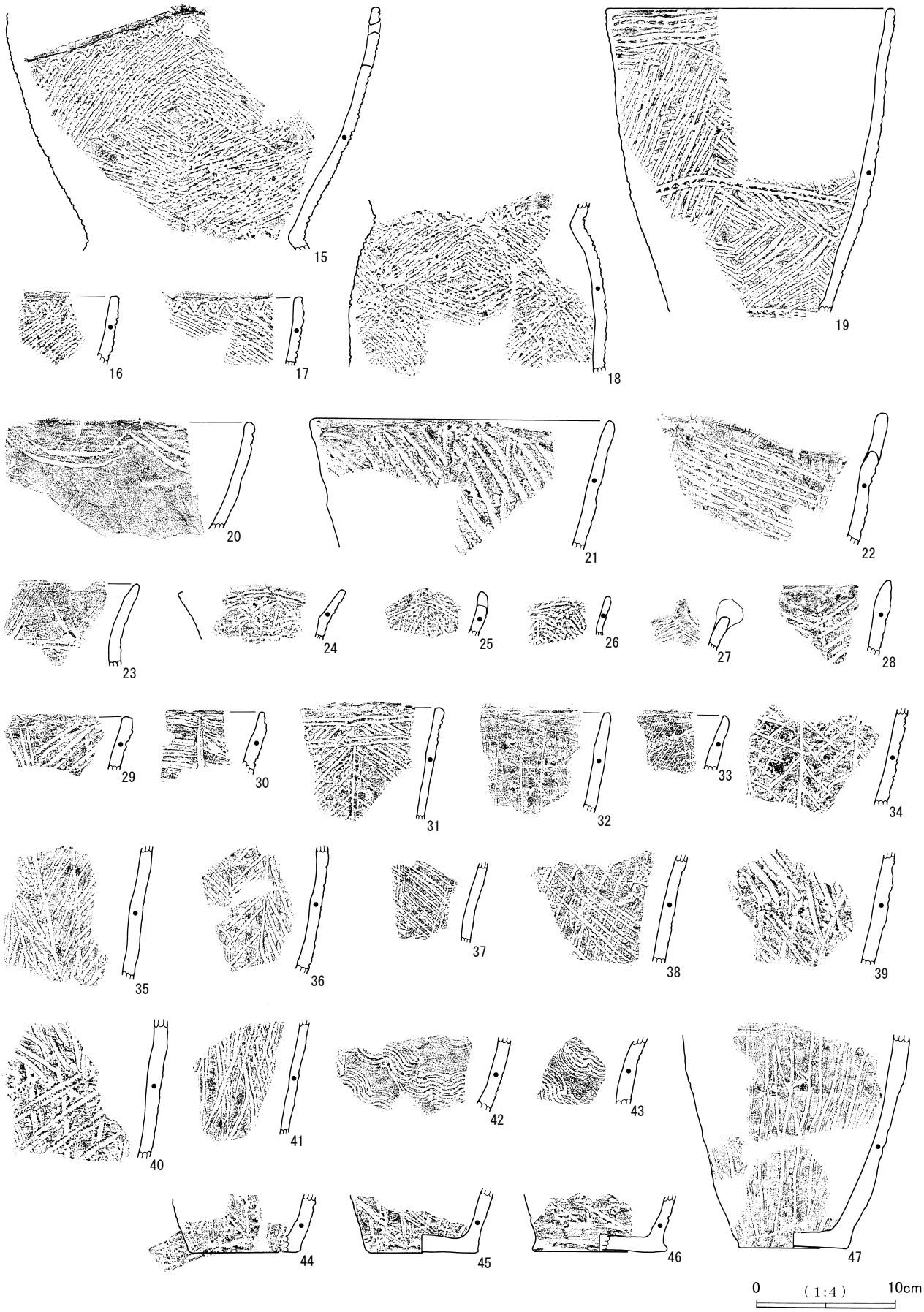
(1)SI-001

1	灰黒褐色土	粘土多
2	灰褐色土	ロームブロック、砂粒
3	灰褐色土	ロームブロック多
4	暗褐色土	ロームブロック
5	明黒褐色土	腐植土主体　ローム粒子・砂粒多
6	暗黒褐色土	腐植土主体　砂粒多、焼土粒子・ローム粒子少
7	暗褐色土	ローム粒子・砂粒多、焼土粒子・炭化物粒子僅
8	明黒色土	腐植土主体　砂粒・ローム粒子少
9	黒褐色土	ロームブロック少

第５図　(1)SI-001①



第６図　(1)SI-001②


15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
0
(1:4)
10cm

第７図　(1)SI-001③

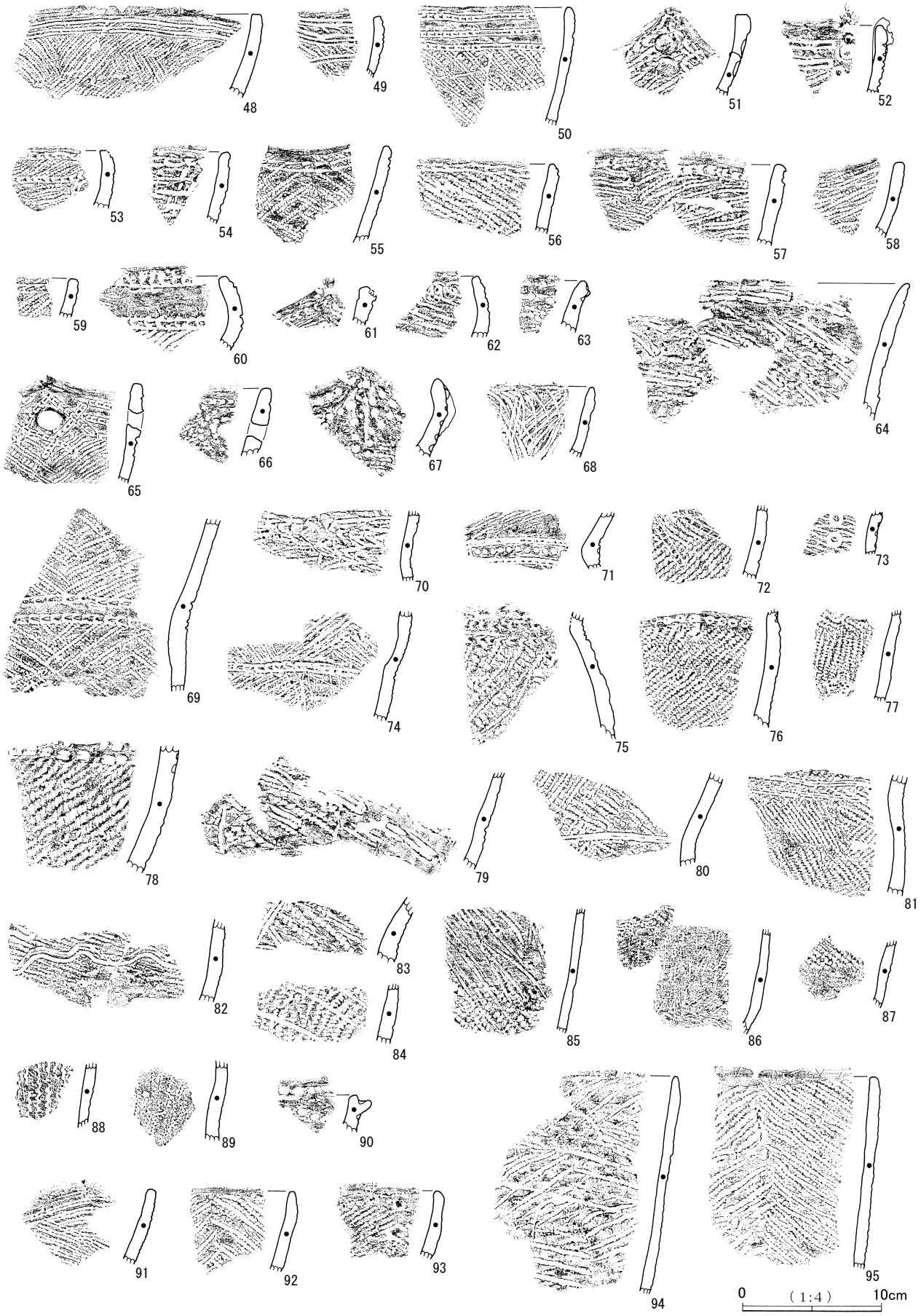
附加）である。52は口縁部に瘤状の突起が付き、その下に円形刺突文が配される。53の地文は合撚Ｌと思われる。55は附加条第１種（軸縄LRにＲ１本・軸縄RLにＬ１本附加）が菱形構成をとる。56はRL、57～59は附加条を地文として口縁部に結節沈線が巡る。60は口縁部が内湾する形で、２条の結節沈線文間は無文である。胴部に無節Ｌを施す。61は波頂部を境に左は口縁に沿って連続刺突文、右は平行沈線が施される。波頂部下には円形刺突文が配される。無節Ｌを地文とし、結節沈線による意匠文が施される。62の地文は附加条第１種（軸縄RLにＬを１本附加）で、口縁部にコンパス文が巡る。63は隆起線の上下に円形刺突文が施される。地文はLRである。64はＬ１本が附加された軸縄不明の附加条を地文に斜位の短沈線が施されたもので、79と同一個体の可能性がある。65は波頂部下に円孔があり、それを囲むように結節沈線で菱形状の文様を描いている。胴部は無節Ｌと附加条第２種（軸縄ＬにＬ２本附加）を羽状施文する。66は円孔の周囲に連続刺突文を巡らせている。67は波頂部から円形刺突文を伴った隆起線が垂下し、横方向に弧状に延びている。地文はLRか。69は胴部中位が緩やかに括れる器形で、括れ部に２条の結節沈線が巡る。地文は附加条第１種（軸縄RLにＬ１本・軸縄LRにＲ１本附加）が菱形構成をとる。70は胴部括れ部に連続刺突文が１条巡る。遺存部位が少ないため不明瞭だが、連続刺突文により意匠文を描き、交点に円形圧痕を施す可能性がある。地文は附加条第２種（軸縄ＲにＬ１本附加）である。71は屈曲部に施された２条の結節沈線文間に円形刺突文が施される。地文はＬを１本附加した軸縄不明の附加条である。72は無節ＬとＲを地文として結節沈線による文様が描かれる。77・82は波状沈線が施され、83～85には斜沈線がみられる。

86～89は貝殻文の施された土器で、86・87はRLが加えられる。89は波状貝殻文である。

90は鍔状隆起線が巡り、円形刺突文が施される。

91～107は異なる縄文原体が羽状、もしくは菱形構成をとるものである。91・104はＲ１本とＬ１本を組み合わせた撚糸文、92は附加条第１種（軸縄LRにＲ１本・軸縄RLにＬ１本附加）による。93はLRとRL、94は軸縄不明の附加条で、ＲとＬをそれぞれ１本ずつ附加している。95は附加条第１種（軸縄LRにＬ１本・軸縄RLにＲ１本附加）、96・98・105・106は附加条第１種（軸縄RLにＬ１本・軸縄LRにＲ１本附加）、97はLRと附加条第１種（軸縄RLにＬ１本附加）による。99は無節Ｌの施文方向を変えて羽状施文している。100はｒを１本附加した軸縄不明の附加条と、附加条第１種（軸縄RLにℓ１本附加）が菱形構成をとるもので、単位の切れ目にミミズ腫れ状の粘土帯がみられる。101は胴部上半と胴部下位で原体・施文方法が異なっている。胴部上位から中位にかけては、附加条第２種（軸縄ＬにＬ１本・軸縄ＲにＲ１本附加）を菱形に、胴部下位は附加条第２種（軸縄ＬにＬ１本附加）を斜方向に施している。胴部上半の原体に用いられた附加条は太め、胴部下位はやや細めである。102は附加条第１種（軸縄RLにℓ１本・軸縄LRにｒ１本附加）、103・107は無節ＲとＬの羽状で、103には環付末端がみられる。

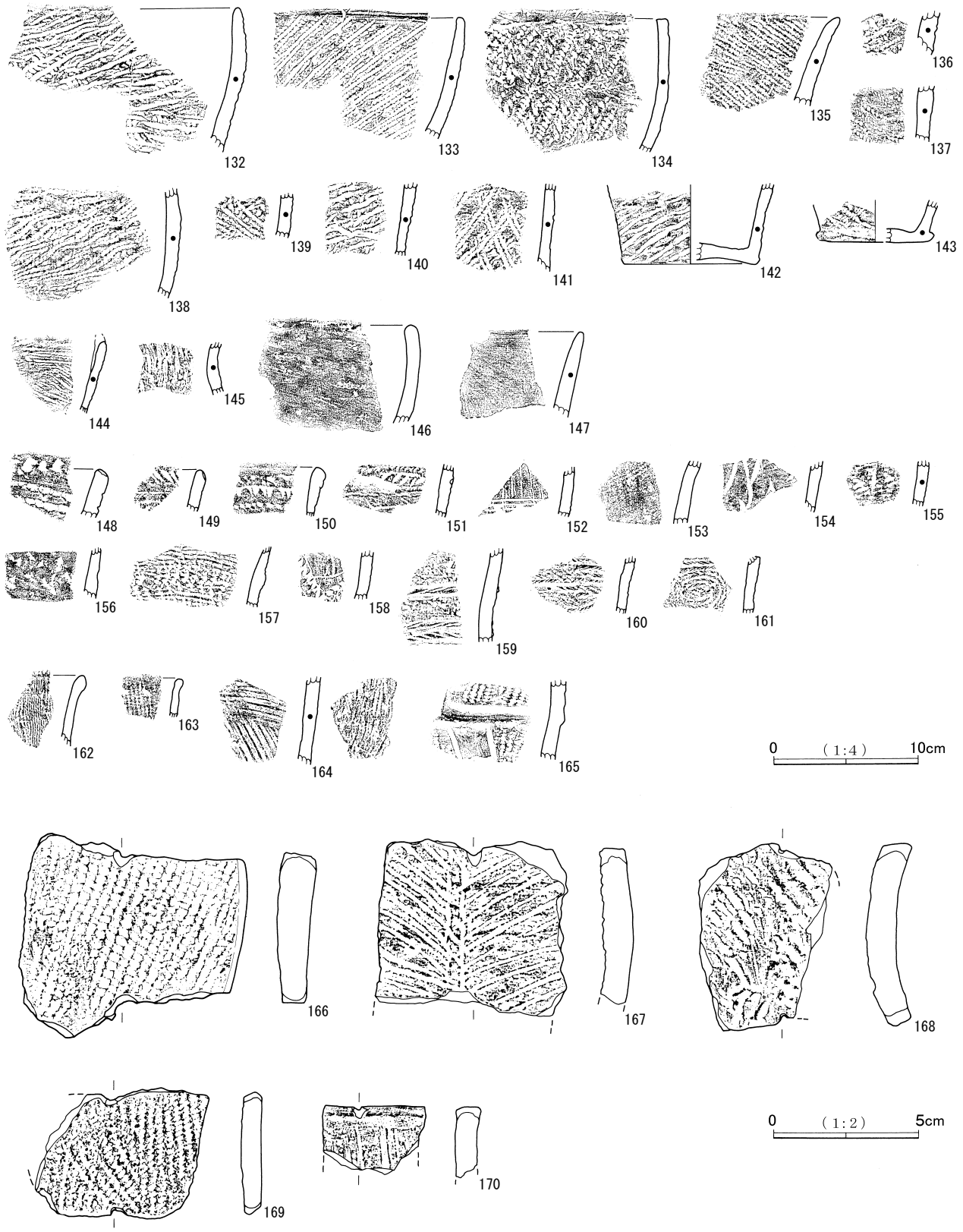
108～145は単一の原体による斜縄文である。109～111は無節Ｌ、108・112・113は無節Ｒ、114～119は単節LR、120～131はRLが施される。132～143が附加条である。132の軸縄はLRで、反撚りもしくはＬの撚りが緩んだものが附加される。133は附加条第1種で軸縄LRにＲを1本附加、135・136・140も附加条第１種で、135は軸縄RLにL・Ｌもしくは RLを附加、136は軸縄LRにＲ１本附加、140は軸縄LRにℓを１本附加している。139・142・143は附加条第２種で、139は軸縄LRにℓを１本、142は軸縄Ｒにｒを１本、143は軸縄ＬにＬを１本附加している。134・137・138・141の軸縄は不明、ＲもしくはＬを１～２本附加している。144・145は撚糸文が施される。


48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
0
(1:4)
10cm

第８図　(1)SI-001④

96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
0
(1:4)
10cm

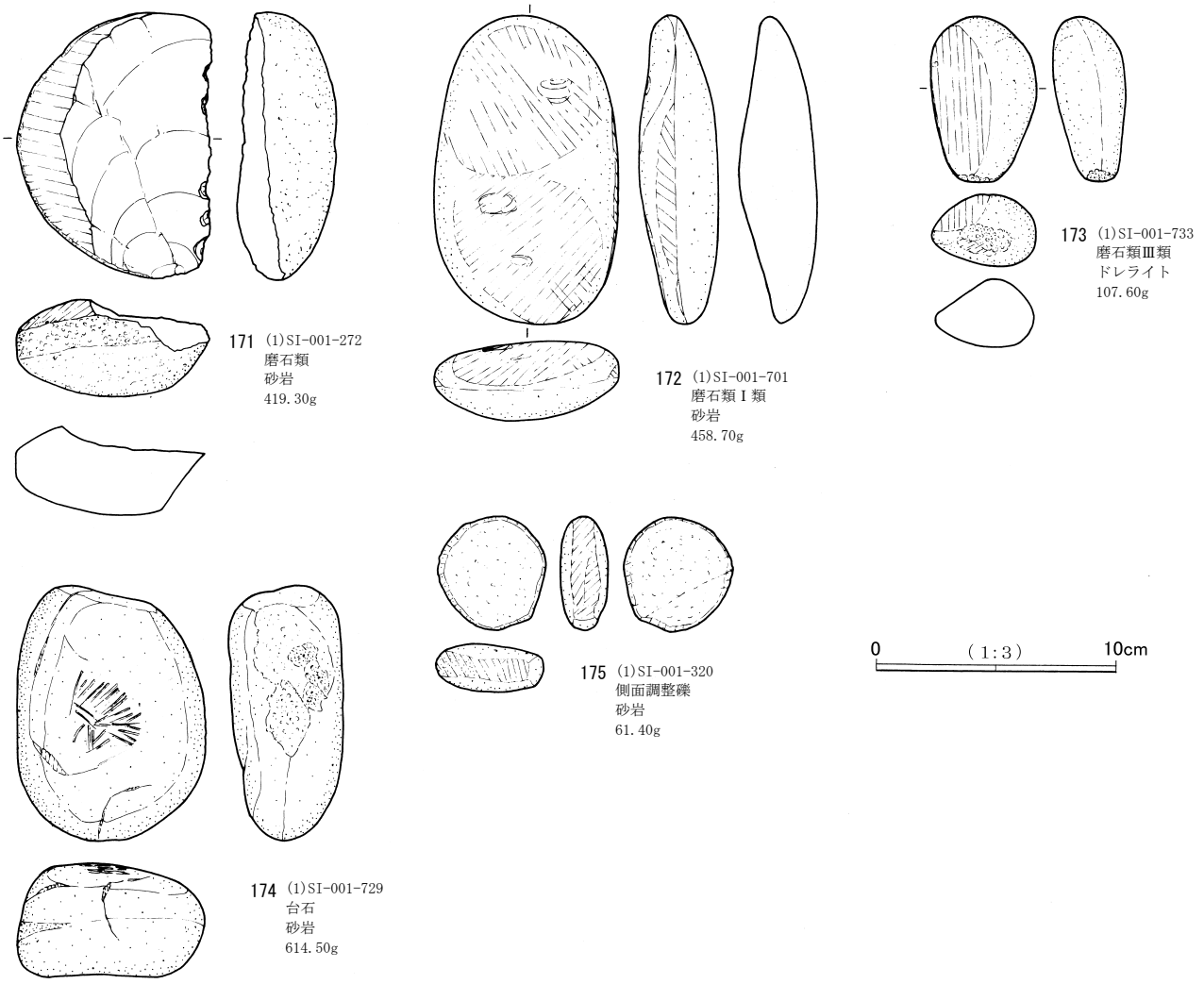
第９図　(1)SI-001⑤



第10図　(1)SI-001⑥

146・147は無文の口縁部片である。

148～156は浮島式、157・158は興津式である。148は口唇部に刺突文、口縁部に結節沈線文が施されている。149が口唇部に斜位の条線帯をもち、爪形文が施される。150には輪積み痕が１段残り、その上に変



第11図　(1)SI-001⑦

形爪形文が施されている。151は２条の変形爪形文間に刺突文がみられる。152・153は撚糸文を地文とし、152には平行沈線文が加えられる。154は波状貝殻文、155は貝殻腹縁押引文か。156は波状貝殻文と三角文がみられる。157は平行沈線による区画内に貝殻腹縁文を充填している。158は変形爪形文により意匠文が描かれる。

159～161は諸磯ｂ式である。いずれも浮線文を有し、159は地文にRLが施される。162・163は撚糸文系、164は条痕文系、165は加曽利Ｅ式である。

166～170は土器片錘である。いずれも黒浜式の土器片を利用したもので、紐掛け部分は明瞭である。

石器は石鏃未成品２点、磨石類４点、敲石２点、石皿７点、側面調整礫１点、剥片類５点、台石１点の計22点、礫は２点である。このうち５点を図示した。なお、磨石類は富士見遺跡にならい以下の４つの型に分類した。

Ⅰ類　器面に磨耗痕を残すもの（狭義の磨石）

Ⅱ類　器面に磨耗痕と凹み痕を残すもの

Ⅲ類　器面に磨耗痕と敲打痕を残すもの

Ⅳ類　器面に磨耗痕、敲打痕、凹み痕を残すもの

171は磨石類である。扁平な円礫が減厚するように加撃され、作出された直線状の縁辺部には刃こぼれ

がみられる。側面は帯状に擦り痕がめぐり、正面の平坦面は磨耗して微かな光沢をもつ。砂岩製である。172は磨石類Ⅰ類で、砂岩の扁平楕円礫を素材とする。正面を上下に分ける磨耗痕があり、下部の面がより強く磨耗する。右側の自然面は磨りにより剥がれ、面状を呈している。173は磨石類Ⅲ類としたが、砥石・磨石・敲石などの複合機能をもつ。左半分が磨耗し、やや光沢がある。下端部に弱い敲打痕と擦りがみられる。一見すると砂岩のようだが磁性がある。ドレライトであろう。174は楔形石器を製作するための台石と推定される。厚みのある円礫を素材とし、正面中央部分に短い線状の弱い敲打痕がみられる。右側面の表皮に薄く剥がれたようなザラつきがみられる。いずれも器形を変えるほどの使用痕ではない。175は砂岩の側面調整礫で、周縁部に擦り痕がめぐる。一部擦り痕が面を成すが、最終形態は扁平な車輪型である。表裏は被熱により赤・黒に変色している。

(1)SI－002（第12～15図、図版３・７・８・10・11・15、第４・５表）

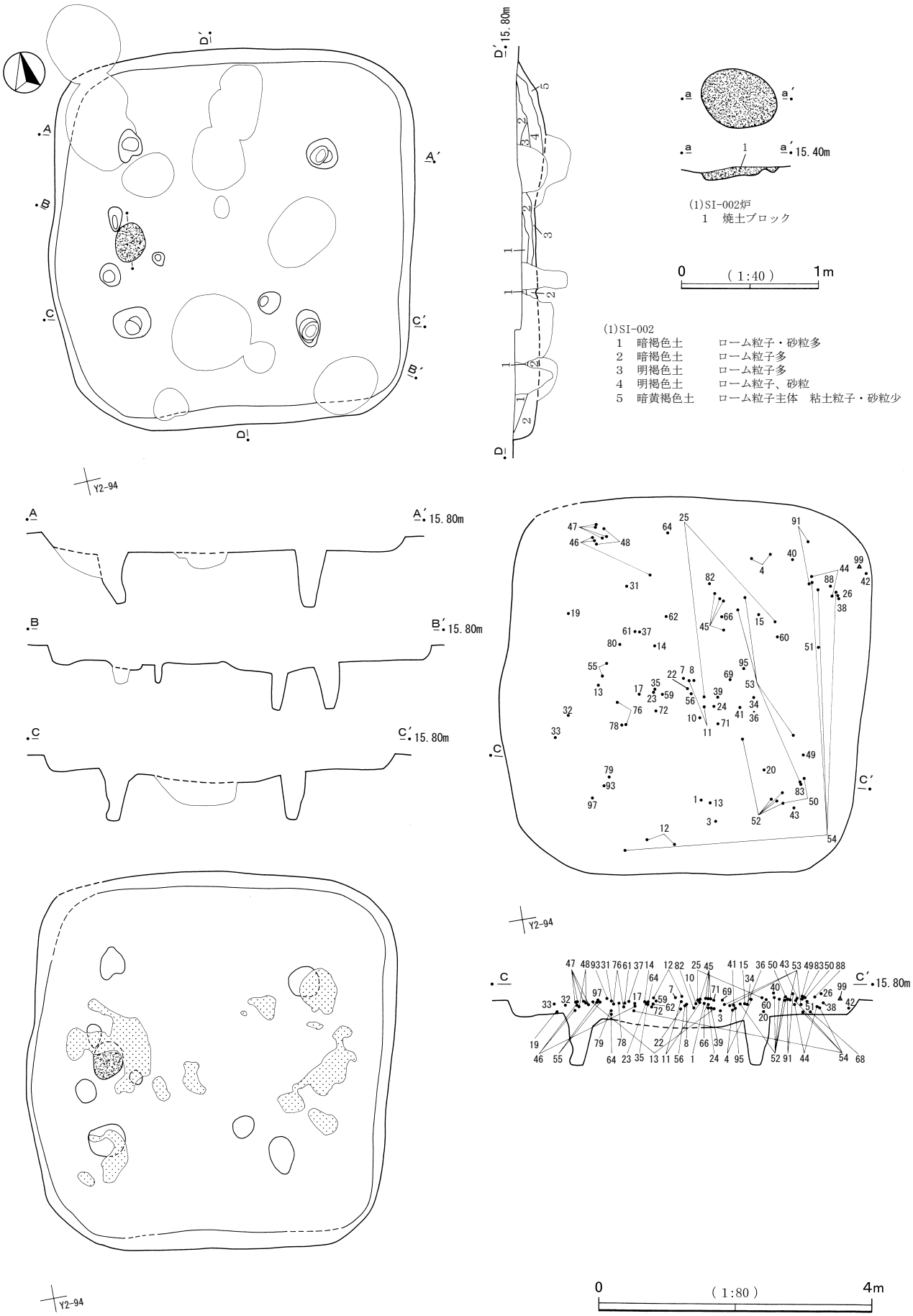
Y2－74付近に位置する。平面形は方形で、規模は5.56m×5.33m、確認面からの深さは29cmである。炉は西側中央に位置し、規模は58cm×45cm、深さ６cmである。ピットは８基検出された。そのうち、対角線上に配置されている４基は71cm～84cmと深く、主柱穴の可能性がある。炉の周囲に位置する３基は16cm～30cmと浅い。他の１基は56cmとやや深い。遺構中央西寄りと東寄りに貝ブロックを検出した。厚みは最大で20cmあり、ハマグリを多く含む。他にサルボオ、マガキ、アサリ、アカニシもみられる。

出土土器は黒浜式を主体とし、浮島式、興津式、諸磯式をわずかに含む。本竪穴住居の時期は黒浜式期である。１～82は黒浜式である。１～19は沈線文が施される。１は波状口縁で、半截竹管による引きずり気味のコンパス文２条と平行沈線１条を交互に施している。２は波状文、３は単沈線による集合沈線がみられる。４は櫛歯状工具による格子目文、５は垂下する沈線がわずかに残っているため葉脈文であろう。６は細く浅い沈線による格子目文、７～11は同一個体と思われ、平行沈線による幾何学状の文様が施される。12の斜格子状沈線は異なる工具を組み合わせて使用している。13はやや太めの単沈線、14は平行沈線、15・16は細い単沈線により格子目文が描かれる。17は縦位の沈線が施されるが、一部斜沈線もみられ、鋸歯状に垂下する可能性がある。18は櫛描き波状文が施される。胎土に繊維を含まないため、浮島式かもしれない。19は櫛歯状工具による鋸歯状文である。

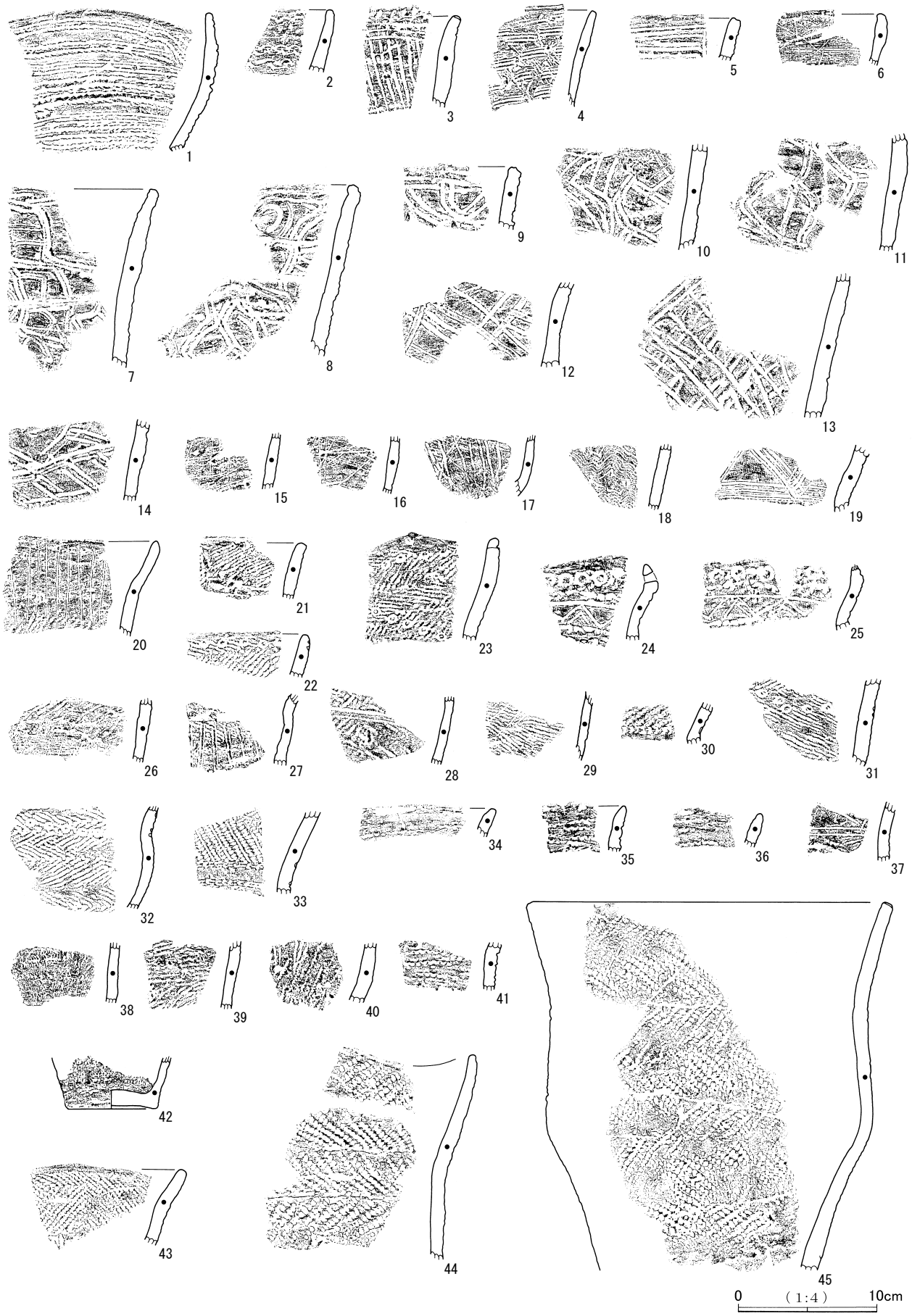
20～33は地文に縄文が施され、沈線や刺突文などが施されるものである。20は胴部に無節Ｌを施した後、口縁部に縦位の沈線を加える。21は胴部下位に単沈線による粗い格子目文、上部に無節Ｌを施しており、20・15・16は同一個体の可能性がある。22・23・31・32は無節Ｌと無節Ｒを羽状施文した後、円形刺突文を加えている。24は口縁部が内屈する器形で、波頂部に円孔が穿たれる。口縁部に円形刺突文が配され、その下に結節文、鋸歯状沈線、環付末端などが施される。25は24と同一個体であろう。26～29は縄文施文後、格子目文や斜沈線が加えられる。30は胴屈曲部に連続刺突文が施されている。33は附加条第１種（軸縄RLにｒ１本附加）を地文とし、結節沈線が加えられる。

34～42は貝殻腹縁文が施される。37・40には貝殻腹縁文を地文に沈線文が施される。39の下半部には貝殻背圧痕文がみられる。

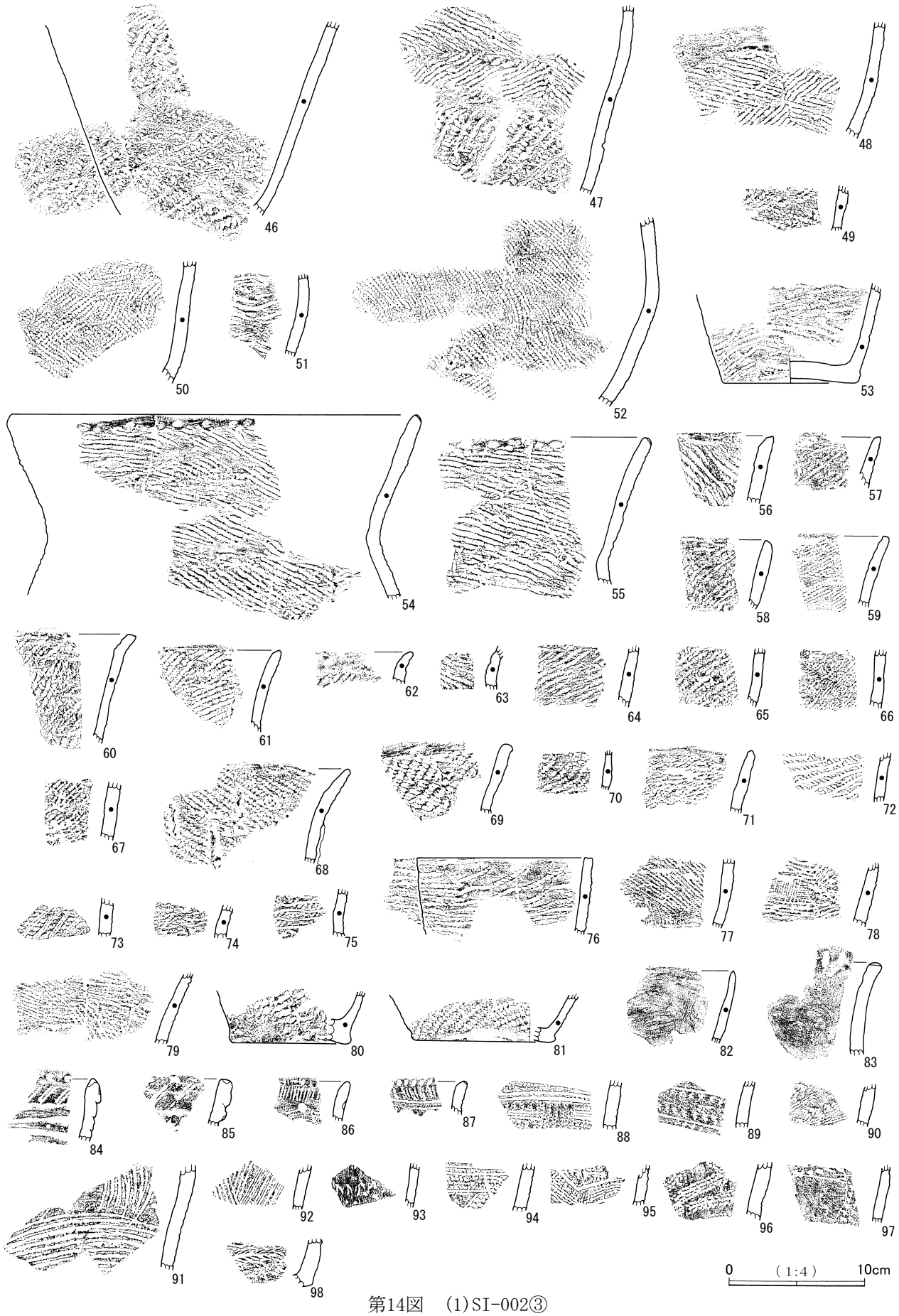
43～53は異なる縄文原体が羽状、もしくは菱形構成をとるものである。43～45・49・50はLRとRLの羽状施文である。45は器形が復元できた個体で、口径は25.5cmと推定される。口縁部がごくわずかしか残存しておらず、波状口縁になる可能性がある。口縁部から胴部中位にかけては比較的整った羽状構成であるが、胴部下位の施文方向はやや乱れている。46の胴部下端、輪積み痕より下はLR、遺存部上端は無節Ｌ、



第12図　(1)SI-002①

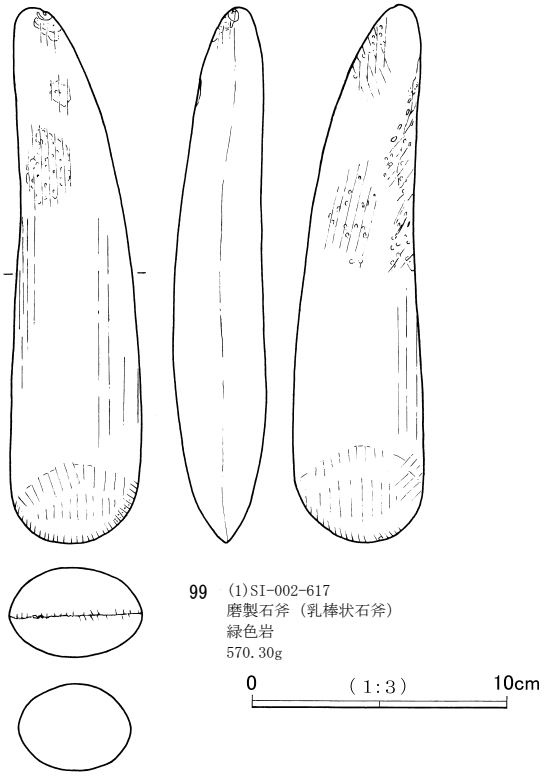


第13図　(1)SI-002②



第14図　(1)SI-002③

中段は１段の縄ＬとＲを合わせてＬに撚った合撚Ｌと思われる。47の遺存部上半は無節ＲとＬの羽状施文、下半は46同様合撚Ｌと思われ、46・47は同一個体の可能性がある。48は無節ＬとＲが菱形構成をとる。51は撚糸文Ｌと撚糸文Ｒもしくは軸縄の不明瞭な附加条縄文か。52はRLを主体とするが、遺存部下端にわずかにLRがみえる。53は上げ底気味の底部で、底径は10.1cmである。撚糸文Ｌと撚糸文Ｒが羽状もしくは菱形構成をとると思われる。



第15図　(1)SI-002④

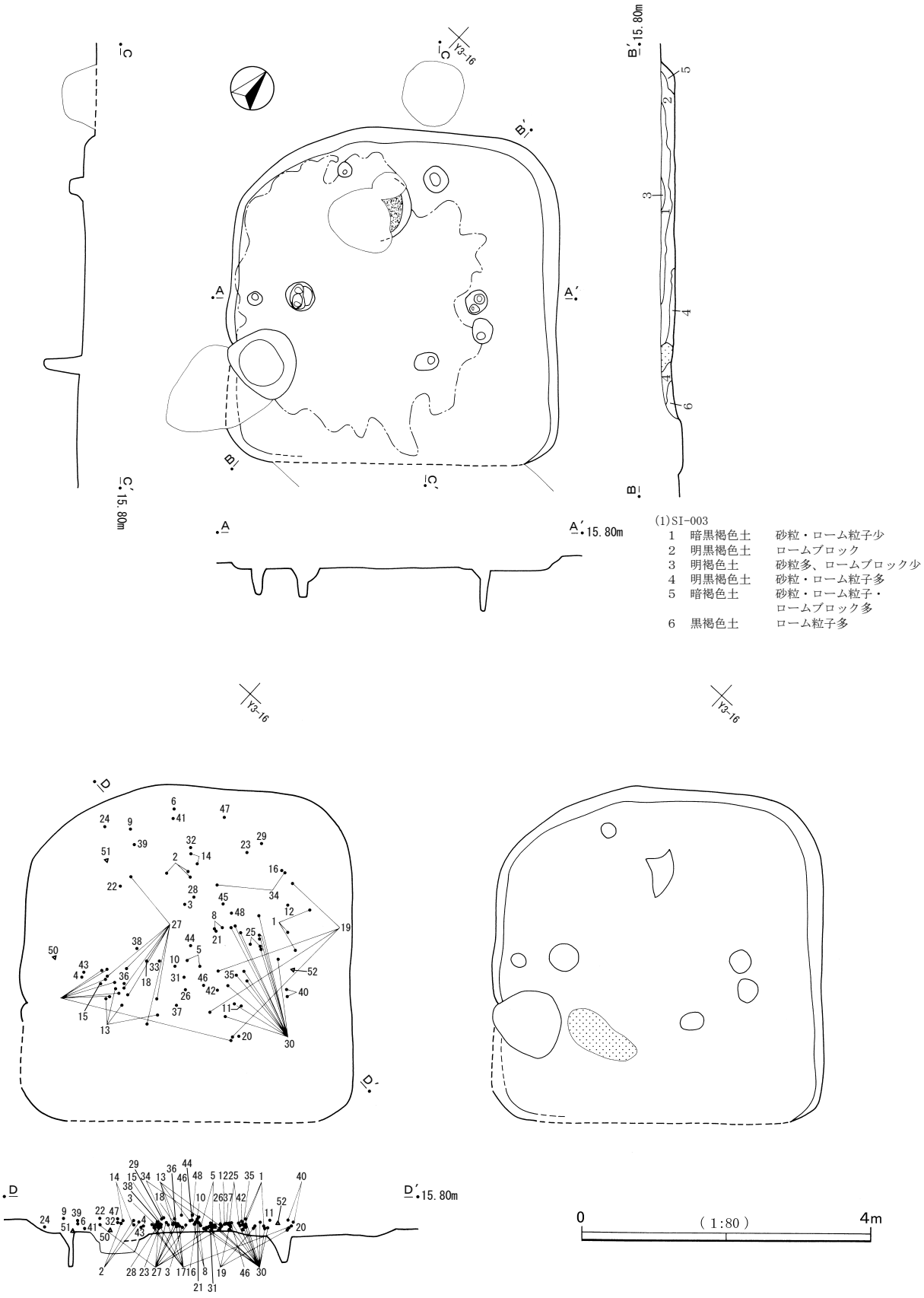
54～81は単一の原体による斜縄文である。54・55は同一個体であろう。胴部上位で括れ、口縁部が直線的に開く器形で、復元口径は30.0cmである。口唇部に押捺痕をもつ。全体に無節Ｒの斜縄文が施され、施文が重なる部分にミミズ腫れ状の粘土の高まりがみられる。56・63は無節Ｒ、57～62・64～67は無節Ｌ、68～70はLRである。68はLRを縦方向に施文しており、所々ミミズ腫れ状の粘土の高まりがみられる。71～75は附加条である。71～73は軸縄をＲとする附加条第２種で、71はｒを１本附加、72はℓを１本、73はＲを２本附加している。74は軸縄LRにＲを絡げたものと思われる。75は附加条第２種（軸縄Ｌにｒを１本附加）である。76～79は撚糸文で、76のみ撚糸文Ｌ、他は撚糸文Ｒである。80・81は底部片である。80は無節Ｌ、81はLRが施されている。82は無文の口縁部片である。

83～93は浮島式、94～97は興津式である。83は口唇部にキザミをもつ。84･85は口唇部に条線帯を有し、輪積み痕が残る。86は櫛歯状工具による波状文が施される。未貫通の穿孔がみられる。87は口唇部にキザミと条線帯をもつ。88は貝殻腹縁文、89は波状貝殻文を地文とし、沈線文が施される。90は貝殻背圧痕文、91・92は集合沈線、93は波状貝殻文が施される。94・95・97は磨消貝殻文、96は貝殻腹縁を押し引いて波状文のような文様を描いている。98は浮線文をもつ諸磯ｂ式の底部片である。

石器は磨製石斧２点、磨石類５点、敲石１点、石皿１点、剥片類10点の計19点、礫は１点出土しているが、図示できたのは１点である。99は乳棒状の磨製石斧である。基部に成形時の敲き痕が残るが、下半部は丁寧に磨かれて光沢を帯びる。刃部は表裏両面からの研磨により円弧を描く。右刃部の方が若干直線的で、いわゆる偏刃を呈する。最大長が21.2cmを超える大型の優品であり、深みのある緑灰色の緑色岩を素材とする。明治大学黒耀石研究センターの中村由克氏の鑑定では秩父地方の緑色岩とされる。

(1)SI－003（第16～18図、図版３・８・11・12・15、第４・５表）

Y3－15付近に位置する。平面形は隅丸方形で、南東壁は確認調査時のトレンチ掘削により削平されている。規模は4.57m、確認面からの深さは19cmである。南西壁際から中央にかけての床面に硬化面がみられる。炉は北東壁際中央に位置するが、(1)SB－001のピットに切られている。ピットは７基で、床面からの深さは19.7cm～56.8cmである。遺構南隅から貝ブロックを検出した。貝種はハマグリを主体とし、ア



(1)SI-003

1	暗黒褐色土	砂粒・ローム粒子少
2	明黒褐色土	ロームブロック
3	明褐色土	砂粒多、ロームブロック少
4	明黒褐色土	砂粒・ローム粒子多
5	暗褐色土	砂粒・ローム粒子・ロームブロック多
6	黒褐色土	ローム粒子多

第16図　(1)SI-003①

サリ、マガキ、シオフキ、オキシジミなどもみられる。

出土土器は黒浜式を主体とする。本竪穴住居の時期は黒浜式期である。１～44は黒浜式である。１～14は沈線文が施されたものである。１は胴括れ部から内湾しながら開く深鉢の口縁部である。復元口径は26.7㎝、半截竹管による横位の集合沈線が施されている。２・３はコンパス文が多段に施される。４は口縁部に波状文がみられる。５は単沈線による格子目文、７は平行沈線が波状に施される。８・９は葉脈文、10は細沈線による格子目文、11は斜位の集合沈線、12は横位の平行沈線の上に連続刺突文がみられる。13は上げ底を呈し、葉脈文が施されている。14は格子目文であろう。

15～21は縄文を地文とし、沈線や刺突文を施すものである。15はLRを地文とし、口縁部に波状沈線が加えられる。16は口縁部に４条の沈線がみられる。地文は無節Ｒで、末端を口縁部の沈線に重なるように４段施している。17は胴部中位が緩く括れる器形で、括れ部に２本一組の短沈線が巡る。地文はLRとRLの羽状縄文である。18は括れ部を境に異なる文様が施されている。括れ部より上は多条沈線による葉脈文、以下は１段の縄ＲとＬをＲに撚った合撚を地文に２列の円形刺突文が垂下する。19は筒型の胴部に口縁部が短く外傾する深鉢で、口縁部は３単位の波状口縁となる。口径は13.3㎝、現存する部分の器高は18.0㎝を測る。口縁直下の括れ部に平行沈線が巡る。胴部は単節LRで、最上段のみ横方向、以下は施文方向を変えながらランダムな羽状を描出している。20は無節Ｌを地文に平行沈線が施される。21は撚糸文Ｒで三角形を描出し、遺存部下位に平行沈線が巡る。

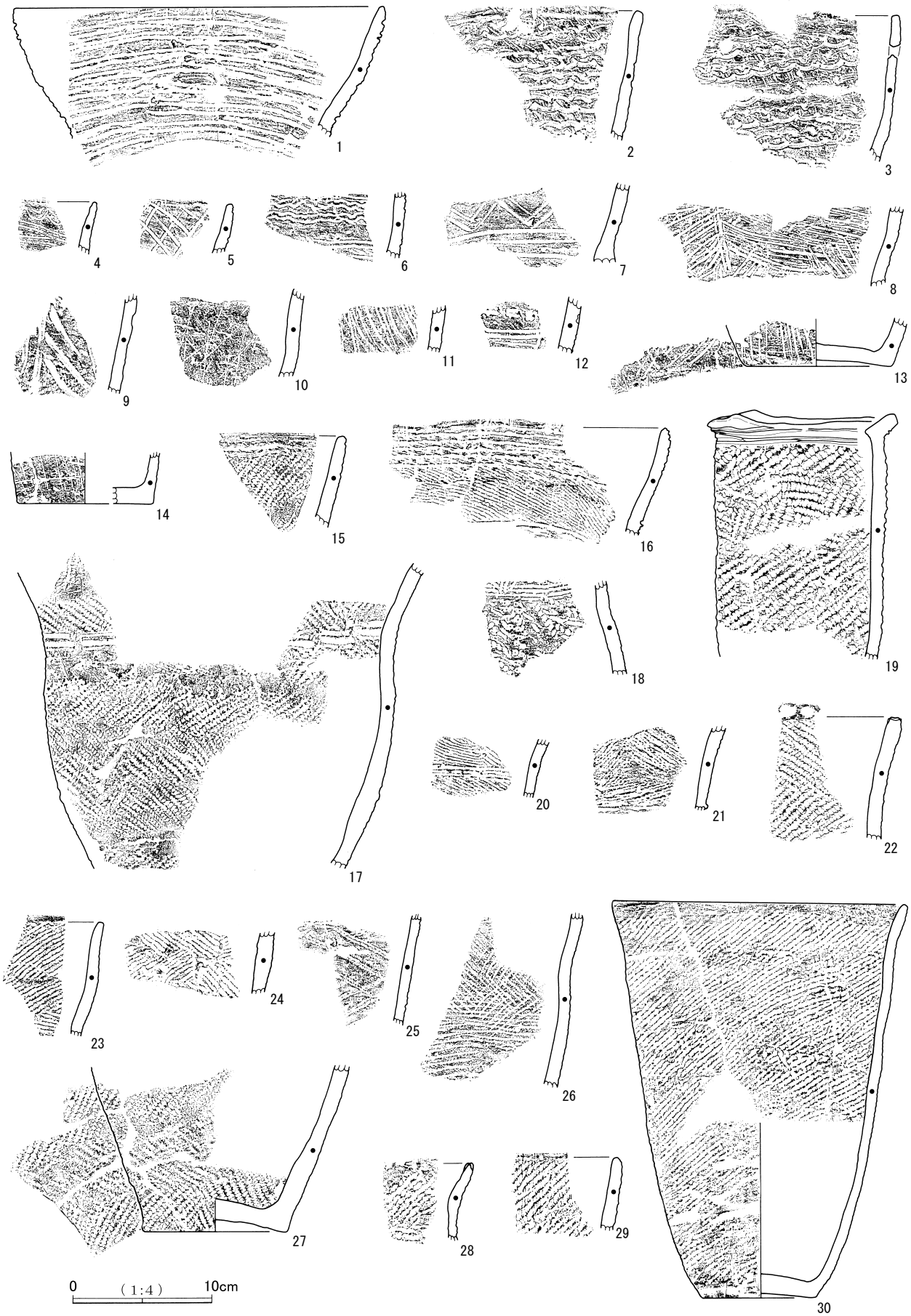
22～27は羽状、もしくは菱形構成をとるものである。22はRLとLRが羽状構成をとる。口唇部に工具の押捺痕がみられる。23は無節Ｌの施文方向を変え羽状を描出している。24は無節Ｌと無節Ｒ、25はＬ２本を組にした撚糸文で、羽状もしくは菱形を描出している。26の上半部は撚糸文Ｌが羽状施文され、一部が交差している。下半部は横走する。27は上げ底を呈し、LRとRLが羽状施文される。

28～44は単一の原体による斜縄文である。28～30は無節Ｌで、28の口唇部には交互押捺が施される。30は器形の復元できた個体で、口径21.1㎝、底径8.2㎝、器高28.7㎝である。底部は上げ底気味で、底部外面にはミガキが施される。31・32・37はLR、33～36・38・39はRLで、39は縄文原体を押捺している可能性がある。40は附加条第１種（軸縄LRにℓ１本附加）、41は結節回転文が多段に施されている。42・43は撚糸文Ｌ、44は撚糸文Ｒが施される。

45は繊維を含まないやや厚手の土器で、横位の沈線が多段に施されている。浮島式であろう。46は磨消貝殻文か。興津式と思われる。47は弧状の集合沈線がみられる。諸磯ｂ式か。48は口唇部と口縁部内面及び外面口縁部下位に円形刺突文を伴ったボタン状の貼付文が付く。口縁部の地文は集合沈線である。諸磯ｃ式であろう。

49は黒浜式の土器片を利用した円板で、径は3.2㎝である。

石器は二次加工ある剥片１点、磨製石斧２点、磨石類５点、石皿１点、軽石１点の計10点が出土し、３点を図示した。50・51は磨石類Ⅰ類で、石材はともに砂岩である。50は上面を除く５面に平坦な磨痕がみられる。この磨痕によって全周に施された敲打痕が消されており、荒くザラついた面で何らかの対象物を擦った結果、平坦な面が作出されたものと思われる。51は丸みのある表面には磨りによる光沢とザラ感をもつ部分がある。裏面は剥落後磨り調整、剥離が繰り返され平坦である。稜は全周が白く摩滅し、下部の半円弧部分で特に顕著となる。52は多孔質安山岩を素材とした石皿である。裏の凹みは分割された後に穿たれる。凹み径は2.0㎜～3.5㎜、深さ1.0㎜～1.5㎜である。



第17図　(1)SI-003②

第18図　(1)SI-003③

(1)SI－004（第19・20図、図版３・８・12・15、第４・５表）

Y3－23付近に位置する。遺構南西側は調査区外となる。一辺４ｍ～５ｍの隅丸方形を呈すると思われる。確認面からの深さは32㎝、炉は遺構北東側中央に位置し、56㎝×50㎝、床面からの深さ７㎝程である。ピットは５基検出され、床面からの深さは20.4㎝～69.3㎝である。遺構南側から貝ブロックを検出した。最大で30㎝の厚みがあった。貝種はサルボオが最も多く、ハマグリ、マガキ、ウミニナ類などもみられる。

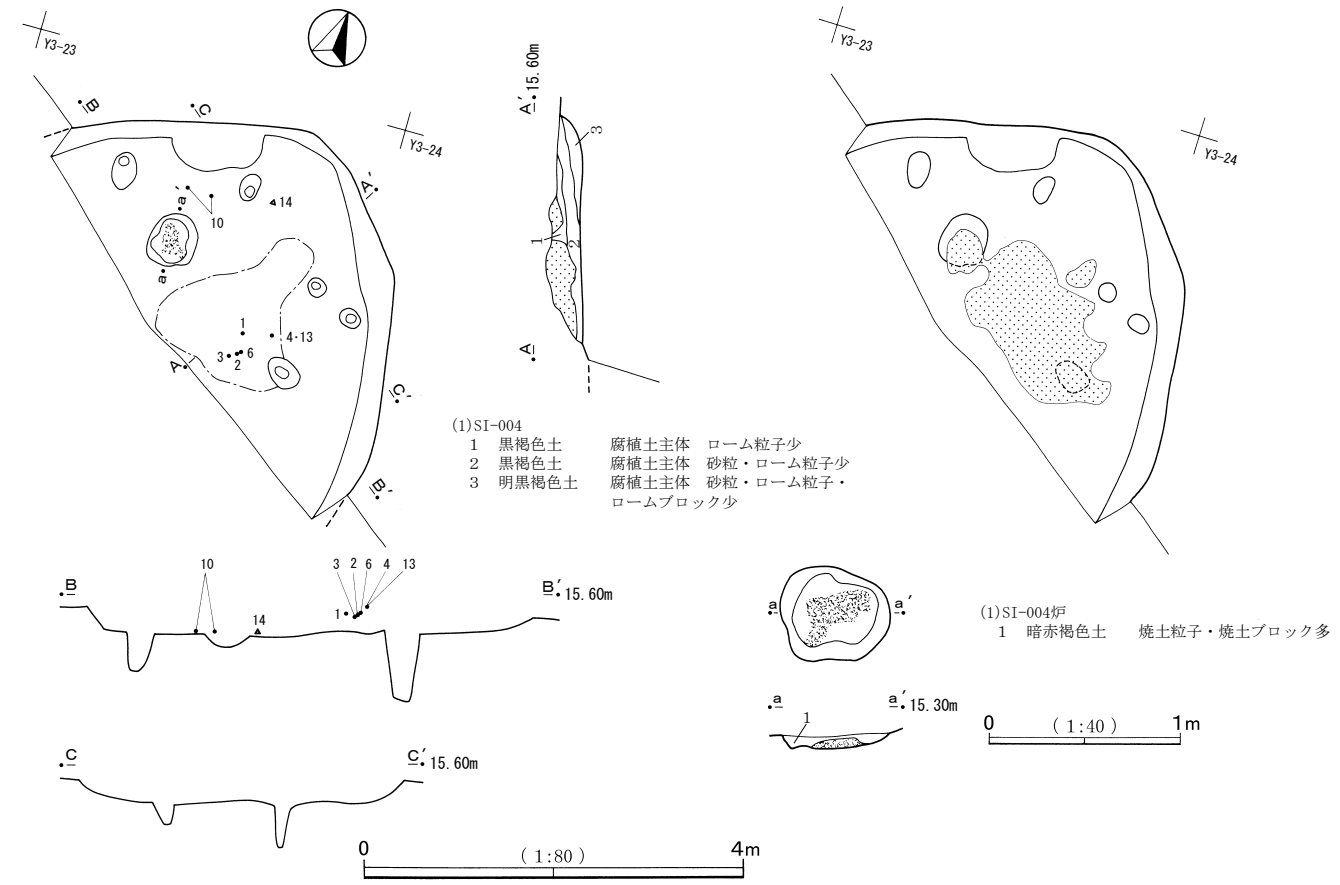
出土土器は全て黒浜式である。本竪穴住居の時期は黒浜式期である。１～３は胴部上位に結節沈線による文様帯、胴部下半に半截竹管による葉脈文が施される。１の胴部上位の区画文は、鋸歯状のモチーフをベースに幾何学文が描かれている。胴部下半の葉脈文は、一部縦位の沈線が省略され、矢羽状になっている箇所がある。２・３は波頂部下に円孔を有する。２は円孔を囲むように結節沈線で三角形が描かれている。胴部上半の文様帯を構成する結節沈線は、平行沈線で文様を描いた後、沈線に重ねて刺突文を施したものである。４は刺突文が付随する鍔状隆起線が２条施される。５は上端を横位の平行沈線で区画された葉脈文が施される。６は胴部が括れる波状口縁の深鉢である。口縁部に結節沈線による葉脈文が描かれ、波頂部下は三角文になると思われる。口縁部文様帯内に地文はみられない。胴部上位の文様帯は、上下が２条一組の結節沈線によって区画され、２条の結節沈線間は無文である。区画内は縦位の結節沈線を中心に斜位の結節沈線が引かれ、葉脈状の文様を描く。縦位の結節沈線は１条で、波頂部と波底部に対応するものと思われる。地文はLRとRLで、それぞれの条の傾きと、斜位の結節沈線の傾きが同じ方向になっている。７の胴部は緩く括れ、横位の結節沈線が１条巡る。胴部上半は押引文による葉脈文、下半は平行沈線による葉脈文か。８～10は葉脈文、11は波状文である。12はRLを地文とし、括れ部にコンパス文が巡る。コンパス文直下に結節文がみられる。13は無節Ｒと無節Ｌの羽状縄文で、遺存部上端に横位の平行沈線がみられる。

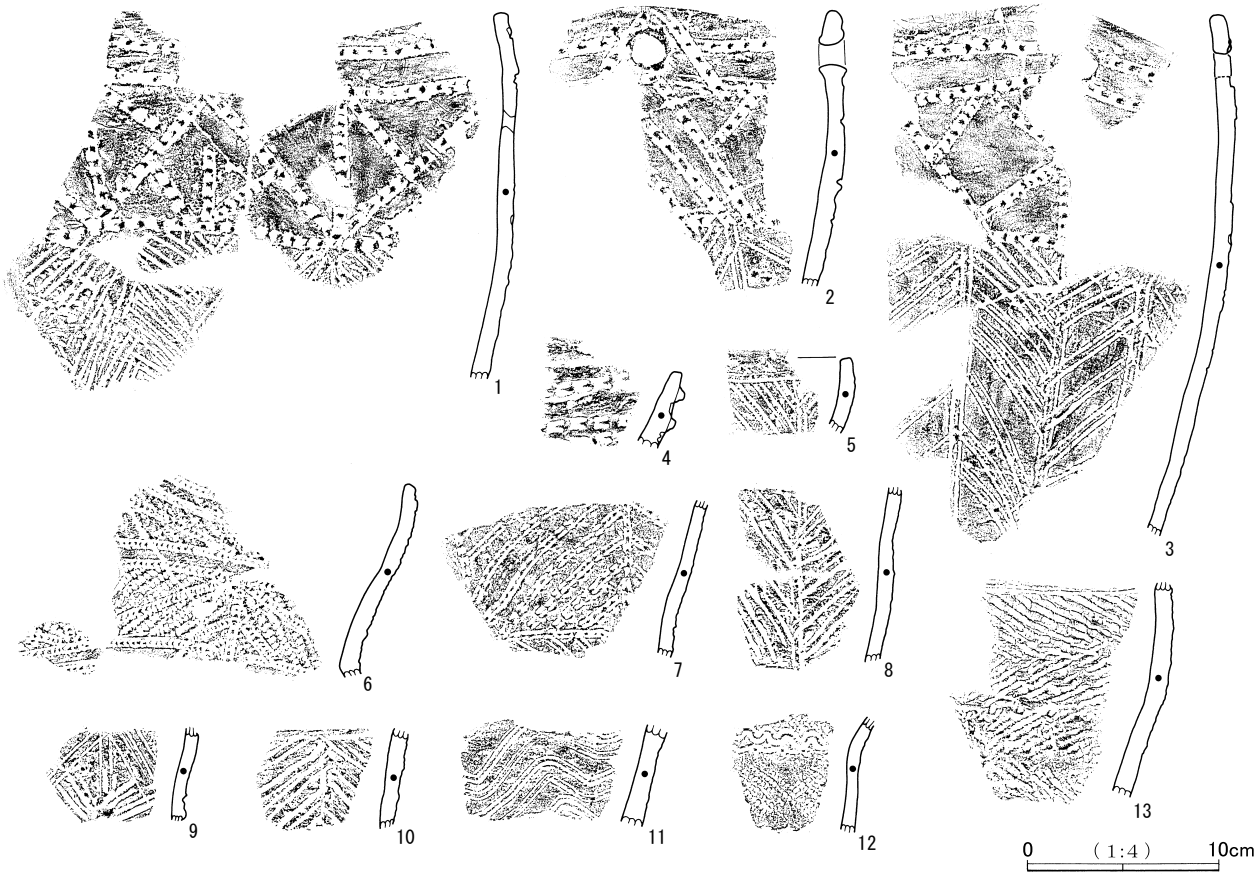
石器は楔形石器１点、磨製石斧１点、磨石類３点、敲石１点、剥片類１点の計７点で１点を図示した。14は乳棒状の磨製石斧である。刃部の形状は(1)SI－002出土の乳棒状石斧（99）と同じく右部が偏刃を呈する。基部は折損後、裏面上方からの敲打と右側縁の磨りにより修復が試みられている。石材は緑色岩である。

(3)SI－001（第21・22図、図版３・12）

AA2－50付近に位置する。平面形は不整形で、規模は5.88ｍ×5.49ｍ、確認面からの深さは34㎝である。床面は２面検出され、旧床面の上に貼り床をし、第２床面としていたと思われる。旧床面は全体的に硬化しており、第２床面は硬化部と軟質部が混在している。また、東壁は拡張された可能性がある。炉は２基確認でき、北側の炉１が102㎝×82㎝、床面からの深さ27㎝、南側の炉２が95㎝×90㎝、床面からの深さ56㎝である。貯蔵穴と思われる径１ｍ前後の掘り込みが南壁際と西壁際にあり、床面からの深さは南壁際のP1が27㎝、西壁際のP2が56㎝である。炉２がP1を切っていることから、P1は旧住居に伴うものと思われる。P1・炉２の左右に暗黄褐色土の盛り土があり、固く締まっていることから出入り口のスロープだった可能性がある。

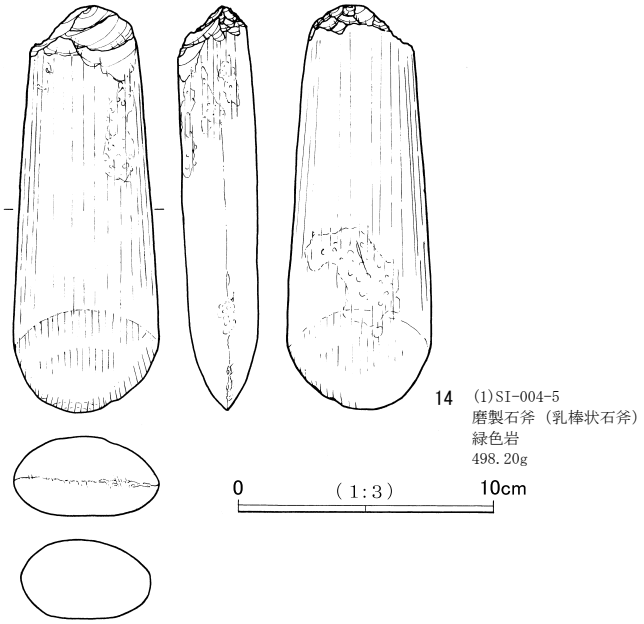
出土土器は浮島式と諸磯式が多く、黒浜式はわずかであった。本竪穴住居の時期は浮島式期である。１～５は黒浜式である。１・２は集合沈線が施される。１は４本一組の櫛歯状工具による。３の口唇部は溝状を呈する。無節Ｌによる斜縄文が施される。４は撚糸文Ｒが施される。５は復元口径12.4㎝を測り、無文で内面にはミガキが施されている。





第19図　(1)SI-004①

６～26は浮島式である。６は小型の深鉢で、復元口径11.6cmを測り、現存高11.0cmである。口唇部にキザミ、胴部上位から中位にかけて変形爪形文が多段に施される。胴部下位は波状貝殻文である。７は波状貝殻文、８・10は変形爪形文、９は波状貝殻文２段と連続刺突文、11・12は変形爪形文と沈線文が施される。13は復元口径17.5cmで、口唇部にキザミを有し、変形爪形文と三角文が交互に施される。14は口縁部に変形爪形文が１条巡り、胴部に刺突文による渦巻き状の文様が描かれる。15は三角文と変形爪形文、平行沈線を多段に施す。16は上半に貝殻背圧痕文、下半に三角文と変形爪形文を交互に巡らす。17・18は輪積み痕の上に指頭圧痕による凹凸文を施すもので、17は胴部に波状貝殻文がみられる。19・20・22～26は波状貝殻文が施される。21は沈線文とコンパス文風の文様がみられる。26は底部が突出する鉢形と思われる。底径は9.4cm、現存高は1.8cmである。６～12は浮島Ⅱ式、13～16は浮島Ⅲ式であろう。



第20図　(1)SI-004②

27～43は諸磯ｂ式である。27は波状口縁で、波頂部に円形の貼付文がみられる。平行沈線による渦巻き文が描かれる。28は波頂部を境に右側の口唇部にキザミを有する。双頭状の波状口縁か。斜位の直線と弧線を組み合わせた文様が描かれている。29は横位の集合沈線に鋸歯状の沈線を重ねている。胴部は弧線文であろう。30は櫛歯状工具による横位の集合沈線で、RLを地文とする。32は横位の集合沈線、33は平行沈線による直曲線文、34・35は鋸歯状沈線と横位の沈線が施されている。36は斜位の短沈線と横位の平行沈線が組み合わされる。37～40はキザミを伴った浮線文によるもので、37は撚糸文Ｌ、他はRLを地文とする。41は有孔浅鉢と思われる。42は横位の集合沈線が施された底部片で、底径は8.0cmと推測される。43は無節Ｌが施された胴部片である。詳細な時期は不明だが、胎土に繊維を含まないため、諸磯式とした。

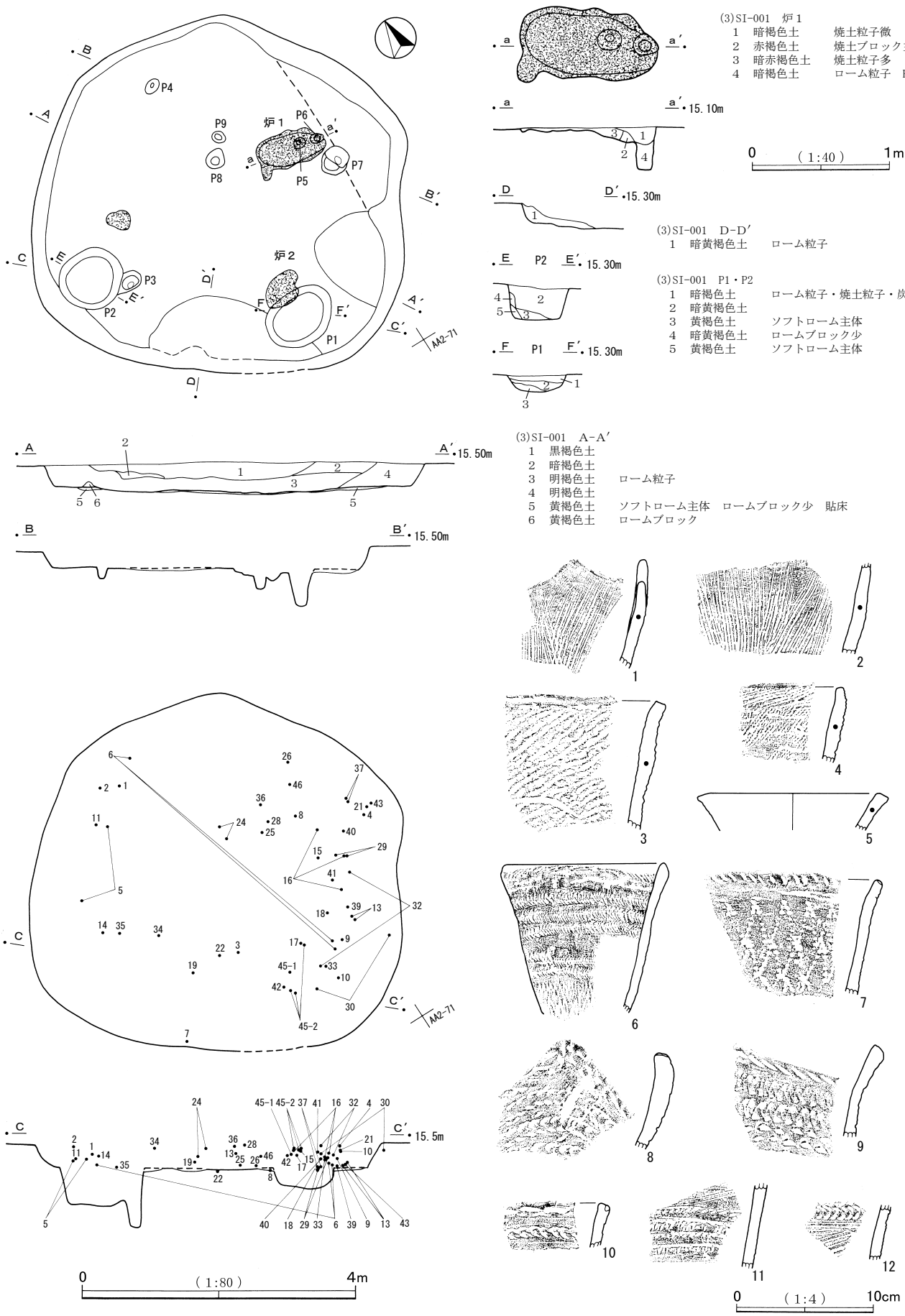
44～46は詳細な時期が不明なものである。44は口唇部に細い竹管状の工具を刺突、沈線区画内に刺突文を充填する。前期のいずれかの時期に含まれるものであろう。45は横位の櫛描文が広めの無文部を挟み多段に施されるもので、無文部は赤彩されている。内面は横方向に磨かれる。46は底径8.2cmの無文の底部片である。

石器は石鏃未成品１点と黒曜石の砕片３点が出土しているが、図示できるものはなかった。

(3)SI－002（第23・24図、図版４・８・12・13・15）

Z2－48付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は4.34m×3.91m、確認面からの深さは34cmである。炉は南に位置し、規模は径60cm、深さ９cmである。ピットは11基で、床面からの深さは11cm～60cmとばらつきがある。南東壁～南壁際のピットが深く、他は浅い。

出土土器は浮島式と諸磯式が多く、黒浜式はわずかであった。本竪穴住居の時期は浮島式期である。１・２は黒浜式である。１はLRを地文とし、口縁部に結節沈線が１条巡る。２は附加条第１種（軸縄RLにＬを１本附加）で、遺存部上端に沈線がみえる。

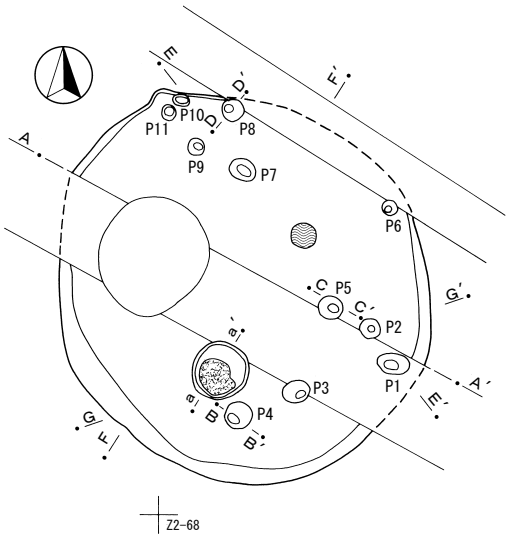


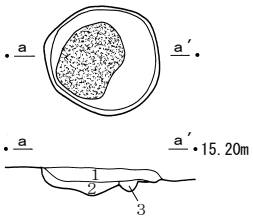
第21図　(3)SI-001①

第22図　(3)SI-001②

３～17は浮島式である。３～５は変形爪形文と集合沈線が施されている。６・７は同一個体と思われ、変形爪形文と半截竹管による連続刺突文が交互に施される。８・９は変形爪形文で、９はやや幅が広い。10・12は三角文か。11は集合沈線、２段の変形爪形文、三角文が整然と施される。13・14は輪積み痕の上に指頭圧痕による凹凸文を施すもので、14は胴部に波状貝殻文がみられる。15・16は波状貝殻文が施された胴部片である。ともに整形痕に櫛描文のような擦痕がみられ、同一個体と思われる。17は口唇部に刺突文をもち、口唇直下から波状貝殻文が施されている。

18～26は諸磯ｂ式である。18～20は平行沈線が施されるもので、20は渦巻き文が描かれる。環状の突起が付くと思われる。21はキザミを伴った浮線文で文様が描出されている。22の器形は壺形を呈する。キザミを伴った扁平な浮線文とRLを交互に多段に施している。23は平行沈線による木葉文、24はLRを地文と





(3)SI-002　炉

1	暗褐色土	ローム粒子多、ロームブロック少
2	暗赤褐色土	焼土ブロック主体 焼土粒子少
3	暗黄褐色土	ソフトローム主体

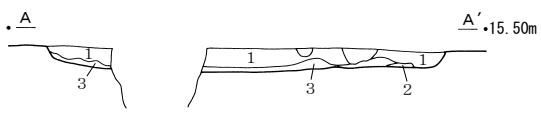
0 (1:40) 1m

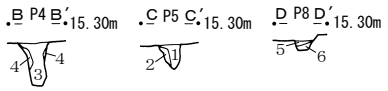
(3)SI-002

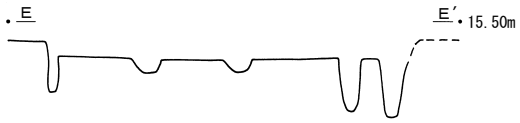
1	暗褐色土	ロームブロック微
2	暗黄褐色土	ロームブロック
3	褐色土	ローム粒子多、焼土粒子少
4	暗黄褐色土	ロームブロック

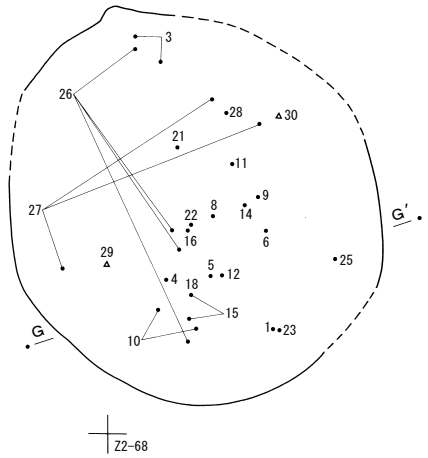
(3)SI-002　ピット

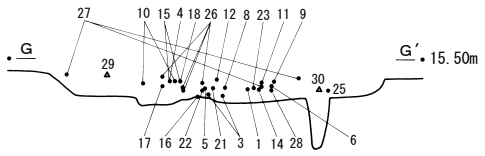
1	暗赤褐色土	焼土粒子・ローム粒子多
2	黄褐色土	ロームブロック主体
3	暗褐色土	焼土粒子少
4	暗黄褐色土	ロームブロック
5	黒褐色土	
6	暗黒褐色土	ローム粒子少



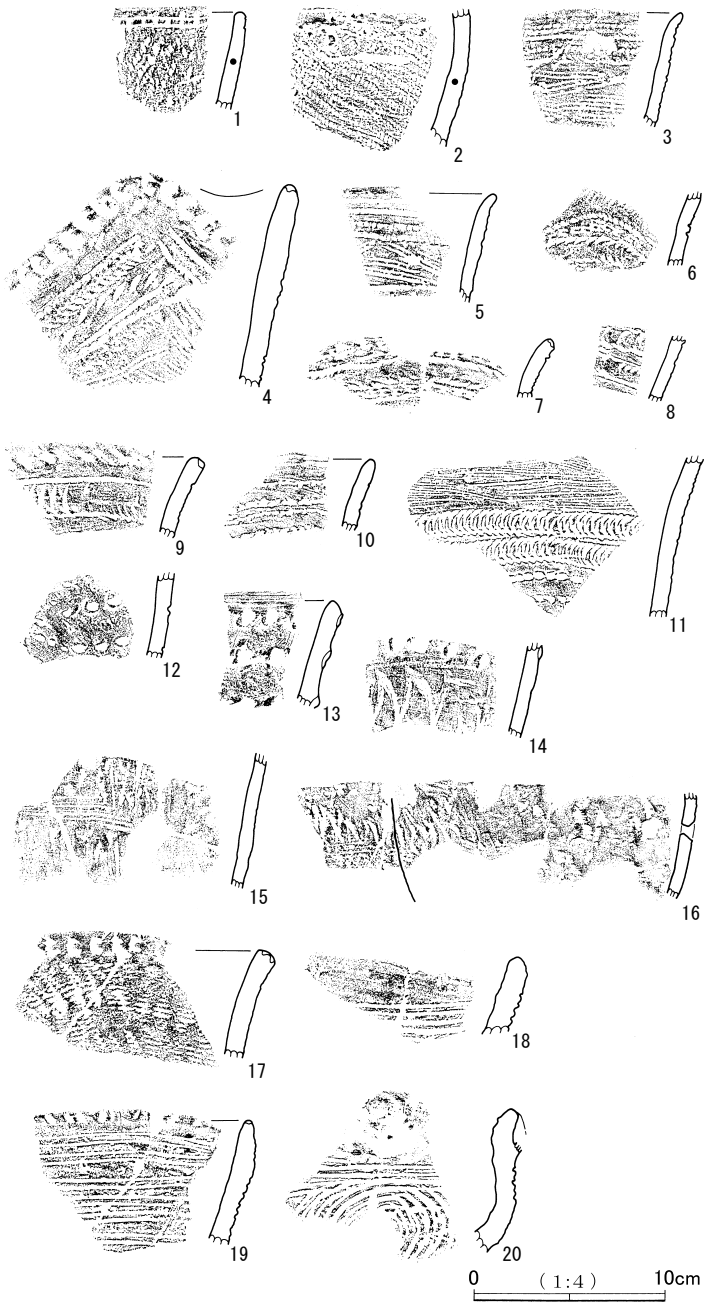






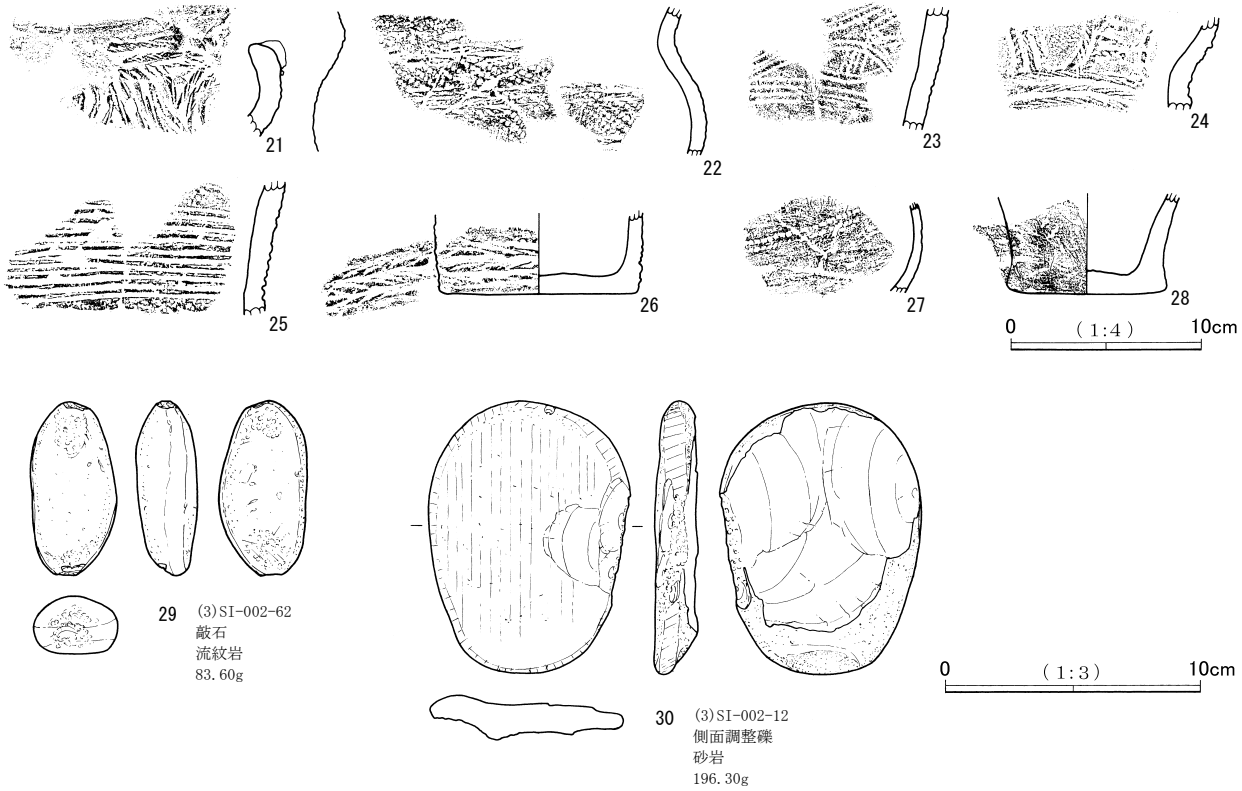


0 (1:80) 4m

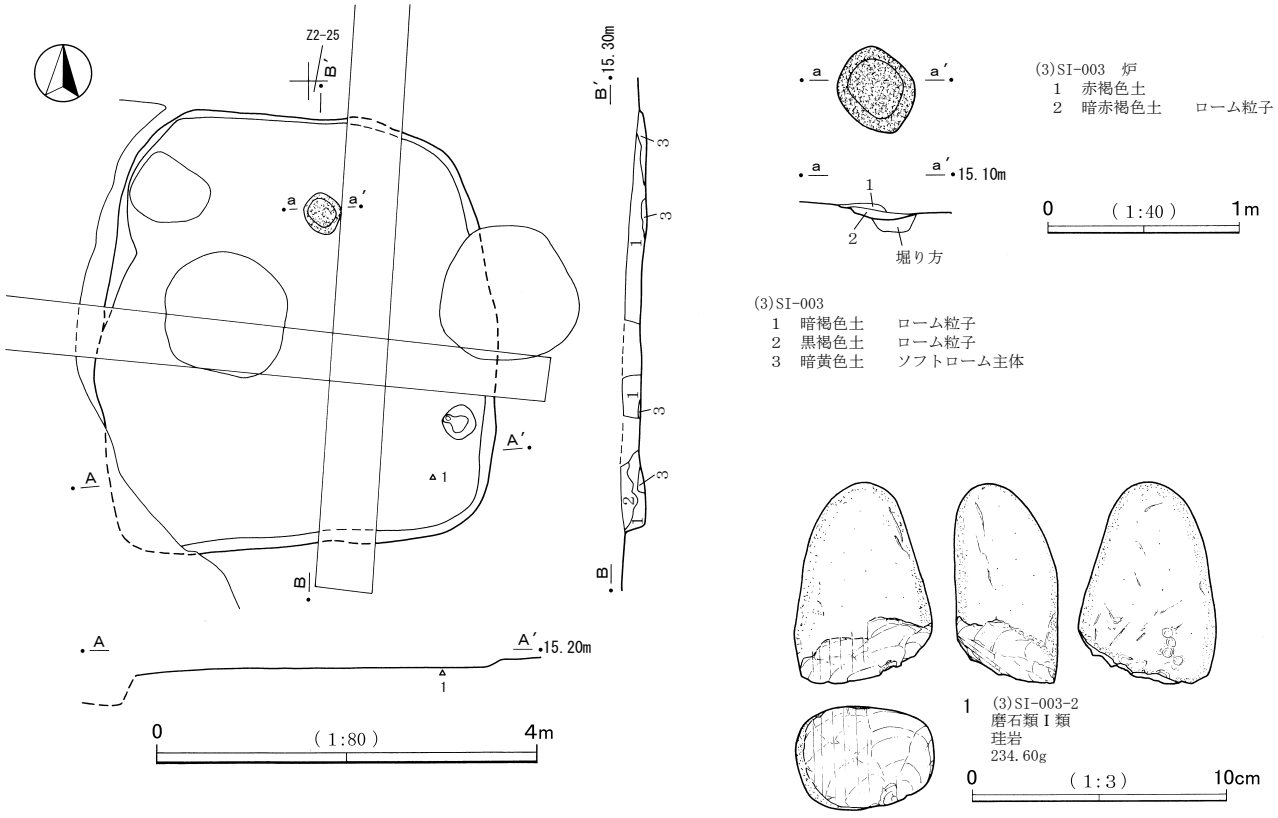


0 (1:4) 10cm

第23図　(3)SI-002①



第24図　(3)SI-002②



第25図　(3)SI-003

し、浮線文による意匠文が描かれる。25は集合沈線の上下にRLがみられる。26は底径10.3㎝で、胴部の立ち上がりはほぼ垂直である。キザミを伴った浮線文が多段に施される。

27は斜位の押引文が見られる胴部片、28は無文の底部片である。27・28は詳細な時期は不明だが、前期に属するものであろう。

石器は磨石類１点、敲石１点、砥石１点の計４点、礫片１点が出土しており、２点を図示した。29は敲石で、長楕円形～棒柱状を呈する流紋岩を素材とする。両端は敲打による剥離痕がみられる。器面は赤黒く変色している。30は砂岩製の側面調整礫である。被熱により裏面の大部分が剥落している。側面はかすかな擦痕がほぼ全周をめぐっている。

(3)SI－003（第25図、図版４・15）

Z2－24付近に位置する。西壁が近世の遺構により削平されているため不明瞭だが、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。規模は4.68m×4.26m、確認面からの深さは100㎝である。炉は北側中央に位置し、規模は46㎝×40㎝、深さ８㎝である。ピットは南東壁際から１基検出された。床面からの深さは12㎝である。

出土土器は黒浜式を少量出土しているが、図示できるものはなかった。

石器は磨石類２点、敲石１点、軽石１点が出土し、１点を図示した。１は磨石類Ⅰ類で、珪岩を素材とする。自然面は黄褐色で滑らか、剥離面は白色の角張った結晶質で、裏面に直径4㎜の敲打痕のようなものが複数みられるが器面に荒れは生じていない。この平坦面から派生した敲打の衝撃により斜めに分断され、剥離面片面は擦れて凹凸がなくなる。また、鋭角の稜も弱く磨耗する。

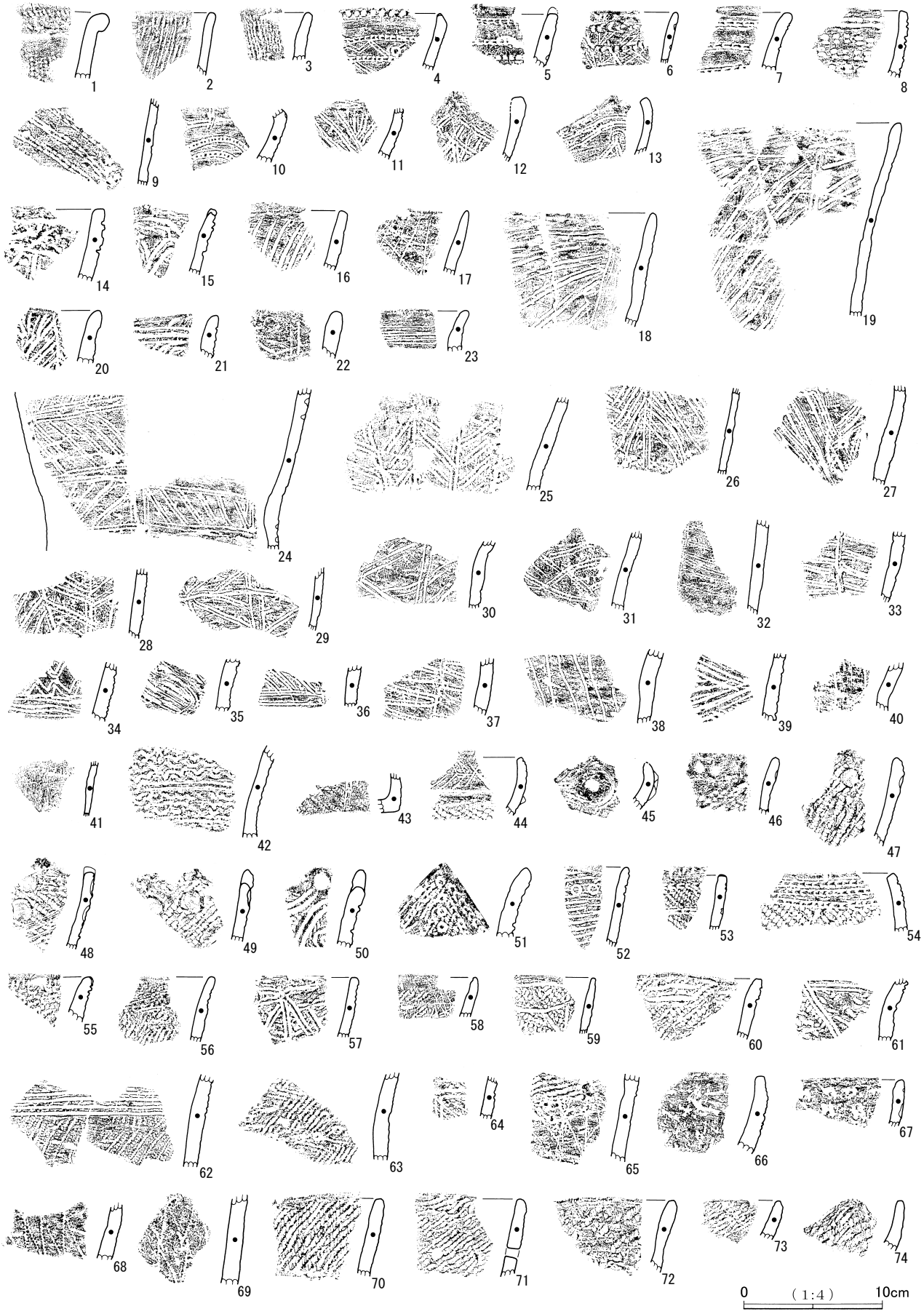
２　遺構外出土遺物

縄文土器（第26～28図、図版８・13・14）

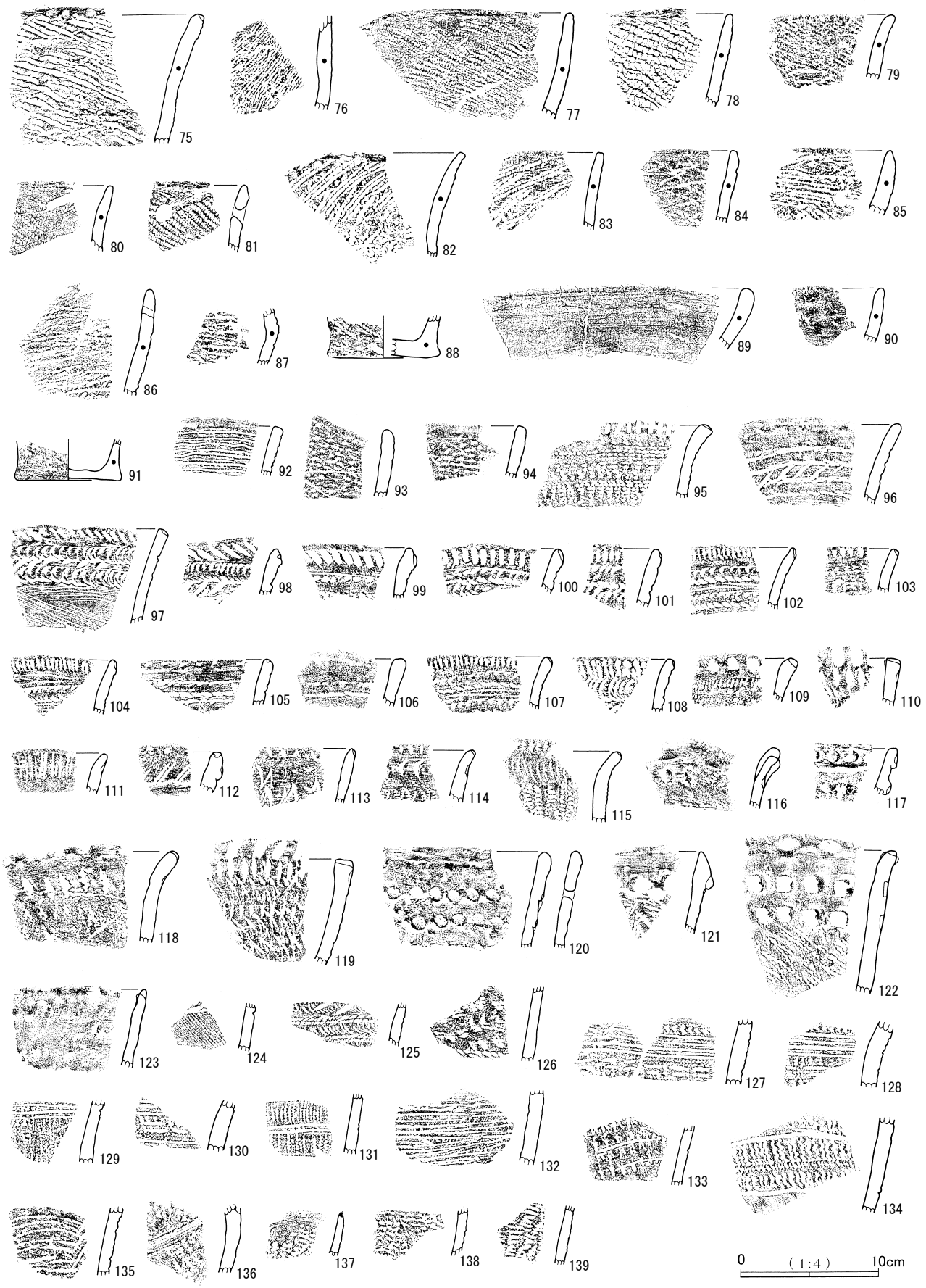
１～３は撚糸文系土器である。１は口唇部が肥厚し、外反する。口唇部および胴部にRLが施される。井草式であろう。２は撚糸文Ｌ、３は撚糸文Ｒが密に施される。夏島式であろう。

４～91は黒浜式であろう。４～11は押引文、有節平行沈線、刺突文が施されるものである。12～42は沈線文による葉脈文や鋸歯状文、波状文が描かれる。43は結節沈線が垂下する。44は隆起線によって区画された口縁部に矢羽状の沈線文が描かれる。胴部はRLである。45は中央に凹みをもつ円形の貼付文が付される。貼付文の下側を囲むように平行沈線が施されている。46～65は縄文を地文に円形凹文、刺突文、結節沈線、沈線等が加えられる。66は櫛歯状工具による列点文、67は縦位の連続刺突文が施される。68・69は波状貝殻文である。70～88は単一の原体による斜縄文である。70～74・76は無節Ｌ、75は無節Ｒ、77～81はRL、82・83は附加条、84は網目状撚糸文Ｌ、85は撚糸文Ｒ、86～88は撚糸文Ｌによる。89～91は無文である。

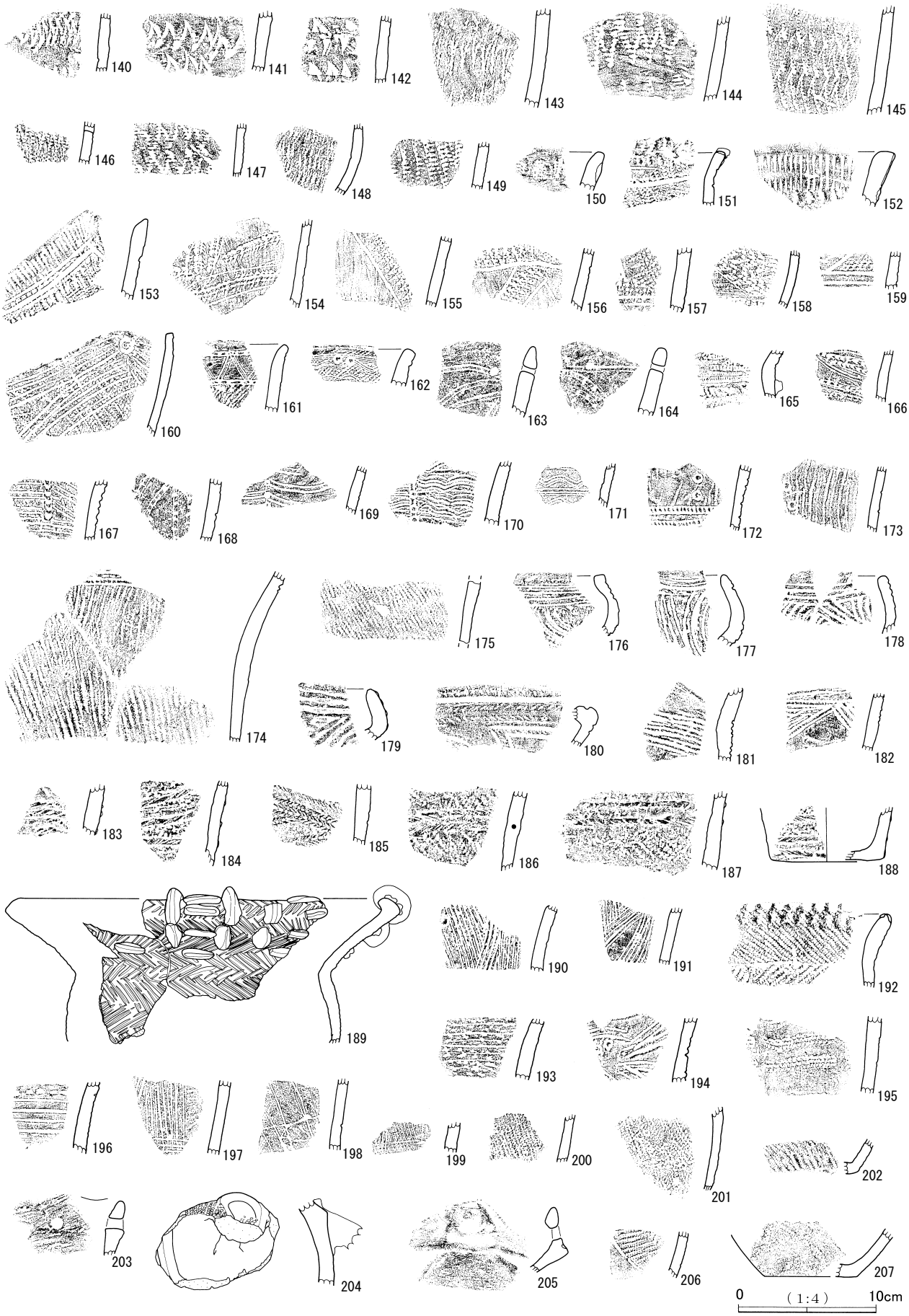
92～149は浮島式であろう。92は平行沈線、93は櫛歯状工具による連続刺突文、94は沈線と貝殻背圧痕文が施される。95・103・109・113・118は波状貝殻文、96～98・100～102・104～108変形爪形文が施される。99は三角文か。110は爪形文、111は口縁部に条線帯をもつ。112は輪積み痕の上に斜位の平行沈線を施し、条線帯としている。114・116は口縁部に貝殻腹縁による圧痕を有する。115の口唇部のキザミは貝殻腹縁による。117・120・121は輪積み痕の上に指頭圧痕による凹凸文を施す。119は波状貝殻文をベースに口縁部に爪形文を施す。122は口縁部に連続刺突文が２条巡り、胴部に波状貝殻文が施される。123は輪積み痕をなで消している。124は撚糸文Ｌ、125は変形爪形文、126は押引状の貝殻腹縁文と変形爪形文が施される。127・128・130は同一個体と思われる。貝殻腹縁文を地文とし、平行沈線と列点文が施される。129は撚糸



第26図　遺構外出土縄文時代遺物①



第27図　遺構外出土縄文時代遺物②



第28図　遺構外出土縄文時代遺物③

文Ｒを地文とする。131・134は貝殻腹縁文を地文に沈線文が施される。132は集合沈線、133・136は波状貝殻文を地文に沈線が施される。135･138は貝殻腹縁文、137は貝殻背圧痕文、139は押引状の貝殻腹縁文、140～149は波状貝殻文である。

150～159は興津式であろう。150は貝殻による凹文か。151は波状貝殻文を施した後沈線が引かれる。152は口縁部に条線帯をもつ。153は波状口縁で、口縁部に条線帯をもち、波状貝殻文、沈線が施される。154は沈線区画内に貝殻腹縁文を充填したものか。155～159は磨消貝殻文である。

160～191は諸磯式であろう。160は波状口縁の頂部に円形刺突文を配する。附加条第１種（軸縄RLにＬ１本附加）を地文として沈線が施される。161は口縁部に結節沈線で区画された文様帯をもち、鋸歯状の沈線文が充填される。胴部に無節Ｌが施される。162は４本一組の櫛歯状工具により波状文が描かれ、円形刺突文を有する。地文はLRであろう。163は沈線による葉脈文か。164は結節沈線により同心円状の文様を描く。163・164は焼成前の穿孔がみられる。165は胴括れ部にキザミが施された隆帯が１条巡る。隆帯より上は連続刺突文による文様が描かれ、以下は撚糸文Ｒが施される。166は平行沈線による区画内に連続刺突文が充填される。167は垂下する有節平行沈線を起点とした葉脈文で、撚糸文Ｌを地文とする。168は平行沈線に重ねて爪形文が施されている。169は縦位の沈線と円形刺突文を起点とした肋骨文、170は横位の区画線を引き、４本一組の櫛歯状工具により波状文を描く。171は横位の沈線と波状沈線を交互に施している。172・173は撚糸文ｒを地文に縦列の円形刺突文が配される。以上は諸磯ａ式と思われる。

174は０段多条LRを地文とし、上端に結節沈線が巡る。175はRLが施される。176～180は口縁部が強く内湾する器形で、176～178は沈線文、179・180は浮線文が施される。181・182は多条沈線、183～188は浮線文が施される。184・186～188はRLを地文とする。以上は諸磯ｂ式であろう。

189は胴部に括れをもち、直線的に開く口縁部の端部が内屈する器形で、復元口径は26.8㎝である。半截竹管による矢羽状沈線が施され、口唇をまたぐように耳状突起を貼り付けている。また、横長の貼付文とやや縦長の貼付文も細かい単位で貼り付けられている。190・191は斜位の集合沈線が施されている。以上は諸磯ｃ式であろう。

192～202は前期の土器である。胎土に繊維を含んでおらず、浮島式もしくは諸磯式に含まれるものかもしれない。192はRLとLRが羽状に施文され、口唇部に押捺痕を有する。押捺痕の内側にもRLがみられる。193は横位の沈線と櫛歯状工具による列点文を施す。194は沈線文と円形刺突文がみられる。195は巻貝の殻表圧痕による押引文か。196は平行沈線と爪形文、197・199は集合沈線、198は細沈線、200～202はRLが施されている。

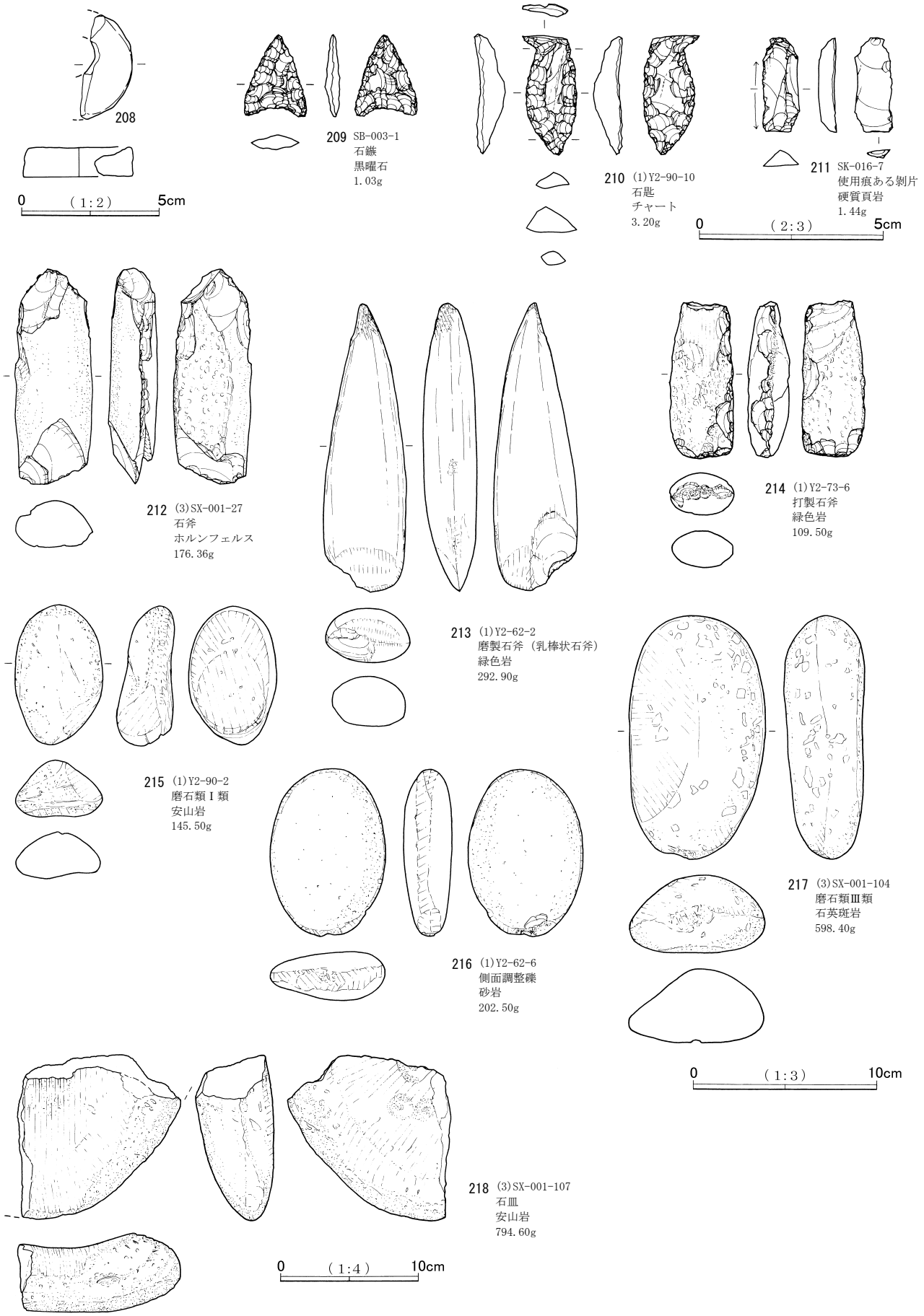
203は口縁部穿孔が横位に連続する。時期は不明である。204は加曽利Ｅ式、205は堀之内式、206は加曽利Ｂ～安行式、207は後期の浅鉢か。

土製品（第29図、図版14）

土製玦状耳飾りと思われるものが１点出土している。208は1/3程が遺存する。遺存部分の最大長は38㎜、最大厚11㎜、最大幅19㎜である。

石器類（第29図、図版15）

花前Ｉ遺跡から出土した石器類は57点である。ここでは10点を図示した。209は石鏃である。二等辺三角形の凹基鏃で、基部の抉りは緩い。縁辺から斜め下に向かって剥離され、やや扁平である。左側縁は鋸歯状を呈する。青みがかった黒色で、白色の夾雑物をごく少量含む黒曜石製である。210は撮部が欠損し



第29図　遺構外出土縄文時代遺物④

た石匙である。厚みある剥片を素材とし、両側縁が正裏面から丁寧に加工される。特に左側縁は厚みを活かした弧状に整形され、技術力の高さをうかがうことができる。石材は青緑灰色の半透明であり、節理や網目状構造を全く含まないごく良質なチャート製である。211は頭部調整のある剥片で、点状の打面をもち両側縁は平行、末端は欠損している。左側縁に微細な刃こぼれがみられる。淡褐色の硬質頁岩製で、旧石器の可能性もある。212は乳棒状石斧もしくはその再加工品である。ホルンフェルスを素材とする。上端部には稜を潰すような敲打痕、下部の鋭い稜上には細かな刃こぼれがみられる。裏面の左半部には敲打による成形と稜の作出がみられる。近世の鍛冶遺構(3)SX－001からの出土であるが、(3)SX－001は(3)SI－003を削平しており、(3)SI－003に伴う可能性がある。213は乳棒状の磨製石斧である。基部は破損後、敲打と磨りにより尖鋭に補正される。刃部片側は刃先から器厚が大きく抉られ、磨りによる調整が試みられるも再生には至らない。器面は器軸に沿って面取り状に整形される。このため断面形はいくつもの直線の集合で表される。石材は緑色岩である。214は乳棒状石斧を再加工した打製石斧で平面形は長方形を呈する。加工は外側から内側へ向かう剥離と、敲打により成形されており、片側の平面上方に素材時の磨面が残っている。215は安山岩を素材とする磨石類Ⅰ類である。磨耗痕が右下部と裏面にみられ、裏面中程はゆるやかに凹む。旧石器時代では主に剥片石器の素材とされる石材であるが、当遺跡では縄文時代の加工具として利用されたようである。216は側面調整礫である。楕円･板状の砂岩製で､左側の厚みは少ない。縁辺全周に横～斜め方向の弱い磨り痕がめぐり、下端部に弱い敲き痕がみられる。(3)SI－002の30と近似する。217は石英斑岩を素材とする磨石類Ⅲ類である。平面は長楕円形、横断面は三角形状である。左面は線状の擦痕が顕著で、平坦である。下端部に敲打痕がみられる。角張った石英の斑晶がまんべんなく含まれ、被熱により赤味を帯びる。218の石皿は、想定される完形の1/4以下で遺存部位は右下半部である。楕円形状で縁は中央部分の磨り面によって形成される｡下部には減厚による掃き出し口が設けられている。裏面に直径1.5㎝～2.5㎝、深さ0.7㎝～1.2㎝の凹み３か所が認められるが、破断面によって切られる。安山岩製である。

第３節　奈良・平安時代

１　掘立柱建物

(1)SB－001（第30・34図、図版４）

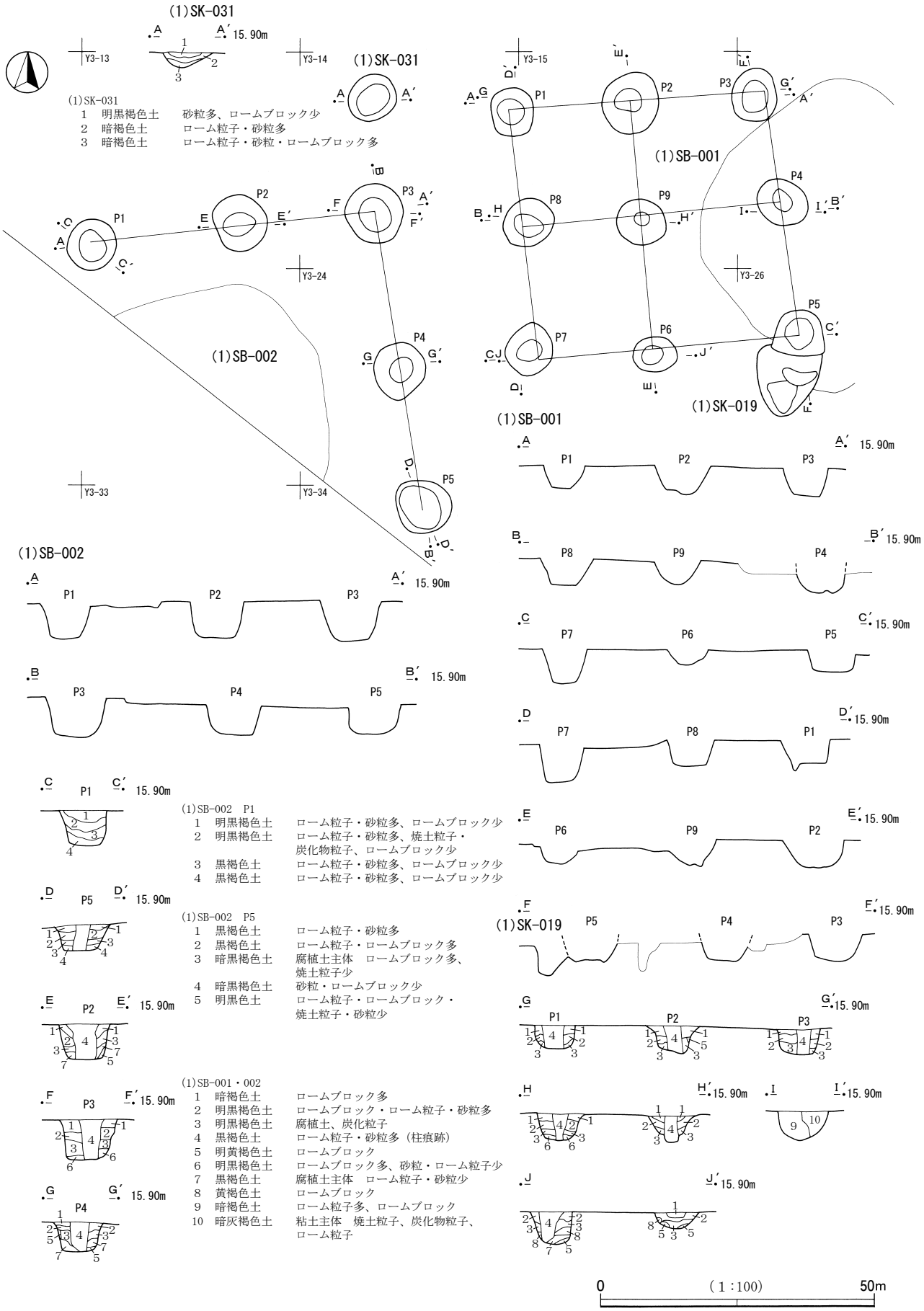
Y3－15付近に位置する。桁行２間（4.66m）×梁行２間（4.36m）の総柱建物である。主軸方位はN－10°－Wを指す。柱掘方は径82㎝～118㎝の楕円形、深さは39㎝～69㎝、柱間寸法は2.3mである。

出土遺物は須恵器蓋・杯・高台付杯、土師器杯が出土しているが、小片が多く２点を図化した。１・２は土師器杯の底部である。いずれも体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施されている。

(1)SB－002（第30・34図、図版４）

Y3－13付近に位置する。南西部分は調査区外のため未検出である。桁行・梁行とも２間以上になると思われ、現況で5.50m×5.20mを測る。主軸方位はN－８°－Wか。柱掘方は径93㎝～113㎝の楕円形、深さは33㎝～85㎝である。

遺物の出土は少なく、２点を図化した。１は須恵器蓋で、口縁部を欠損する。天井部は回転ヘラケズリの後、扁平な擬宝珠状のつまみを貼り付けている。２は須恵器杯である。やや大きめの底部から体部が直線的に立ち上がる。底部切り離しは回転ヘラ切り、体部下端に手持ちヘラケズリを加える。



第30図　(1)SB-001、(1)SB-002、(1)SK-019、(1)SK-031

(1)SB－003（第31・33・34図、図版２・４・16）

Y2－73付近に位置する。(1)SB－004、(1)SB－005と重なり合う。桁行４間（9.40m）×梁行２間（4.64m）の片廂建物で、主軸方位はN－１°－Eを指す。柱掘方は径66㎝～132㎝の楕円形、深さは34㎝～87㎝、柱間寸法は1.8m～2.4mである。柱穴の切り合い関係から、重なり合う３棟の建物のうち、本遺構が最も古く、次いで(1)SB－005が建てられ、(1)SB－004・(1)SB－007が最も新しいと思われる。

なお、土層説明については、図中に配する余裕がないため、ここで記述する。

(1)SB－003　P1

1	黒褐色土	砂粒、ローム粒子、焼土粒子
2	明黒褐色土	ローム粒子多
3	暗黄褐色土	ローム主体
4	暗褐色土	ローム粒子・砂粒多
5	暗黒褐色土	腐植土主体　ローム粒子・砂粒微
6	暗黒褐色土	ローム粒子・砂粒多、焼土微

(1)SB－003　P2

1	黒褐色土	ロームブロック
2	明黒褐色土	焼土粒子・炭化物粒子少
3	黒褐色土	ローム粒子・砂粒多
4	暗褐色土	砂粒多、ローム粒子
5	暗褐色土	砂粒主体　ローム粒子、粘土粒子

(1)SB－003　P3

1	暗褐色土	砂粒・ロームブロック多
2	明黒褐色土	砂粒多、ロームブロック
3	明黒褐色土	砂粒・ロームブロック多
4	明黒褐色土	砂粒・ロームブロック多
5	暗黄褐色土	ローム粒子、ロームブロック
6	黒褐色土	腐植土主体　砂粒・ローム粒子・ロームブロック多
7	暗褐色土	ローム粒子、砂粒少
8	明黒色土	砂粒多、焼土粒子・炭化物粒子少

(1)SB－003　P6

1	明黒褐色土	ロームブロック少
2	暗褐色土	砂粒・ローム粒子多
3	暗黄褐色土	ロームブロック主体
4	明黒褐色土	ロームブロック
5	黒褐色土	炭化物粒子・焼土粒子多
6	暗黒褐色土	砂粒多、ロームブロック
7	暗黄褐色土	砂粒・ロームブロック主体
8	明黒色土	ローム粒子・砂粒多、炭化物粒子・焼土粒子少

(1)SB－003　P7

1	明黒褐色土	ローム粒子、焼土粒子
2	明黒褐色土	ローム粒子、ロームブロック、砂粒
3	明黒色土	砂粒多、ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少
4	明黒褐色土	ロームブロック、ローム粒子、砂粒少
5	暗黒褐色土	ロームブロック
6	明黒色土	砂粒多、ローム粒子微

(1)SB－003　P8

1	暗褐色土	砂粒・ローム粒子多、焼土粒子微
2	明黒褐色土	ローム粒子・ロームブロック多
3	明黒褐色土	ローム粒子・ロームブロック多、砂粒
4	暗褐色土	ローム粒子・砂粒多、ロームブロック
5	明褐色土	ロームブロック多
6	黒褐色土	炭化物粒子多
7	明黒色土	砂粒多、ローム粒子少

(1)SB－003　P11

1	暗褐色土	砂粒・ローム粒子多、焼土粒子微
2	暗黒褐色土	砂粒・ローム粒子多、炭化物粒子、焼土粒子微
3	暗黒褐色土	ローム粒子少
4	暗黒褐色土	砂粒、ローム粒子少

(1)SB－003　P12

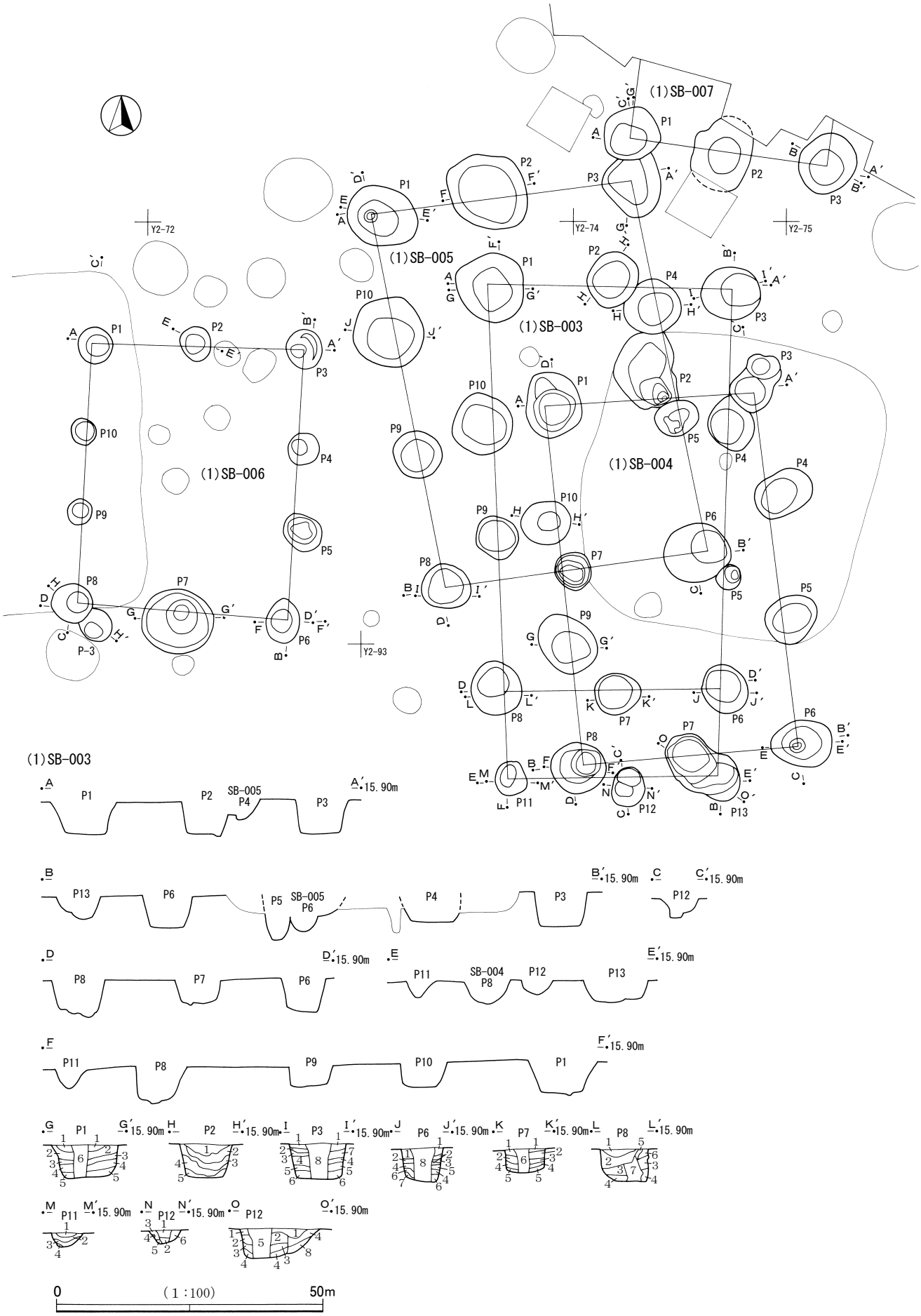
1	明黒褐色土	ローム粒子・砂粒多
2	明黒褐色土	ローム粒子多、砂粒、炭化物粒子少
3	暗褐色土	ローム粒子
4	黄褐色土	ロームブロック
5	暗黄褐色土	ローム粒子主体　砂粒微
6	暗褐色土	ローム粒子、炭化物粒子、砂粒

(1)SB－003　P13

1	暗黒褐色土	ロームブロック
2	明黒褐色土	ロームブロック多
3	明黒褐色土	ロームブロック
4	暗黒褐色土	砂粒多、ロームブロック
5	明黒色土	砂粒多、ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子
6	黒色土	ロームブロック微
7	明黒褐色土	ローム粒子多、砂粒微
8	暗褐色土	ローム粒子主体　ロームブロック少

遺物の出土量は多く、23点を図示した。１は土師器杯である。体部のみの遺存で、外面体部下端に回転ヘラケズリが施されている。

２～４は須恵器蓋である。２・３の口縁部は短く折り曲げられる。４はつまみのみの遺存である。胎土に雲母と白色粒子を含む。５～９は須恵器杯である。５は底径と口径の差が大きく、体部が直線的に開く。底部と外面体部下端に手持ちヘラケズリが施される。胎土に白色粒子と雲母を多く含み、新治産である。６は底部回転ヘラ切りの後底部と外面体部下端に手持ちヘラケズリを施す。７の底部切り離しは不明で、



第31図　(1)SB-003～(1)SB-007・(1)P-3

底部及び体部下端の調整は手持ちヘラケズリである。８の底部は回転ヘラ切り後粗いナデ、体部下端に手持ちヘラケズリを施す。９は底部回転糸切り後無調整、胎土に白色針状物を多く含む。10は須恵器長頸壺の底部である。暗灰色を呈し、底部内面には釉のたまりがみられる。外面及び底部に回転ヘラケズリを施した後、高台を貼り付けている。11～13は須恵器高台付杯である。いずれも底部回転ヘラケズリ後高台を貼り付けている。14は須恵器高盤である。杯部内面体部下端に沈線状の凹みがみられる。外面は杯部下端に回転ヘラケズリを施した後脚部を貼り付けている。15は須恵器鉢である。口縁部を欠損する。底部と外面体部下端に手持ちヘラケズリが施される。

16・17は常陸型の土師器甕である。口縁部が強く外反し、端部は上方につまみ上げられる。胎土に雲母と多量の白色粒子を含む。

18～20は須恵器甕である。いずれも口縁端部が下方に摘み出される形で、胎土に雲母を含んでいる。18・20の胴部に横位の平行タタキが施され、18の内面には当て具痕もみられる。21は須恵器甑である。灰黄色を呈し、胎土に雲母と白色粒子を多く含む。22・23は須恵器甕の胴部片である。いずれも外面にタタキ目を有し、擬格子状を呈する。

(1)SB－004（第31～34図、図版２・４・16）

Y2－73付近に位置する。桁行３間（6.64m）×梁行２間（4.00m）の側柱建物で、主軸方位はN－7°－Wを指す。柱掘方は径48㎝～135㎝の楕円形、深さは29㎝～83㎝、柱間寸法は2.0m～2.2mである。

出土遺物は15点を図示した。１・２は土師器杯である。１は底径と口径の差が小さく、箱形を呈する。底部及び外面体部下端に回転ヘラケズリが施される。２は底部のみの遺存で、外面の調整は１と同様である。

３～６は須恵器蓋である。３は扁平な擬宝珠状のつまみが付き、胎土に雲母を多く含む。４～６はいずれも口縁部のみの遺存で、４はやや内側へ、５・６は下方へ端部が折り曲げられる。７・８は須恵器杯である。７の底径は口径の1/2で、体部が直線的に立ち上がる。回転ヘラ切りの後底部及び外面体部下端に手持ちヘラケズリを施す。胎土に白色粒子を多く含むが、雲母は微量である。８も底径と口径の差が大きく、口縁部がわずかに外反する。底部及び体部下端に手持ちヘラケズリが施される。胎土に雲母を多く含む。新治産であろう。９～11は須恵器高台付杯である。９は箱形の杯に「ハ」の字状に開く高台が付く。長石、雲母などの混入物が多く、気泡による凹凸がみられるなど、あまり丁寧な作りではない。10も９と類似の器形で、雲母の混入は少量である。

12は土師器甕である。常陸型で、胴部外面には縦位のミガキが施される。ごく部分的ではあるが、胴部下端に布目状圧痕がみられる。底部に木葉痕が残る。

13は須恵器長頸壺の頸部である。内外面ともに釉が付着している。14・15は須恵器甕の胴部片である。14は同心円状のタタキが施される。灰白色を呈し、雲母を多く含む。新治産であろう。15は斜位の平行タタキで、下端にヘラケズリが施される。

(1)SB－005（第31～33・35図、図版２・４・16）

Y2－63付近に位置する。桁行３間（7.2m）×梁行２間（5.02m）の側柱建物で、主軸方位はN－10°－Wを指す。柱掘方は73㎝～159㎝、深さは28㎝～70㎝、柱間寸法は2.2m～2.6mである。

出土遺物は17点を図示した。１～７は土師器杯である。１は体部が内湾しながら立ち上がる器形である。底部は回転糸切り後外周部に回転ヘラケズリを加えるが、1/4周程削り残しがある。外面のロクロ目は強く、体部下端に回転ヘラケズリが施される。体部外面には墨書がみられるが、ロクロ目にかかり筆跡が乱れて

いるため判読できない。２は大きめの底部から体部が直線的に開く器形である。底部及び外面退部下端に回転ヘラケズリが施される。３は口縁部を欠損する。内面にミガキと黒色処理が施される。底部調整は摩滅のため不明瞭である。４は体部が内湾しながら立ち上がる器形で､内面にミガキと黒色処理が施される。底部は回転糸切り後無調整、外面体部下端に手持ちヘラケズリが施される。５は静止糸切り後、底部と体部下端に手持ちヘラケズリを加える。６は箱形を呈すると思われる。底部及び外面体部下端にヘラケズリが施されるが、回転か手持ちか判然としない。７は底部回転糸切りの後、外周部と体部下端に手持ちヘラケズリが施される。

８～12は須恵器蓋である。８は扁平、９は擬宝珠状のつまみをもつ。８の口縁部内面には円形に変色している箇所があり、重ね焼きの可能性がある。10・11の口縁部は短く下方に折り曲げられている。13は須恵器杯で、口縁部が緩やかに外反する。14・15は須恵器高台付杯である。底部回転ヘラケズリの後高台を貼り付けている。16・17は須恵器甕の胴部片である。16は外面に縦位の平行タタキが施され、釉が掛かっている。胎土は精緻で、灰白色を呈する。17のタタキ目は横位で、胎土に雲母を多く含み、新治産である。

(1)SB－006（第31～33・35図、図版２）

Y2－71付近に位置する。３間（5.08m）×２間（4.05m）の側柱建物で、主軸方位はN－5°－Eを指す。柱掘方は49㎝～83㎝、深さは56㎝～85㎝、柱間寸法は1.44m～2.00mである。

出土遺物は土師器杯、須恵器蓋・杯・高台付杯・長頸瓶などがあるが、いずれも小片で、図化できたのは１点である。１は土師器甕である。器厚が薄く、口縁部が「コ」の字に近い形状をとることから武蔵型と思われる。外面には横方向のヘラケズリが施される。

本遺構の西側、縄文時代の竪穴住居(1)SI－001の覆土中から土器のほか、鉄滓が集中して出土した。これらは遺構に伴わないため、遺構外出土遺物として扱ったが、本遺構との関連が想起される。

(1)SB－007（第31～33・35図、図版２・16）

Y2－65付近に位置する。南端部のみの検出で、梁行２間、柱間3.80mを測る。周囲の掘立柱建物の検出状況から南北棟と推測される。柱掘方は径110㎝～124㎝、深さ60㎝～75㎝である。

出土遺物は５点を図示した。１は土師器杯である。体部が内湾しながら立ち上がる器形で、口縁部を欠損する。底部は回転糸切り後回転ヘラケズリを施す。胎土に雲母微粒子を多く含み、白色針状物がわずかにみられる。

２は須恵器杯で、底径と口径の差が大きく、口縁部が外反する。底部と外面体部下端に手持ちヘラケズリが施される。３は須恵器高台付杯である。箱形の杯に「ハ」の字に開く高台が付く。胎土に雲母を多く含む。４は須恵器小型壺である。胴部以下を欠損するが、肩部に稜を有すると思われる。色調は暗灰色、胎土に白色粒子を多く含む。５は須恵器甕の胴部片である。縦位の平行タタキが施される。

２　土坑

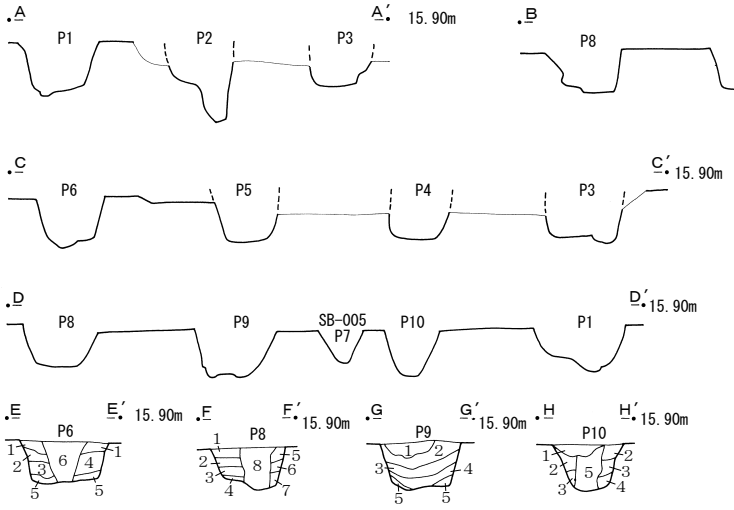
(1)SK－001（第38図、図版４）

Z3－85に位置する。３基のピットが連なる形状を呈する。便宜的に北側のものをA、南側のものをB、西側のものをCとした。Aは0.93m×0.9mの楕円形で、確認面からの深さは84㎝、Bは0.82m×0.72m、深さ60㎝、Cは0.58m×0.57m、深さ18㎝である。

遺物は出土していない。

(1)SK－002（第38図、図版４）

(1)SB-004



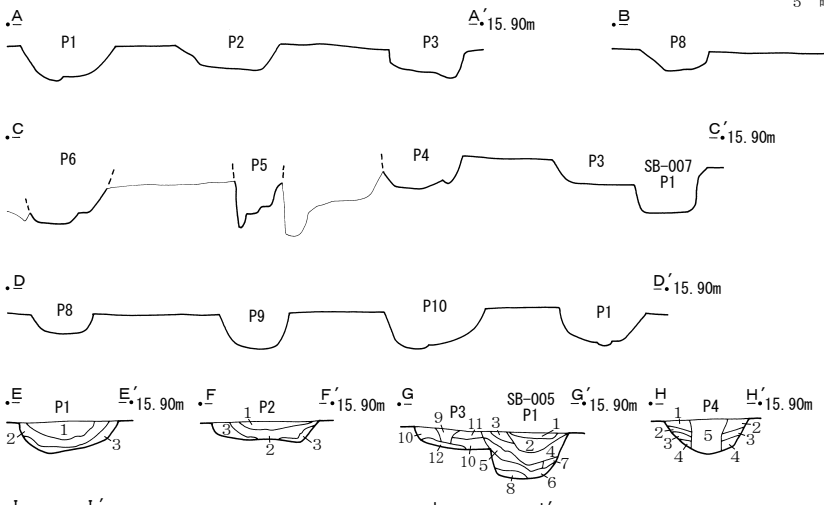
(1)SB-004　P6
1　明黒褐色土　ロームブロック、焼土ブロック
2　明黒褐色土　ローム粒子、ロームブロック、砂粒
3　明黒色土　ロームブロック
4　暗黄褐色土　ロームブロック
5　暗黒褐色土　砂粒・ローム粒子多
6　明黒褐色土　ロームブロック、砂粒、ローム粒子、炭化物粒子

(1)SB-004　P8
1　暗褐色土　ロームブロック
2　暗褐色土　ロームブロック
3　暗褐色土　ロームブロック
4　暗褐色土　ローム粒子、砂粒
5　黒褐色土　炭化物粒子多
6　明黒褐色土　炭化物粒子多、ロームブロック
7　明黒褐色土　砂粒多
8　明黒色土　砂粒・ローム粒子多、焼土粒子・炭化物粒子少

(1)SB-004　P9
1　明黒褐色土　砂粒多、ローム粒子少
2　明黒褐色土　ローム粒子、ロームブロック、砂粒
3　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック
4　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック
5　明褐色土　ローム粒子主体、砂粒多

(1)SB-004　P10
1　明黒色土　炭化物粒子多、焼土粒子少
2　黒褐色土　ローム粒子多
3　暗黒褐色土　ローム粒子・砂粒多
4　暗黒褐色土　ロームブロック
5　暗黒褐色土　砂粒・ローム粒子多

(1)SB-005



(1)SB-005　P1
1　暗黒褐色土　砂粒多、焼土粒子微
2　暗黒褐色土　腐植土、ローム粒子、砂粒、焼土粒子微
3　黒褐色土　腐植土、ローム粒子・砂粒多、焼土粒子微

(1)SB-005　P2
1　黒褐色土　腐植土、砂粒多
2　明黒褐色土　腐植土、砂粒・ローム粒子多
3　暗褐色土　ローム粒子多

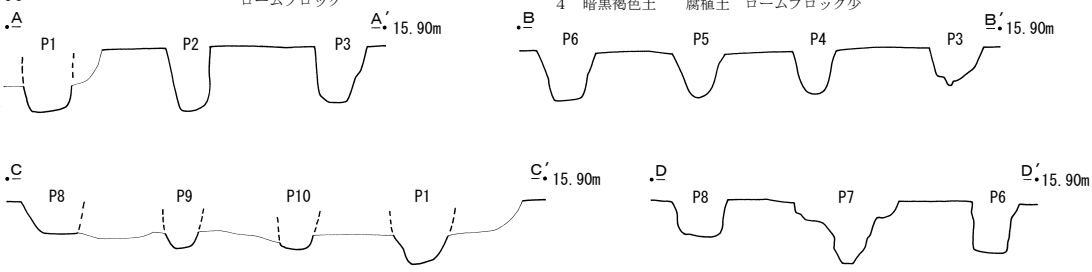
(1)SB-005　P3
1　黒色土　腐植土主体　焼土粒子少
2　明黒色土　腐植土主体　焼土粒子・ローム粒子・炭化物粒子少
3　明黒色土　腐植土主体　焼土粒子・ローム粒子少
4　灰黒褐色土　腐植土主体　焼土粒子多、ローム粒子少
5　灰黒褐色土　腐植土主体　焼土粒子多、ローム粒子・ロームブロック少
6　暗褐色土　ローム粒子・砂粒多、ロームブロック少
7　明黒褐色土　炭化物粒子多、焼土粒子少
8　暗褐色土　砂粒、ローム粒子、ロームブロック
9　黒褐色土　砂粒・ロームブロック多、炭化物粒子
10　明黒褐色土　ローム粒子多、ロームブロック・砂粒少
11　明黒色土　腐植土主体　ロームブロック、ローム粒子
12　暗黄褐色　ローム粒子・ロームブロック多

(1)SB-005　P4
1　黒褐色土　腐植土　ローム粒子・焼土粒子微
2　明黒褐色土　ローム粒子・砂粒多
3　暗褐色土　ローム粒子・砂粒多
4　暗黄褐色土　ローム粒子・砂粒多
5　明黒褐色土　ローム粒子、砂粒、炭化物粒子少

(1)SB-005　P8
1　暗褐色土　砂粒多、焼土粒子少
2　黒褐色土　腐植土主体　ローム粒子・砂粒少
3　明黒褐色土　腐植土主体　ローム粒子・砂粒少、ロームブロック

(1)SB-005　P10
1　暗褐色土　ローム粒子・砂粒多
2　明黒褐色土　ローム粒子・砂粒多
3　黒褐色土　腐植土　ローム粒子微
4　暗黒褐色土　腐植土　ロームブロック少

(1)SB-006



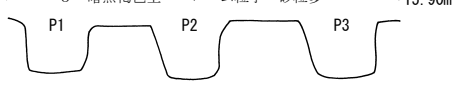
(1)SB-006　P2
1　黒褐色土　砂粒、ローム粒子
2　明黒褐色土　ローム粒子多
3　黄褐色土　ローム主体　砂粒微
4　暗褐色土　ローム粒子・砂粒多
5　暗黒褐色土　ローム粒子・砂粒多

(1)SB-006　P6
1　暗褐色土　砂粒多
2　暗褐色土　ローム粒子・砂粒多
3　明黒褐色土　ローム粒子
4　明黒褐色土　砂粒多、ローム粒子

(1)SB-006　P7
1　明黒褐色土　ローム粒子多
2　明褐色土　ロームブロック・ローム粒子多
3　黒色度　ローム粒子・砂粒少
4　黒褐色土　ローム粒子多
5　暗褐色土　ロームブロック
6　黄褐色土　ローム主体
7　暗褐色土　ロームブロック多
8　黒褐色土　ローム粒子・砂粒多

(1)SB-006　P8・P-3
1　明黒色土　砂粒・ローム粒子多
2　黒褐色土　砂粒・ローム粒子多
3　明黒褐色土　ローム粒子多
4　黒褐色土　ローム粒子・砂粒多
5　明黒色土　砂粒多、ローム粒子
6　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子、砂粒
7　暗褐色土　砂粒多、ローム粒子、焼土粒子
8　黒褐色土　砂粒・ローム粒子多、焼土粒子
9　黄褐色土　ロームブロック
10　暗黒褐色土　腐植土主体　砂粒、ローム粒子

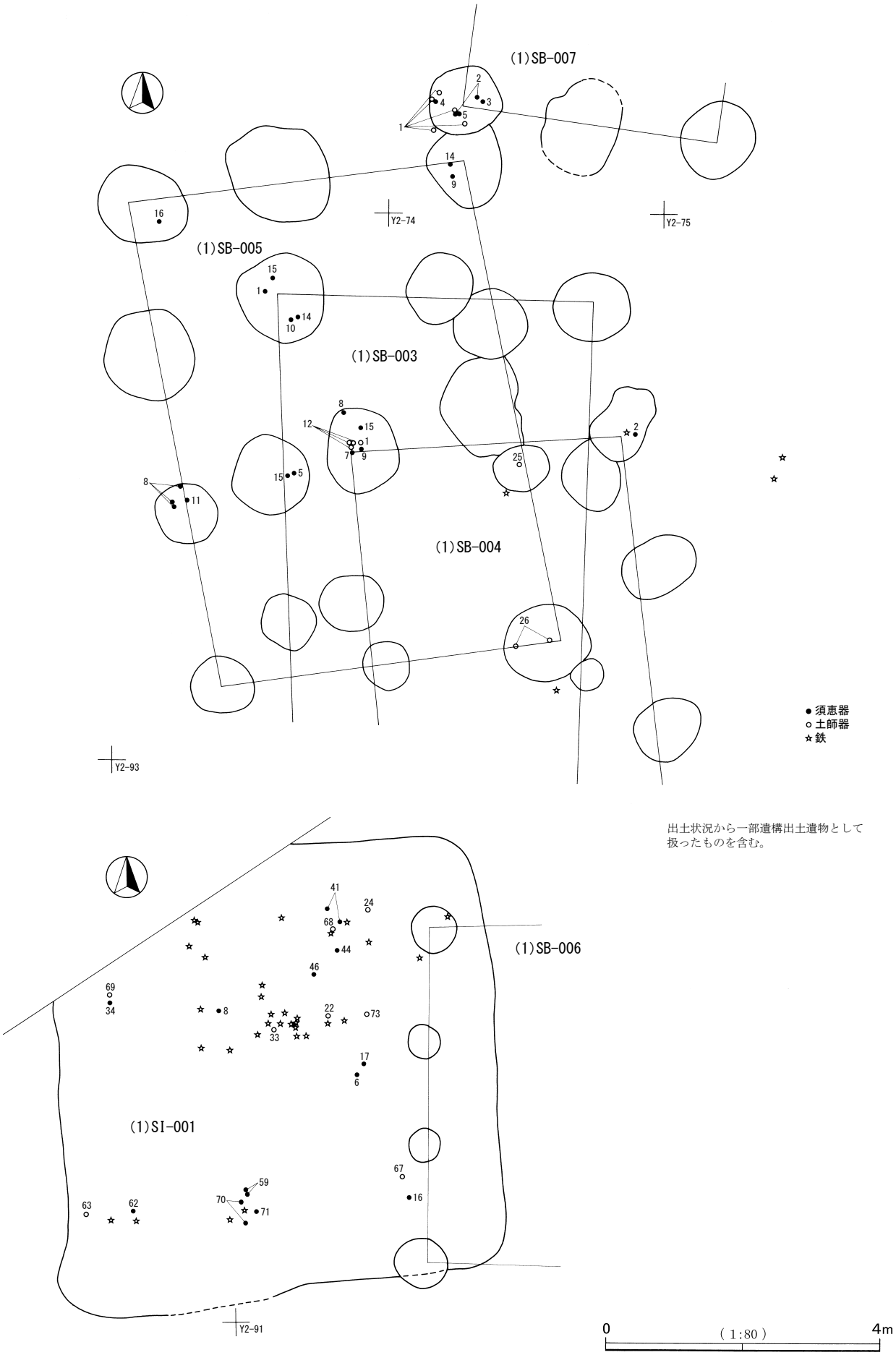
(1)SB-007



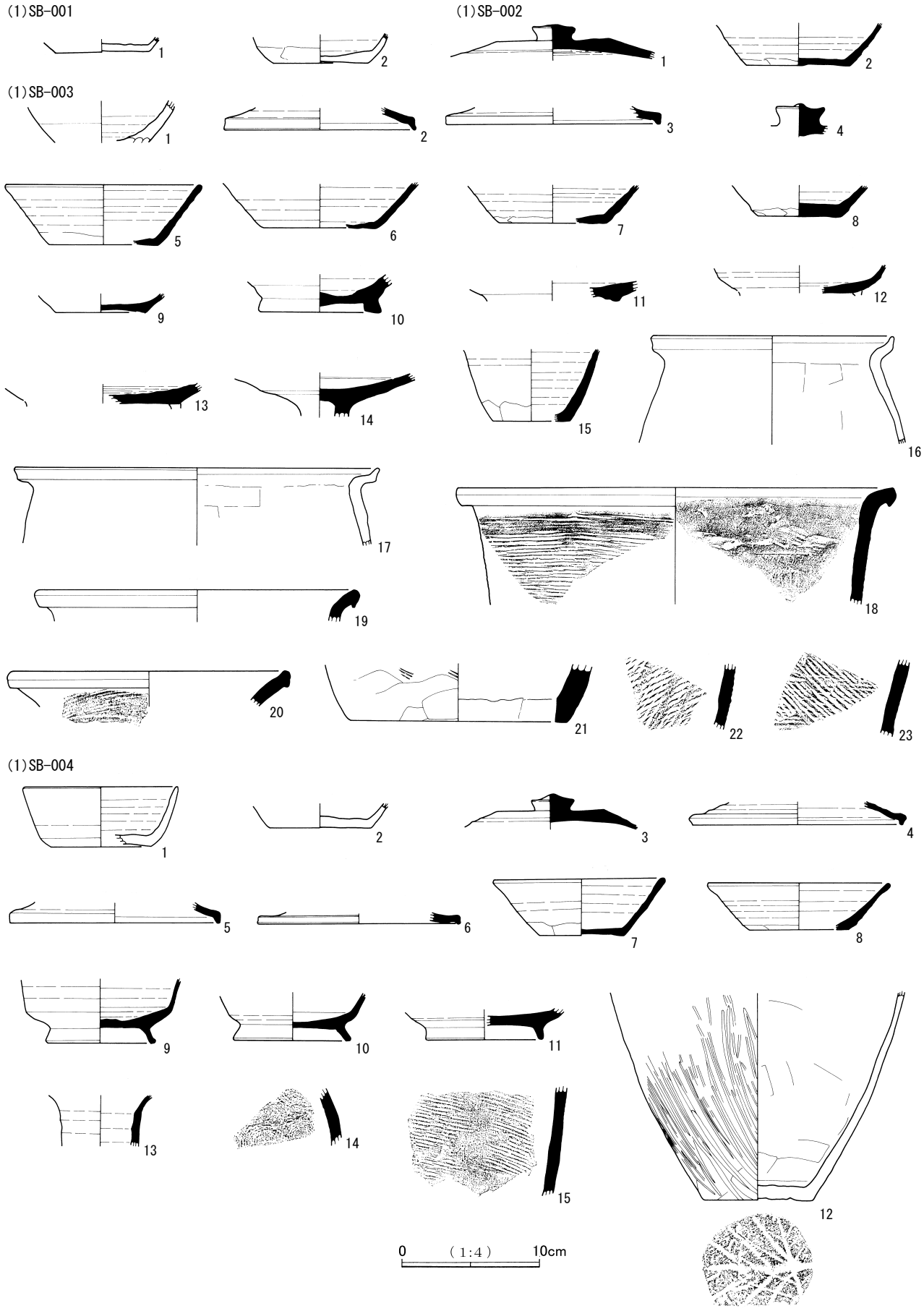
(1)SB-007
1　明黒褐色土　砂粒多、ロームブロック少
2　暗褐色土　ローム粒子・砂粒多
3　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック・砂粒多
4　黒褐色土　腐植土、炭化粒子
5　明黒褐色土　砂粒、ローム粒子、ロームブロック
6　明黄褐色土　ロームブロック
7　黒褐色土　ローム粒子・砂粒多（柱痕跡）

0　(1:100)　50m

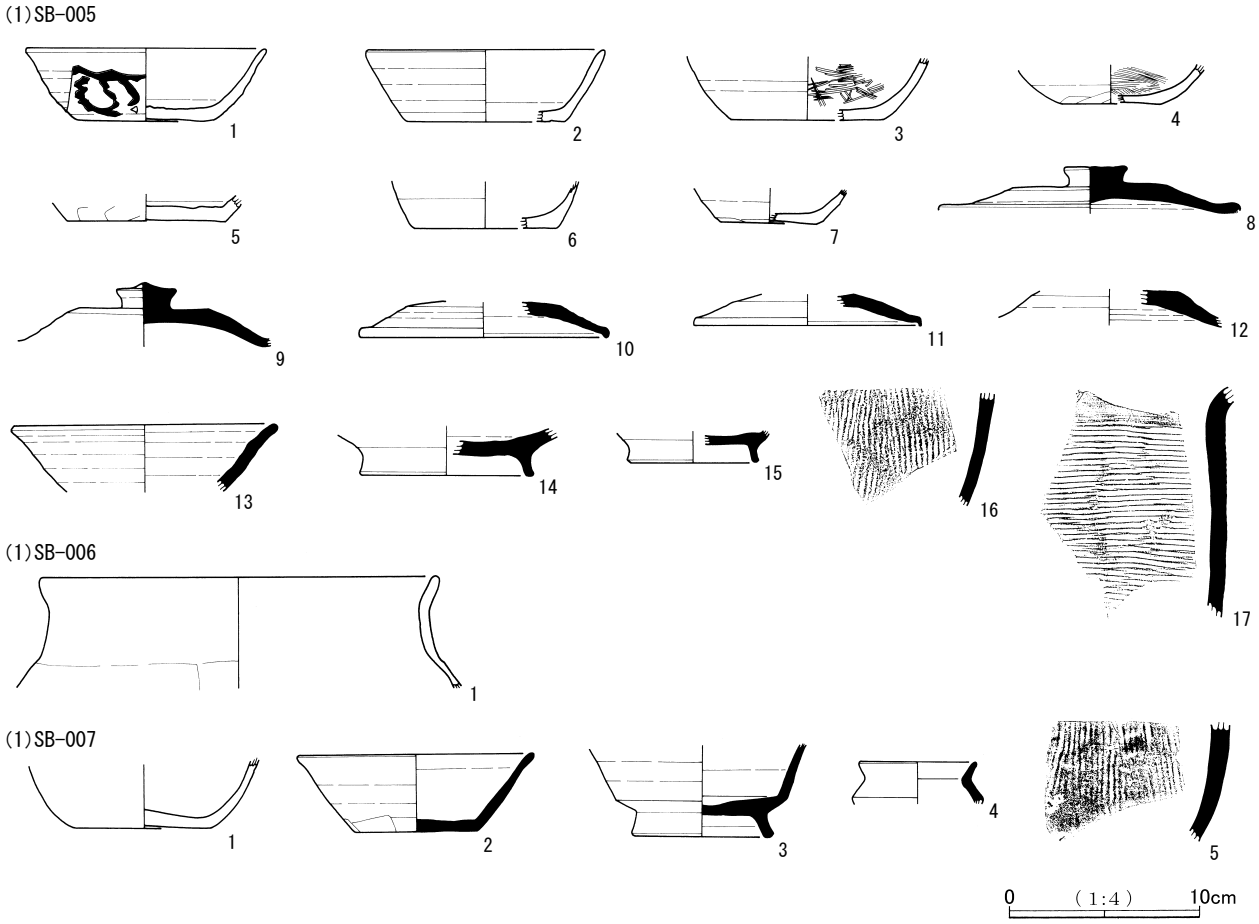
第32図　(1)SB-004～(1)SB-007・(1)P-3



第33図　掘立柱建物群周辺遺物出土状況



第34図　(1)SB-001～(1)SB-004出土遺物



第35図　(1)SB-005～(1)SB-007出土遺物

Z3－75に位置する。平面形は1.00m×0.98mの楕円形で、確認面からの深さは57cmである。

遺物は出土していない。

(1)SK－003（第38図、図版４）

Z3－75に位置する。平面形は1.52m×1.18mの不整形で、確認面からの深さは80cmである。

遺物は出土していない。

(1)SK－004（第38図、図版４）

Z3－84に位置する。平面形は径1.05mの楕円形で、確認面からの深さは100cmである。

遺物は新治産の須恵器杯が１点出土しているが、小片のため図示できなかった。

(1)SK－005（第38図、図版４）

Z3－73・74に位置する。３基のピットが連なり、3.09m×1.55mの不整形を呈する。便宜的に北からＡ、Ｂ、Ｃとした。底面での規模はＡが径70cm、確認面からの深さは55cm、Ｂが72cm×80cm、深さ50cm、Ｃが103cm×74cm、深さ32cmである。

遺物は出土していない。

(1)SK－006（第38図、図版４）

Z3－64・74に位置する。平面形は1.50m×0.84mの長楕円形で、２基のピットが連なる形状を呈する。確認面からの深さは西側で75cm、東側で30cmである。

遺物は出土していない。

(1)SK－007（第38図、図版４）

Z3－74に位置する。平面形は2.28m×1.04mの不整形で、東西２基のピットを繋ぐような形状を呈する。便宜的に西の掘り込みをＡ、東の掘り込みをＣ、その中間をＢとした。底面での規模は、Ａが80cm×62cm、確認面からの深さは55cm、Ｂが95cm×88cm、深さ38cm、Ｃが50cm×39cm、深さ55cmである。

遺構に伴う時期の遺物は出土しなかった。

(1)SK－008（第38図、図版４）

Z3－73に位置する。平面形は1.02m×0.86mの楕円形で、確認面からの深さは58cmである。

遺構に伴う時期の遺物は出土しなかった。

(1)SK－009（第38・40図、図版５）

Z3－64に位置する。平面形は1.52m×1.20mの不整な三角形で、３基のピットが連なる形状を呈する。便宜的に西から時計回りにＡ、Ｂ、Ｃとした。底面での規模は、Ａが55cm×42cm、確認面からの深さ53cm、Ｂが64cm×48cm、深さ50cm、Ｃが58cm×48cm、深さ55cmである。

出土遺物は少量で、１点を図示した。１は須恵器杯である。口縁部のみの遺存で、外面に釉が付着している。

(1)SK－010（第38図、図版５）

Z3－73に位置する。平面形は一辺0.85mの隅丸方形で、確認面からの深さは64cmである。

遺構に伴う時期の遺物は出土しなかった。

(1)SK－011（第38図、図版５）

Z3－73に位置する。平面形は0.76m×0.68mの楕円形で、確認面からの深さは50cmである。

遺物は出土していない。

(1)SK－012（第38図、図版５）

Z3－72・73に位置する。平面形は1.00m×0.70mの長楕円形で、確認面からの深さは38cmである。

遺構に伴う時期の遺物は出土しなかった。

(1)SK－013（第38図）

Z3－65に位置する。平面形は0.90m×0.83mの楕円形で、確認面からの深さは60cmである。

遺物は出土していない。

(1)SK－014（第38図、図版５）

Z3－64に位置する。平面形は0.95m×0.86mの楕円形で、確認面からの深さは76cmである。

遺構に伴う時期の遺物は出土しなかった。

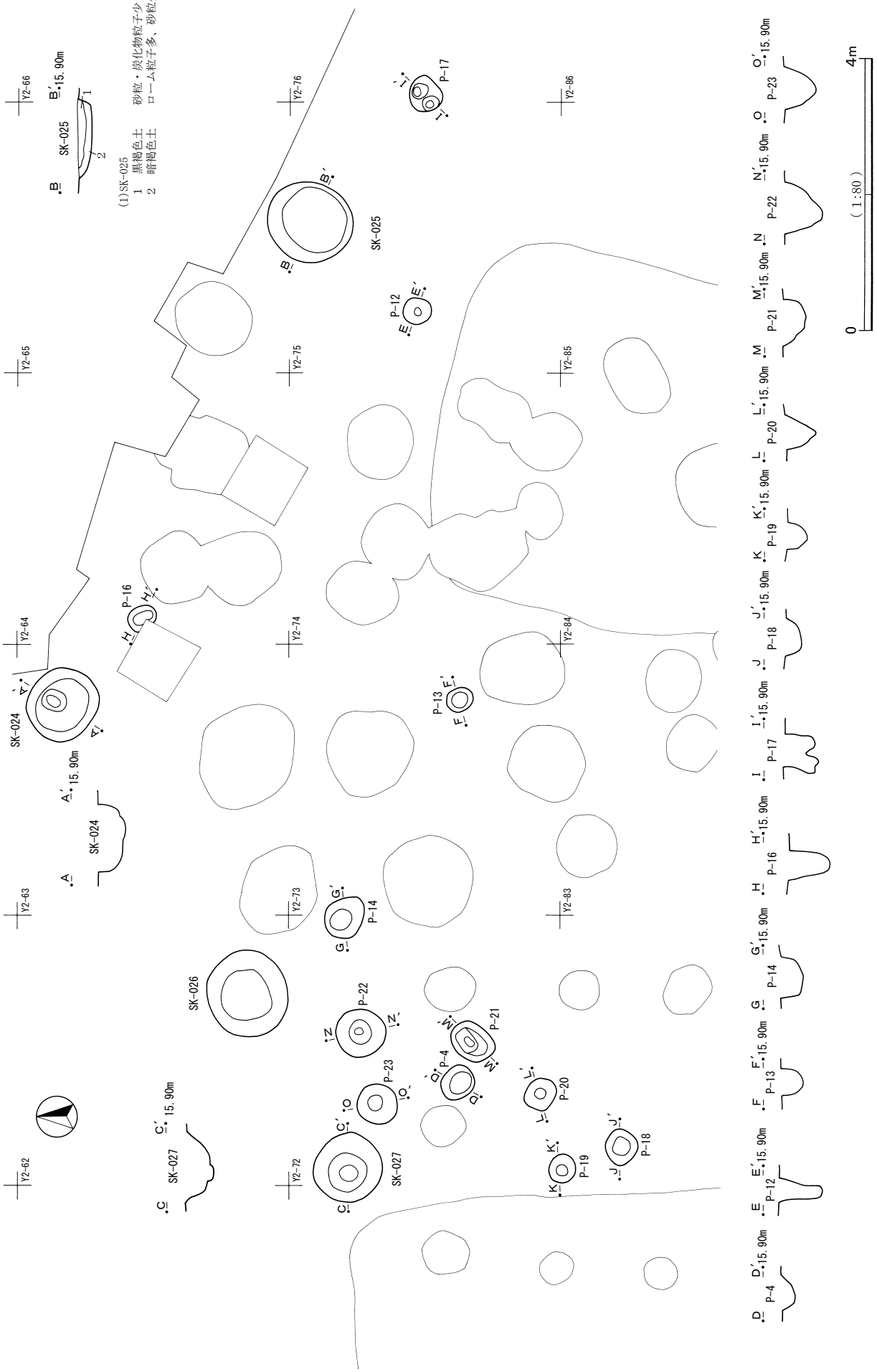
(1)SK－015（第38・40図、図版５・16）

Z3－62・63に位置する。平面形は1.64m×1.35mの楕円形で、確認面からの深さは10cmである。

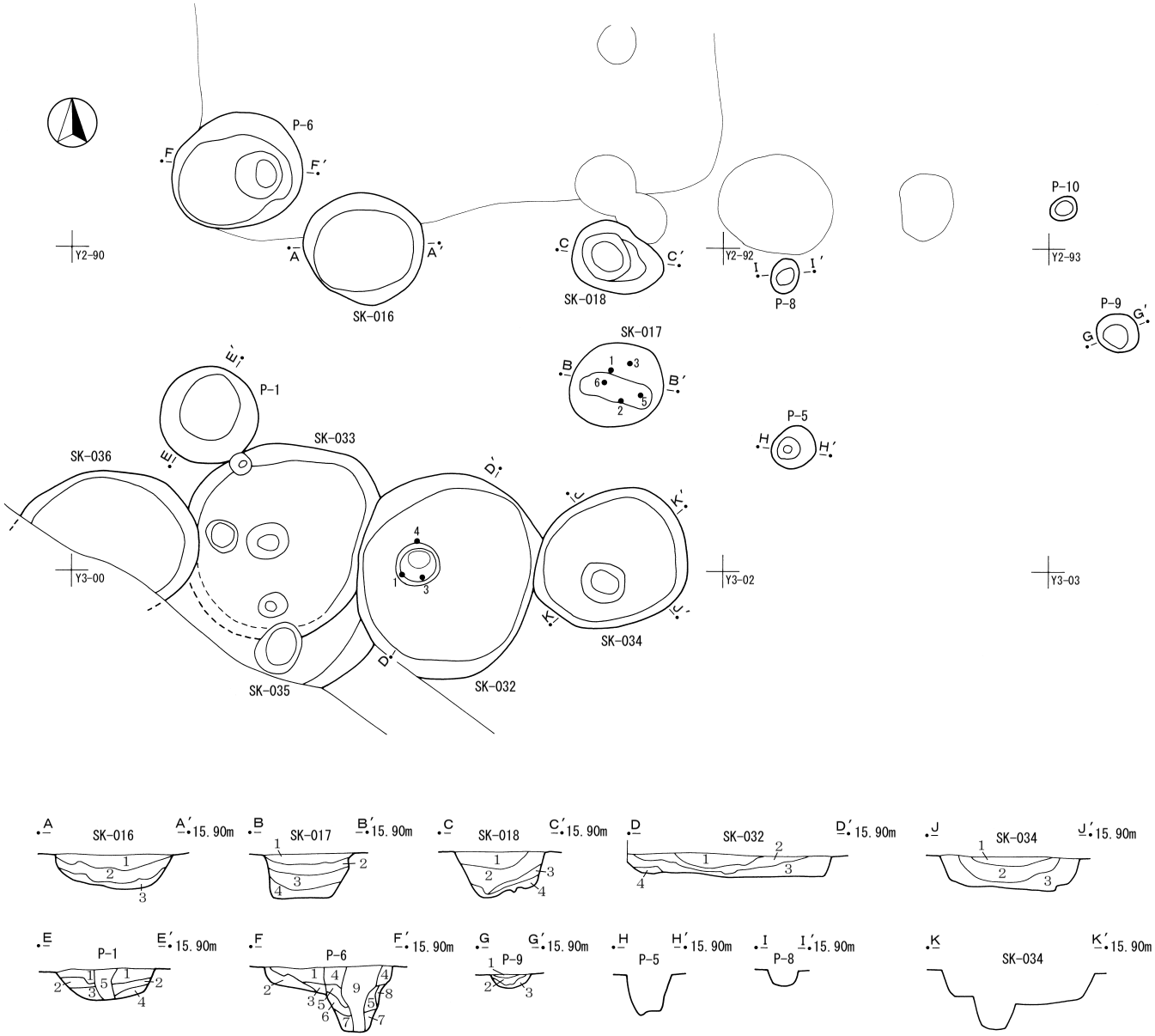
出土遺物は少なく、２点を図示した。１は須恵器杯である。口縁部を欠損しているが、意図的に打ち欠いた可能性がある。灰色を呈し、胎土に白色粒子を多く含む。底部は一定方向の手持ちヘラケズリ、体部外面下端にも手持ちヘラケズリが施される。２は須恵器甕の口縁部片である。口唇部がわずかに上方につまみ上げられ、胴部外面に平行タタキが施される。

(1)SK－016（第37図、図版５）

Y2－80付近に位置する。平面形は1.50m×1.42mの楕円形で、確認面からの深さは44cmである。


(1)SK-025
1 黒褐色土 砂粒・炭化物粒子少
2 暗褐色土 ローム粒子多、砂粒少
SK-024
SK-025
SK-026
SK-027
P-4
P-12
P-13
P-14
P-16
P-17
P-18
P-19
P-20
P-21
P-22
P-23
Y2-62
Y2-63
Y2-64
Y2-65
Y2-66
Y2-72
Y2-73
Y2-74
Y2-75
Y2-76
Y2-83
Y2-84
Y2-85
Y2-86
15.90m
0
4m
(1:80)

第36図　土坑群①



第37図　土坑群②

(1)SK-016
1　明黒褐色土　ロームブック
2　暗褐色土　砂粒・ローム粒子多
3　暗黄褐色土　ローム粒子・ロームブロック多

(1)SK-017
1　明黒褐色土　ロームブロック
2　明黒褐色土　砂粒・ローム粒子多、焼土粒子微
3　明黒色土　ロームブロック、ローム粒子
4　明黒色土　ロームブロック、ローム粒子、砂粒

(1)SK-018
1　黒褐色土　砂粒多、ローム粒子・焼土粒子少
2　黒褐色土　砂粒・焼土粒子多、ローム粒子
3　明黒色土　砂粒微
4　明黒褐色土　砂粒、焼土粒子、炭化物粒子

(1)SK-032
1　暗黒褐色土　焼土粒子多
2　暗褐色土　砂粒、ローム粒子
3　暗褐色土　ローム粒子多、砂粒
4　暗黄褐色土　ロームブロック主体　砂粒、ローム粒子

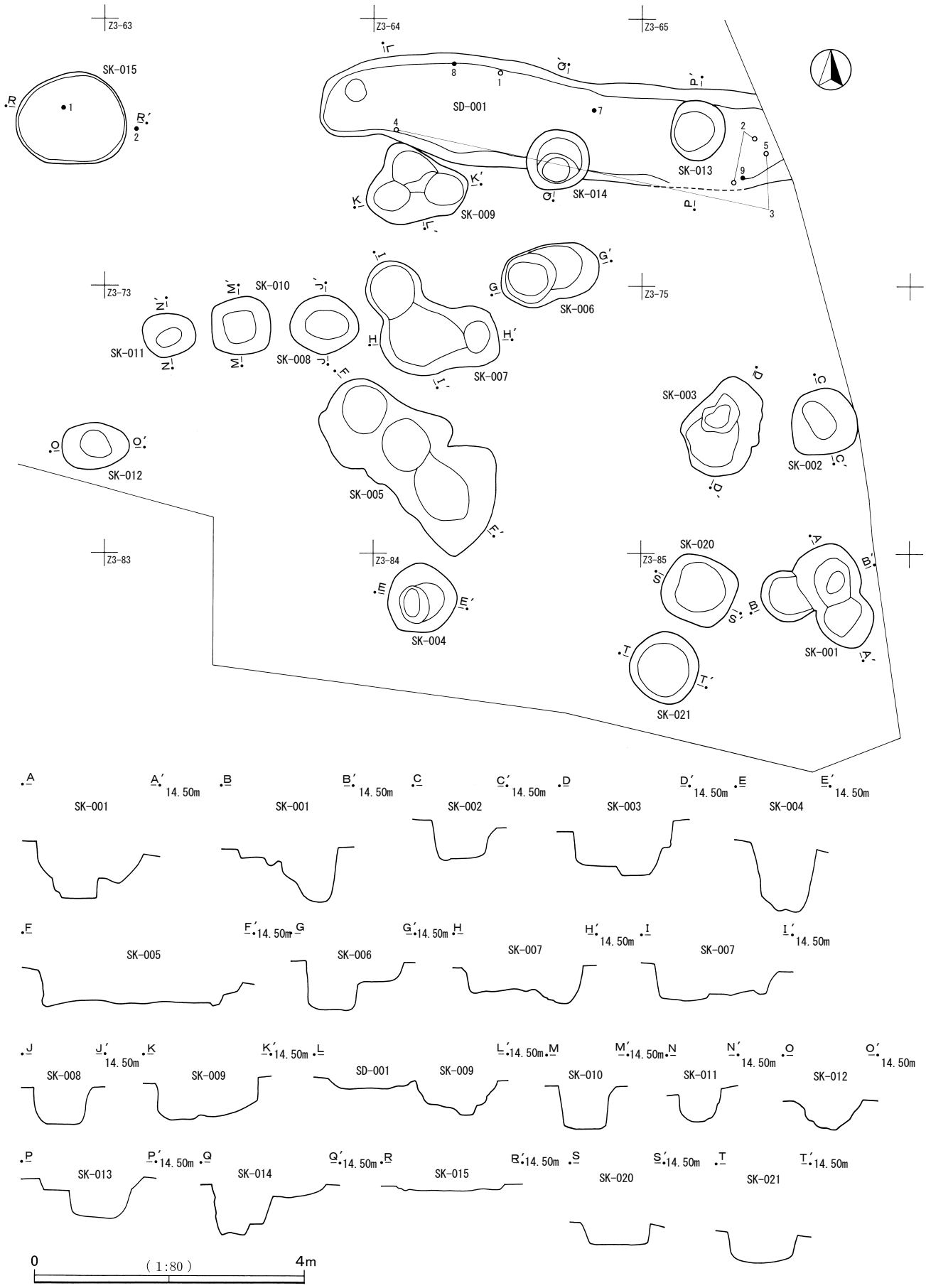
(1)SK-034
1　明黒褐色土　ローム粒子・砂粒多
2　明黒褐色土　ローム粒子・砂粒多、ロームブロック、粘土粒子
3　暗褐色土　砂粒極多、ローム粒子少

(1)P-1
1　明黒褐色土　焼土粒子、砂粒
2　明黒褐色土　ローム粒子、粘土
3　暗灰褐色土　粘土主体　焼土ブロック、炭化粒子
4　暗褐色土　ロームブロック
5　明黒褐色土　焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子

(1)P-6
1　暗褐色土　砂粒多
2　暗褐色土　ローム粒子多、砂粒少
3　明黒褐色土　砂粒・ローム粒子多
4　明黒褐色土　ローム粒子少
5　黒褐色土　砂粒多、ローム粒子
6　暗黄褐色土　ローム粒子主体
7　暗黒褐色土　腐植土主体　ローム粒子・砂粒多
8　暗黄褐色土　ロームブロック主体
9　黒褐色土　腐植土主体　砂粒多

(1)P-9
1　暗褐色土　ローム粒子多
2　明黒褐色土　ローム粒子多、焼土粒子・炭化物粒子少
3　明褐色土　ロームブロック

0　(1:80)　4m


Z3-63
Z3-64
Z3-65
Z3-73
Z3-75
Z3-83
Z3-84
Z3-85
SK-015
SD-001
SK-013
SK-014
SK-009
SK-010
SK-006
SK-011
SK-008
SK-007
SK-003
SK-002
SK-012
SK-005
SK-020
SK-001
SK-004
SK-021
A A′ 14.50m
B B′ 14.50m
C C′ 14.50m
D D′ 14.50m
E E′ 14.50m
F F′ 14.50m
G G′ 14.50m
H H′ 14.50m
I I′ 14.50m
J J′ 14.50m
K K′ 14.50m
L L′ 14.50m
M M′ 14.50m
N N′ 14.50m
O O′ 14.50m
P P′ 14.50m
Q Q′ 14.50m
R R′ 14.50m
S S′ 14.50m
T T′ 14.50m
0
(1:80)
4m

第38図　土坑群③

遺物は出土していない。

(1)SK－017（第37・40図、図版５・16）

Y2－91に位置する。平面形は径1.10mの円形で、確認面からの深さは52cmである。

遺物は６点を図示した。１は土師器杯で、箱形を呈する。器面が荒れているため、底部切り離し及び底部調整は不明である。２は須恵器杯である。底径と口径の差が大きく、口縁部は緩やかに外反する。外面体部下端に手持ちヘラケズリが施される。３は須恵器高台付杯である。外面体部下端に稜を有し、口縁部が外反する。内面は体部の立ち上がりが溝状に凹む。胎土に３mm以下の白色礫、黒色粒子、微量の雲母を含む。４は須恵器杯で体部外面に朱書きの記号がみられる。５は須恵器甕の胴部片で、横位の平行タタキがみられる。色調は黒褐色、胎土に白色微粒子を含む。６は須恵器甕の底部である。底径は18.0cmと推定される。底部外面に敷物圧痕がみられる。新治産と思われる。

(1)SK－018（第37・40図、図版５・16）

Y2－81・91に位置する。平面形は1.14m×0.85mの楕円形で、確認面からの深さは50cmである。

遺物は３点を図示した。１は須恵器杯で、外面底部及び体部下端に手持ちヘラケズリが施される。２は土師器杯である。体部が直線的に開く器形で、外面底部及び体部下端に回転ヘラケズリが施される。３は土師器甕の底部である。いわゆる常陸型の甕で、胴部外面にはヘラケズリ後ミガキが施される。

(1)SK－019（第30図）

Y3－26に位置する。(1)SI－003の南隅に重なり、北側を(1)SB－001によって切られる。平面形は1.50m×1.18mの不整形で、確認面からの深さは60cmである。

遺構に伴う時期の遺物は出土しなかった。

(1)SK－020（第38図、図版５）

Z3－85に位置する。平面形は1.07m×1.05mの楕円形で、確認面からの深さは34cmである。

遺物は出土していない。

(1)SK－021（第38図、図版５）

Z3－84・85に位置する。平面形は1.02m×1.00mの楕円形で、確認面からの深さは50cmである。

遺物は出土していない。

(1)SK－022（第39図）

Y2－77・87に位置し、北側半分は調査区外となる。平面形は1.35mの楕円形で、確認面からの深さは26cmである。

遺物は出土していない。

(1)SK－023（第39図）

Y2－87に位置する。平面形は1.00m×0.84mの楕円形で、確認面からの深さは30cmである。

遺物は出土していない。

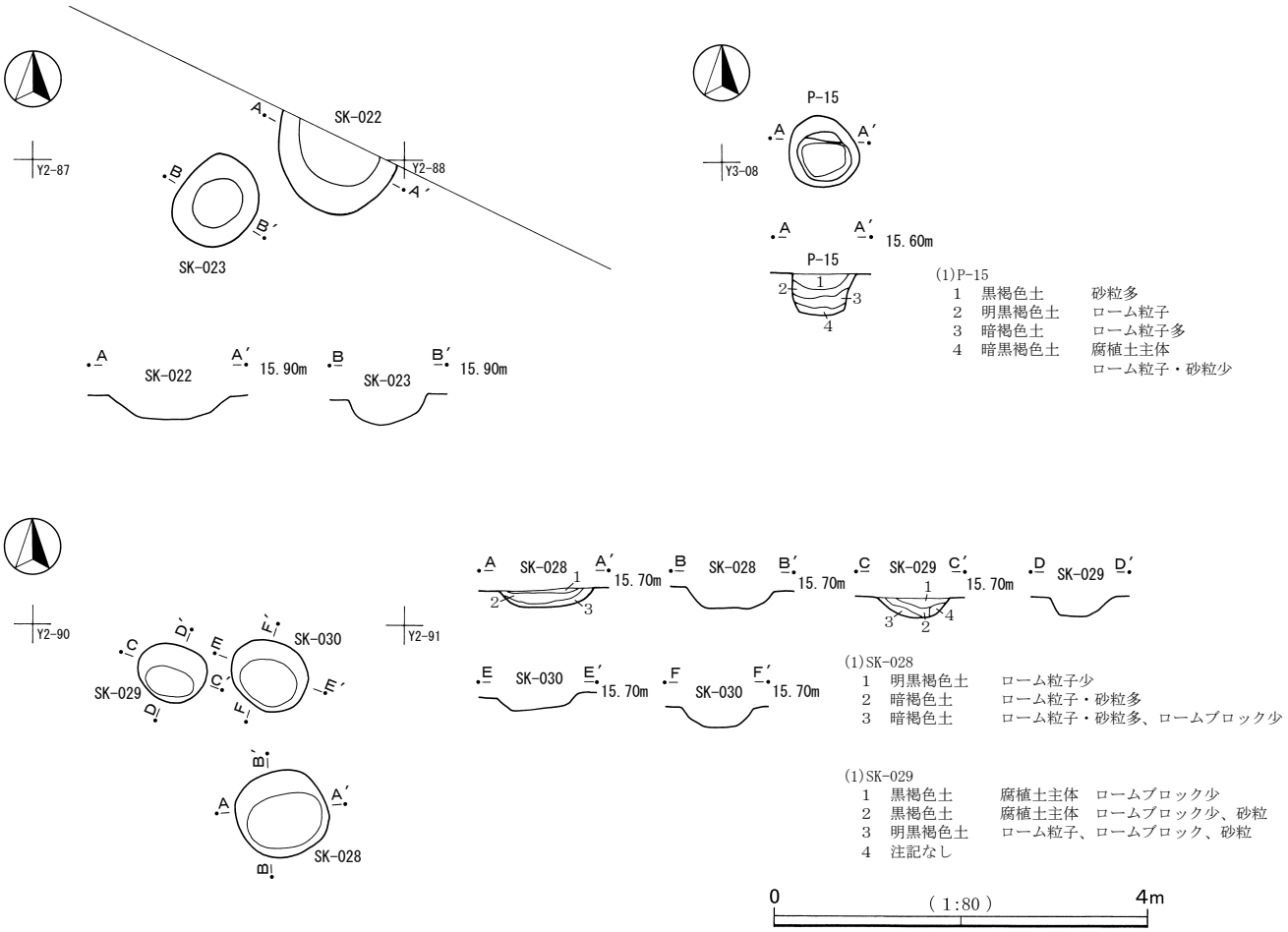
(1)SK－024（第36図、図版５）

Y2－63に位置する。平面形は1.08m×0.97mの楕円形で、確認面からの深さは40cmである。

遺物は須恵器杯、土師器杯が少量出土しているが、図化できるものはなかった。

(1)SK－025（第36図、図版５）

Y2－65・75に位置する。平面形は1.28m×1.20mの楕円形で、確認面からの深さは26cmである。



第39図 (1)SK-022、(1)SK-023、(1)SK-028～(1)SK-030、(1)P-15

土師器甕の胴部片１点が出土している。

(1)SK－026（第36図、図版５）

Y2－62に位置する。平面形は1.28m×1.20mの楕円形で、確認面からの深さは38cmである。

遺物は出土していない。

(1)SK－027（第36図、図版５）

Y2－71・72に位置する。平面形は1.03m×1.00mの楕円形で、確認面からの深さは40cmである。

遺物は出土していない。

(1)SK－028（第39図、図版５）

Y2－90に位置する。平面形は1.00m×0.92mの楕円形で、確認面からの深さは23cmである。

遺構に伴う時期の遺物は出土しなかった。

(1)SK－029（第39図、図版５）

Y2－80・90に位置する。平面形は0.75m×0.62mの楕円形で、確認面からの深さは20cmである。

遺物は須恵器杯の破片が１点出土している。

(1)SK－030（第39図、図版５）

Y2－80・90に位置する。平面形は0.84m×0.72mの楕円形で、確認面からの深さは18cmである。

土師器杯の小片２点が出土している。

(1)SK－031（第30図）

Y3－14に位置する。平面形は1.12m×0.84mの楕円形で、確認面からの深さは29cmである。

遺物は出土していない。

(1)SK－032（第37・40図、図版６・16）

Y2－90付近に位置する。東を(1)SK－034、西を(1)SK－033・035と切り合う。平面形は2.53m×2.25mの楕円形で、確認面からの深さは28cmである。底面西寄りに径55cm、底面からの深さ28cmのピットを伴う。(1)SK－032～036は当初縄文時代の小竪穴として調査されたが、出土した遺物等から奈良・平安時代の土坑と思われる。

遺物は４点を図示した。１・２は須恵器杯である。１は底径と口径の差が大きく、体部が直線的に開く器形である。外面底部及び体部下端に手持ちヘラケズリが施される。体部外面に朱書きで記号が記されている。２は口唇部が肥厚し、わずかに外反する。外面底部及び体部外面の調整は手持ちヘラケズリである。胎土に１mm前後の白色粒子を多く含み、軟質である。３・４は須恵器高台付杯である。ともに底部回転ヘラケズリ後高台を貼り付けている。３は口径に比して器高が深めで、体部の立ち上がりが明瞭である。口唇部、高台部ともに端部が摩滅している。胎土に白色粒子を多く含む。４は底径８cmとやや大型である。胎土に雲母を多く含む。

(1)SK－033（第37・40図、図版６）

Y2－90付近に位置する。東を(1)SK－032、西を(1)SK－036、南を(1)SK－035と切り合う。残存している部分の平面形は2.50m×2.20mの楕円形で、確認面からの深さは36cmである。底面から４基のピットが検出された。底面からの深さは14cm～30cmである。

遺物は３点を図示した。１・２は須恵器杯である。１は体部が直線的に開く器形で、底部回転ヘラ切りの後、底部全面及び体部下端に手持ちヘラケズリを施す。２は摩滅しているため不明瞭だが、底部回転ヘラ切り後、底部及び体部下端に手持ちヘラケズリを施している。３は須恵器甕の口縁部片である。肩の張った壺型を呈する。口縁部から胴部にかけて横位の平行タタキを施した後口縁部を横ナデしている。いずれも新治産と思われる。

(1)SK－034（第37・40図、図版６）

Y2－91付近に位置する。西側は(1)SK－032と切り合う。平面形は1.90m×1.72mの楕円形で、確認面からの深さは39cmである。遺構南寄りからピットが検出され、底面からの深さは39cmであった。

遺物は須恵器杯・甕、土師器杯・甕が出土しているが、いずれも小片である。１点を図化した。１は土師器甑である。胴部は張らず、直線的に開く。口縁部は外反して、端部が外方へ摘み出される。胴部外面の調整はナデで、木口状の工具痕がみられる。胎土に雲母を多く含む。

(1)SK－035（第37図、図版６）

Y3－00に位置する。遺構南西は遺構外となり、また北側に(1)SK－033が重なるため、一部のみ検出した。確認面からの深さは24cmである。(1)SK－033との境にピットが１基あり、(1)SK－033の底面からの深さは12cmである。

遺物は出土していない。

(1)SK－036（第37図、図版６、第４・５表）

Y2－90付近に位置する。南西部は遺構外となる。平面形は1.98mの楕円形で、確認面からの深さは39cmである。覆土中から貝ブロックが検出されている。堆積状況や形成された時期等は不明である。貝種はハ

マグリを主体とし、オキシジミがこれに次ぐ。

遺物は土師器甕の胴部片が出土している。

３　ピット

(1)Ｐ－１（第37・40図、図版２）

Y2－90に位置し、(1)SK－033の北西に接する。平面形は径120㎝の円形で、確認面からの深さは38㎝である。

遺物は須恵器蓋・杯・甕、土師器甕が出土しているが小片のため図示できたのは１点である。１は須恵器甕の胴部片である。丸く張った肩部から頸部が直立する形で、胴部に横位の平行タタキがみられる。

(1)Ｐ－３（第31・40図、図版２）

Y2－81に位置する。平面形は径76㎝の円形で、確認面からの深さは76㎝である。

遺物は土師器杯、須恵器蓋・杯・壺の胴部片が出土している。１は土師器杯である。底径と口径の差が小さく、器高も浅い。内外面ともにミガキが施される。２は須恵器杯の底部である。底部は回転ヘラ切りの後手持ちヘラケズリが施される。

(1)Ｐ－４（第36図、図版２）

Y2－72に位置する。(1)SB－006の東寄りから検出された。平面形は52㎝×48㎝の楕円形で、確認面からの深さは29㎝である。

遺物は土師器甕の胴部片が１点出土している。

(1)Ｐ－５（第37図、図版２）

Y2－92に位置する。平面形は54㎝×52㎝の楕円形で、確認面からの深さは40㎝である。

遺物は土師器杯・甕、須恵器蓋などが出土しているが、小片のため図化できなかった。

(1)Ｐ－６（第37・40図、図版２）

Y2－80に位置し、(1)SI－001の南西隅に重なる。平面形は202㎝×158㎝の楕円形で、確認面からの深さは32㎝である。遺構のほぼ中央にピットを１基有し、底面からの深さは48㎝である。

遺物は土師器杯、須恵器杯・甕が出土している。１は土師器杯である。底部回転ヘラ切りの後底部及び体部下端に手持ちヘラケズリを施す。２・３は須恵器杯である。２の底部切り離し方法は不明、底部と体部下端に手持ちヘラケズリが施される。３は底部外面に朱書きの文字がみられる。４は須恵器甕である。外面に灰白色の釉が掛かっており、肩の部分と思われる。胎土に大粒の白色粒子を多く含み、やや軟質である。

(1)Ｐ－７（図版２）

Y2－81に位置し、(1)SI－001の南東隅から検出された。平面形は100㎝×76㎝の楕円形で、２つのピットが連結している。確認面からの深さは、北側で24㎝、南側で68㎝である。

遺物は出土していない。

(1)Ｐ－８（第37図、図版２）

Y2－92に位置する。平面形は42㎝×34㎝の楕円形で、確認面からの深さは21㎝である。

遺物は出土していない。

(1)Ｐ－９（第37図、図版２）

Y2－93に位置する。平面形は58㎝×46㎝の楕円形で、確認面からの深さは18㎝である。

遺構に伴う時期の遺物は出土しなかった。

(1)P－10（第37図、図版２）

Y2－83に位置する。平面形は28cm×24cmの楕円形を呈するが、プランのみの検出で詳細は不明である。

遺物は少なく、肩部に稜をもつ須恵器壺の胴部片が出土している。

(1)P－11（図版２）

Y2－75に位置する。(1)SB－004の北東隅のP3を切っている。平面形は60cm×48cmの楕円形で、確認面からの深さは72cmである。

遺物は出土していない。

(1)P－12（第36図、図版２）

Y2－75に位置する。平面形は39cm×37cmの楕円形で、確認面からの深さは64cmである。

遺物は出土していない。

(1)P－13（第36図、図版２）

Y2－73に位置する。平面形は45cm×34cmの楕円形で、確認面からの深さは34cmである。

遺物は出土していない。

(1)P－14（第36図、図版２）

Y2－72・73に位置する。平面形は69cm×58cmの楕円形で、確認面からの深さは35cmである。

遺物は土師器甕の胴部片が１点出土している。

(1)P－15（第39図、図版２）

Y2－98に位置する。平面形は80cm×75cmの楕円形で、確認面からの深さは46cmである。

遺物は出土していない。

(1)P－16（第36図、図版２）

Y2－64に位置する。平面形は長軸45cmの楕円形で、南西部分を欠く。確認面からの深さは60cmである。

遺構に伴う時期の遺物は出土しなかった。

(1)P－17（第36図、図版２）

Y2－75・76に位置する。平面形は50cm×40cmの楕円形で、確認面からの深さは54cmである。

遺物は出土していない。

(1)P－18（第36図、図版２）

Y2－82に位置する。平面形は53cm×50cmの楕円形で、確認面からの深さは23cmである。

遺物は出土していない。

(1)P－19（第36図、図版２）

Y2－72・82に位置する。平面形は43cm×40cmの楕円形で、確認面からの深さは30cmである。

遺物は出土していない。

(1)P－20（第36図、図版２）

Y2－72に位置する。平面形は43cm×40cmの楕円形で、確認面からの深さは44cmである。

遺物は出土していない。

(1)P－21（第36図、図版２）

Y2－72に位置する。平面形は68cm×56cmの楕円形で、確認面からの深さは35cmである。

第40図　土坑・ピット・溝出土遺物

遺物は出土していない。

(1)P－22（第36図、図版２）

Y2－72に位置する。平面形は76㎝×72㎝の楕円形で、確認面からの深さは54㎝である。

(1)P－23（第36図、図版２）

Y2－72に位置する。平面形は60㎝×52㎝の楕円形で、確認面からの深さは47㎝である。

遺物は出土していない。

４　溝状遺構

(1)SD－001（第38・40図、図版６）

Z3－63～65にかけて、ほぼ直線的に東西に延びる溝状遺構である。東端は調査区外へと続き、検出面での長さは約７ｍ、最大幅1.68ｍ、確認面からの深さは18㎝である。

遺物は９点を図示した。１～６は土師器杯である。底径と口径の差が比較的小さく、体部外面下端から底部にかけての調整はいずれも回転ヘラケズリである。底部の切り離しが確認できるのは２～４で、いずれも回転ヘラ切りである。

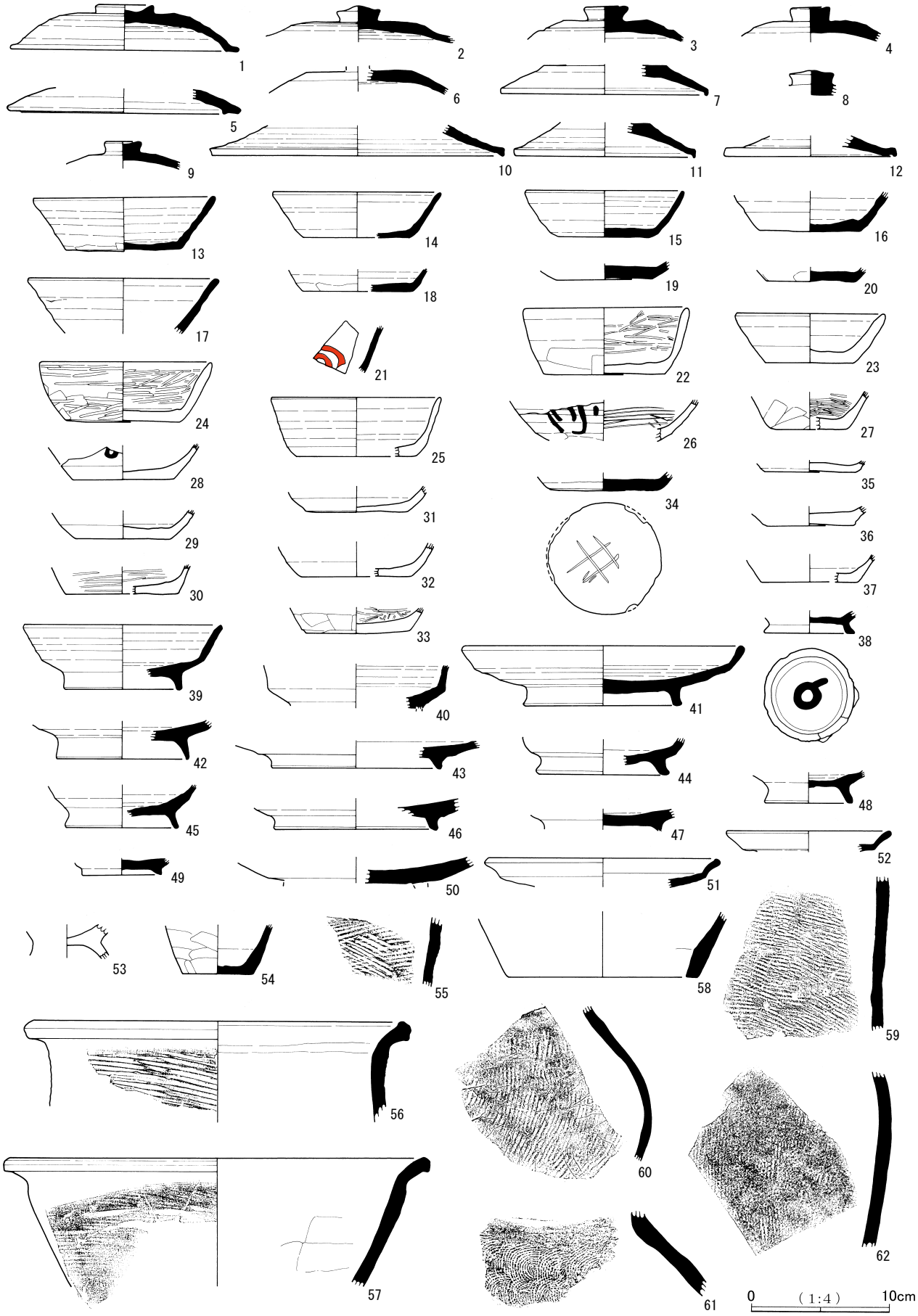
７は須恵器蓋である。扁平な擬宝珠型のつまみをもつ。口縁端部は折り曲げられ、やや外側へ張り出す。天井部は回転ヘラケズリが施される。８は須恵器杯で、体部外面に朱書きがみられる。９は須恵器甕である。口縁部は短く外反し、外側に稜をもつ。縦位の平行タタキが施される。

５　遺構外出土遺物（第41・42図、図版８・16・17、第６表）

１～12は須恵器蓋である。１は深みのある笠形の天井部に環状のつまみが付く。口縁部はほぼ水平に引き出され、わずかにカエリの痕跡を残す。色調は黒褐色、胎土に雲母を含む。それ以外のつまみは擬宝珠状のものが多く、９はボタン状を呈する。口縁端部は短く下方に折り曲げるものが多い。５のみ退化したカエリを有する。４の内面に赤色顔料が付着しているが、朱墨の可能性がある。

13～21・34は須恵器杯である。底径と口径の差が比較的小さく、体部が直線的ないしはわずかに内湾しながら開くものが多い。13は底部回転ヘラ切り後部分的に手持ちヘラケズリが施される。外面体部下端にも手持ちヘラケズリが施されるが、あまり丁寧ではない。胎土に雲母を含む。14・19は底部回転糸切り後無調整で、胎土に白色針状物を含む。15は体部の立ち上がりが丸味を帯びる。底部は回転糸切り後周縁部に回転ヘラケズリを施している。胎土は精緻で、目立った混入物はみられない。体部外面下端及び底部の調整は、16・17が回転ヘラケズリ、18・20は手持ちヘラケズリである。21は体部外面に朱書きの記号がみられる。34は底部回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリが施される。線刻の「井」がみられる。胎土に雲母を含み、新治産と思われる。

22～33・35～37は土師器杯である。底径と口径の差が小さく箱形を呈するものが多い。22の底部は静止糸切り後底部全面及び体部下端に手持ちヘラケズリ、内面に粗いミガキを施す。23は全体に厚手で、底部及び外面体部下端に回転ヘラケズリが施される。24は体部外面下半～底部にかけて手持ちヘラケズリ調整の後内外面にミガキを施している。体部内面の立ち上がりに凹みを有する。25は底部外面及び体部下端に回転ヘラケズリが施される。26は体部外面に墨書がみられる。記号の「◎」か。25・26は(1)SI－002覆土中から出土したため、遺構外出土としたが、(1)SB－005に伴う可能性がある。27の内面は丁寧に磨かれ、黒色処理される。28は底部回転糸切り後周縁部と体部下端に回転ヘラケズリが施される。体部外面に墨書がみられる。他は底部片で、29・32・37は回転ヘラケズリ、30・33は手持ちヘラケズリ、31・34は回転糸



第41図　遺構外出土奈良・平安時代遺物①

切り後周縁部に回転ヘラケズリを施す。36は回転糸切り後無調整である。

38～40・42・44～49は須恵器高台付杯である。38は回転糸切り後に高台を貼り付けている。底部外面に墨書がみられる。39の杯部は浅く、体部が直線的に外方に開く。その他、確認できるものは底部回転ヘラケズリ後高台を貼り付けている。

41・43・50は台付盤である。41は復元口径20.1㎝の大型品である。体部が内湾しながら開き、口縁部で斜め上方へ向きを変え、口唇部が肥厚する。底部から体部下端に回転ヘラケズリを施した後高台を貼り付けている。既報告分のSI－041から類似の高台付盤が出土している。43・50は一部のみの遺存であるが、やはり大型品であろう。

51・52は須恵器盤である。口縁部が外反し、端部で肥厚する。51は復元口径11.9㎝、52は復元口径16.5㎝である。有台か無台かは遺存部位が少なく不明である。いずれも胎土に雲母を含む。新治産と思われる。

53は土師器台付甕である。暗赤褐色を呈し、胎土に雲母微粒子を含む。

54は須恵器小型甕である。ロクロ整形で、外面は手持ちヘラケズリが施される。底部内面には粘土紐を環状に接合した痕が残り、指頭痕もみられる。

55・56・59～62・71は須恵器甕である。55は平行タタキが一部向きを変えて矢羽状になっている。56は口縁部が短く外反し、外面に面をもつ。胴部に横位の平行タタキが施される。59～62は胴部片である。59・60・62は平行タタキが施される。61は雲母を多く含み、同心円状のタタキが施される。新治産であろう。71は口縁部に明瞭な面をもち、端部が下方に摘み出される。色調は褐色で、胎土に雲母を多く含む。

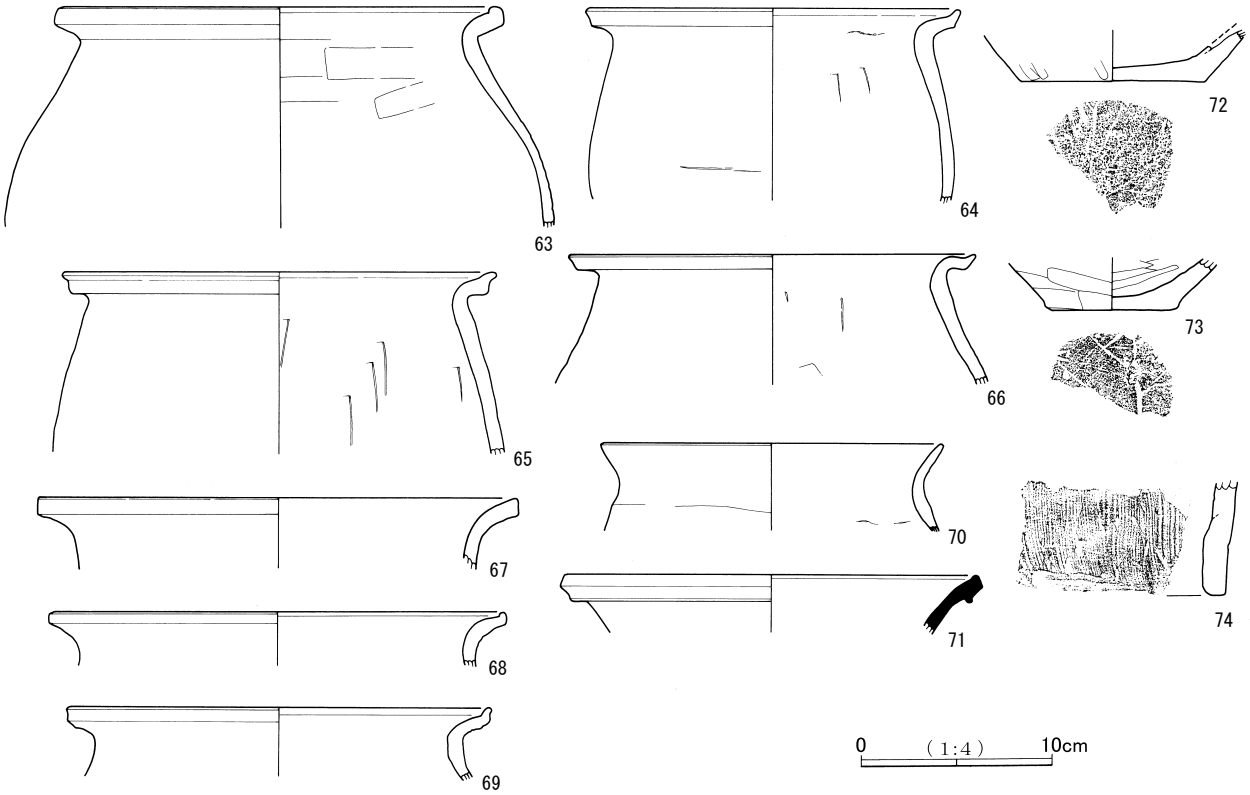
57は須恵器鉢である。胴部がわずかに内湾しながら開き、口縁部は短く外反して端部が下方に突出する。胴部には横位の平行タタキが施される。胎土に雲母、白色粒子を多く含む。新治産であろう。58は須恵器甑の底部である。五孔の甑で、外面と内面胴部下端にヘラケズリが施される。胎土に雲母を多く含む。新治産であろう。

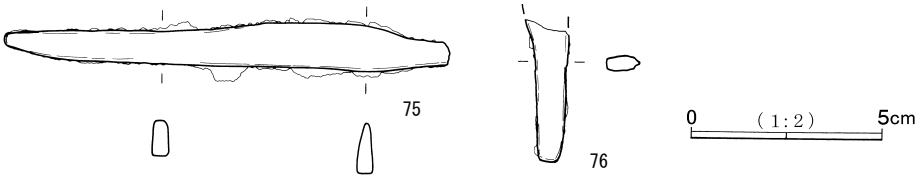
63～70・72・73は土師器甕である。63～69はいわゆる常陸型で、口縁端部が上方に摘み出される。70は口縁部が緩やかに外反する。胴部外面に横方向のヘラケズリが施される。72・73は底部外面に木葉痕が残る。72の胴部外面はヘラケズリの後粗いミガキが施される。内面は接合面で剥離している。

74は円筒埴輪片である。Z2－91グリッドから検出された。『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』所収の花前Ⅰ遺跡でも報告されているが、本来はこの集落の近辺に所在する古墳に存在したものである。

75・76は金属製品である。75は刀子で切先を欠損している。現存長117.8㎜、幅16.8㎜、厚さ4.9㎜、重量18.52ｇである。茎と刃部の境は錆により不明瞭である。76は用途不明の鉄製品である。断面長方形を呈する薄板で、現存長37.7㎜、幅12.1㎜、厚さ3.9㎜、重量2.54ｇである。

ほかに掘立柱建物群周辺から製鉄関連遺物が出土している。分布状況については第33図に示した。また、重量を計測し第６表に一覧を示した。





第42図　遺構外出土奈良・平安時代遺物②

第４節　近世

１　鍛冶工房

(3)SX－001（第43図、図版６）

Z2－24周辺に位置する。縄文時代の竪穴住居(3)SI－003の西壁に重なって検出され、長さ5.5m、幅0.70m前後、深さ25cmの弧状を呈する。周辺からは鉄滓と礫が多く出土しており、鍛冶工房の可能性が考えられる。

２　土坑

(3)SK－001（第43・44図、図版６）

Z2－24に位置する。平面形は1.41m×1.32mの楕円形で、確認面からの深さは31cmである。外周部に青灰色の粘土が貼り付けられ、底面部は被熱し硬化していた。覆土から砥石と近世陶器が多量に出土し、板状の銅製品も出土したことから、土坑墓の可能性がある。

3　炉

(3)SK－002（第43・44図、図版６）

Z2－33に位置する。平面形は153㎝×85㎝の不整形で、確認面からの深さは48㎝である。近世の屋敷または鍛冶工房の炉と思われ、隣接した北側の床面にいわゆる貧乏徳利１点が完形に近い状態で埋設されていた。

(3)SK－003（第43・44図、図版６）

Z2－45に位置する。平面形は444㎝×258㎝の不整形で、確認面からの深さは10㎝と浅い。底面南端は土間状に硬くたたきしめられている。遺構南寄りに火床部を伴った青灰色粘土の高まりが２か所みられる。炉１は焼土の北側に49㎝×28㎝の範囲でみられ、炉２は98㎝×60㎝で粘土と焼土が版築状になっていた。炉内の土をふるいにかけたが、鍛造剥片等は検出されなかった。

(3)SK－004（第44図、図版６）

Z2－56に位置する。平面形は61㎝×55㎝の楕円形で、確認面からの深さは９㎝である。炉壁と思われる粘土が北～西壁を中心に1/2周ほどみられた。

(3)SK－005（第44図、図版６）

Z2－21に位置する。平面形は91㎝×86㎝の不整形で、確認面からの深さは７㎝である。南東壁40㎝程の範囲を除き厚さ15㎝で炉壁が巡る。南東部は焚口か。炉内の土をふるいにかけたが、鍛造剥片等は検出されなかった。

(3)SK－006（第44図、図版６）

Z2－21に位置する。平面形は76㎝×65㎝の楕円形で、確認面からの深さは４㎝である。撹乱を受けている西壁を除き、厚さ５㎝～10㎝の炉壁と思われる粘土がみられる。

(3)SK－007（第44図、図版６）

Z2－22に位置する。平面形は84㎝×80㎝の不整形、確認面からの深さは６㎝である。壁際に粘土はみられなかった。

(3)SK－008（第44図）

Z2－56に位置する。平面形は63㎝×54㎝の不整形で、確認面からの深さは３㎝と浅い。

4　柵列

(3)SA－001（第45図、図版６）

Z2－15・16に位置する。調査区の北側中央に径45㎝～78㎝の４基のピットが北東－南西方向へ並ぶ。長さは3.75ｍ、確認面からの深さは35㎝～43㎝である。

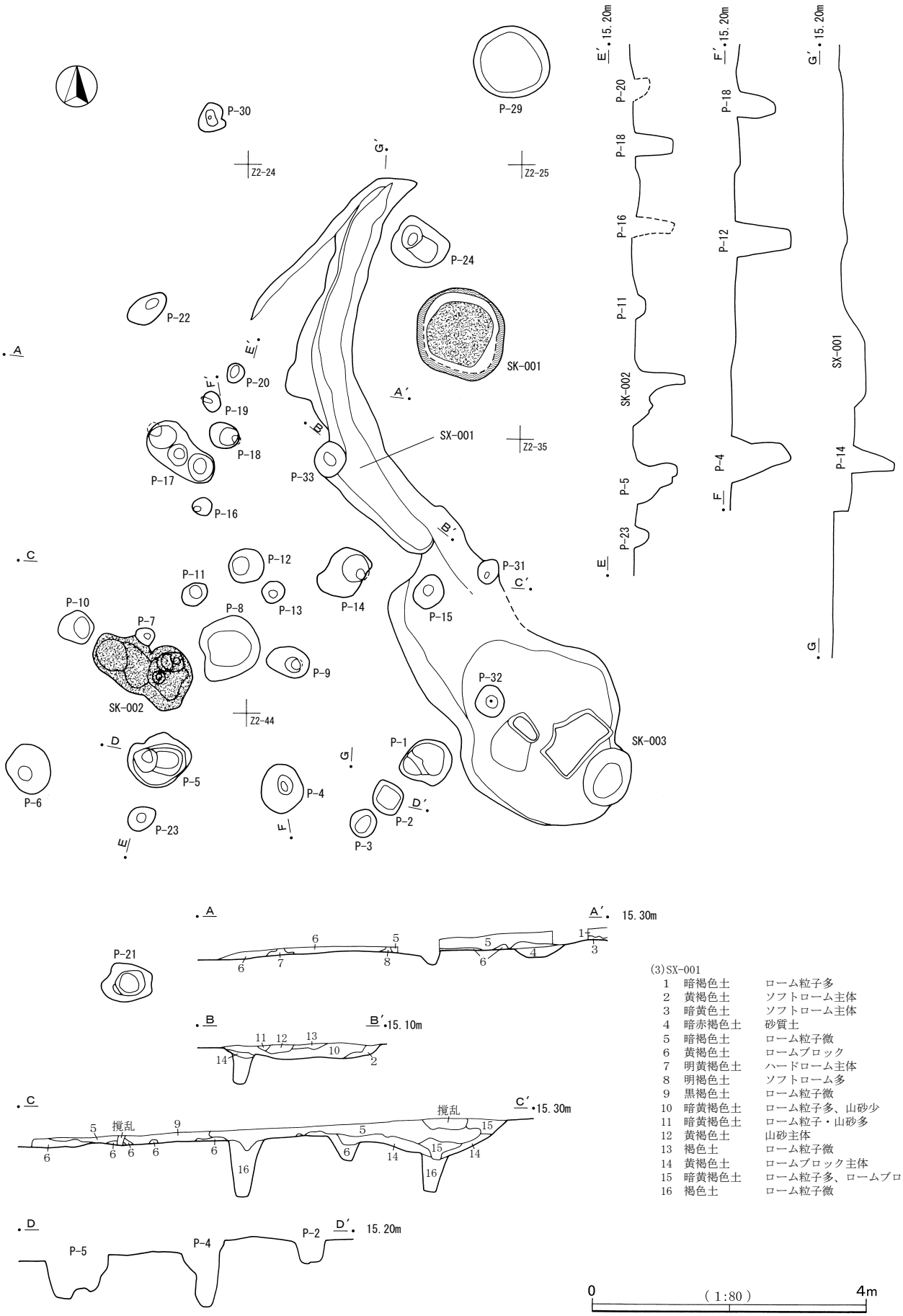
5　ピット（第43図）

ピットは(3)SX－001周辺を中心に29基検出された。平面形は28㎝～113㎝の円形もしくは楕円形で、確認面からの深さは11㎝～99㎝である。Ｐ－５、Ｐ－９、Ｐ－24には柱痕跡が認められる。

6　道路状遺構

(3)SD－001（第45図、図版６）

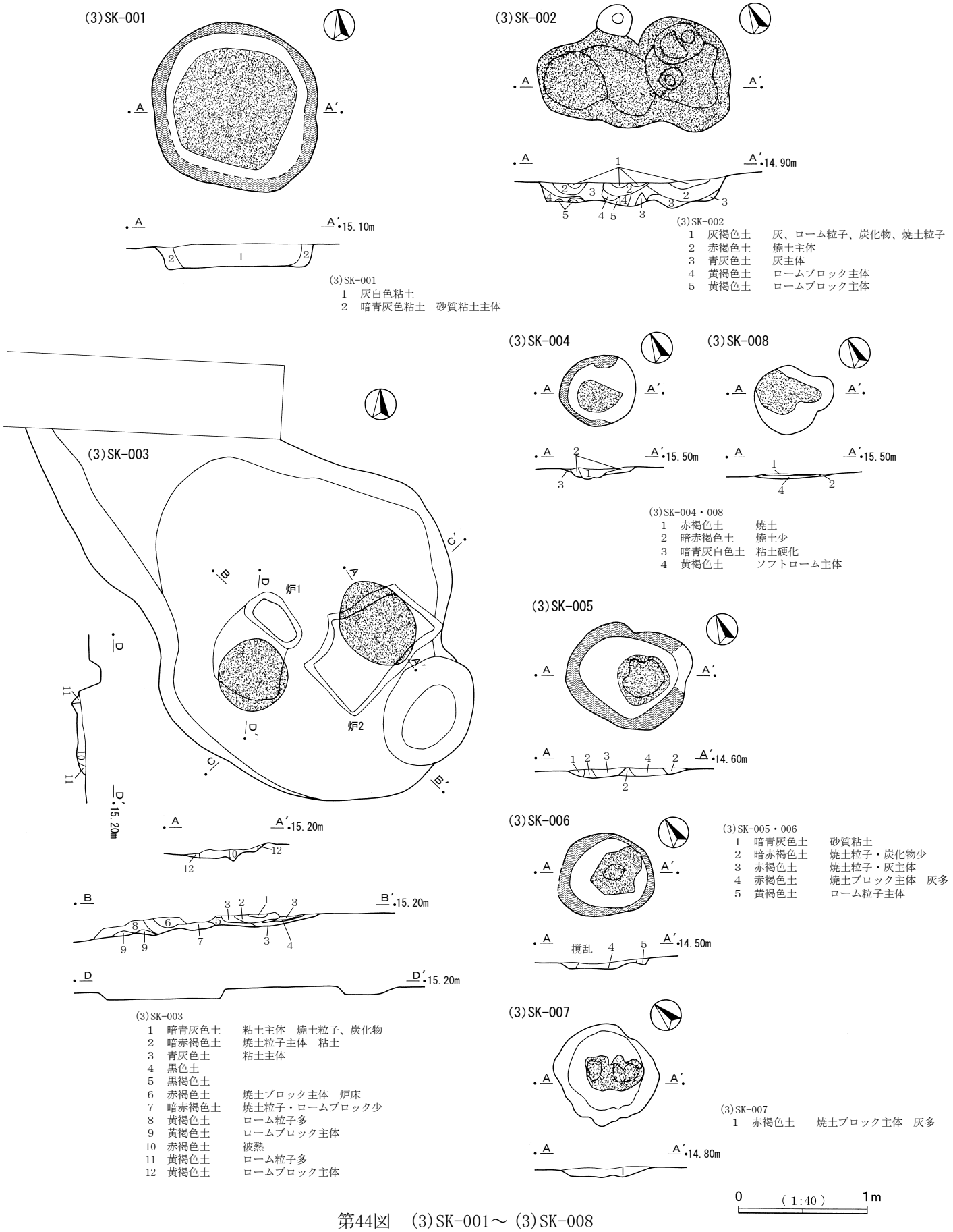
Z1－82付近に位置する。検出できた範囲は6.83ｍ×0.96ｍで、大部分は調査区外となる。確認面からの深さは15㎝～34㎝である。



(3)SX-001

1	暗褐色土	ローム粒子多
2	黄褐色土	ソフトローム主体
3	暗黄色土	ソフトローム主体
4	暗赤褐色土	砂質土
5	暗褐色土	ローム粒子微
6	黄褐色土	ロームブロック
7	明黄褐色土	ハードローム主体
8	明褐色土	ソフトローム多
9	黒褐色土	ローム粒子微
10	暗黄褐色土	ローム粒子多、山砂少
11	暗黄褐色土	ローム粒子・山砂多
12	黄褐色土	山砂主体
13	褐色土	ローム粒子微
14	黄褐色土	ロームブロック主体
15	暗黄褐色土	ローム粒子多、ロームブロック
16	褐色土	ローム粒子微

第43図　(3)SX-001



(3)SK-001
1　灰白色粘土
2　暗青灰色粘土　砂質粘土主体

(3)SK-002
1　灰褐色土　灰、ローム粒子、炭化物、焼土粒子
2　赤褐色土　焼土主体
3　青灰色土　灰主体
4　黄褐色土　ロームブロック主体
5　黄褐色土　ロームブロック主体

(3)SK-003
1　暗青灰色土　粘土主体　焼土粒子、炭化物
2　暗赤褐色土　焼土粒子主体　粘土
3　青灰色土　粘土主体
4　黒色土
5　黒褐色土
6　赤褐色土　焼土ブロック主体　炉床
7　暗赤褐色土　焼土粒子・ロームブロック少
8　黄褐色土　ローム粒子多
9　黄褐色土　ロームブロック主体
10　赤褐色土　被熱
11　黄褐色土　ローム粒子多
12　黄褐色土　ロームブロック主体

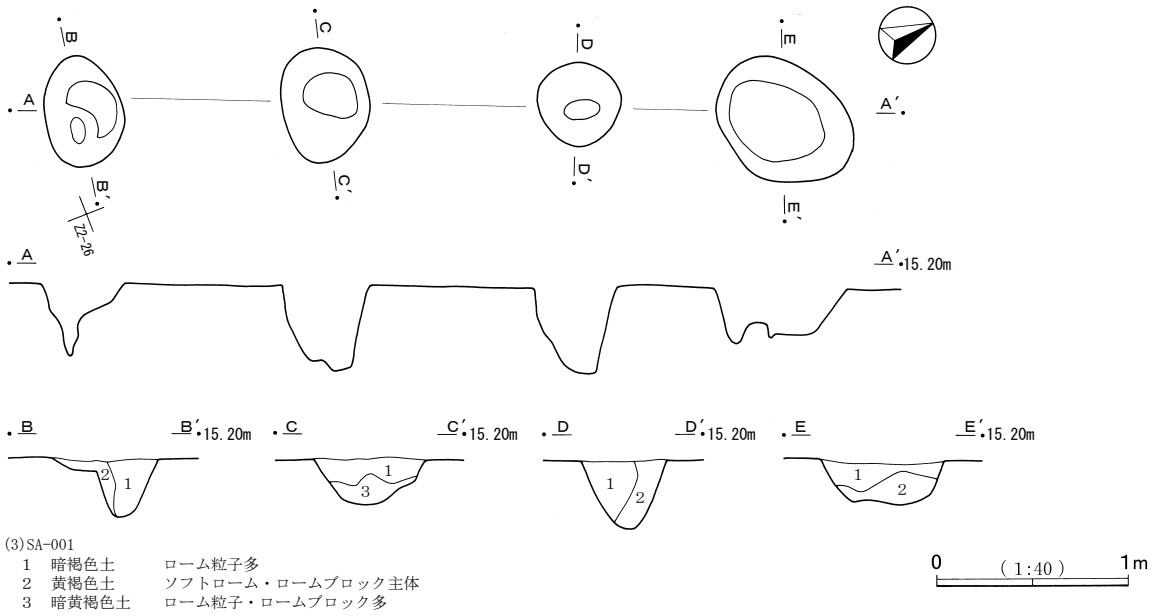
(3)SK-004・008
1　赤褐色土　焼土
2　暗赤褐色土　焼土少
3　暗青灰白色土　粘土硬化
4　黄褐色土　ソフトローム主体

(3)SK-005・006
1　暗青灰色土　砂質粘土
2　暗赤褐色土　焼土粒子・炭化物少
3　赤褐色土　焼土粒子・灰主体
4　赤褐色土　焼土ブロック主体　灰多
5　黄褐色土　ローム粒子主体

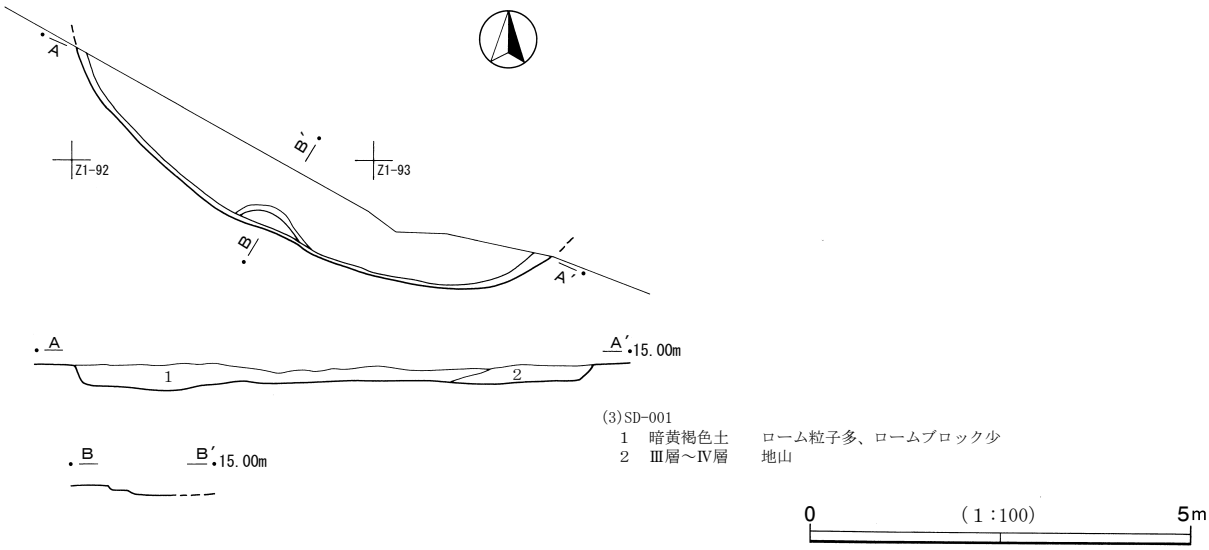
(3)SK-007
1　赤褐色土　焼土ブロック主体　灰多

第44図　(3)SK-001～(3)SK-008

(3)SA-001



(3)SD-001



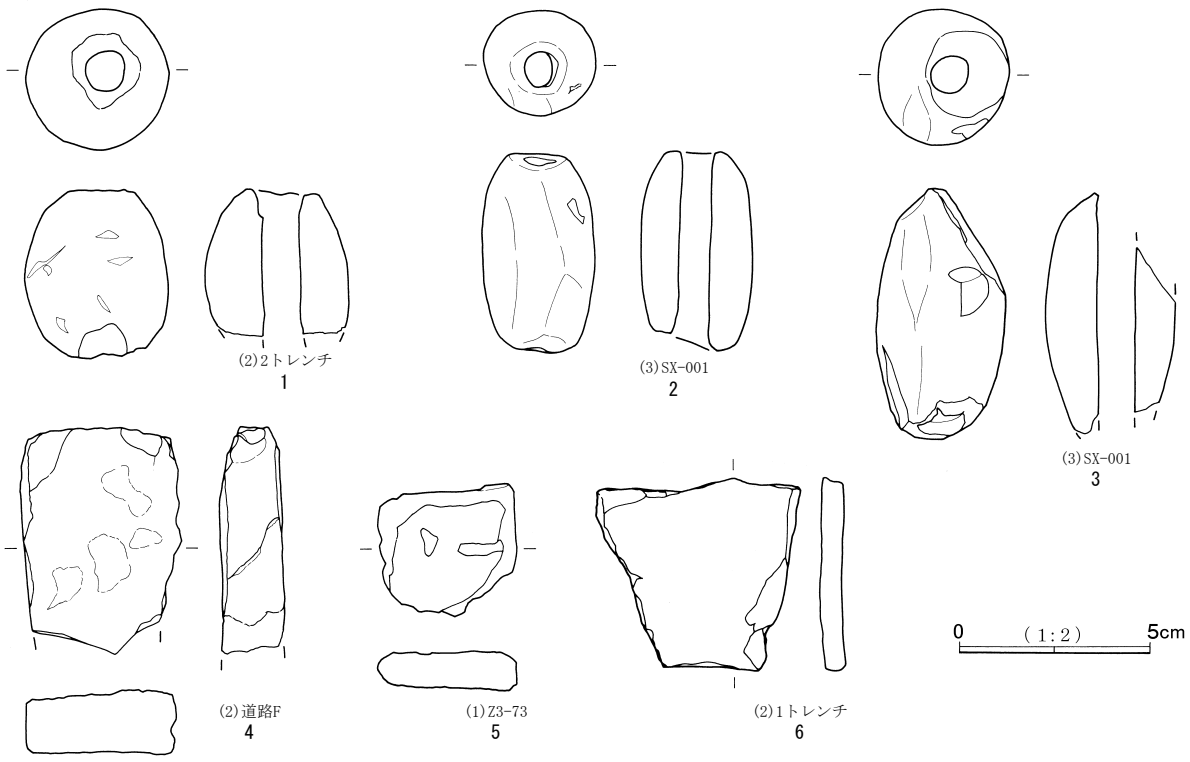
第45図　(3)SA-001、(3)SD-001

7　遺物

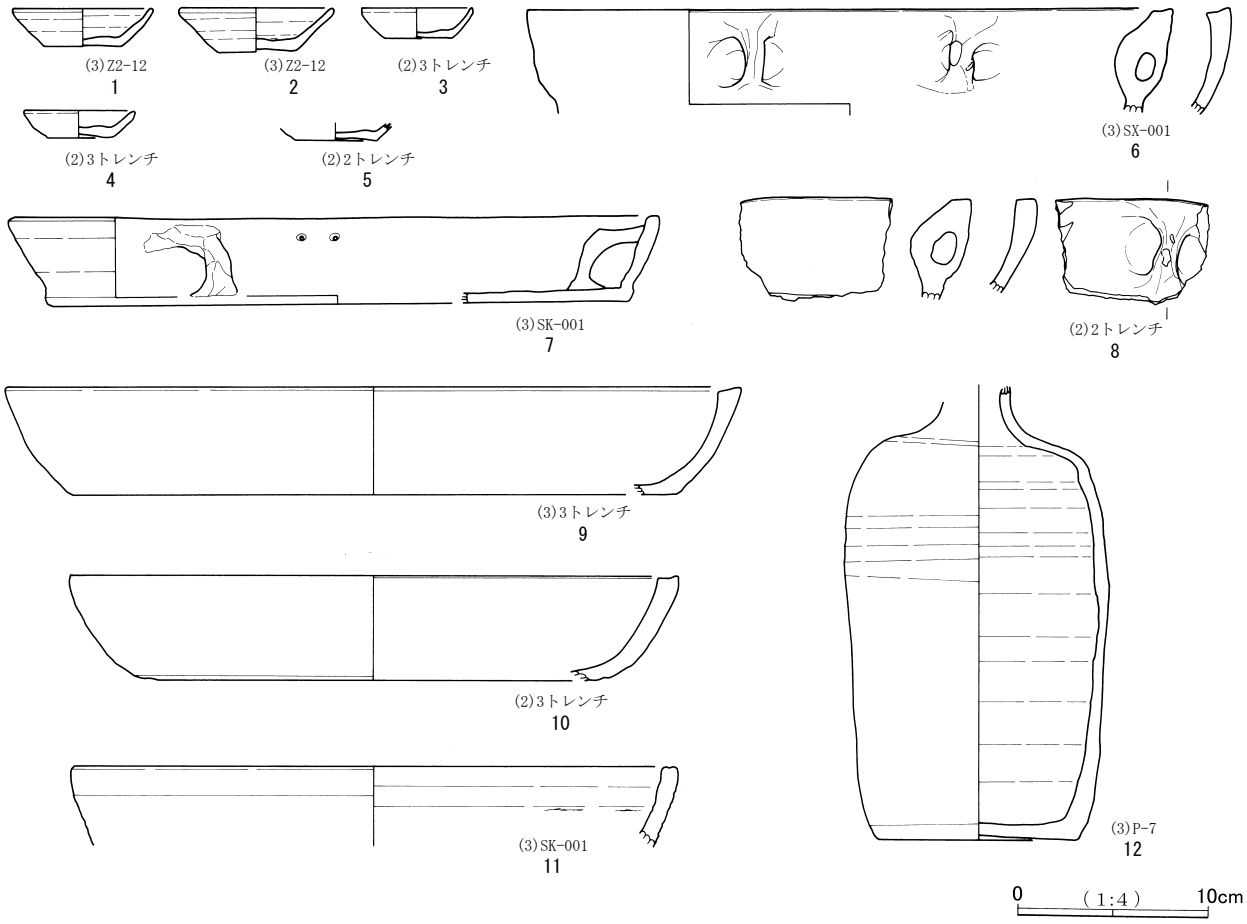
土製品、石製品（第46図、図版17）

１～３は土錘である。中膨らみの管状を呈し、表面は平滑に整えられている。１は下端を欠損している。現存長4.5cm、最大径3.8cm、孔径1.0cm、重量52.2ｇである。２はほぼ完形で、最大長5.2cm、最大幅3.0cm、孔径0.9cm、重量40.7ｇである。３は上下両端に欠損部分がある。現存長6.6cm、最大幅3.4cm、孔径0.9cm、重量66.3ｇである。詳細な時期は不明であるが、新しい時期の遺物の可能性がある。

４・５は砂岩製の砥石である。４は下半部を欠損している。土中の鉄分により褐色を帯びる。二次的に火を受けている可能性もある。明確な研磨面はなく、表面は凹凸している。現存長6.0cm、最大幅4.2cm、最大厚1.7cm、重量57.6ｇである。５の表面は研磨により非常に滑らかで、周辺部は欠損後も使用しているためか、所々平坦面や擦痕をもつ。現存長3.5cm、最大幅3.6cm、最大厚1.0cm、重量16.3ｇである。



第46図　土製品・石製品



第47図　中・近世遺物

６は常滑甕の胴部片を砥石に転用したものである。側縁部に使用痕がみられる。最大長10.2㎝、最大幅10.8㎝、最大厚1.2㎝、重量159.04ｇである。

中・近世遺物（第47図、図版17）

１～５はカワラケである。いずれも底部は回転糸切り無調整である。６～11は焙烙である。６は内耳が１対２の３耳になると思われ、２耳が遺存する。胎土に雲母を極めて多く含む。７は(3)SK－001から出土した。口縁部が2/3程遺存し、口径34.0㎝、底径30.6㎝、器高4.5㎝である。ロクロ成形で底部外面は無調整、内耳は３耳一組と思われ、２耳が遺存する。口縁部と底部に補修孔がみられる。黒色を呈し、胎土に雲母微粒子を少量含む。『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』で報告された花前Ⅱ－１遺跡でも類似の焙烙が出土している。８～10は胎土に雲母を多く含む。11は灰色を呈し、内面に輪積み痕が残る。体部外面は無調整で、型作りの可能性がある。胎土に雲母を含む。12は灰釉の五号徳利である。(3)SK－002の北側、(3)Ｐ－７の覆土内から出土した。口縁部を欠損する。底径10.5㎝、現存高24.0㎝である。外面胴部下半及び底部に回転ヘラケズリが施される。花前Ⅱ－１遺跡から類似の徳利が出土している。

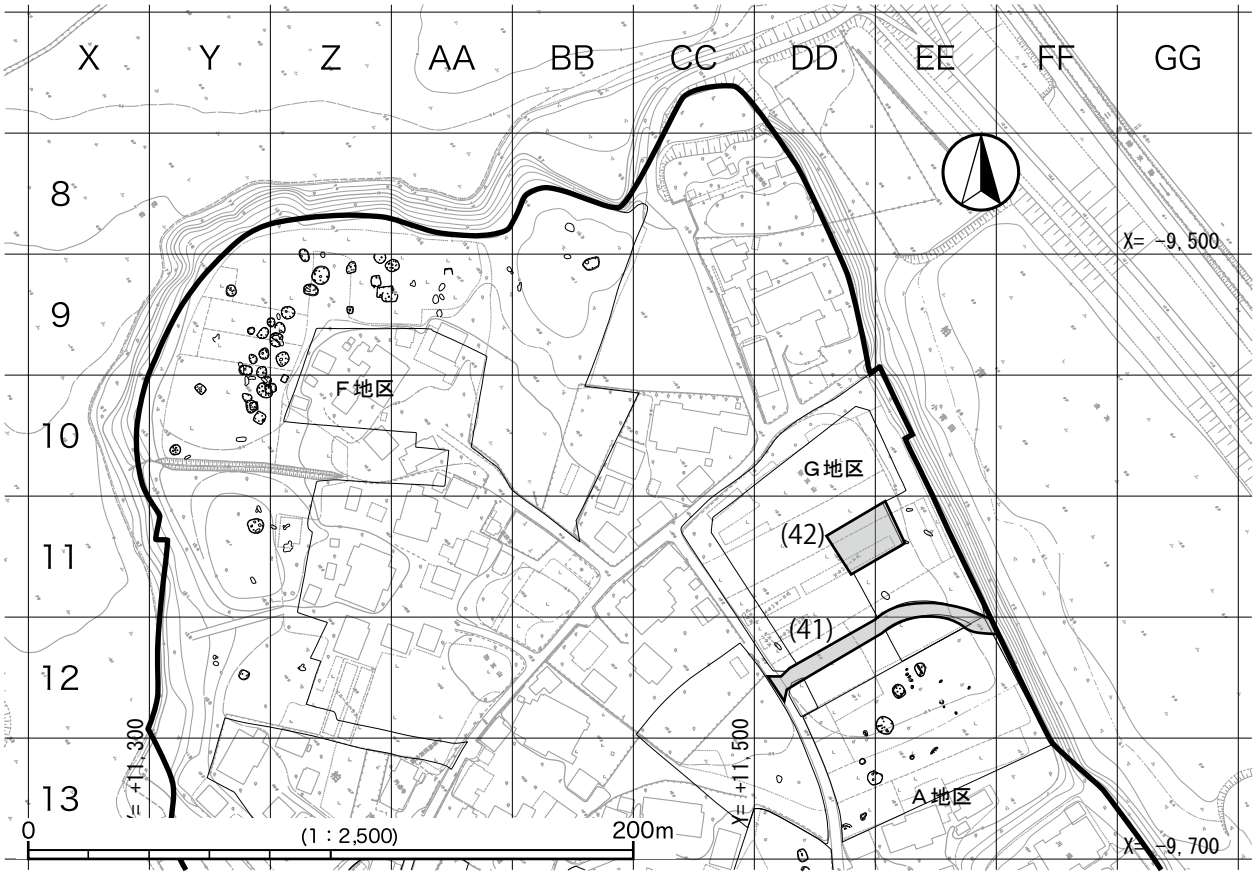
第３章　駒形遺跡

第１節　遺跡の概要（第48・49図、図版１）

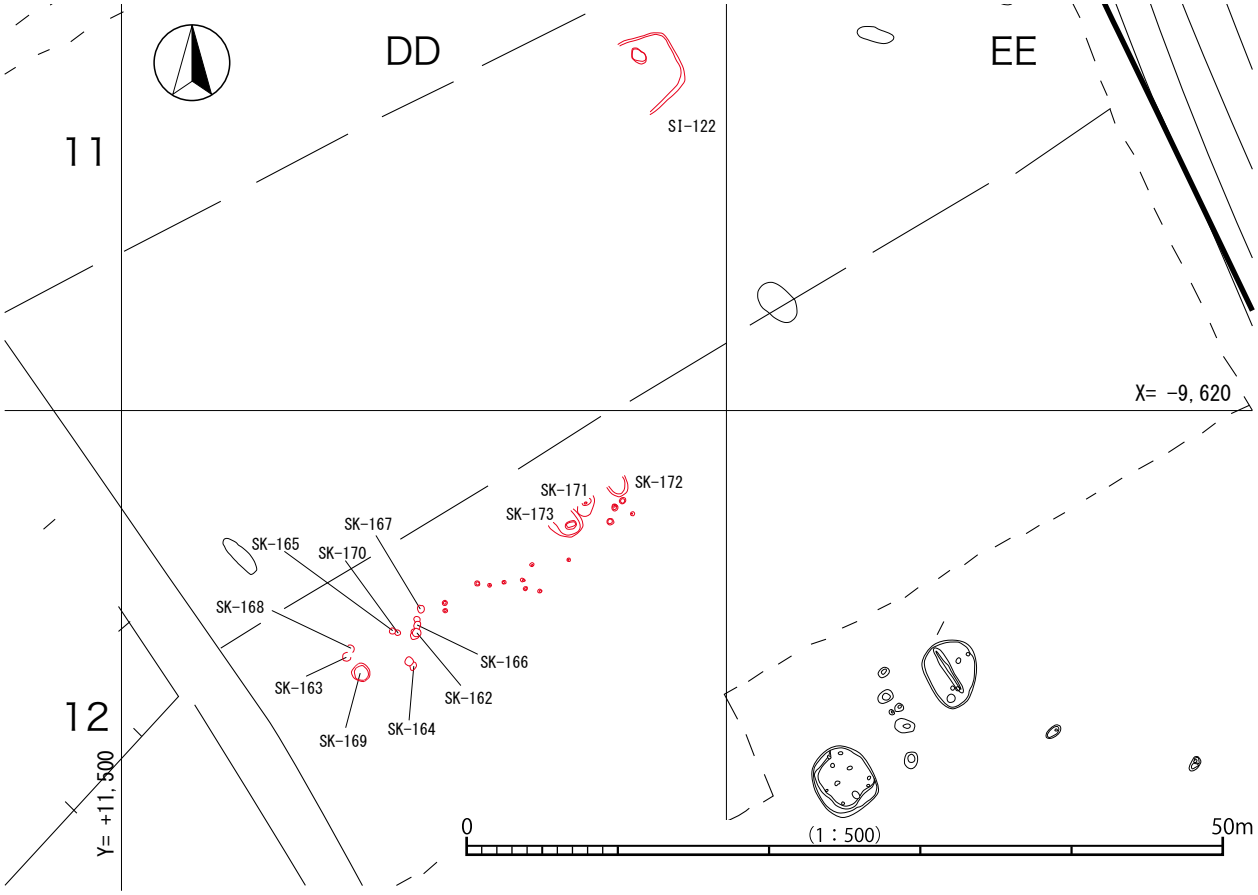
駒形遺跡は、利根川から南西方向に湾入する二つの支谷に挟まれた標高約13m～18mの台地上に所在する。周辺一帯は江戸期の利根川東遷以前、小貝川に合流していた古常陸川の水系にあったと言え、古鬼怒湾に属する古常陸川湾奥部の柏・我孫子低地の北西端に面している。いわゆる縄文海進の盛期には、付近の古常陸川谷に谷奥干潟が形成されていたと考えられている。富士見遺跡・大松遺跡を含めた台地は南西部を基部とし、柏・我孫子低地に向かって半島状に突出している。駒形遺跡はこの台地の北東部を占めており、遺跡の東側と、富士見遺跡と分別される北側からさらに小支谷が湾入している。

調査は平成12年度から断続的に行われ、第１次～第19次までは『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書２－柏市駒形遺跡－縄文時代以降編１』、第20次～第40次までは『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書５－柏市駒形遺跡－縄文時代以降編２』で報告されている。主な成果として、縄文時代早期鵜ガ島台式期を中心とする広義の条痕文土器群と、前期前半関山式期から黒浜式期の集落が検出されたことが挙げられる。

今回報告する内容は、第41次・42次の発掘調査のうち縄文時代以降を対象としたもので、縄文時代の竪穴住居１軒、炉８基、土坑４基、ピット14基である。



第48図　駒形遺跡(41)・(42)調査位置図



第49図　駒形遺跡遺構分布図

第２節　縄文時代

１　竪穴住居

SI－122（第50図、図版18・20）

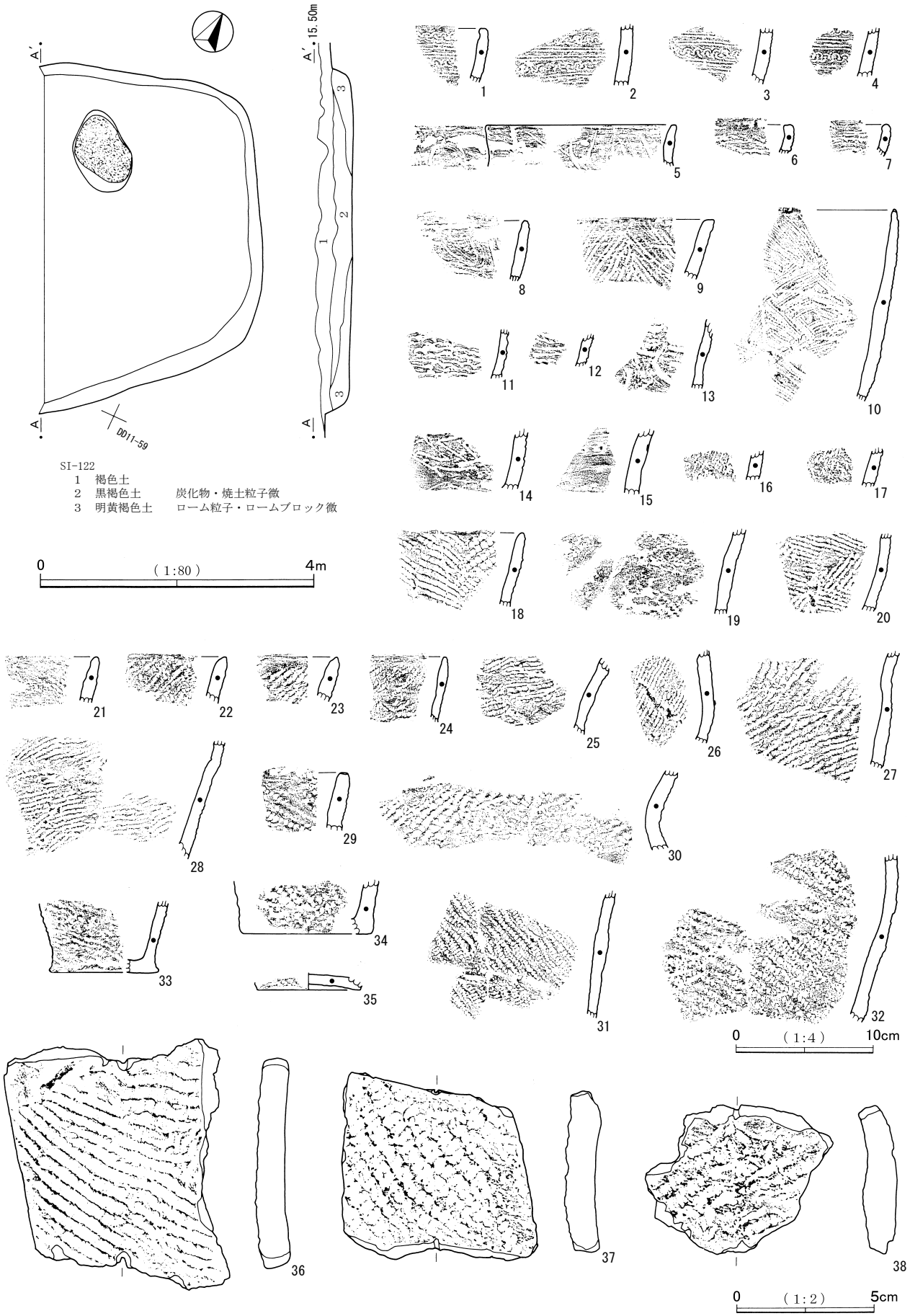
DD11－38付近に位置する。西側半分は調査区外のため未検出である。現存部分で5.50ｍを測り、隅丸方形を呈するものと思われる。確認面からの深さは25cmである。遺構北側から炉が検出された。124cm×80cmの楕円形で、床面からの深さは5cmである。

遺物は黒浜式土器と土器片錘が覆土中から出土している。１はコンパス手法による波状沈線文と平行沈線が交互に施される口縁部片で、２～４は同一個体の可能性がある。５・８は1本引きの沈線、６・７は平行沈線による文様がみられる。９は集合沈線で菱形構成をとるものと思われる。10は平行沈線による菱形文、11・12は波状沈線文が描かれる。13は粗雑な沈線文、14は鋸歯状の沈線文が垂下する。15～17は刺突文のみられる胴部片で、16・17は櫛歯状工具によるものと思われる。

18～35は縄文のみがみられる土器である。18は無節ＲとLR、19はLRとRLの羽状施文、20は無節Ｌと無節Ｒが菱形構成をとる。21は無節Ｒ、22～28は無節Ｌ、29・31・32はRL、30はLRが施される。32は土器片錘に加工した破片が接合した。33～35は底部で、33は無節Ｒ、34・35はRLである。

36～38は土器片錘である。いずれも胎土に繊維の混入がみられ、36は口縁部片を加工している。38は片側の紐かけ部分がみられないため、欠損していると思われる。

石器は、ホルンフェルスを素材とする石鋸１点とチャート製の台石１点が出土しているが、図示できなかった。


A'
A
15.50m
DD11-59
SI-122
1 褐色土
2 黒褐色土 炭化物・焼土粒子微
3 明黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック微
0 (1:80) 4m
0 (1:4) 10cm
0 (1:2) 5cm

第50図 SI-122

2　炉

SK－162（第51図、図版18）

DD12－34に位置する。３個の掘り込みからなり、最も新しいと思われる掘り込みをＡ、南側に位置する掘り込みをＢ、西側に位置する掘り込みをＣとした。Ａの平面形は径56㎝の不整な円形で、確認面からの深さは14㎝である。

SK－163（第51図、図版18）

DD12－43に位置する。北東側を撹乱によって切られるが、平面形は径57㎝の円形になると思われ、確認面からの深さは８㎝である。

SK－164（第51図、図版18）

DD12－44に位置する。２個の楕円形の掘り込みからなり、北側をＡ、南側をＢとした。２基合わせた長さは94㎝、Ａの平面形は57㎝×54㎝、確認面からの深さはＡが９㎝、Ｂが16㎝である。

SK－165（第51図、図版18）

DD12－34に位置する。平面形は径39㎝の円形で、確認面からの深さは５㎝である。

SK－166（第51図、図版18）

DD12－34に位置する。２個の楕円形の掘り込みからなり、南側をＡ、北側をＢとした。南側はSK－162と重なる。２基合わせた長さは79㎝、幅は43㎝、確認面からの深さは最も深いところで９㎝である。

SK－167（第51図、図版18）

DD12－34に位置する。平面形は53㎝×45㎝の不整形で、確認面からの深さは８㎝である。

SK－168（第51図、図版18）

DD12－33に位置する。西側半分を撹乱によって切られている。平面形は径54㎝の円形になると思われ、確認面からの深さは８㎝である。

SK－170（第51図、図版18）

DD12－34に位置する。西側をSK－165と切り合う。平面形は径37㎝の不整な円形で、確認面からの深さは５㎝である。

3　土坑

SK－169（第51図、図版18）

DD12－43・44に位置する。平面形は1.21ｍ×1.19ｍの不整な円形で、確認面からの深さは15㎝である。中央部分は北西から南東方向へ帯状に撹乱を受けている。

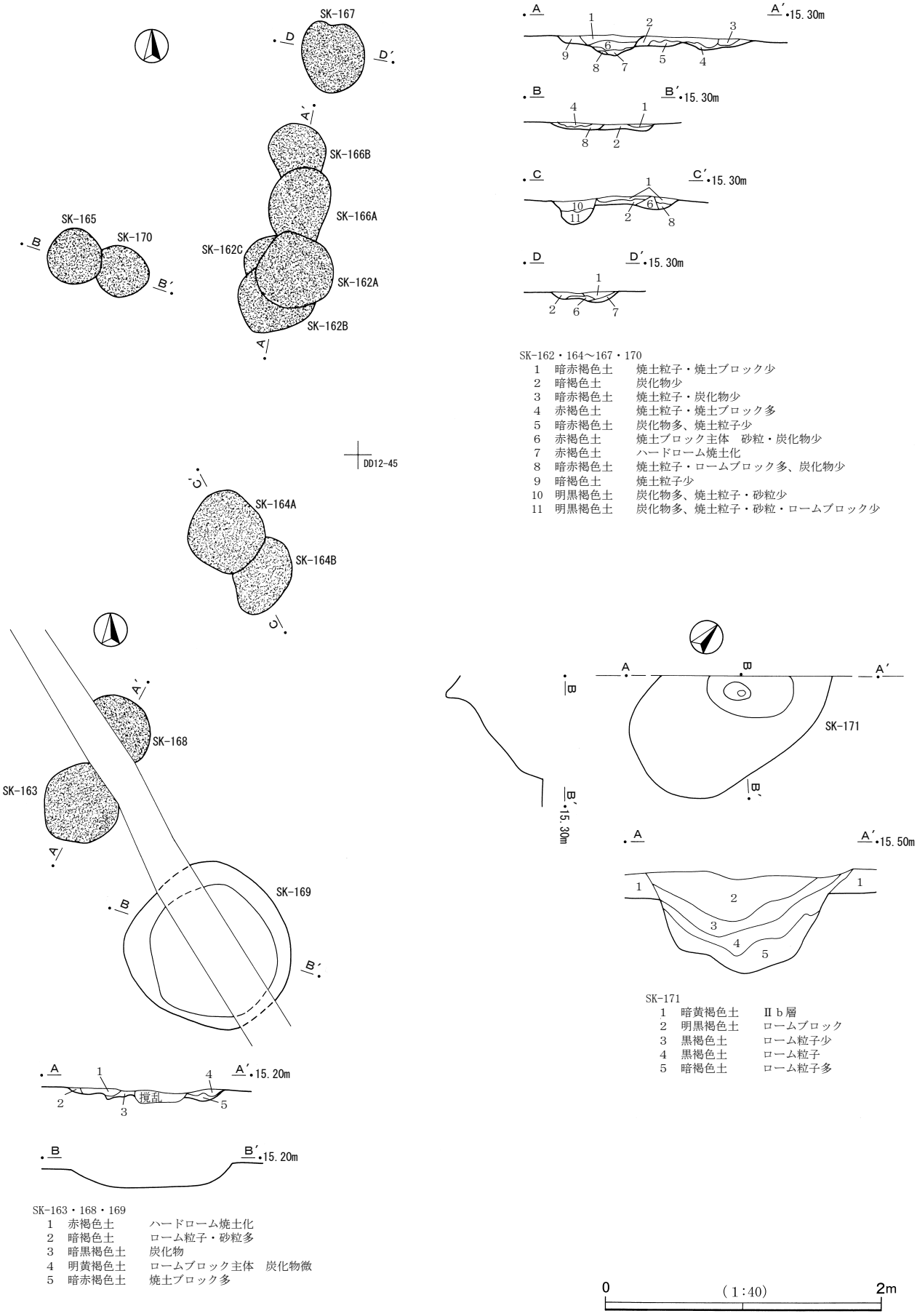
SK－171（第51図、図版18）

DD12－17に位置する。平面形は南北方向に延びる長楕円形を呈すると思われるが、北半分は調査区外のため未検出である。幅1.00ｍ、確認面からの深さは70㎝である。遺構中央に長さ62㎝、底面からの深さ18㎝の掘り込みがある。

遺物は少量の土器の他、チャート製の石鏃未成品、楔形石器、剥片が出土しているが、図示できるものはなかった。

SK－172（第52図、図版19）

DD12－18に位置する。平面形は南北方向に延びる長楕円形を呈すると思われるが、北半分は調査区外のため未検出である。幅1.42ｍ、確認面からの深さは24㎝である。



SK-162・164～167・170

1	暗赤褐色土	焼土粒子・焼土ブロック少
2	暗褐色土	炭化物少
3	暗赤褐色土	焼土粒子・炭化物少
4	赤褐色土	焼土粒子・焼土ブロック多
5	暗赤褐色土	炭化物多、焼土粒子少
6	赤褐色土	焼土ブロック主体　砂粒・炭化物少
7	赤褐色土	ハードローム焼土化
8	暗赤褐色土	焼土粒子・ロームブロック多、炭化物少
9	暗褐色土	焼土粒子少
10	明黒褐色土	炭化物多、焼土粒子・砂粒少
11	明黒褐色土	炭化物多、焼土粒子・砂粒・ロームブロック少

SK-163・168・169

1	赤褐色土	ハードローム焼土化
2	暗褐色土	ローム粒子・砂粒多
3	暗黒褐色土	炭化物
4	明黄褐色土	ロームブロック主体　炭化物微
5	暗赤褐色土	焼土ブロック多

SK-171

1	暗黄褐色土	Ⅱｂ層
2	明黒褐色土	ロームブロック
3	黒褐色土	ローム粒子少
4	黒褐色土	ローム粒子
5	暗褐色土	ローム粒子多

第51図　SK-162～ SK-171

SK－173（第52図、図版17・19）

DD12－17付近に位置する。平面形は南北方向に延びる長楕円形を呈すると思われるが、北半分は調査区外のため未検出である。幅1.97m、確認面からの深さは110cmである。遺構南端に75cm×55cm、底面からの深さ18cmの掘り込みがある。

わずかだが覆土中から黒浜式の土器片と石器が出土している。１は沈線による粗い格子目文、２はLRの環付末端が施された胴部片で、１には補修孔がみられる。３は石鏃の未成品である。厚みのある五角形で、裏面下部に折れ面を打面とした剥離痕が器面半分に残る。周縁から成形されるが厚みが除去しきれず、完成には至らない。濃灰色で節理のあるチャート製である。

４　ピット

P－1（第53図、図版19）

DD12－35に位置する。平面形は31cm×26cmの楕円形で、確認面からの深さは20cmである。

P－2（第53図、図版19）

DD12－35に位置する。平面形は34cm×33cmの円形で、確認面からの深さは16cmである。

P－3（第53図、図版19）

DD12－25に位置する。平面形は径33cmの円形で、確認面からの深さは16cmである。

P－4（第53図、図版19）

DD12－26に位置する。平面形は径24cmの円形で、確認面からの深さは21cmである。

P－5（第53図、図版19）

DD12－26に位置する。平面形は29cm×24cmの楕円形で、確認面からの深さは20cmである。

P－6（第53図、図版19）

DD12－26に位置する。平面形は32cm×24cmの不整形で、確認面からの深さは40cmである。

P－7（第53図、図版19）

DD12－26に位置する。平面形は28cm×25cmの楕円形で、確認面からの深さは16cmである。

P－8（第53図、図版19）

DD12－26に位置する。平面形は27cm×25cmの楕円形で、確認面からの深さは30cmである。

P－9（第53図、図版19）

DD12－26に位置する。平面形は26cm×24cmの楕円形で、確認面からの深さは24cmである。

P－10（第52図、図版19）

DD12－27に位置する。平面形は径22cmの円形で、確認面からの深さは13cmである。

P－11（第52図、図版19）

DD12－18に位置する。平面形は径27cmの不整な円形で、確認面からの深さは30cmである。

P－12（第52図、図版19）

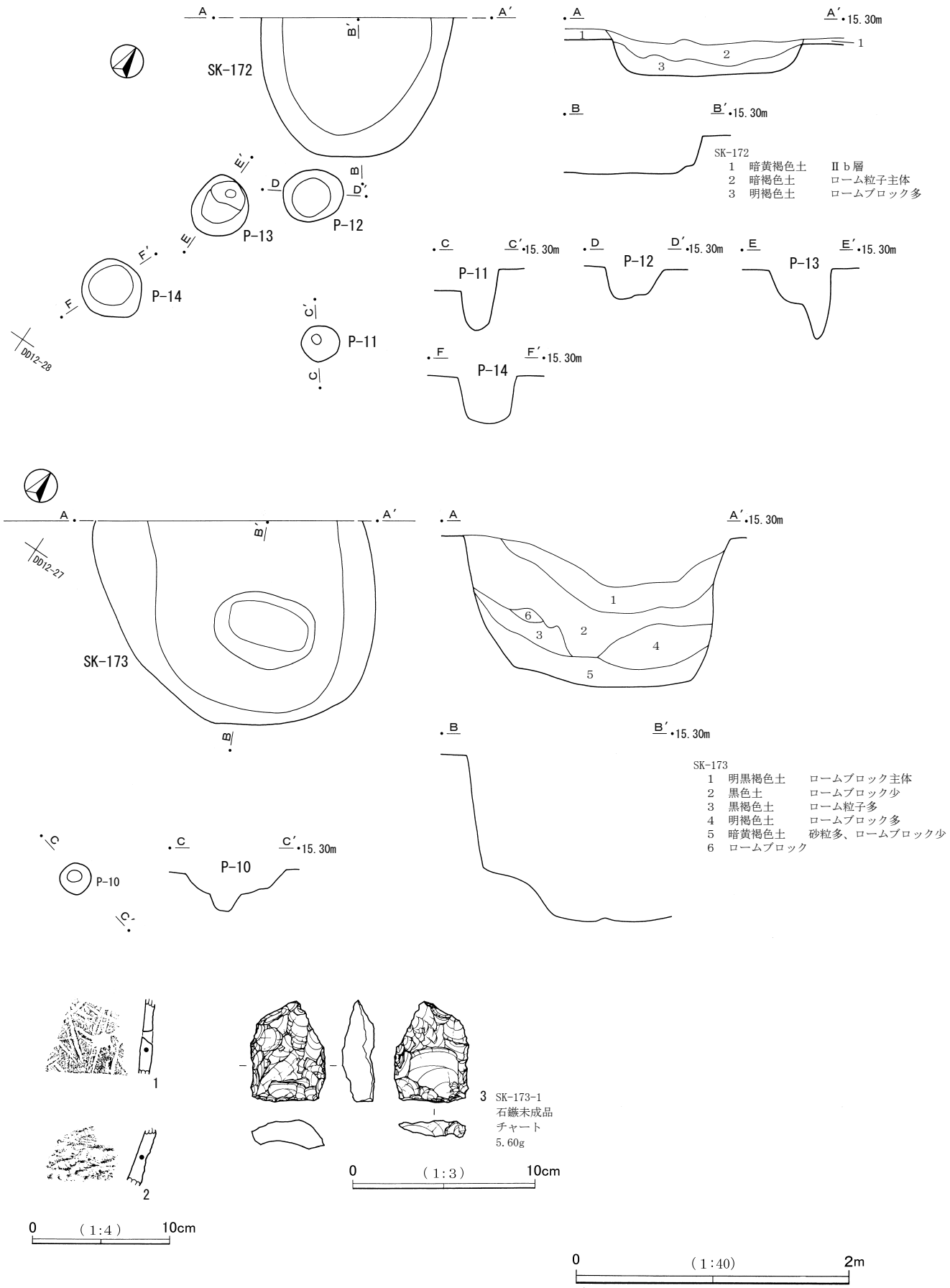
DD12－18に位置する。平面形は44cm×36cmの楕円形で、確認面からの深さは22cmである。

P－13（第52図、図版19）

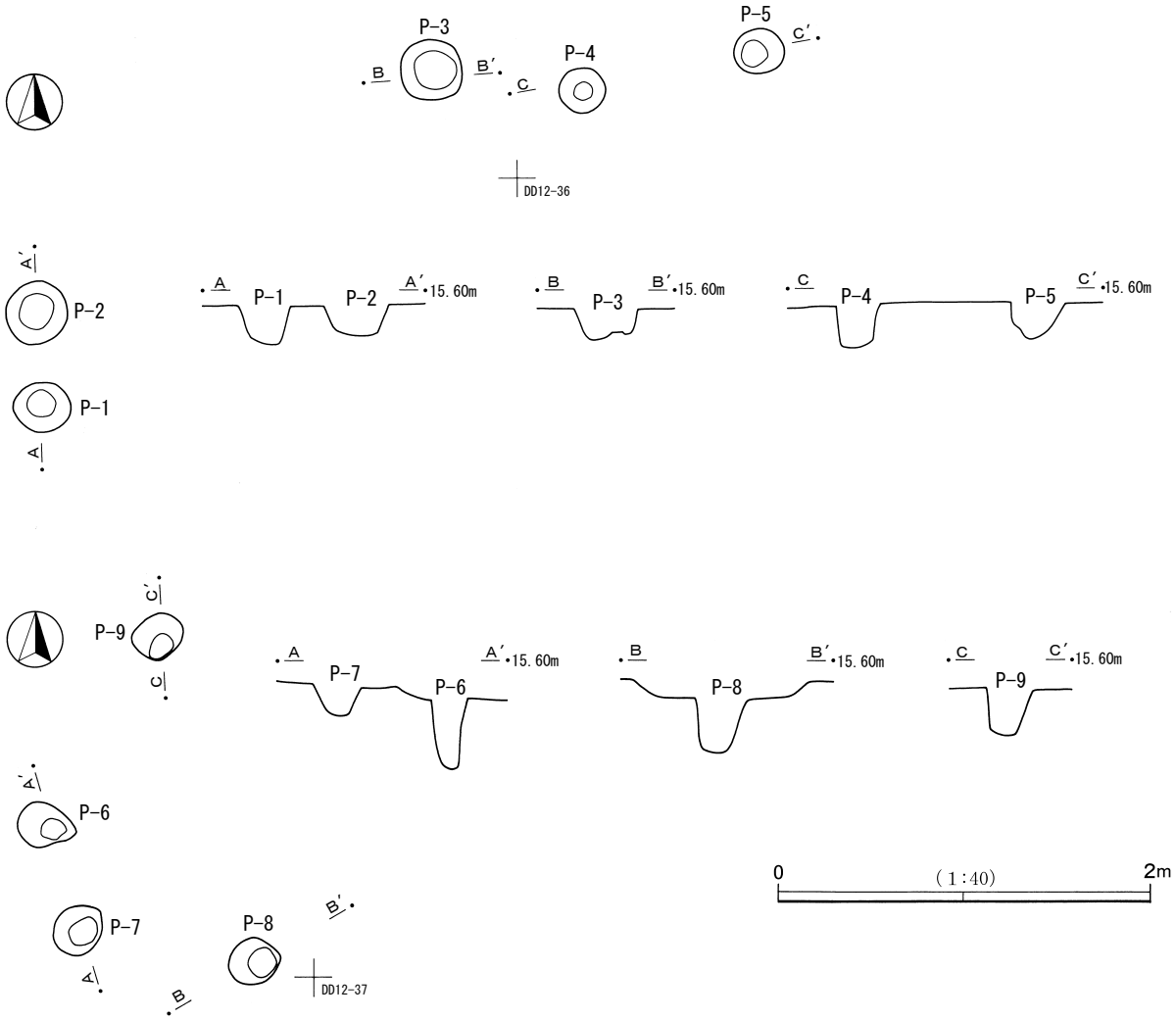
DD12－18に位置する。平面形は45cm×40cmの楕円形で、確認面からの深さは52cmである。

P－14（第52図、図版19）

DD12－18に位置する。平面形は46cm×44cmの不整な円形で、確認面からの深さは33cmである。



第52図　SK-172、SK-173、P-10～P-14



第53図　P-1～P-9

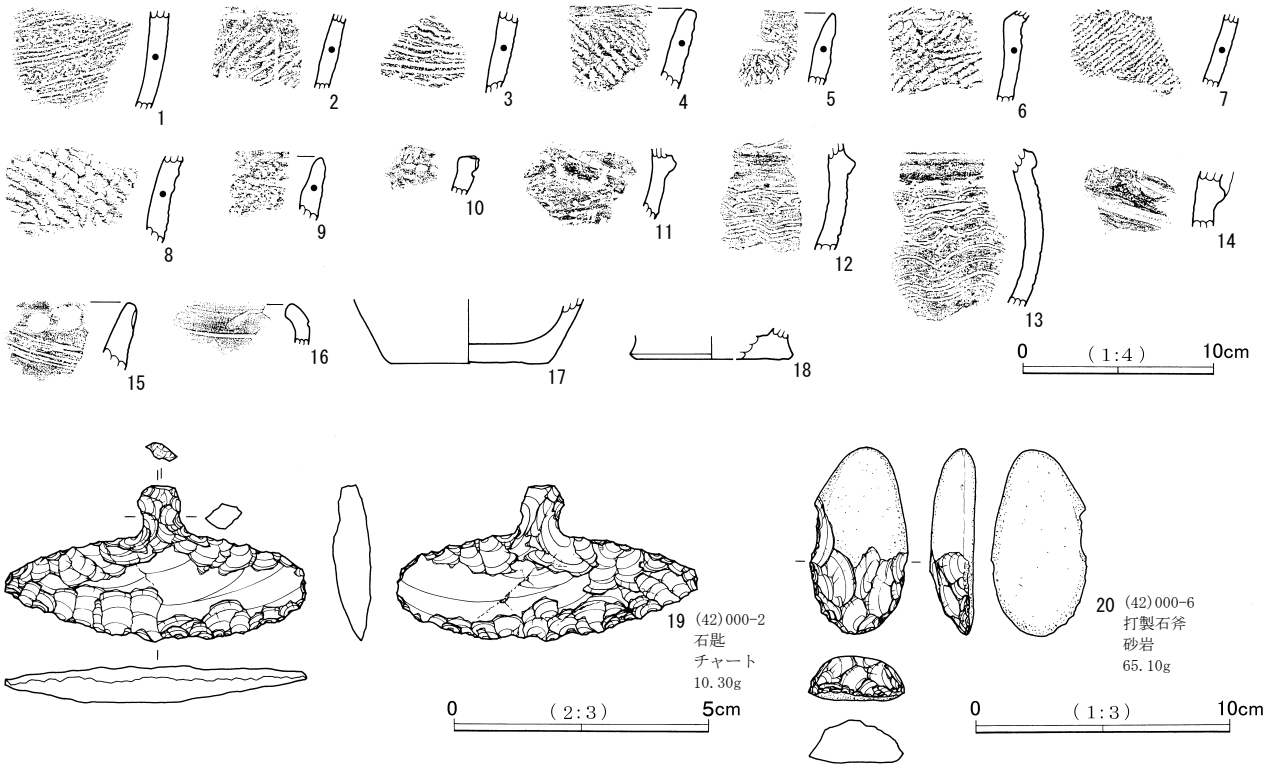
5　遺構外出土遺物

縄文土器（第54図、図版20）

１～９は黒浜式である。１はコンパス手法による波状沈線文と平行沈線が交互に施される。２は粗雑な沈線文で地文は無節Ｌか。３は平行沈線で部分的に波状を描く。４・８は無節Ｒ、５～７は無節Ｌ、９はLRが施される。10・11は阿玉台式で押引文がみられ、胎土に雲母を含む。12・13は隆帯以下が内湾する胴部片で、沈線による波状文が描かれる。胎土に２㎜以下の白色礫と雲母を含むことから阿玉台式もしくは阿玉台式に並行する時期の土器と思われる。14は加曽利Ｅ式で、隆帯による枠状文がみられる。15は円形凹文と櫛歯状条線が施される口縁部片で、堀之内式と思われる。16は加曽利Ｂ式の浅鉢である。沈線で区画された口縁部にミガキが施される。17・18は底部である。文様がみられないため詳細な時期は不明だが、17は黒浜式と思われる。

石器類（第54図、図版17）

19は石匙である。厚みのない横長の大形剥片が素材である。撮み部を除けば木葉形の尖頭器のような形態（斜平行剥離）で一端が尖る。最大幅は撮み部直下にあり、抉れの形状は四角形を呈する。撮み部の端部は節理折れと考えられる。濃灰色のチャート製である。20は片刃の打製石斧である。扁平な小楕円礫を素材として片面下半に剥離を加え、半円弧状の刃部を作り出している。素材の形状を大きく変えることなく成形され、側面に至る加工では、敲打による稜の摩滅が認められる。自然面は黒褐色で光沢があり、剥離面は濃灰褐色で粒状組織が確認される。砂岩製である。



第54図　遺構外出土遺物

第４章　富士見遺跡

第１節　遺跡の概要（第55・56図、図版１）

富士見遺跡は、柏・我孫子低地に半島状に突き出た古常陸川南岸の標高16m～18mの台地に立地する。縄文時代の遺構を主体としており、集落のまとまりからＡ～Ｅの５地区に区分され、これまで第１地点～第50地点を２冊に分けて報告している。Ａ～Ｃ地区に位置する縄文時代の遺構・遺物については『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告６－柏市富士見遺跡－縄文時代以降編１』、Ｄ・Ｅ地区の縄文時代の遺構・遺物、Ａ～Ｅ区の縄文時代以降の遺構・遺物については『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告７－柏市富士見遺跡－縄文時代以降編２』に収録されている。Ａ地区は遺跡の南部、Ｂ地区は南西部、Ｃ地区は南東部、Ｄ地区は中央部、Ｅ地区は北部にあたる。各地区とも縄文時代前期の黒浜式期が集落の中心となり、花積下層式期から興津式期まで時期による盛衰はあるものの、前期を通して集落が営まれたことが分かっている。Ｄ・Ｅ地区は縄文時代前期の遺構の他に早期・中期・後期の遺構も検出されている。

今回報告するのは第51地点～第59地点である。第52・54・55地点はＡ地区にあたるが、遺構が検出されなかったため確認調査で終了した。第51・53・56～59地点はＤ地区にあたり、第53・57～59地点から竪穴住居８軒、土坑９基、道路状遺構１条、ピット１基が検出された。既報告のSI－121の続きとなる遺構も確認できた。

また、柏北部東地区遺跡群では前期集落設営時期を通じて遺構内貝層が形成されるが、富士見遺跡でも例外ではなく、今回もこの時期の貝層が検出された。

第２節　縄文時代

１　竪穴住居

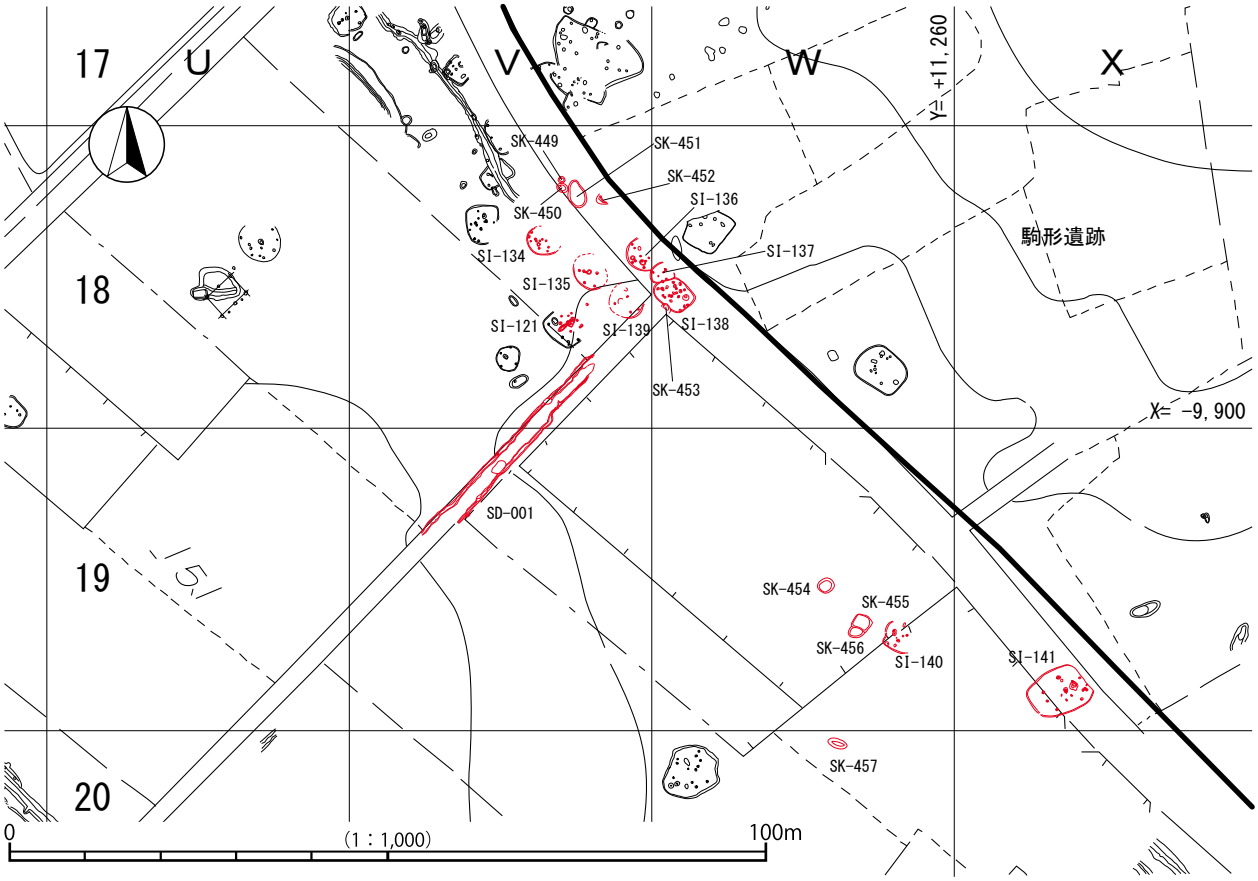
SI－121（第57・58図、図版21・23、第４・５表）

V18－66付近に位置し、Ｄ地区の南東端にあたる。当初、土坑およびピットとして検出したが、既報告のSI－121の一部と判断した。南側の壁は確認できなかったが、長軸5.40m、短軸5.20mの隅丸方形を呈すると推定される。炉は既報告の北寄りのものの他、中央東寄りからも検出された。規模及び平面形は70㎝×49㎝の楕円形で、床面からの深さは13㎝である。東寄りの炉周辺から径23㎝～55㎝、深さ30㎝～97㎝のピットが12基確認された。

貝ブロック除去後に遺構が検出されたため、範囲や堆積状況は不明である。貝種は第４表に示したとおりであるが、サルボオ、ハマグリが最も多く、アサリがこれに次ぐ。

出土した土器は全て黒浜式である。１は浅鉢で、底部を欠損している。口縁部に上下端を半截竹管による連続刺突文で区画した磨消帯が巡る。胴部以下は第２種の附加条縄文（軸縄ＲにＲ１本附加・軸縄ＬにＬ１本附加）が施文され、羽状構成をとる。また、口縁部と同じ工具による刺突列が垂下する。２～４・８～10は平行沈線による葉脈文、７は斜沈線のみがみられるが、葉脈文の可能性がある。５は隆起線と波状沈線、６は結節沈線が施される。11は波状口縁で、波頂部下に貫通孔がみられる。口縁に沿って連続刺突文が２条巡り、地文に附加条第２種（軸縄ＬにＬ１本附加・軸縄ＲにＲ１本附加）が施される。12～19は縄文地に沈線文などが施される。12は附加条第２種（軸縄ＲにＲ１本附加・軸縄ＬにＬ１本附加）に沈

第55図　富士見遺跡調査範囲・調査区位置図



第56図　富士見遺跡遺構分布図

線文、13は結節沈線による葉脈文がみられる。地文はRLか。14の口縁部は狭い無文帯を有し、直下に押引文、胴部に撚糸文Ｌが施される。15はRL、16は附加条第２種（軸縄ＲにＲ１本附加）、17は附加条第２種（軸縄ＬにＬ１本附加）を地文として沈線文が施される。18はコンパス状の文様がみられるが、地文は摩滅のため不明瞭である。19は附加条第２種（軸縄ＬにＬ１本・軸縄ＲにＲ１本附加）を羽状に施した後波状沈線が描かれる。

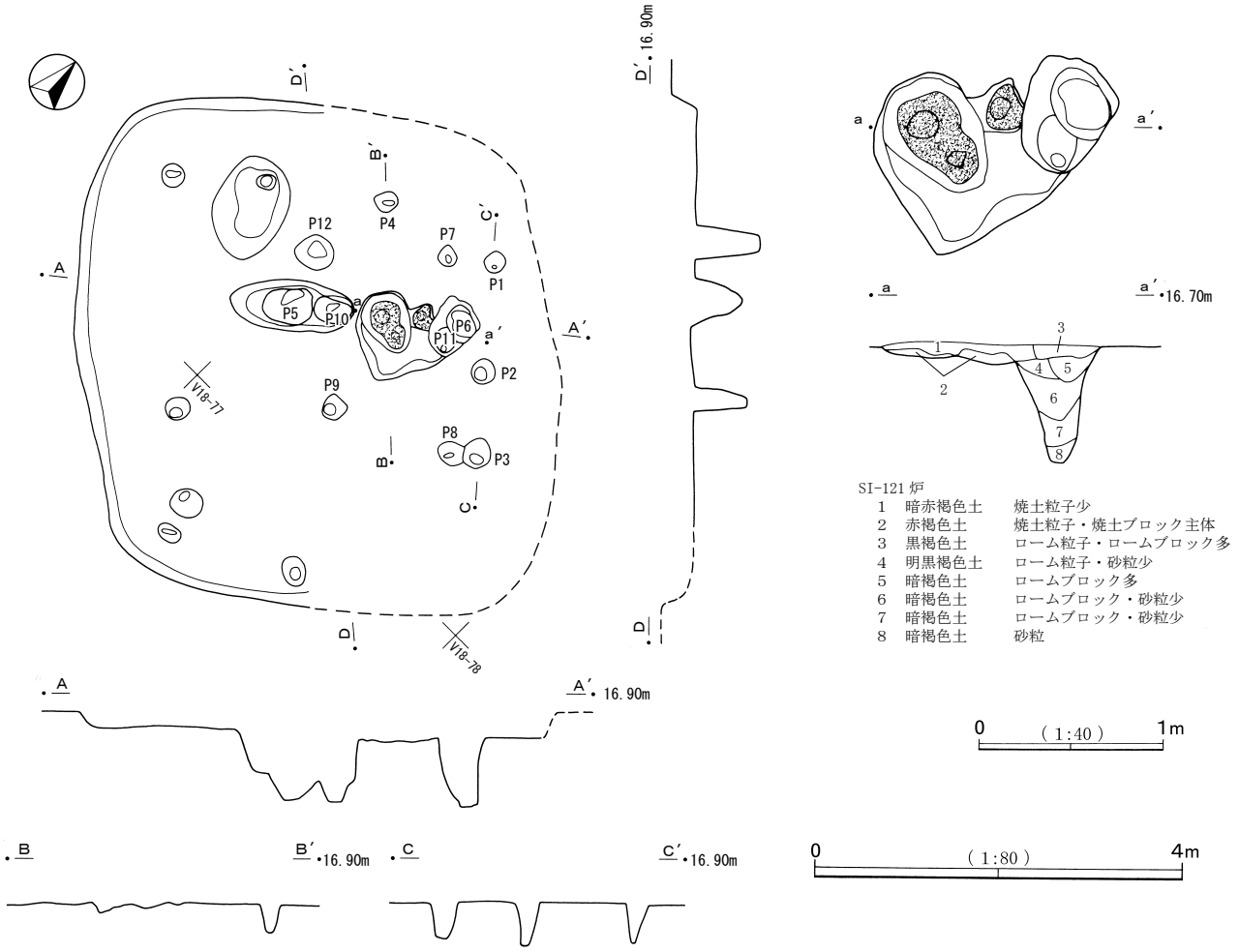
20～22は羽状もしくは菱形構成の縄文が施されるものである。20は無節ＬとＲ、21は附加条第２種（軸縄ＲにＲ１本・軸縄ＬにＬ１本附加）、22は反撚りRRとLLと思われる。23～27は単一の原体による斜縄文であるが、遺存部位が少ないため羽状もしくは菱形構成となる可能性を含む。23・24はLR、25は網目状撚糸文か。26は附加条第２種（軸縄ＲにＲ１本附加）、27は附加条第２種（軸縄ＬにＬ１本附加）であろう。28も遺存部位が少なく不明瞭だが、附加条第１種（軸縄ＲにＲ１本・軸縄ＲにＬ１本附加）がみられる。29は無文の口縁部片である。

30～33は底部片である。30は沈線文、31はLR、32は撚糸文Ｌ、33は撚糸文Ｒと思われる。

石器は磨製石斧１点、石皿２点、剥片類３点が出土しているが、図示しえなかった。

SI－134（第59図、図版21・24、第４・５表）

V18－35付近に位置する。北東部の1/2程が撹乱及び調査区外のため検出できなかった。長軸4.5m前後の長楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは16cmである。床面中央より南西寄りに炉を検出した。規模は42cm×36cmの不整形で、床面からの深さは12cmである。炉の底面は凹凸があり、平らではない。ピットは11基で、径20cm～34cm、深さ９cm～43cmである。炉の北側、床面中央に貝が堆積していた。最大で



第57図　SI-121①

15cmの厚みがあった。貝種はサルボオが最も多く、マガキ、ハマグリがこれに次ぐ。

出土した土器は全て黒浜式である。1は円形凹文と押引文が施される口縁部片で、補修孔が１孔みられる。２は緩やかな波状を描く沈線文、３は葉脈文、４は沈線文と撚糸文Ｒが施される。５は格子目文の崩れた形態か。６はLR、７は撚糸文でＲ１本とＬ２本を一組にしたもの、８は網目状撚糸文である。９は撚糸文ℓとｒの羽状施文か。10は沈線文が施された底部片である。

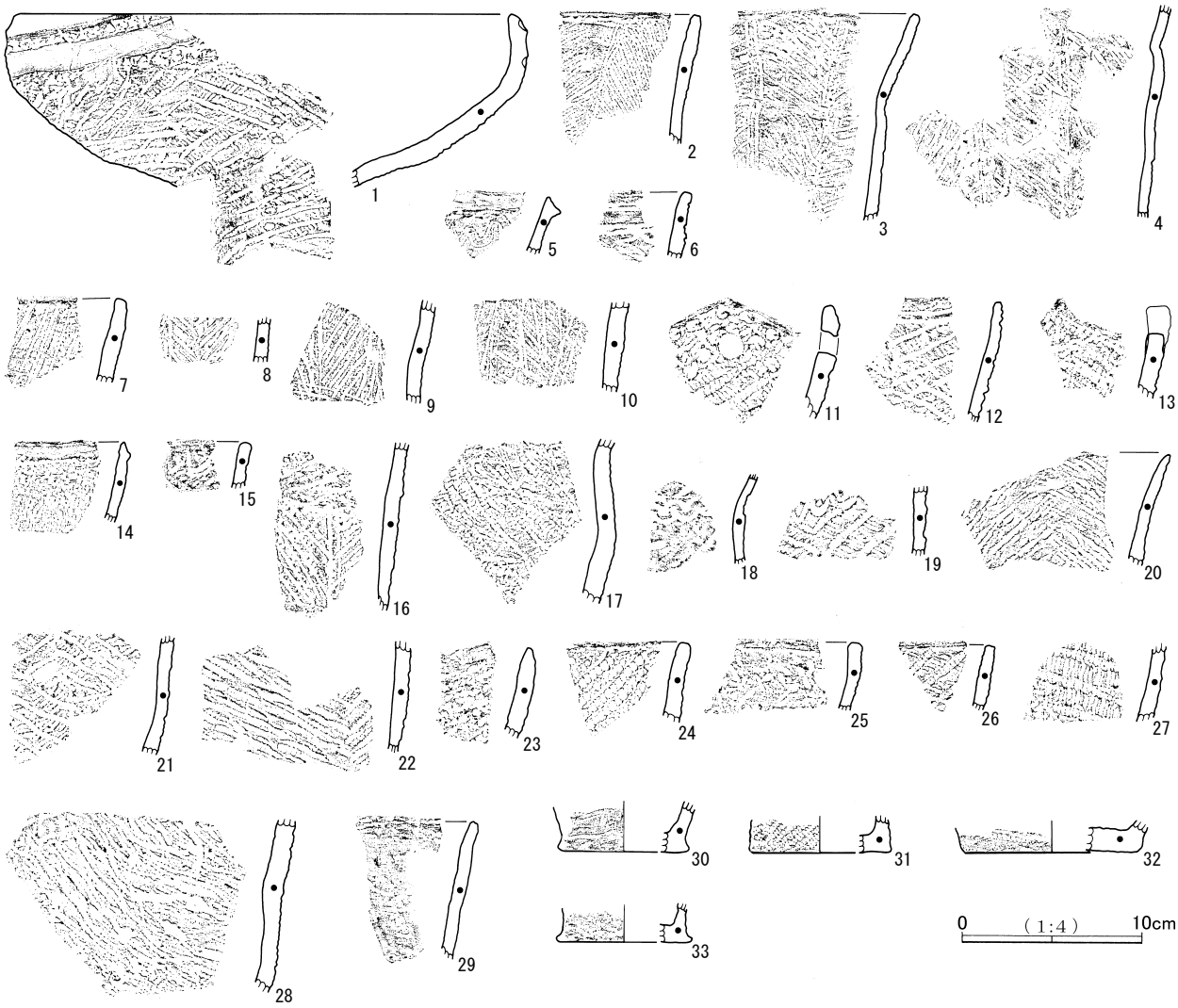
石器は流紋岩の磨石類と多孔質安山岩の石皿が出土しているが、図示しえなかった。

SI－135（第60図、図版21・24・28）

V18－47付近に位置する。北東部の一部が調査区外となる。撹乱が著しく不明瞭だが、長軸5.01m、短軸3.90mの長楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは13cmと浅い。床面中央から炉が検出された。規模は67cm×52cmの楕円形で、床面からの深さは10.7cmである。炉の底面は平らで、ロームの焼土化はさほど顕著ではない。ピットは６基で、径20cm～35cm、深さ９cm～77.4cmである。

出土遺物は少なく、５点を図示した。１～４は黒浜式の土器である。１は無文の口縁部片、２はLRを地文とし、結節沈線文が施される胴部片である。３は集合沈線、４は複節LRLと単節RLが施される。

５は削器である。左側縁に褐灰色の自然面がわずかに残る。厚みのある半月形で両側縁に小剥離痕が並ぶ。加工は主に正面側に施され、稜上には白濁した潰れ痕がみられる。左側面中央部など剥離面のところどころに褐色の強い部分があり、加工に時間差が感じられる。石材は硬質頁岩である。



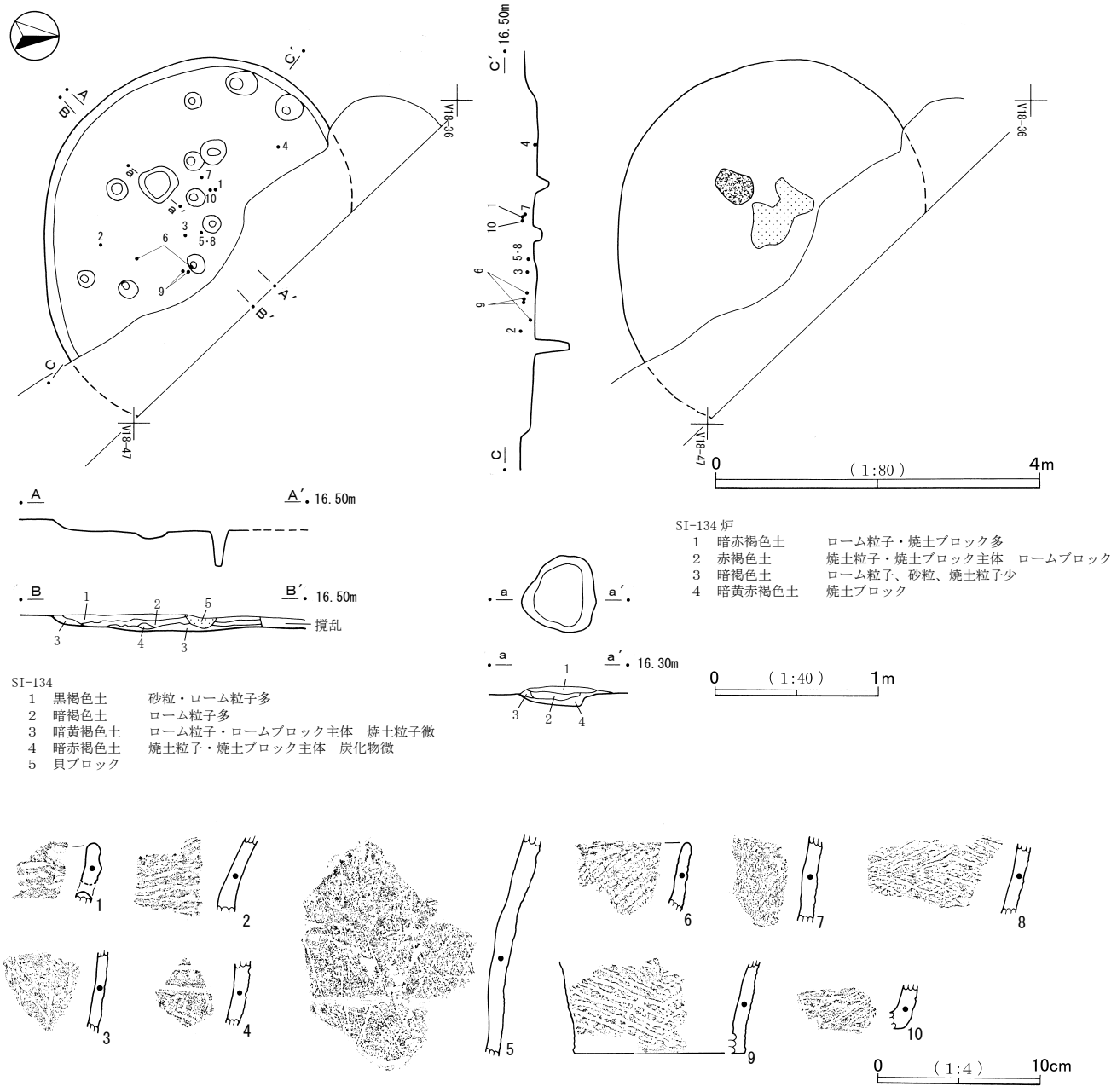
第58図　SI-121②

SI－136（第61・62図、図版21・23・24、第４・５表）

V18－39付近に位置する。北東部分は排水溝によって削平されており、南側はSI－137と切り合っている。平面形は円形もしくは楕円形を呈すると思われ、4.47m×3.19mの範囲で検出した。確認面からの深さは19cmである。炉は床面北西にあり、規模は73cm×52cmの長楕円形で、床面からの深さは９cmである。径20cm～30cm、深さ14cm～54cmの小ピット８基と、82cm×66cm、深さ30cmのP1、62cm×52cm、深さ16cmのP2が検出されている。床面南寄りに貝の小ブロックが点在していた。貝種はハマグリが主体で、オキシジミ、シオフキが若干混じる。

出土した土器は全て黒浜式である。１は胴部が内湾しながら開く浅鉢である。口径24.7cm、底径15.4cm、器高10.0cmを測る。集合沈線により菱形文を描出している。２は深鉢の口縁部片で、口唇部に結節沈線文、胴部に半截竹管による格子目文が施される。３は連続刺突文と思われるが、器面が荒れているため不明瞭である。４は平行沈線による菱形文か。５の口縁部には平行沈線による短沈線、胴部にはRLが施される。６・７は同一個体と思われる。大型の波状口縁で、波底部には双頭状の突起が付く。口縁に沿って刺突文が３条巡り、胴部には附加条第１種（軸縄RLにｒ１本附加）が施される。胴部屈曲部にも刺突文が巡る。

８～12は羽状もしくは菱形構成をとる縄文が施されるものである。８は附加条第２種(軸縄ＬにＬ１本・

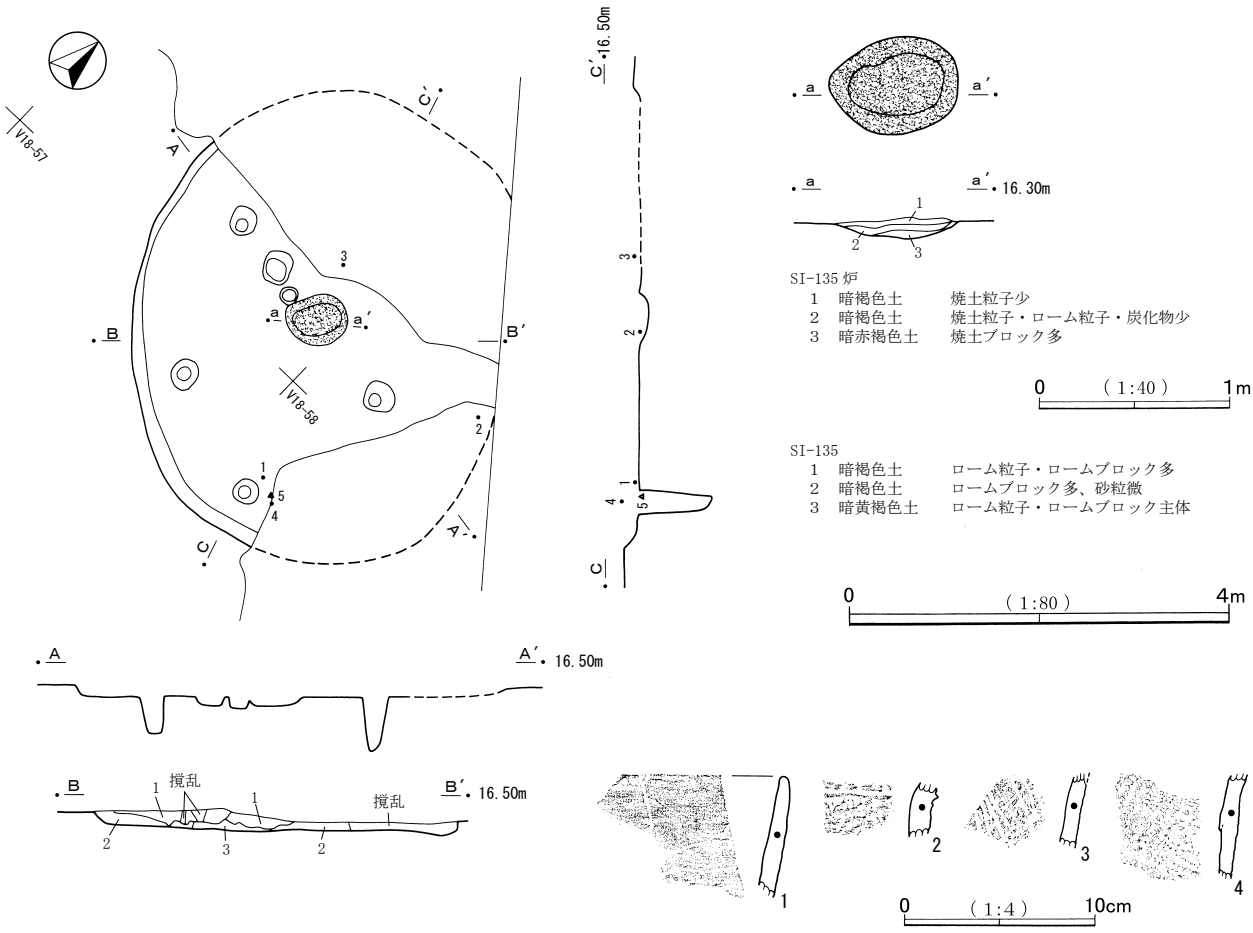


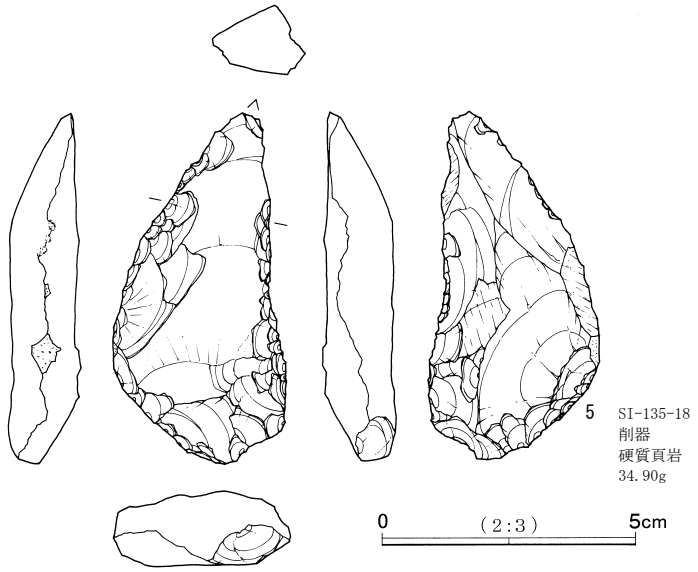
第59図　SI-134

軸縄不明Ｒ１本附加）の羽状で、口縁部に円形凹文がみられる。９・10は撚糸文ＬとＲ、11は撚糸文Ｒの施文方向を変えて羽状にしている。12は附加条第２種（軸縄ＲにＲ１本・軸縄不明Ｌ１本附加）による菱形施文である。13～19は単一の原体による斜縄文である。13・14は附加条第２種（軸縄ＲにＲ１本附加）、15は軸縄不明の附加条で、Ｒ１本を付加する。16～18は撚糸文Ｒ、19は撚糸文Ｌが施される。20は上げ底を呈する底部であろう。

21は黒浜式の土器片を利用した円板である。直径2.8㎝、厚さ0.9㎝を測り、周縁部を打ち欠いて整えている。

石器は多孔質安山岩の石皿が１点出土しているが、図示しえなかった。





第60図　SI-135

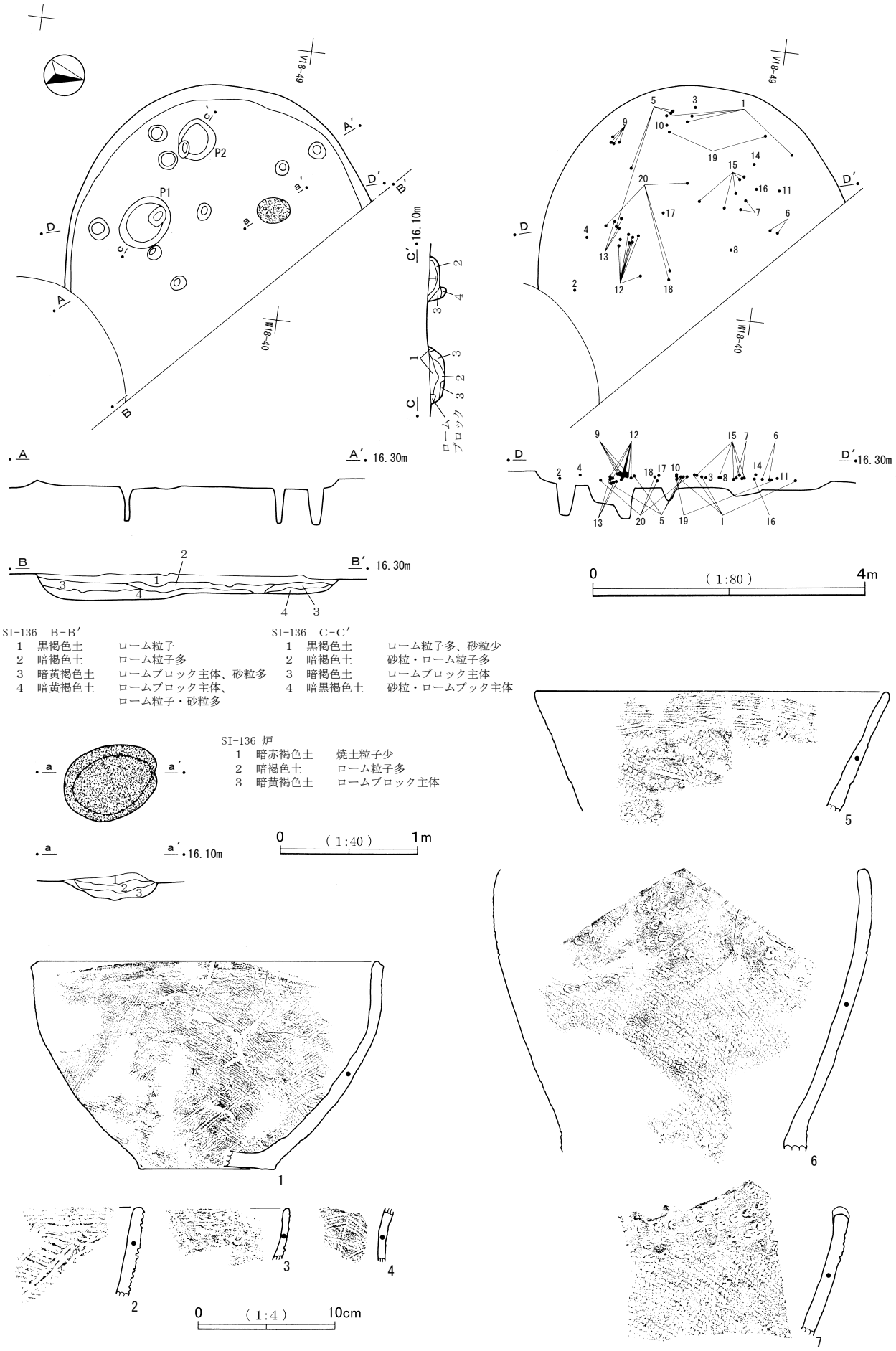
SI－137（第63図、図版21・24）

W18－40付近に位置する。北側をSI－136、南側をSI－138と切り合う。遺構の新旧関係はSI－136が最も古く、SI－138が最も新しい。平面形は不正な楕円形を呈し、規模は3.27m×2.84m、確認面からの深さ24cmである。炉は検出されなかった。ピットは6基で、径20cm～34cm、床面からの深さは13cm～40cmである。

出土遺物は少なく、図示できたのは3点である。いずれも黒浜式の胴部片で、1は斜格子状の沈線であるが、痕跡はごく浅く条線に近い。2はRL斜縄文、3はr1本が附加された軸縄不明の附加条が施される。

SI－138（第64・65図、図版21・23・25・28）

W18－50付近に位置する。北側をSI－137と切り合う。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は5.01m×3.94m、確認面からの深さは29cmである。炉は北寄りから検出され、規模は44cm×35cm、床面からの深さは20cmで



SI-136　B-B′

1	黒褐色土	ローム粒子
2	暗褐色土	ローム粒子多
3	暗黄褐色土	ロームブロック主体、砂粒多
4	暗黄褐色土	ロームブロック主体、ローム粒子・砂粒多

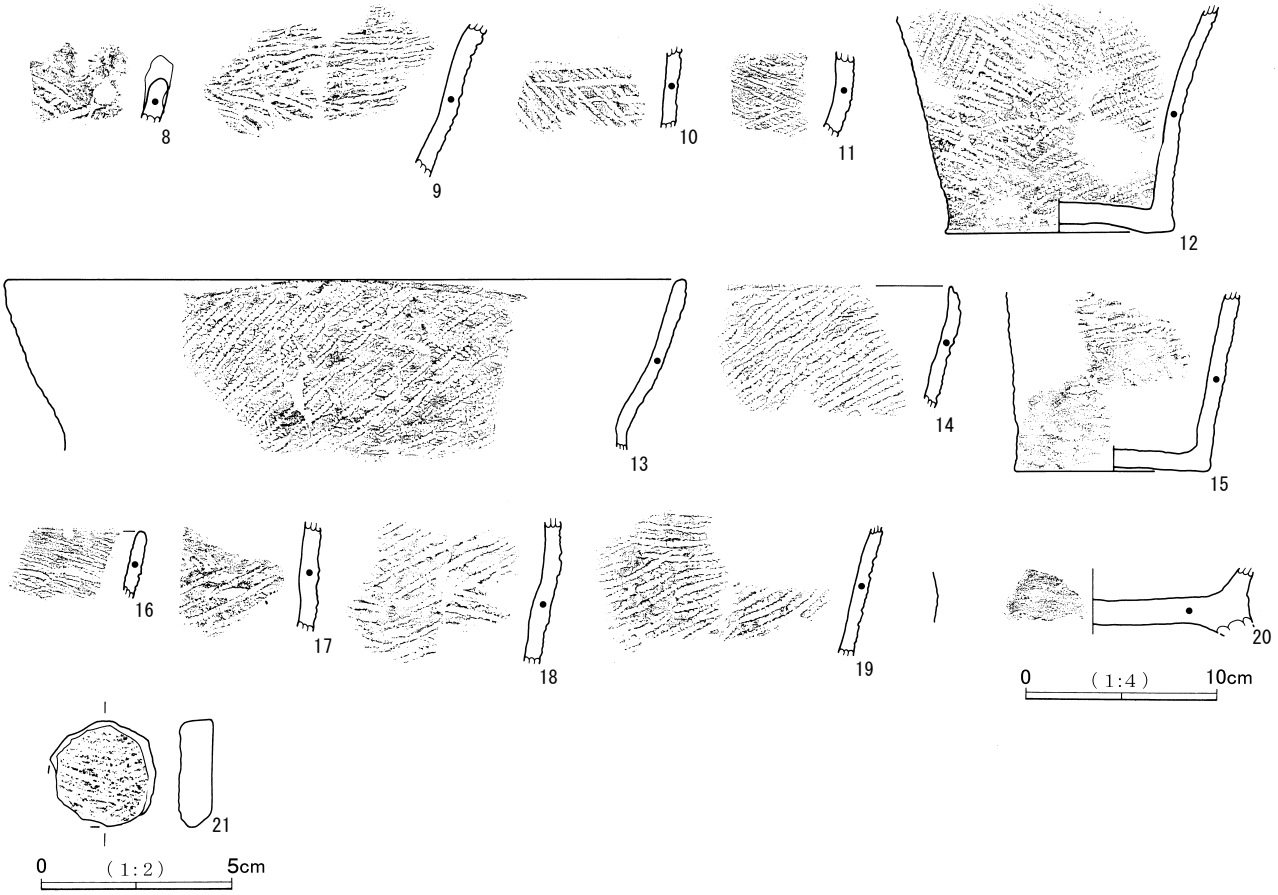
SI-136　C-C′

1	黒褐色土	ローム粒子多、砂粒少
2	暗褐色土	砂粒・ローム粒子多
3	暗褐色土	ロームブロック主体
4	暗黒褐色土	砂粒・ロームブック主体

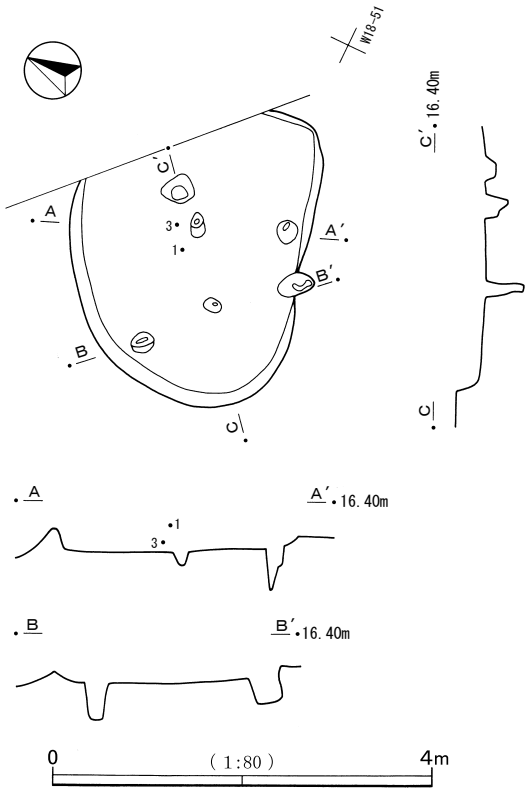
SI-136 炉

1	暗赤褐色土	焼土粒子少
2	暗褐色土	ローム粒子多
3	暗黄褐色土	ロームブロック主体

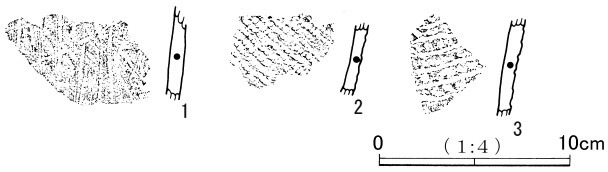
第61図　SI-136①



第62図　SI-136②



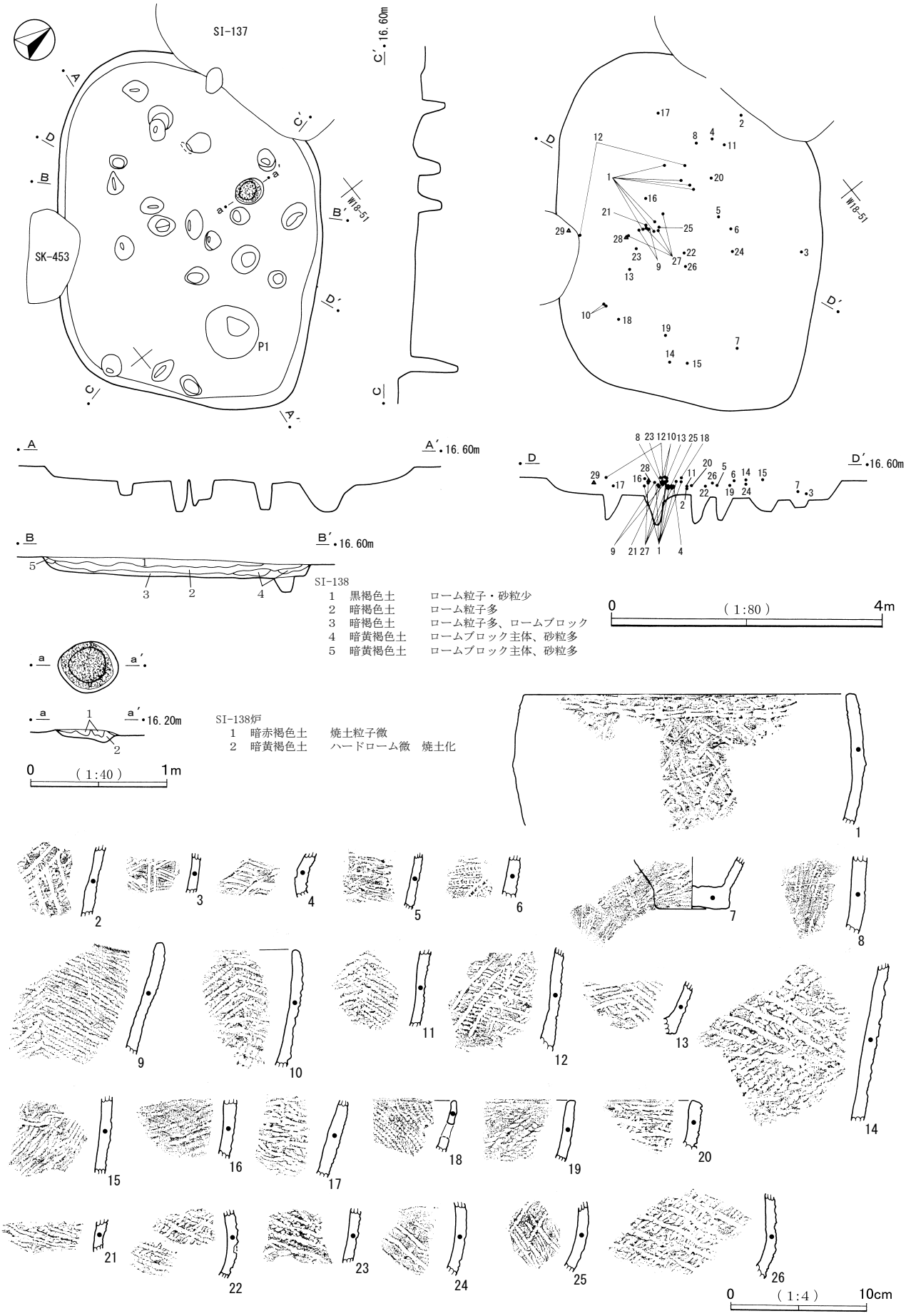
第63図　SI-137



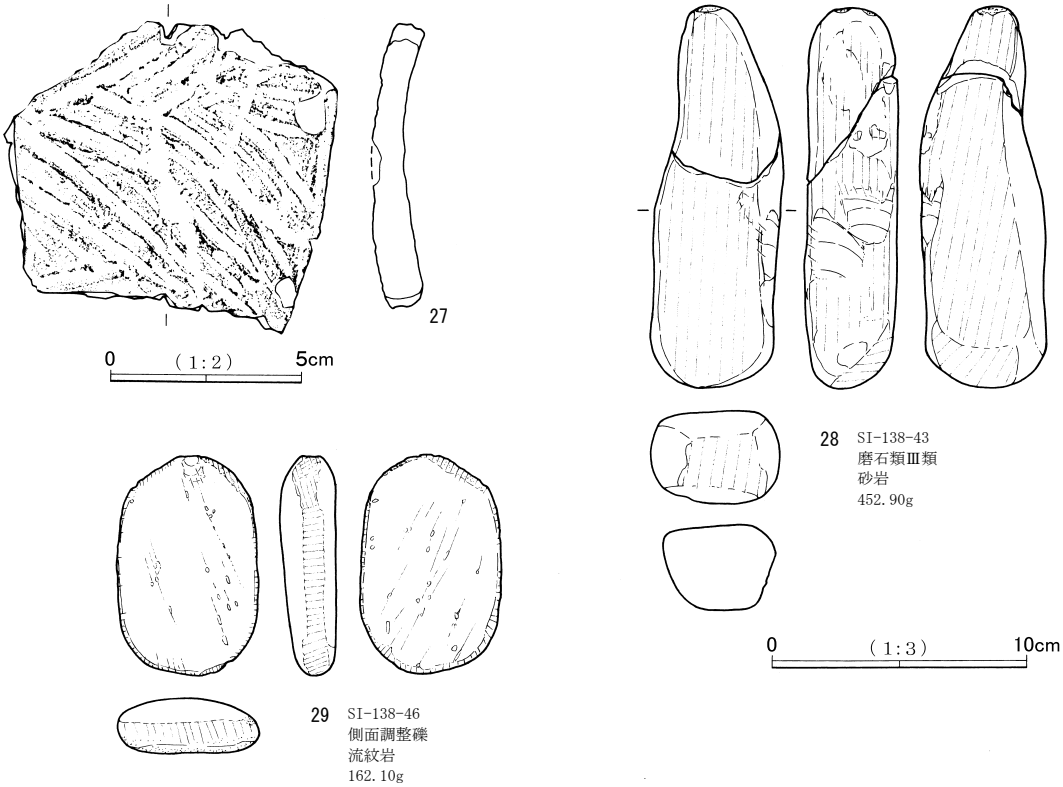
ある。覆土中の焼土は少量で、わずかに炭化粒を含む。ピットは20基検出された。南東隅から検出されたP1は径79cmとやや大きめで、深さは42cmである。他は長軸26cm～46cmの楕円形のものが多く、深さは12cm～70cmとばらつきがある。

出土した土器は全て黒浜式である。１は口縁部が内湾する深鉢で、口径24.3cmと推定される。半截竹管による格子目文が施され、口縁部には結節沈線が巡る。２～５は沈線文、６は結節沈線文がみられる。７は葉脈文が施された底部片である。８は貝殻腹縁文が施される。

９～14は羽状構成をとるものである。９・10・13は附加条第２種（軸縄ＲにＲ１本･軸縄ＬにＬ１本附加)、11はLRと撚糸文Ｌ、12は附加条第２種（軸縄Ｒにｒ１本・


SI-137
SK-453
P1
W18-51
A′ 16.60m
B′ 16.60m
D′ 16.60m
C′ 16.60m
SI-138
1 黒褐色土 ローム粒子・砂粒少
2 暗褐色土 ローム粒子多
3 暗褐色土 ローム粒子多、ロームブロック
4 暗黄褐色土 ロームブロック主体、砂粒多
5 暗黄褐色土 ロームブロック主体、砂粒多
0 (1:80) 4m
a′ 16.20m
SI-138炉
1 暗赤褐色土 焼土粒子微
2 暗黄褐色土 ハードローム微 焼土化
0 (1:40) 1m
0 (1:4) 10cm

第64図 SI-138①



第65図　SI-138②

軸縄Ｌにℓ１本附加)、14はLRと附加条第２種（軸縄ＲにＲ１本附加）による。

15～26は単一の原体による斜縄文である。15～17は無節Ｌで、15には結節回転文がみられる。18はRL、19は附加条第１種（軸縄LRにＬ１本附加)、20・22・26は附加条第２種（軸縄ＬにＬ１本附加)、21は附加条第１種（軸縄RLにｒ１本附加）もしくは異節のRLと思われる。23は附加条後LRか。24・25は撚糸文ℓが施される。

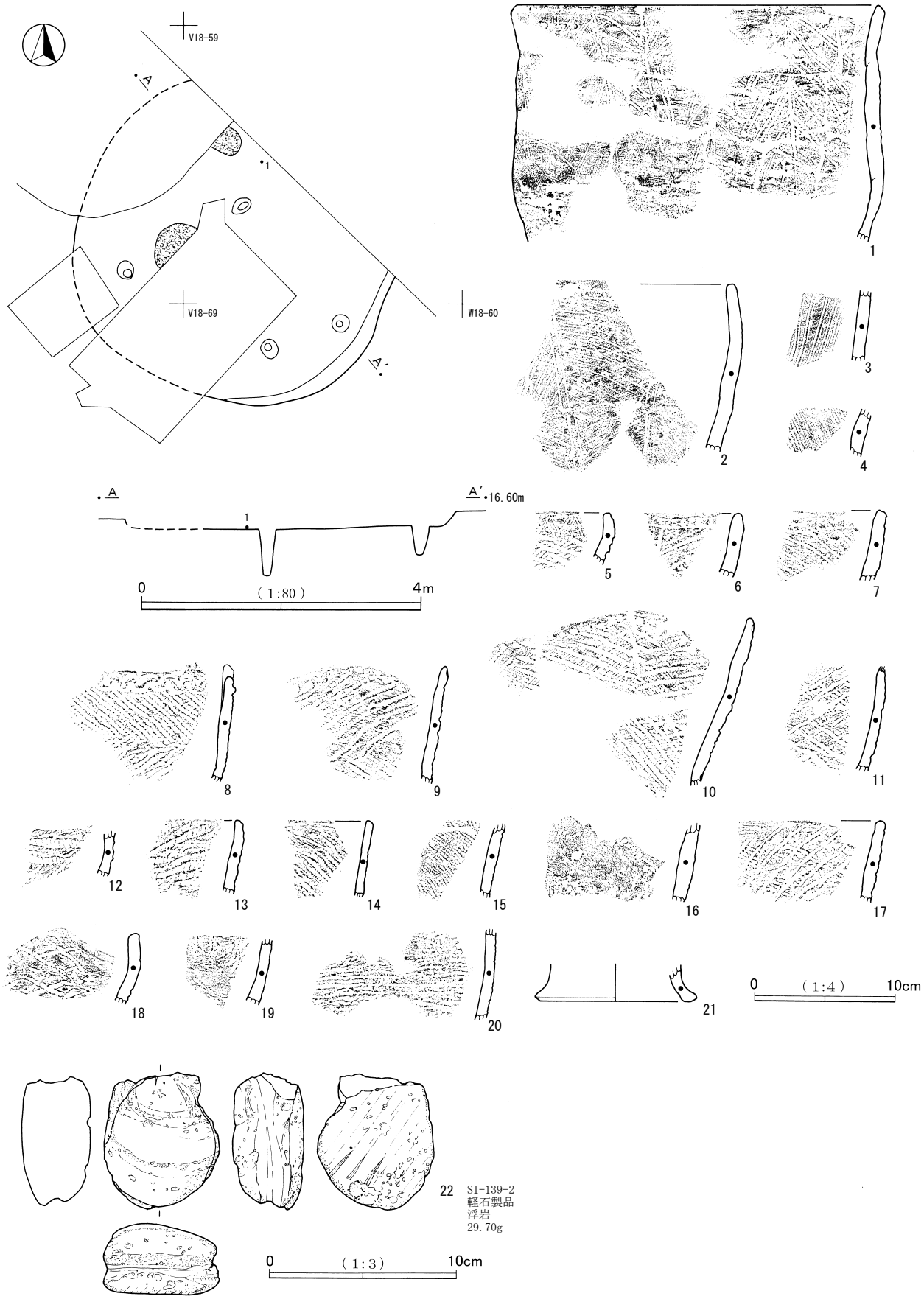
27は黒浜式の口縁部片を利用した土器片錘である。最大長8.2cm、最大幅8.8cm、厚さ1.1cm、周縁部は打ち欠きによって整えられる。

石器は磨石類、側面調整礫、剥片類が出土しており、２点を図示した。28は砂岩製の磨石第Ⅲ類である。上端部に敲打痕がみられるが、この他の５面は平坦に磨耗し、各々を区画する稜を形成する。右側面の剥落痕は磨り消され、段差で凹んだ部分に器面の荒れが残る。29は側面調整礫である。扁平礫のほぼ全周に擦痕がめぐる。擦りの方向は多様だが、上部は斜め、両側縁は横方向の筋状痕が観察される。石材は流紋岩である。

SI－139（第66図、図版21・23・25・28）

W18－58付近に位置する。北東部は調査区外のため未検出である。また、撹乱が著しく、確認できたのは一部分のみである。確認面からの深さは26cmで、中央西寄りに炉が位置する。ピットは４基で、径24cm～34cm、深さは38cm～80cmである。

出土した土器は全て黒浜式である。１は胴部にわずかに膨らみをもつ深鉢で、口径は25.9cmと推定される。半截竹管による葉脈文が施される。２も葉脈文のみられる深鉢で、口縁部が内湾する。３・４は集合沈線が施される。５は附加条第２種（軸縄ＬにＬ１本附加）を地文とし、口縁部に鋸歯状沈線文が描出さ


V18-59
V18-69
W18-60
A
A'
1
A
A'
16.60m
0
(1:80)
4m
0
(1:4)
10cm
0
(1:3)
10cm
22
SI-139-2
軽石製品
浮岩
29.70g

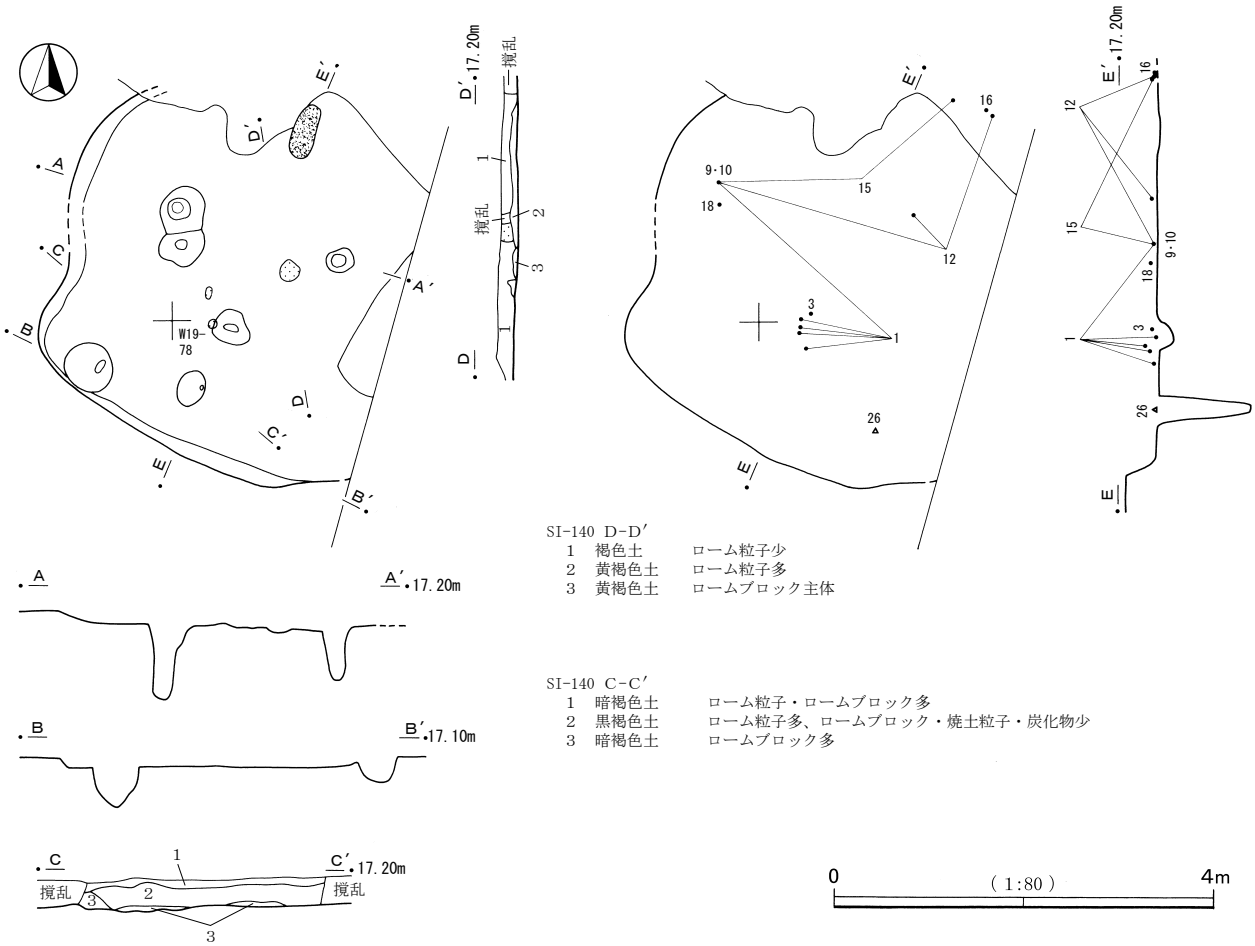
第66図　SI-139

れる。６・７は口唇部に押引文がみられる。８は附加条第１種（軸縄RLにＲ１本附加）と附加条第１種（軸縄ＬにＬ１本附加）が羽状構成をとるもので、口縁部にコンパス文が施される。９～12も羽状構成となるもので、９・10は附加条第２種（軸縄ＬにＬ１本・軸縄ＲにＲ１本附加）による。口縁部に沿って連続刺突文が巡る。16は胴部が屈曲する器形で、屈曲部にも刺突文が施されると思われる。11は附加条第２種（軸縄Ｒにｒ１本附加と軸縄Ｌにℓ１本附加）、12は撚糸文ＬとＲによる。13～20は単一の原体による斜縄文である。13は無節Ｌ、14～16はRL、17は附加条第２種（軸縄Ｒにｒ１本附加）が施される。18・19は軸縄不明、Ｌ１本附加の附加条第３種、いわゆる網目状撚糸文か。20は撚糸文Ｒである。21は台付土器の台部か。同様の土器は矢船Ⅱ遺跡に出土例がある。

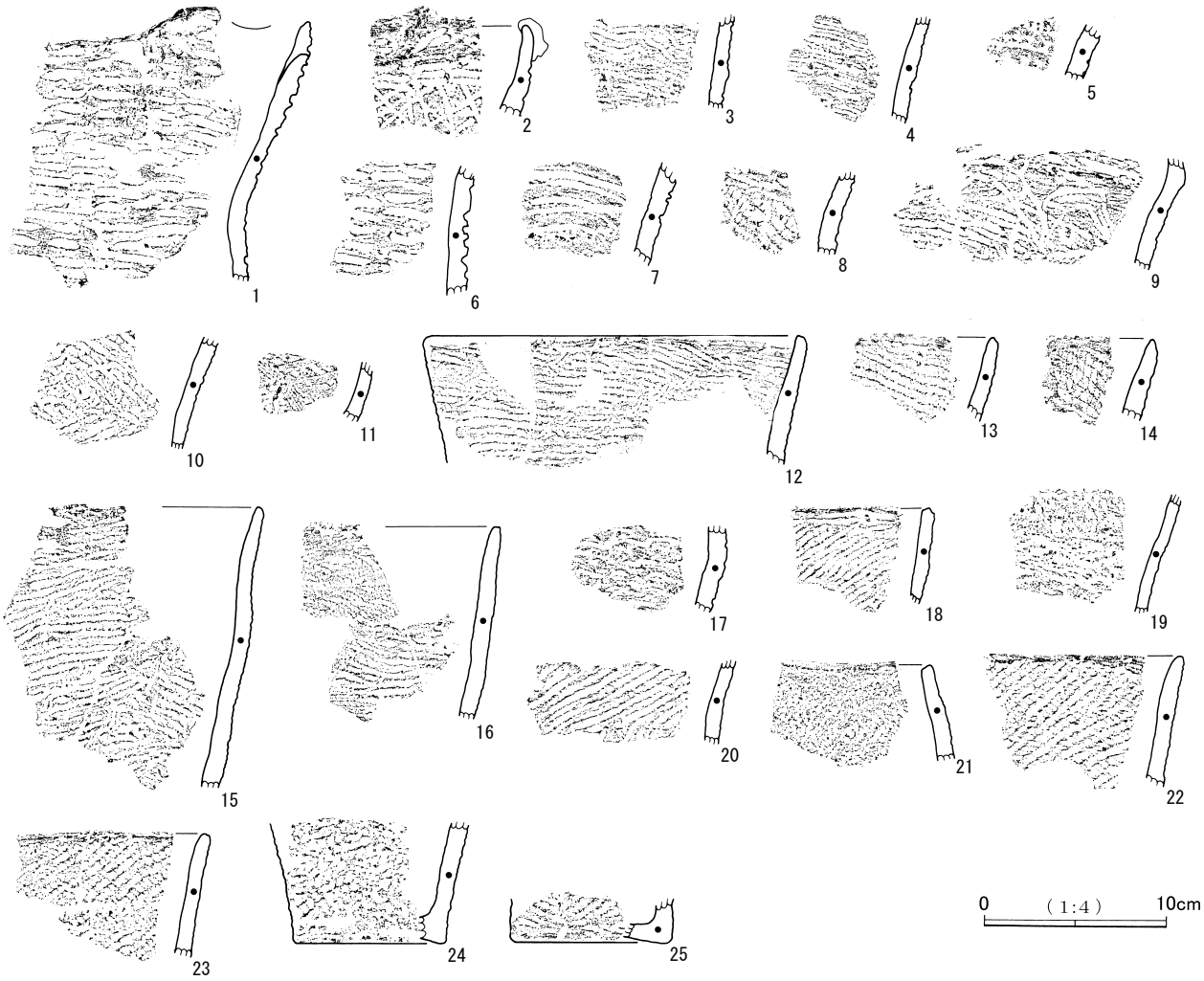
22は軽石製品である。ドーム状の円形を呈するが、上部は破損面であり、原形は不明である。側面から下部にかけてＵ字状の凹みが半周する。紐掛け痕か。表面は緩やかな山形、裏面は平坦で平行する３条の筋状痕と擦痕がみられる。

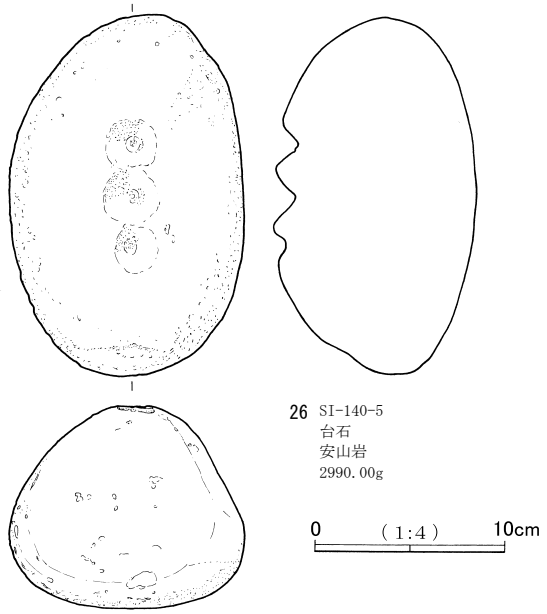
SI－140（第67・68図、図版22・26・28、第４・５表）

W19－67付近に位置する。東側は調査区外であり、北側は撹乱により検出できなかった。規模は4.14mの不整な方形を呈すると思われる。確認面からの深さは30cmである。北寄りに60cm×26cmの範囲で焼土がみられ、炉と推測される。ピットは６基検出され、径34cm～48cm、深さは19cm～101cmで、南壁際中央のピットが最も深い。床面中央部分で貝の小ブロックが３か所みられた。貝種はアサリを主体とし、ハマグリがこれに次ぐ。



第67図　SI-140①





第68図　SI-140②

出土した土器は全て黒浜式土器である。１は胴部中位が括れる波状口縁の深鉢で、やや長めの連続刺突文が施されている。６は同一個体と思われる。２の口唇部には隆帯が貼り付けられ、隆帯の上下両側に半截竹管による短沈線が付随する。胴部は単沈線による格子目文が施される。３は平行沈線による文様で、上半は緩やかな波状、下半は短沈線となる。４は半截竹管による横位の連続短沈線、５は連続刺突文が施される。７は沈線文、８は横位の短沈線と無節Ｒで環付末端がみられる。

９は無節Ｒを地文とし、沈線文が描かれる。10・11は羽状構成をとるもので、10は無節ＲとＬ、11は附加条第２種（軸縄ＲにＲ４本附加）と軸縄不明の附加条（Ｌ４本附加）による。12～23は単一の原体による斜縄文である。12～17は無節Ｒで、17にはＺ字状の結節

文がみられる。18～20は無節Ｌ、21～23はLRである。

24・25は底部である。24は複節LRL、25は無節ＲとＬの羽状施文である。

26は安山岩製の台石である。正面形は長楕円形、横断面は肉厚で丸みのある正三角形状を呈する。頂部に３か所の凹みが直列する。裏面は緩やかな丸みをもつ。茶褐色の付着物が所々にみられる。

SI－141（第69・70図、図版22・23・26・28、第４・５表）

X19－73付近に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は7.55m×6.09m、確認面からの深さは38㎝である。炉は北側中央から検出され、規模は1.08m×1.02m、深さ16㎝である。ピットは15基で、径26㎝～68㎝、深さは16㎝～59㎝である。床面中央からわずかながら貝が出土している。ハマグリを主体とし、マガキ、サルボオがわずかに混入する。

出土した土器は黒浜式を主体とし、興津式がわずかに混入する。１は波状口縁で、隆帯による意匠文が描出されるが、隆帯の先端はほぼ欠損している。波頂部から垂下する隆帯と口縁部文様帯を区画する隆帯に刺突文が伴う。口唇部にRL、胴部にLRが施される。２は押引状の連続刺突文、３は沈線文である。４～８は縄文を地文とし、刺突文や沈線文が施されるものである。９・10はLRとRLが菱形構成をとる。11～16は単一の原体による斜縄文である。11・12は無節Ｒで12には環付末端がみられる。13・14はRL、15・16はLRが施される。17・18は附加条縄文である。17は軸縄LRにＲを２本・軸縄RLにＬを２本附加したものによる羽状、18は軸縄ＬにＲを２本附加したもので、いずれも附加条第２種である。19はRLが施された底部である。

20は興津式の口縁部片である。口唇部に条線帯を有し、貝殻腹縁文が施される。胴部は遺存部位が少なく不明瞭であるが、爪形文が施されているようである。

21は磨製石斧である。器面は熱による剥落や周縁部からの調整痕によって凹凸が顕著であるが、刃部付近は剥離痕を磨り消すように滑らかに整えられている。重みのある深緑色の石材で、直径２㎜～３㎜の丸く抜けた斑晶痕が多くみられる。石材は緑色岩とみられる。

２　土坑

SK－449（第71図、図版22）

V18－16に位置する。平面形は径0.90mの円形で、確認面からの深さは26㎝である。

SK－450（第71図、図版22）

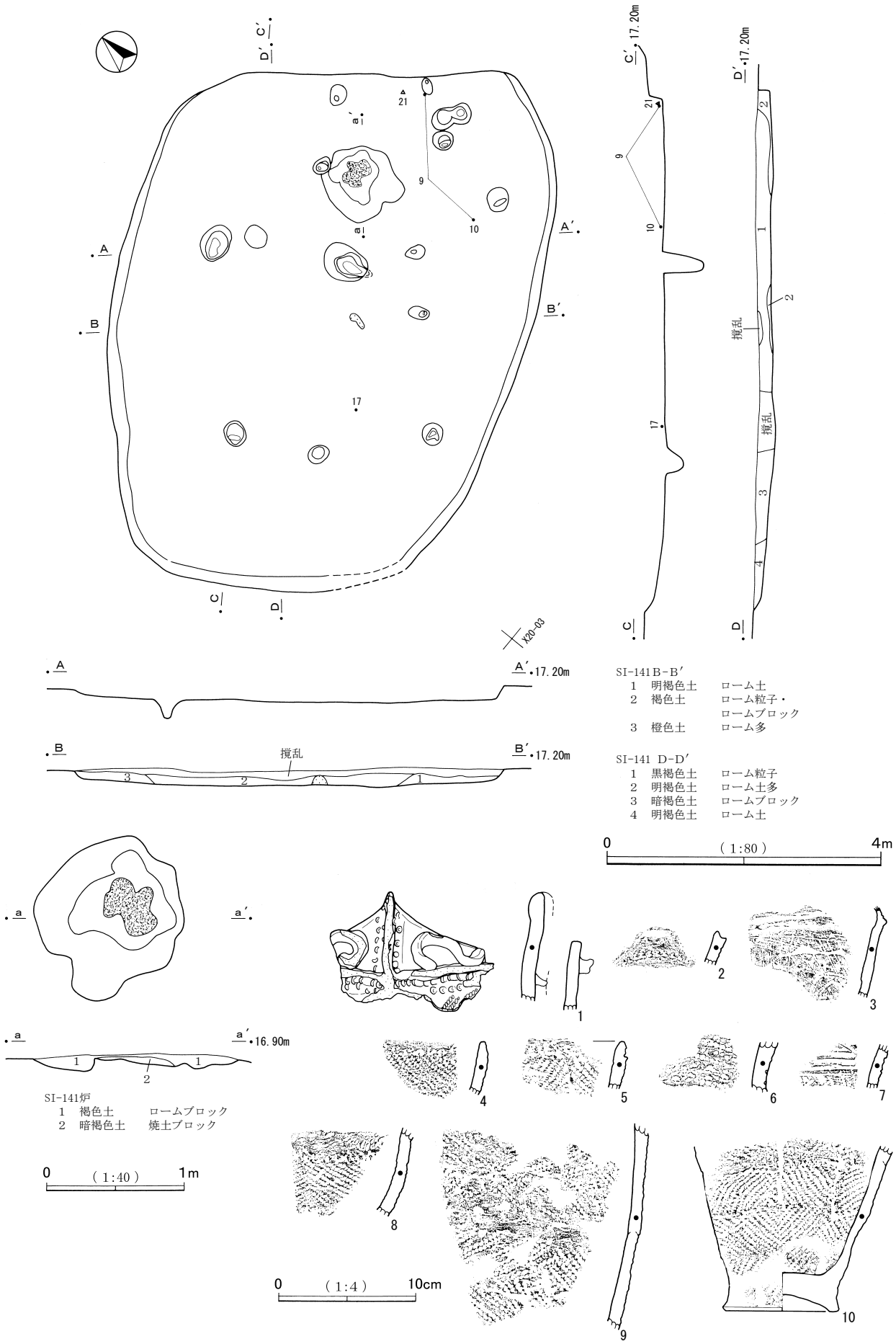
V18－16に位置し、北にSK－449、東にSK－451が近接する。平面形は1.25m×0.93mの楕円形で、確認面からの深さは28㎝である。

SK－451（第71・72図、図版22・27）

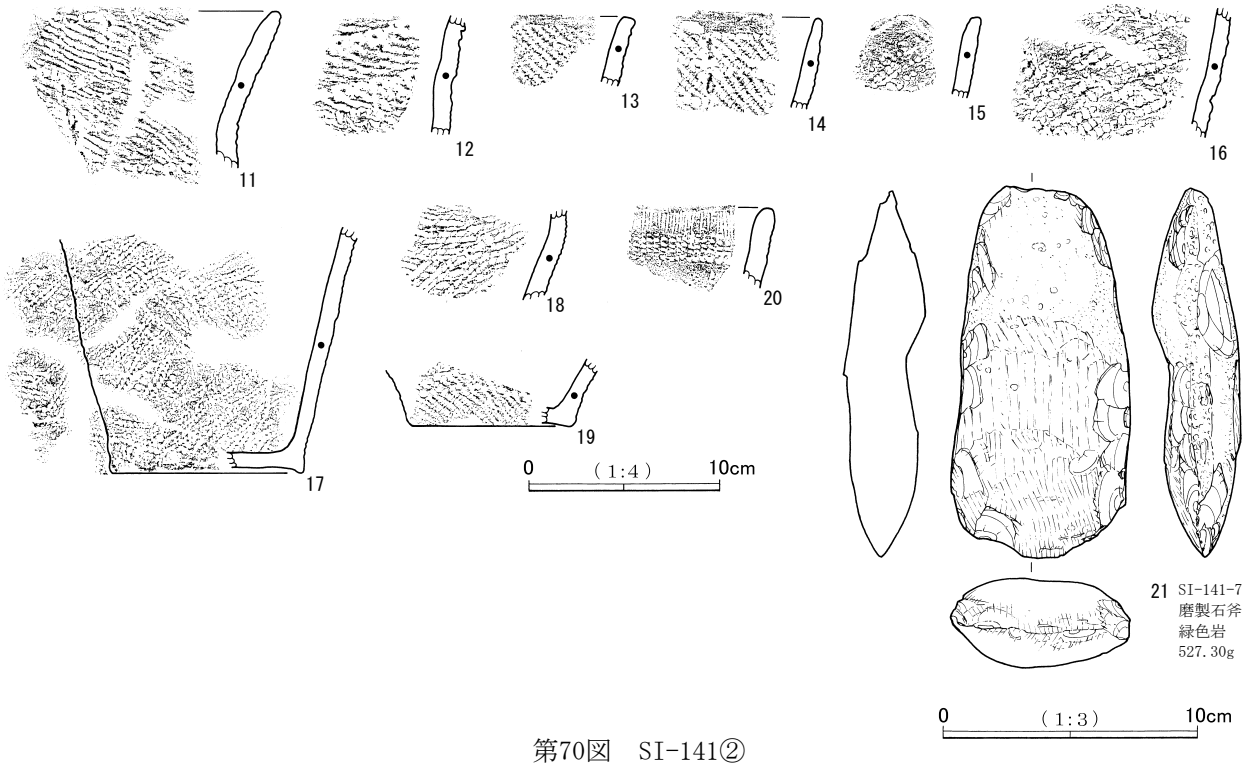
V18－17に位置する。平面形は3.70m×2.38mの長楕円形で、確認面からの深さは32㎝である。

覆土中から、黒浜式とわずかながら浮島式、諸磯式と思われる土器が出土している。

１～５は沈線文の施された土器である。６はRLを地文とし、平行沈線により文様が描かれる。７は地文RLに結節沈線が施されるもので、胎土に繊維を含まないため諸磯式の可能性がある。８は胴部に膨らみをもつ器形で、押引文が２条めぐる。押引文より以下は斜位の沈線文で、軸縄不明の附加条を地文とする。９・10は羽状構成の縄文が施される。９はｒを１本附加した軸縄不明の附加条と附加条第２種（軸縄ＲにＲ１本附加）、10はLRと附加条第２種（軸縄ＬにＬ１本附加）による。11･12は単一の原体による斜縄文で、11は無節Ｌ、12は複節RLRが施される。13は黒浜式である。


A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
a
a′
17.20m
16.90m
攪乱
SI-141B-B′
1 明褐色土 ローム土
2 褐色土 ローム粒子・ロームブロック
3 橙色土 ローム多
SI-141 D-D′
1 黒褐色土 ローム粒子
2 明褐色土 ローム土多
3 暗褐色土 ロームブロック
4 明褐色土 ローム土
SI-141炉
1 褐色土 ロームブロック
2 暗褐色土 焼土ブロック
0 (1:80) 4m
0 (1:40) 1m
0 (1:4) 10cm

第69図 SI-141①



第70図　SI-141②

14は櫛歯状工具により弧線文が描かれる。15はRLが施される。14・15とも胎土に繊維を含まないため14は浮島式、15は諸磯式と思われる。

SK－452（第71・72図、図版22・27）

V18－28に位置する。西側の一部のみの検出である。確認面からの深さは48cmである。

遺物の出土は少なく、４点を図示した。１は櫛歯状工具による文様が施される胴部片で、浮島式であろう。２・３は黒浜式で２はRL、３はLRが施される。４は底径6.4cmと推測される底部である。無文のため詳細な時期は不明である。

SK－453（第71・72図、図版22・27）

W18－50に位置する。SI－138の南東壁と切り合う。平面形は1.42m×0.77mの不整な楕円形で、確認面からの深さは33cmである。

遺物の出土量は少なく、５点を図示した。いずれも黒浜式である。１は平行沈線による格子目文、２は葉脈文が描かれる。３はコンパス文が施された胴部片で、Ｒ１本を附加した軸縄不明の附加条縄文を地文とする。４は口縁部が緩やかに内湾する。附加条第２種（軸縄ＲにＲ１本附加）とRLが羽状構成をとる。５は附加条第２種（軸縄ＬにＬ１本附加）が施される。

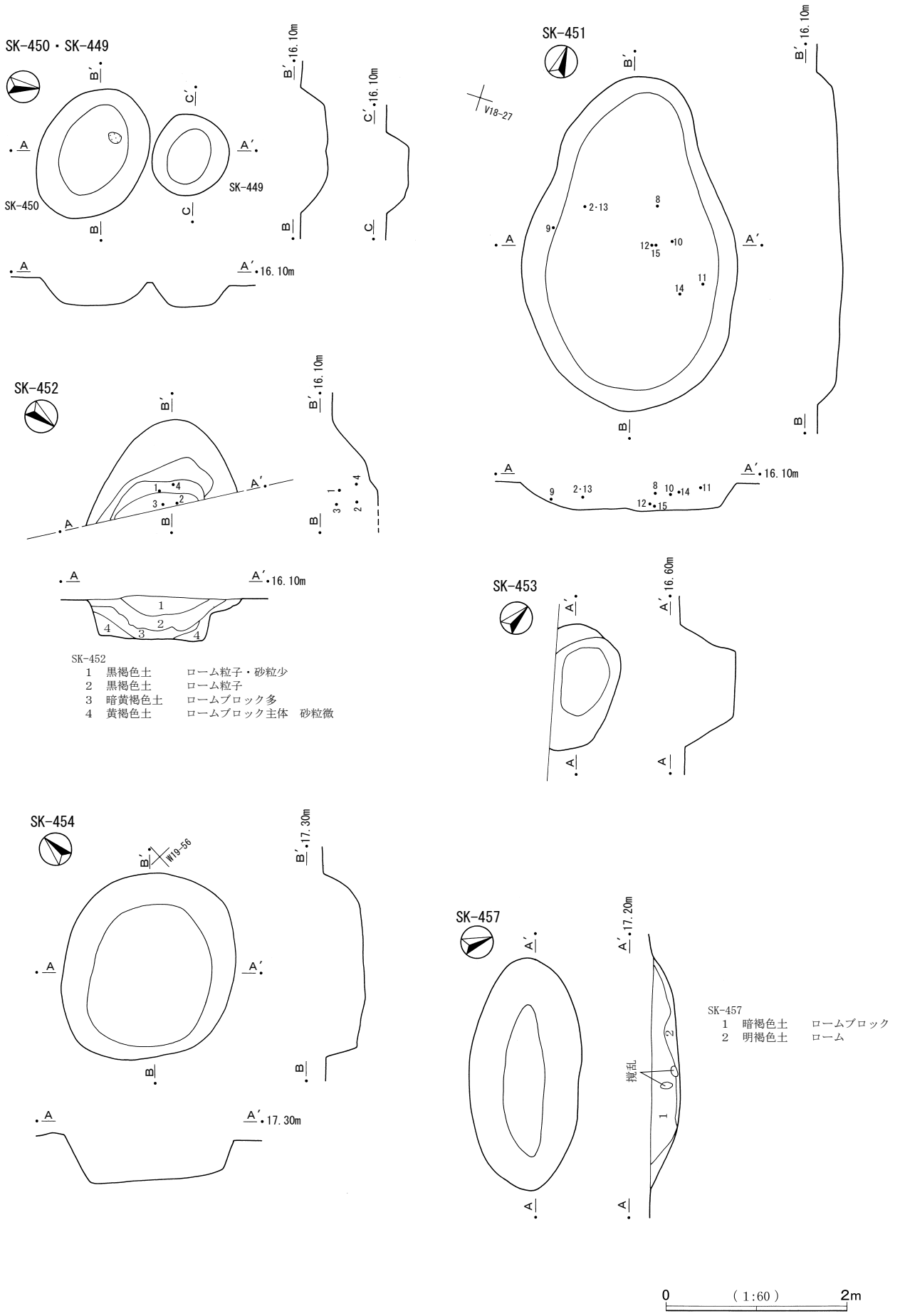
SK－454（第71・72図、図版22・27）

W19－55に位置する。平面形は2.24m×1.63mの楕円形で、確認面からの深さは53cmである。底面は凹凸が少なく、北西側がやや窪む。

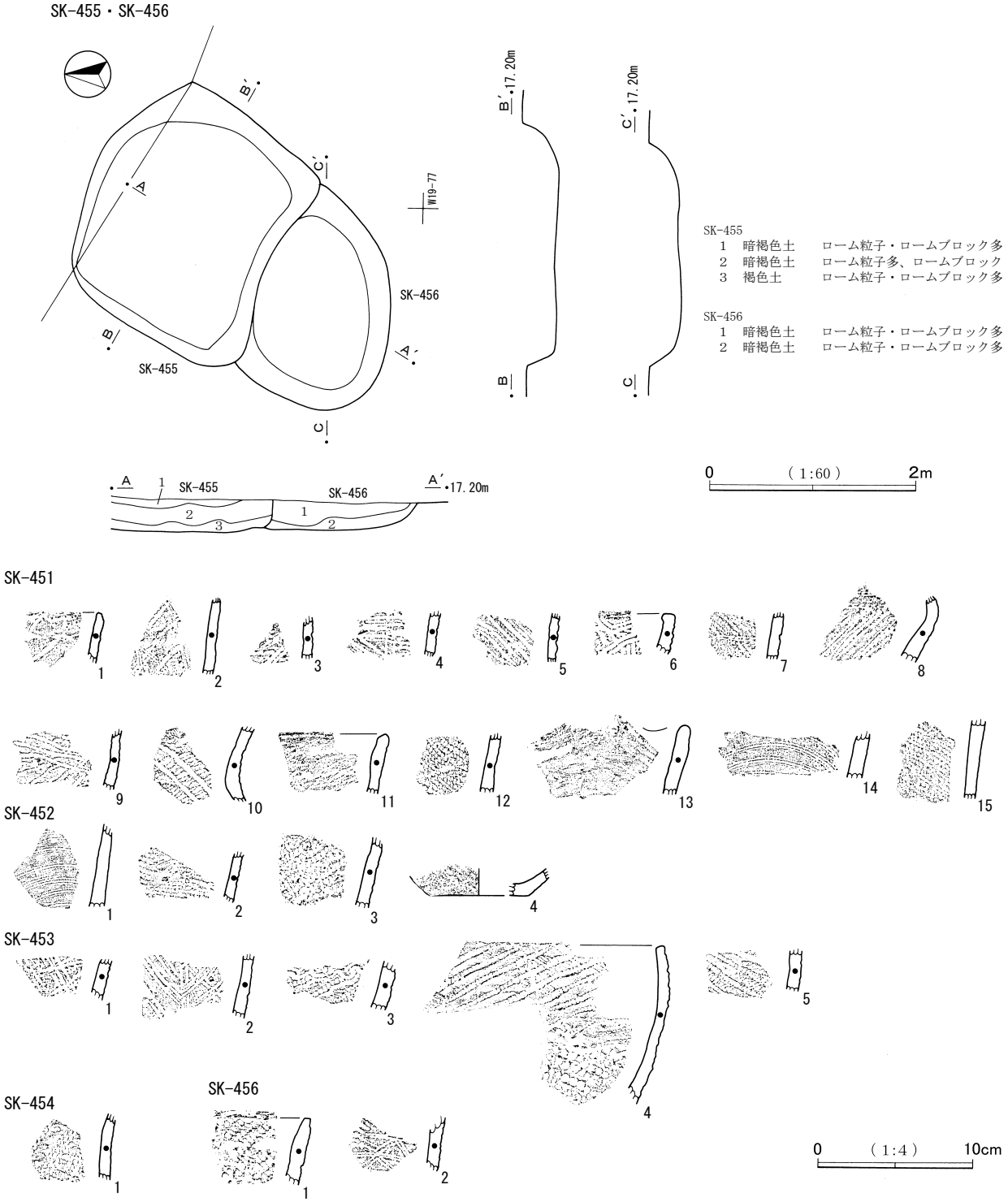
遺物は少なく、図化できたのは黒浜式の胴部片１点のみである。１は附加条縄文が羽状構成をとる。軸縄ＬにＲを３本附加した附加条第２種と、軸縄不明でＬを２本附加したものとによる。

SK－455（第72図、図版22）

W19－66に位置する。南側はSK－456と切り合い、北側1/4が調査区外となる。平面形は一辺2.35mの方



第71図　SK-449～SK-454、SK-457



第72図　SK-455、SK-456、土坑出土遺物

形と考えられ、確認面からの深さは34cmである。土層の堆積状況から本遺構の方が新しいと思われる。

SK－456（第72図、図版22・27）

W19－66に位置する。平面形は2.22m×1.47mの楕円形で、確認面からの深さは31cmである。

遺物の出土は少なく、２点を図示した。１はLRが施された口縁部片、２は鋸歯状の沈線文が多段に施された胴部片である。いずれも黒浜式である。

SK－457（第71図、図版22）

W20－05に位置する。平面形は2.57m×1.23mの長楕円形で、確認面からの深さは29cmである。

３　遺構外出土遺物

縄文土器（第73図、図版27）

黒浜式が主体を占め、ごくわずかに浮島式と加曽利Ｅ式がみられた。１～39は黒浜式である。１は鋸歯状の沈線文と円形刺突文が施される。２は結節沈線文、３は鋸歯状の沈線文、４・５は沈線文が施される。６・７は平行沈線による菱形文が描かれる。８は単沈線による格子目文、９・10は粗雑な沈線文である。11～18は縄文地に刺突文や沈線文が施されるものである。11は無節ＲとLRが菱形構成をとり、口縁部に円形竹管による押引文が３条～４条めぐる。12は無節Ｌを地文とし、半截竹管による３条の押引文が施される。13は口唇部に沈線が１条めぐる。地文は附加条第２種（軸縄ＬにＬ１本・軸縄ＲにＲ１本附加）が羽状構成をとる。14は地文RLに葉脈文が描かれる。15は地文RLに沈線文、16は地文RLに押引き状の連続刺突文が施される。17は羽状構成をとる附加条縄文に爪形文、18は反撚LLに円形刺突文が加えられている。19は鍔状隆起線と円形刺突文が２段めぐる。

20～26は異なる原体によって羽状もしくは菱形構成をとるものである。20はLRとRL、21は軸縄不明の附加条でそれぞれＲを１本、Ｌを１本附加する。22はLRと無節Ｒ、23・24はLRとRL、25は撚糸文Ｒと撚糸文ｒ、26は附加条第２種（軸縄ＬにＬ２本・軸縄ＲにＲ２本）による。27～36は単一の原体による斜縄文である。27～29は無節Ｌで、28・29には環付末端がみられる。30は無節Ｒの端末結節か。30～33はRL、34・35は附加条第１種で、34は軸縄ＬにＬ２本附加、35は軸縄RLに ℓを１本附加、36は軸縄不明の附加条でＲを１本附加したものである。37・38は無文、39は波状貝殻文と思われる。

40は波状貝殻文が施された底部片で、繊維の混入はみられない。浮島式であろう。

41は加曽利Ｅ式である。沈線による楕円区画文内にRLが充填される。

土製品（第73図、図版27）

42は玦状耳飾りと思われる土製品の一部である。現存部の長さは35mm、幅22mm、厚さ13mmで、円形刺突文が施されている。

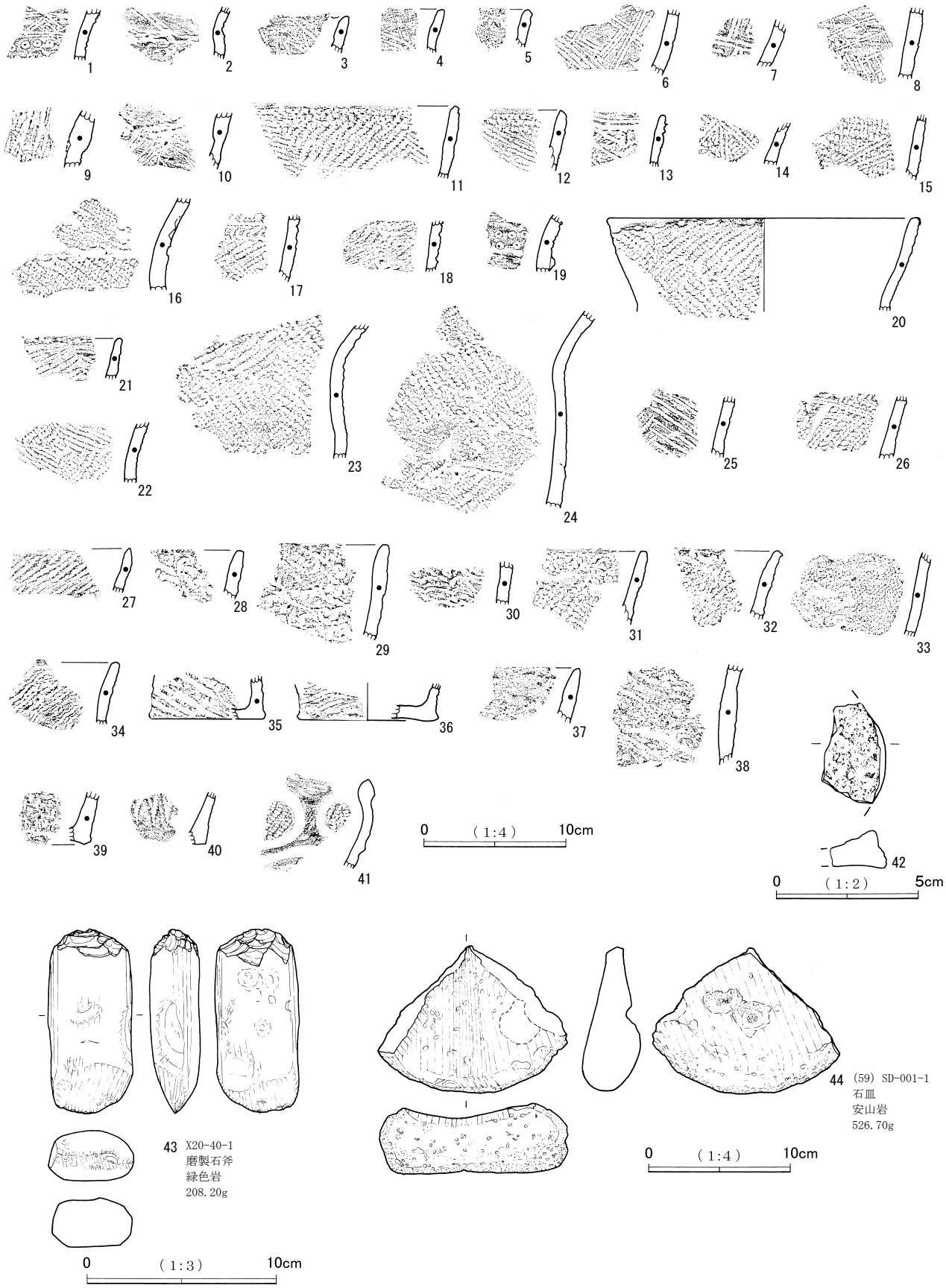
石器類（第73図、図版28）

石器は黒曜石製の石鏃１点、磨製石斧１点、磨石類３点、石皿４点、剥片類３点が出土しており、２点を図示した。43は磨製石斧である。両側面は磨りによって作出され長方形の断面を呈する。上部は折れの後、再加工により山形に成形されている。刃部は特に丁寧に調整され光沢を帯びる。石材は緑色岩である。44は安山岩製の石皿である。断片的であり、分割後にも石皿として利用され、中央部には縦方向の磨りによる凹みが残る。裏面中央部には直径2.0cm～2.5cm、深さ0.4cm～0.7cmほどの凹み痕が２か所みられる。

第３節　中・近世以降

SD－001（第74図、図版22・28）

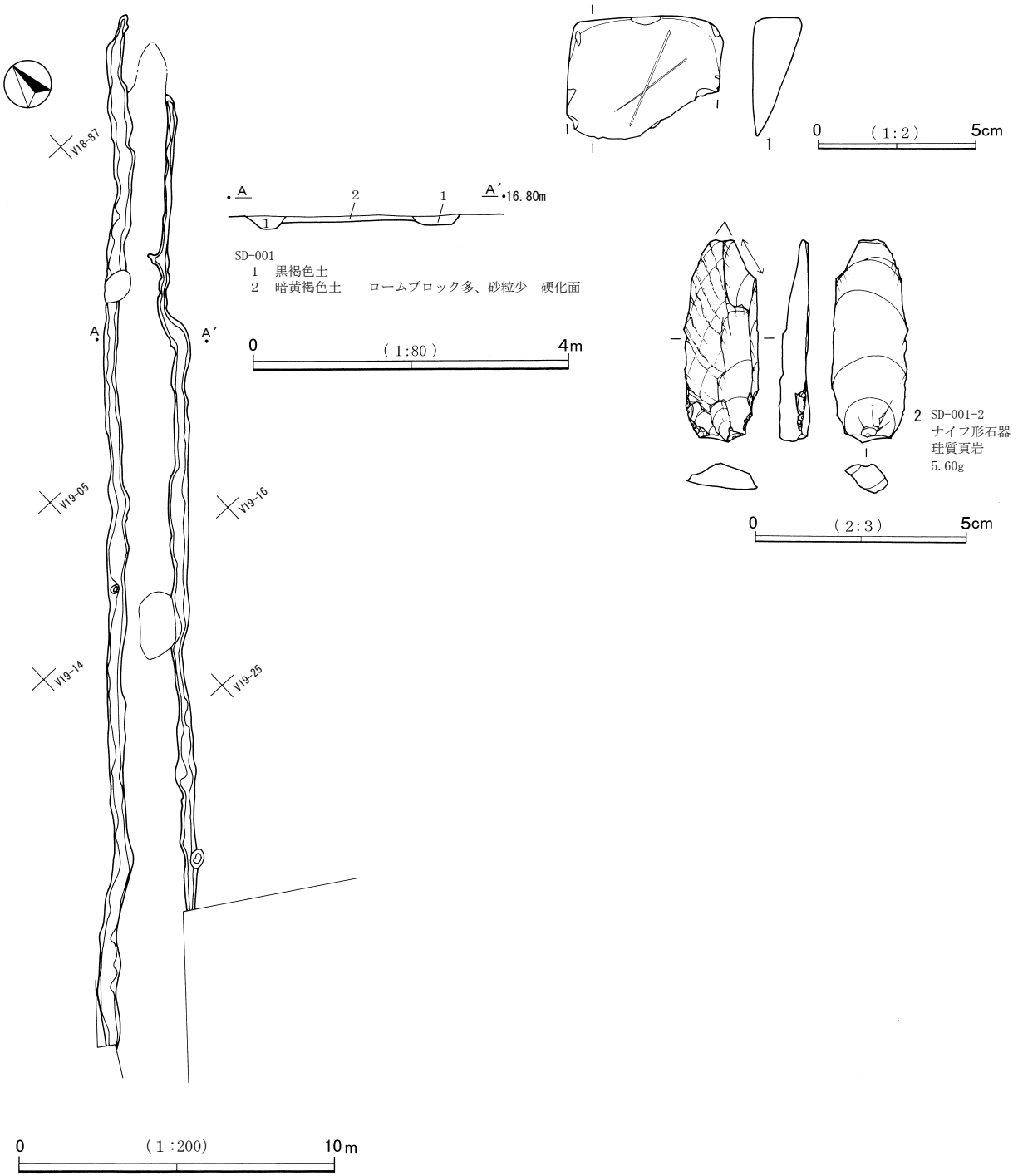
V18－77～ V19－32にかけて、北東化から南西方向へ直線的に延びる道路状遺構である。検出された範囲での長さは33m、幅1.8m～2.7mである。両側に幅30cm前後、深さ20cm以下の浅い溝を有し、硬化面は平らで非常に硬く踏み締められている。時期を決定付ける遺物は検出されなかった。なお、本遺構から出土したものであるが、本遺構の時期とは異なる旧石器時代の石器をここで掲載する。



第73図　遺構外出土遺物

１は砥石である。最大長3.9㎝、幅5.0㎝、厚さ1.7㎝、重さ31.7ｇである。よく使いこまれ、断面は三角形を呈している。

２は石刃を素材としたナイフ形石器である。基部の両側縁に主要剥離面から背面へ向け連続した小剥離が施される。先端部を欠損する。右側縁上部に微細な刃こぼれがみられる。珪質頁岩製であり、直径0.3㎜～1.5㎜の黒色斑が散在し、明褐灰～明黄褐色の２色に分かれる。



第74図　SD-001

第５章　原畑遺跡

第１節　遺跡の概要（第75図、図版１）

原畑遺跡は、古鬼怒湾に属する古常陸川湾奥部の標高約17ｍ～19ｍの台地上に所在する。駒形遺跡・大松遺跡･富士見遺跡と小山台遺跡の間に北側から侵入する支谷の最奥部に位置する。北東部は富士見遺跡、北西部は矢船Ⅱ遺跡、南東部は小山台遺跡と境を接する。

平成22年度に第１次～第23次までの調査成果が報告され、縄文時代前期中葉の黒浜式期に営まれた中規模集落であることが分かっている（上守秀明ほか　2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書３－柏市原畑遺跡－縄文時代以降編１』（財）千葉県教育振興財団）。

今回報告するのは第24次～29次の調査成果である。縄文時代の遺構は第28次調査区と第29次調査区から竪穴住居が１軒ずつ検出された。第29次調査区の竪穴住居SI－023は小山台遺跡で検出された（88）SI001の西側部分にあたるため、詳細は次に刊行する小山台遺跡に譲る。近世の遺構としては、第24次・第26次調査で原畑遺跡を南北方向に横断すると思われる野馬土手と野馬堀が検出された。また、第27次調査では小山台遺跡との境界に沿って野馬堀が検出された。

第２節　縄文時代

１　竪穴住居

SI－022（第76・77図、図版29～32、第４・５表）

EE37－68付近に位置する。一部が検出され､南部は調査区外へと続く。平面形は歪な隅丸方形を呈する。確認面からの深さは16㎝である。炉は中央に位置し、規模は1.52ｍ×0.85ｍの不整形で、床面からの深さは10㎝である。ピットは検出されなかった。床面中央から東側にかけて貝が堆積していた。最大で30㎝の厚みがあり、ハマグリを主体とする。アサリがこれに次ぎ、ウミニナ類、シオフキ、オキシジミなどもみられた。

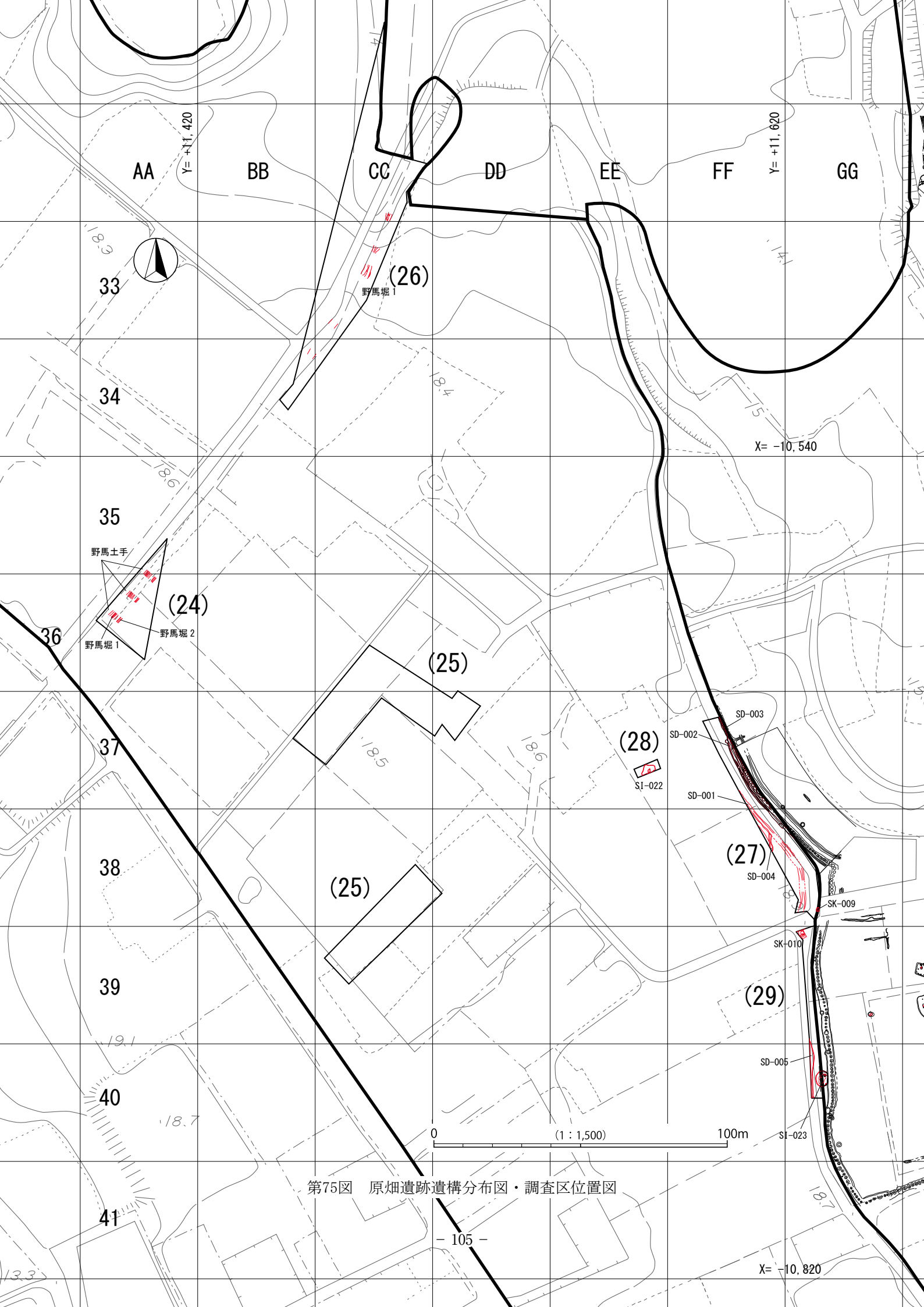
出土土器は全て黒浜式で、本遺構の帰属時期をよく反映している。１～３には細い単沈線による格子目文が施される。４は口縁部に列点文、胴部に撚糸文Ｌが施されたもので、同一個体の資料としては５がある。６は胴部上位が外反する器形で､その変換点には鍔状隆起線が施されている。地文は撚糸文Ｒである。

７～10は異なる縄文原体を用いて羽状もしくは菱形構成をとる土器で、７～９は無節Ｌと無節Ｒ、10はRLとLRを用いる。11は撚糸文Ｒの向きを変えて羽状もしくは菱形を構成する。

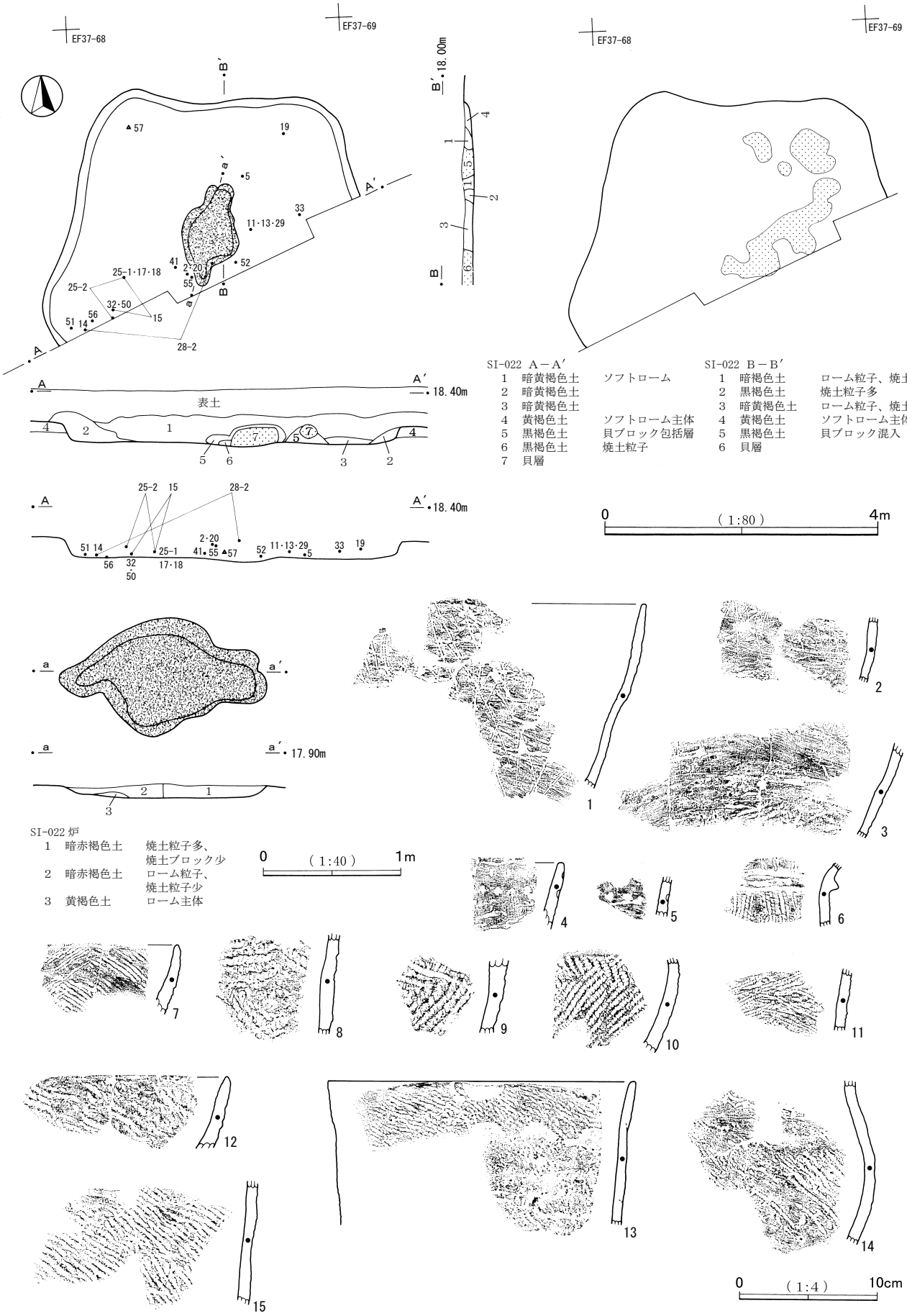
12～18には無節Ｒ、19～21には無節Ｌ、22にはLR、23・24にはRLの斜縄文が施される。11は推定口径22.5㎝、口縁部から胴部にかけて直線的に開く器形で、口縁部下位の輪積み部分で器面の剥離がみられる。14は胴部が丸く張る器形、21は胴部に緩やかな括れを有する。19は口唇部に棒状工具による押捺が施されている。

25～46には撚糸文、25～35には撚糸文Ｌ、36～46には撚糸文Ｒが施されている。25は胴部が直線的に開いた後､口縁部で外反する。推定口径26.8㎝で､口唇部は面取りされている。28は胴部上位で強く屈曲する。最大径は推定で24.2㎝である。47は口唇部が面取りされる無文の口縁部片である。

48～56は底部を集めた。上げ底状となるものが多い。文様要素は､48･52が無節Ｌ､49がLR､50が撚糸文Ｌ、



第75図　原畑遺跡遺構分布図・調査区位置図



SI-022 A－A′

1	暗黄褐色土	ソフトローム
2	暗黄褐色土	
3	暗黄褐色土	
4	黄褐色土	ソフトローム主体
5	黒褐色土	貝ブロック包括層
6	黒褐色土	焼土粒子
7	貝層	

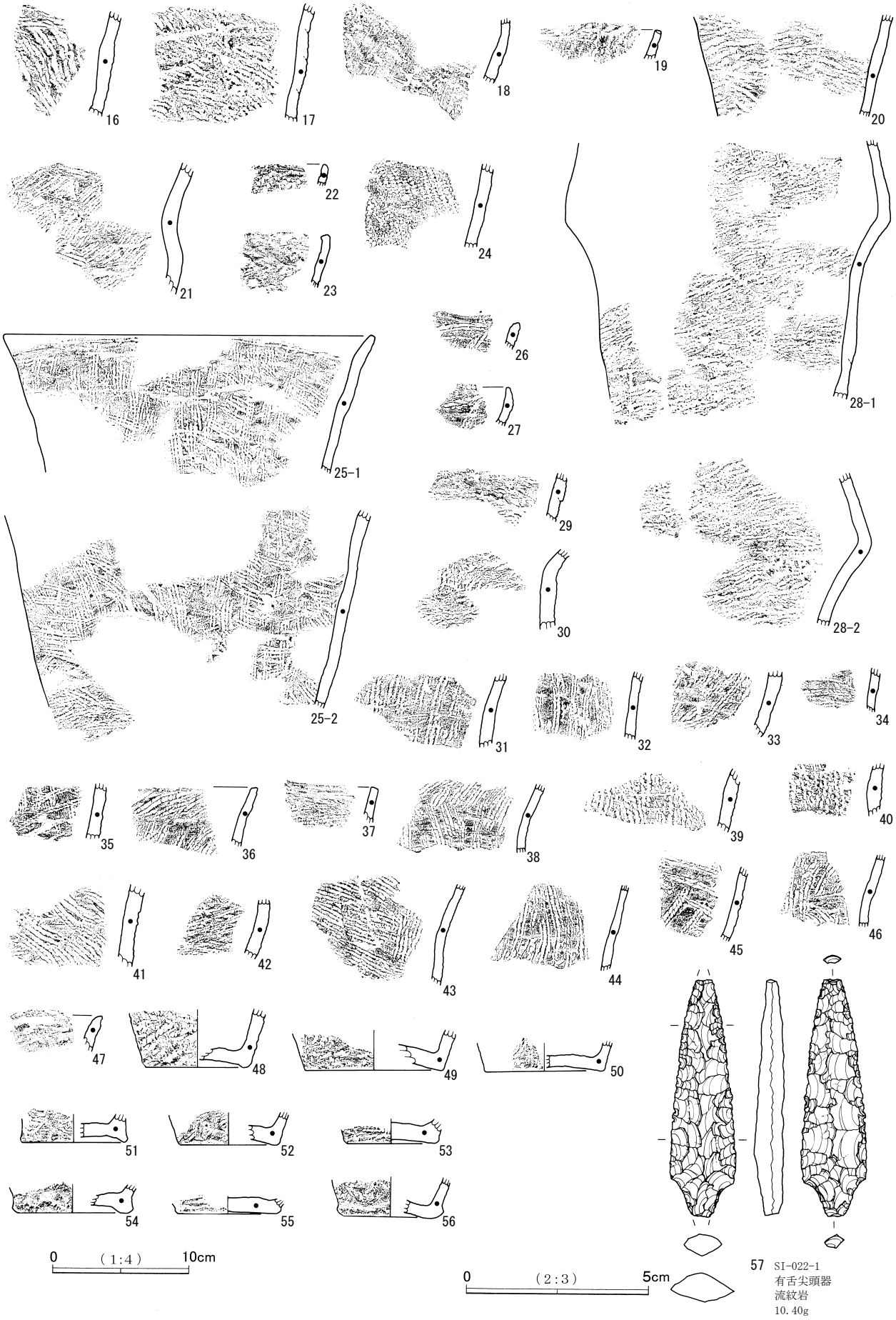
SI-022 B－B′

1	暗褐色土	ローム粒子、焼土粒子
2	黒褐色土	焼土粒子多
3	暗黄褐色土	ローム粒子、焼土粒子多
4	黄褐色土	ソフトローム主体
5	黒褐色土	貝ブロック混入
6	貝層	

SI-022 炉

1	暗赤褐色土	焼土粒子多、焼土ブロック少
2	暗赤褐色土	ローム粒子、焼土粒子少
3	黄褐色土	ローム主体

第76図　SI-022①


16
17
18
19
20
21
22
23
24
25-1
26
27
28-1
29
30
28-2
25-2
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
0 (1:4) 10cm
0 (2:3) 5cm
57 SI-022-1
有舌尖頭器
流紋岩
10.40g

第77図　SI-022②

51が沈線による格子目文、53が撚糸文Ｒとなっている。

石器は有舌尖頭器１点、磨製石斧１点、石皿１点が出土しており、このうち１点を図示した。57は小瀬ヶ沢型の有舌尖頭器である。先端部と舌部が欠損する。身部は細く逆刺が鋭く、側縁は鋸歯状を呈する。小瀬ヶ沢型尖頭器の標識遺跡は新潟県阿賀町上川地区小瀬が沢洞窟である。57の石材は一見すると砂岩のようだが、石基は黄褐色を帯びた灰色で、斑晶は半透明の粒子がまんべんなく散る流紋岩である。微かに磁性を帯びる。

SI－023（第78図、図版29、第４・５表）

GG40－13付近、小山台遺跡との境界に位置する。住居跡の西側1/3程を検出したが、大部分は小山台遺跡（88）でSI001として調査されているため、詳細は小山台遺跡Ｂ区上層の報告書に譲る。

２　土坑

SK－009（第79図、図版29）

GG38－82に位置する。平面形は1.44m×1.10mの楕円形で、確認面からの深さは38cmである。

SK－010（第79図、図版29）

GG39－01に位置する。北側は調査区外へと続き、東側は水道管が敷設されているため未検出である。平面形は長楕円形を呈すると思われる。検出範囲では2.85m×1.95mの規模であるが、本来の規模はこれを上回る。南北両端にピット状の掘り込みがあり、それを繋ぐような形で中央に平場を有する。確認面からの深さは平場で34cm、南側のピット状部分で128cmである。

３　遺構外出土遺物

縄文土器（第80図、図版31・32）

遺構外出土土器の大半は黒浜式であるが、わずかながら中期、後期の土器も出土している。

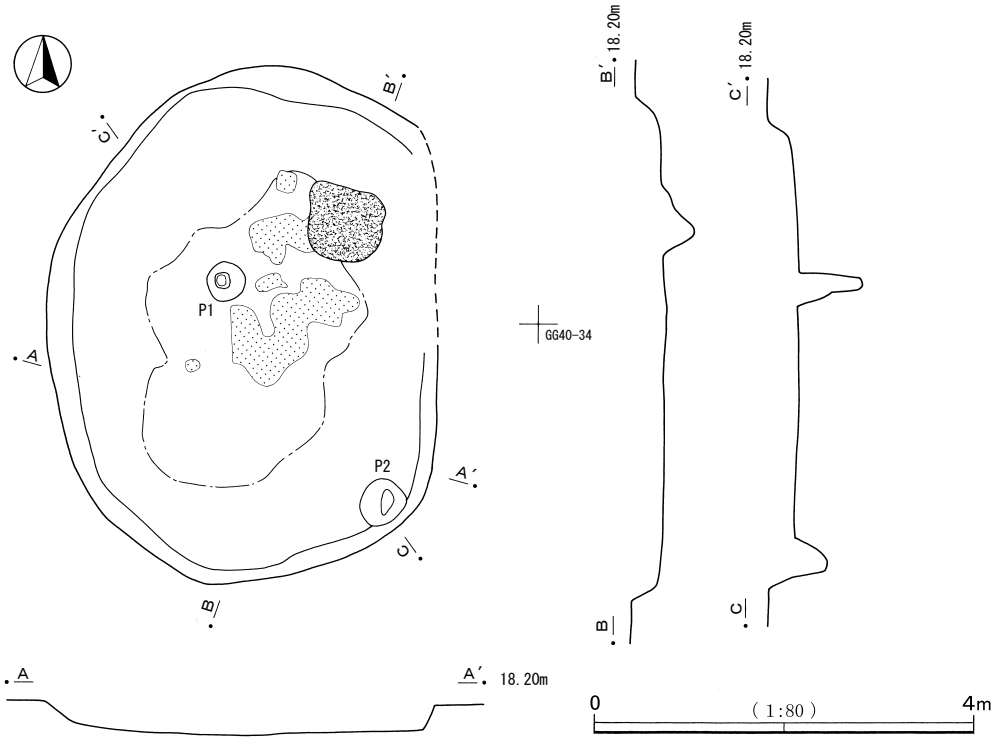
１～36は黒浜式である。１は２条の平行沈線文を有する口縁部片で、胴部は鋸歯状の沈線文か。２は集合沈線、３は幅広の沈線が垂下する区縁部片で地文は無節Ｌと思われる。５は口唇部に押捺痕がみられる。胴部は沈線文もしくは列点文であろう。４・６～８は羽状構成をとる。４・６は附加条縄文で、軸縄は不明、Ｌ２本もしくはＲ２本を附加した原体を用いる。７はＲ１本とＬ１本を一組にした撚糸文、８はＲを４本附加した軸縄不明の附加条、附加条第２種（軸縄ＲにＬ４本附加）を用いる。９～12は無節Ｌで、12のみ羽状に近い構成をとる。13～17は無節Ｒである。14は胎土に繊維を含んでおらず、Ｚ字状の結節回転文がみられるため、前期末の縄文土器に含めた方がよいかもしれない。18・19はLR、20～22はRLの斜縄文が施される。23は反撚りLLか。24～27は附加条である。24は附加条第３種、いわゆる網目状のもので、軸縄・付加条ともにℓと思われる。25は附加条第２種（軸縄ＲにＲ４本附加）、26はＬ２本を附加した軸縄不明の附加条、27はＲ２本を附加した軸縄不明の附加条を用いる。28～36は撚糸文である。一部不明瞭なものもあるが、28は撚糸文Ｌ、ほかは撚糸文Ｒと思われ、32・33は２本を一組としている。

37は連続刺突文がみられる胴部片で、胎土に少量の雲母を含む。浮島式であろう。

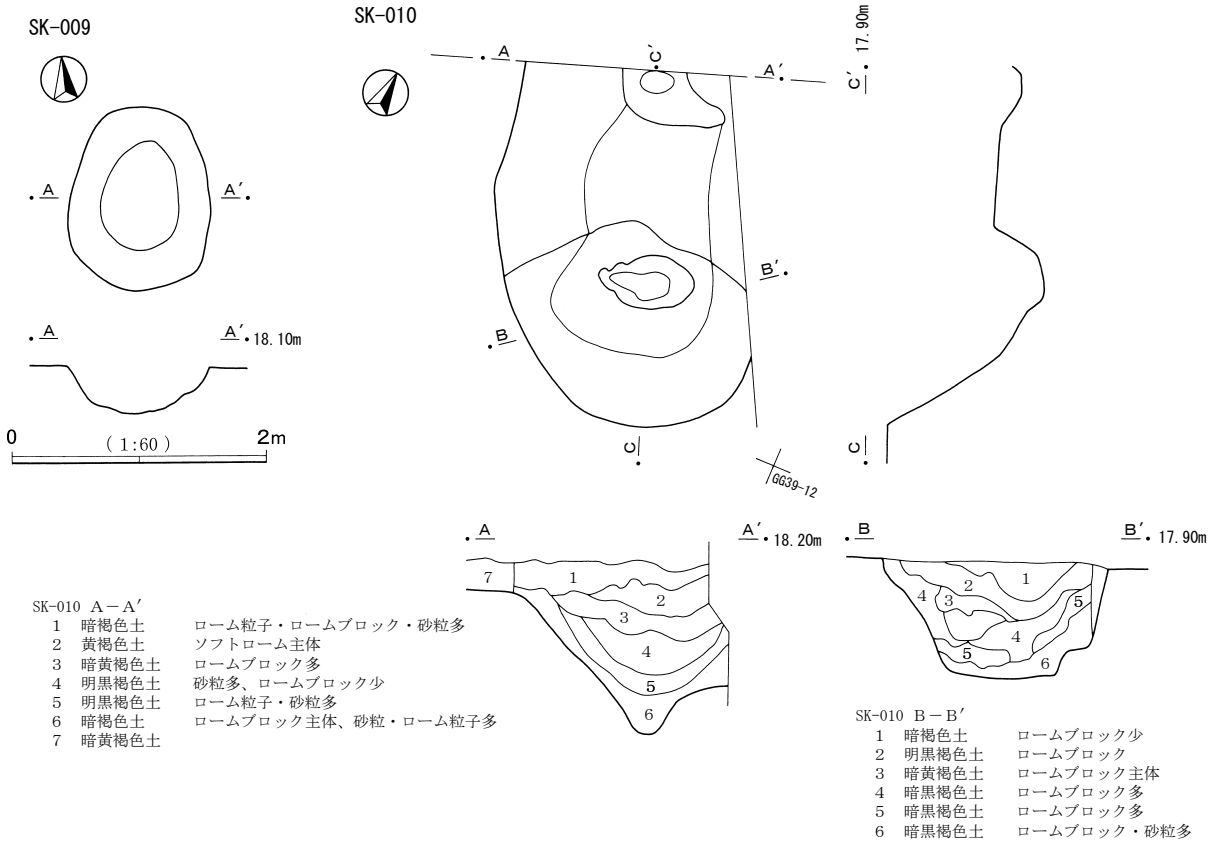
38・39は無節ＬのＺ字状結節回転文が施される。38の口縁部は折り返し状を呈し、内面に凹みがみられる。時期としては前期末であろう。

40～44は加曽利Ｅ式である。40は沈線区画内にRLを充填する。41は波状口縁で、口縁部上端に無文部を有し、RLが施される。42～44は磨消懸垂文がみられるもので、42は複節LRL、43･44はRLを地文とする。

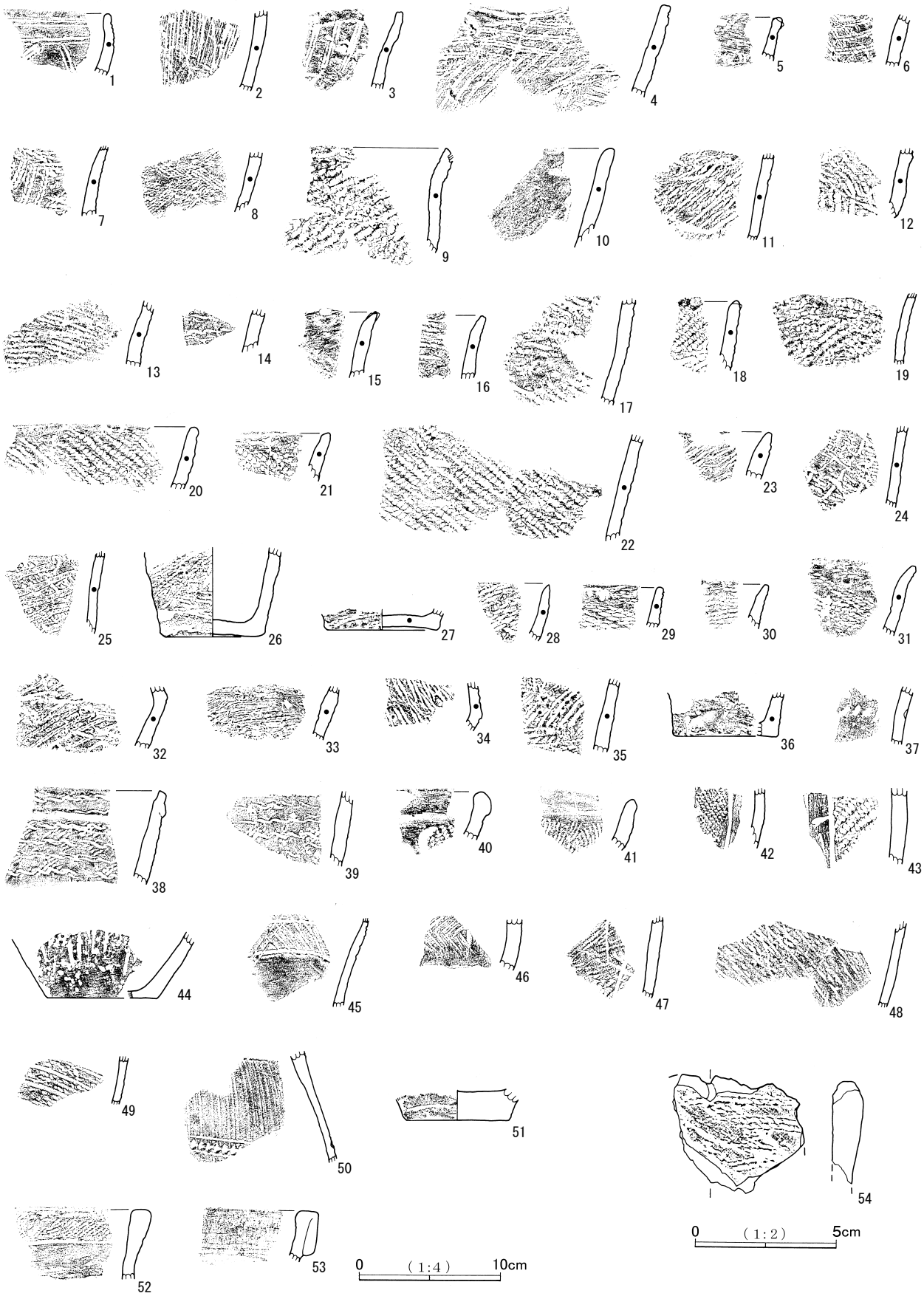
45～50は加曽利Ｂ式および加曽利Ｂ式併行の土器である。45は沈線区画内に鋸歯状の沈線を充填して



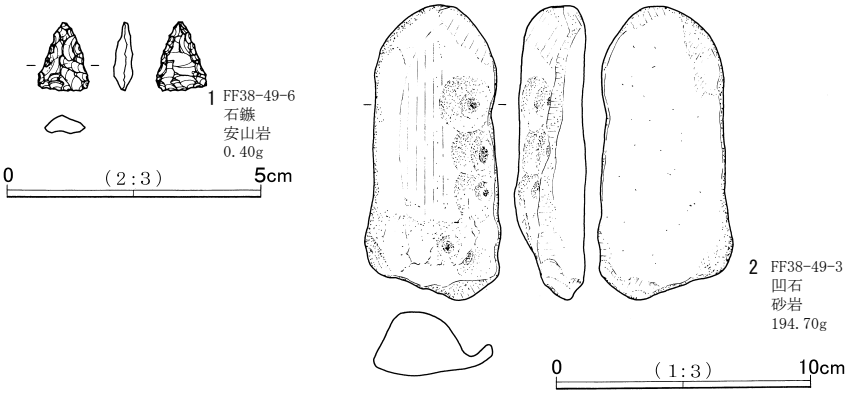
第78図　SI-023・小山台(88)SI001



第79図　SK-009、SK-010



第80図　遺構外出土縄文時代遺物①



第81図　遺構外出土縄文時代遺物②

いる。46は綾杉状の沈線文、47は地文LRに鋸歯状の沈線を施している。48～51は粗製土器である。48はLR、49はRLを地文とし、条線が加えられる。50は胴部中位に刻みを伴った沈線による区画文を有し、斜位の条線が施される。口縁部が肥厚するため安行式に伴うものかもしれない。51はヘラ先状の工具による短沈線がみられる底部片である。52は端部が肥厚する口縁部である。沈線で区画した口唇部には無節Ｌが施される。安行式であろう。53は折返し状となって肥厚する口縁部で無文である。晩期の安行式に伴うものと推定される。

54は黒浜式の土器片を利用した土器片錘である。左側及び下半を欠損する。

石器類（第81図、図版32）

原畑遺跡から出土した石器は石鏃、打製石斧、磨石類、凹石、磨製石斧、剥片類が出土している。このうち２点を図示した。１は石鏃である。最大長は13.75㎜で、ごく小型の平基鏃である。尖頭器の先端を思わせるような形状を呈しており、尖頭器の基部などの再加工品である可能性が高い。石材は白色の筋が入る灰色の安山岩で、濃灰色の斑晶を少量含む。２は凹石である。明瞭な凹み痕が３か所並び、ごく弱い凹みが１か所みられる。左側に高まりをもつが、３か所の凹みは厚みの少ない右寄りに穿たれている。石材は淡褐色の軟質な砂岩製である。

第３節　中・近世以降

１　遺構

SD－001（第82図、図版29）

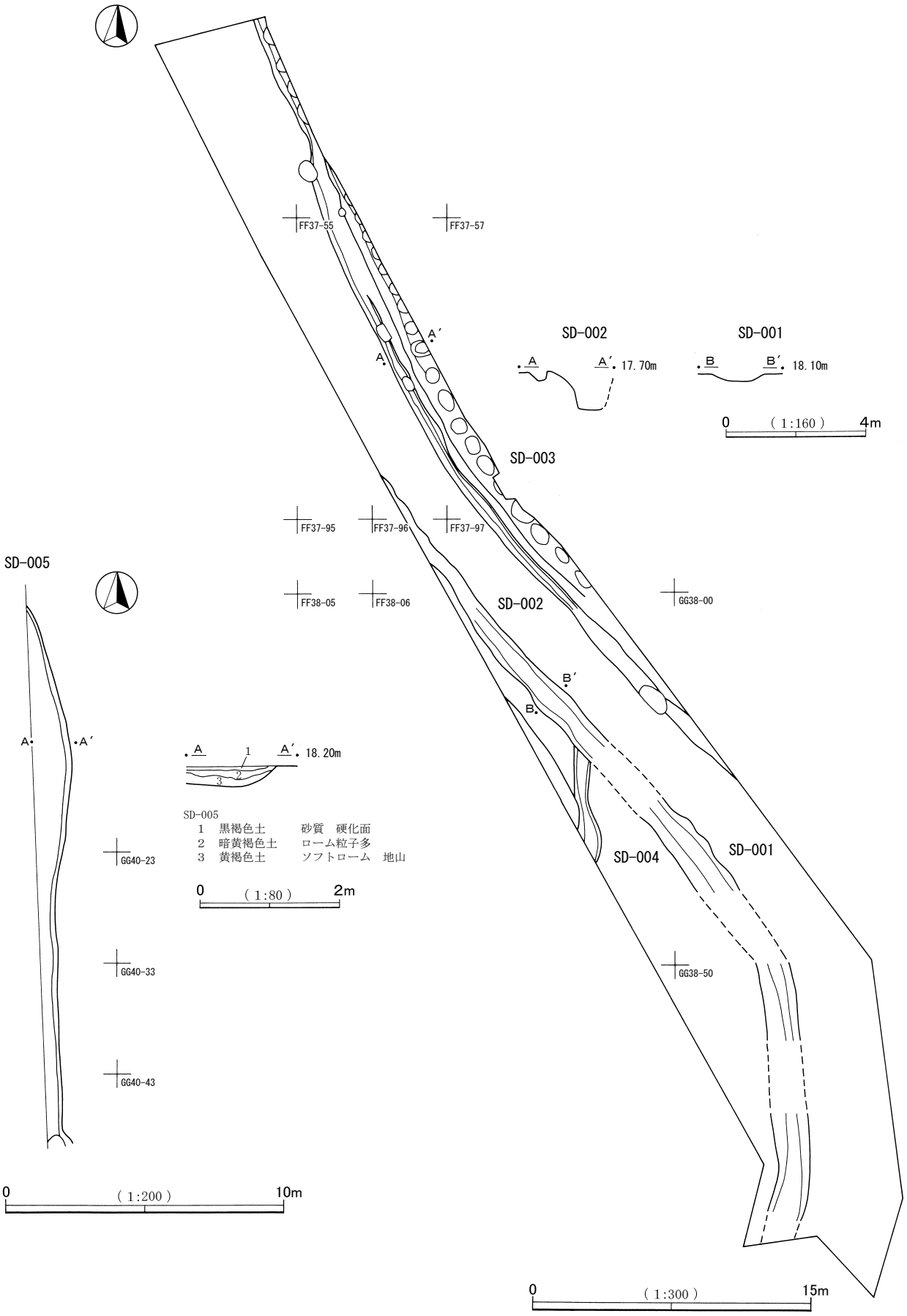
FF37－86からGG38－81に位置する溝状遺構である。北西から南東方向へ直線的に延び、GG38－51付近で南へ向きを変える。検出された範囲での長さは49m、幅２m、深さ40㎝である。

SD－002（第82図、図版29）

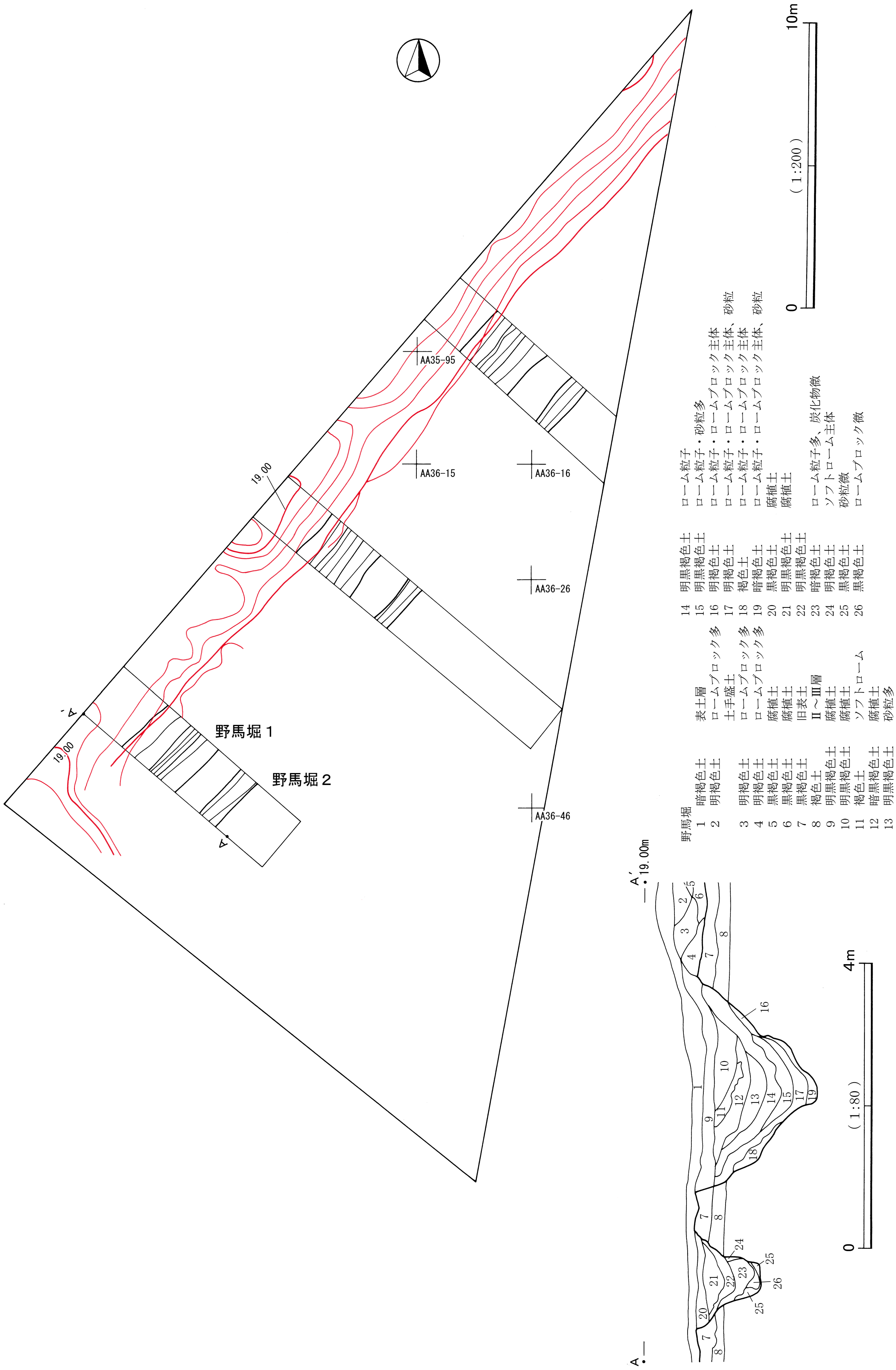
FF37－45付近からGG38－20に位置する溝状遺構である。北西から南東方向へ直線的に延び、南側は小山台遺跡(5)SD003へと続く。検出された範囲での長さは49m、幅0.80m、深さ50㎝である。

SD－003（第82図、図版29）

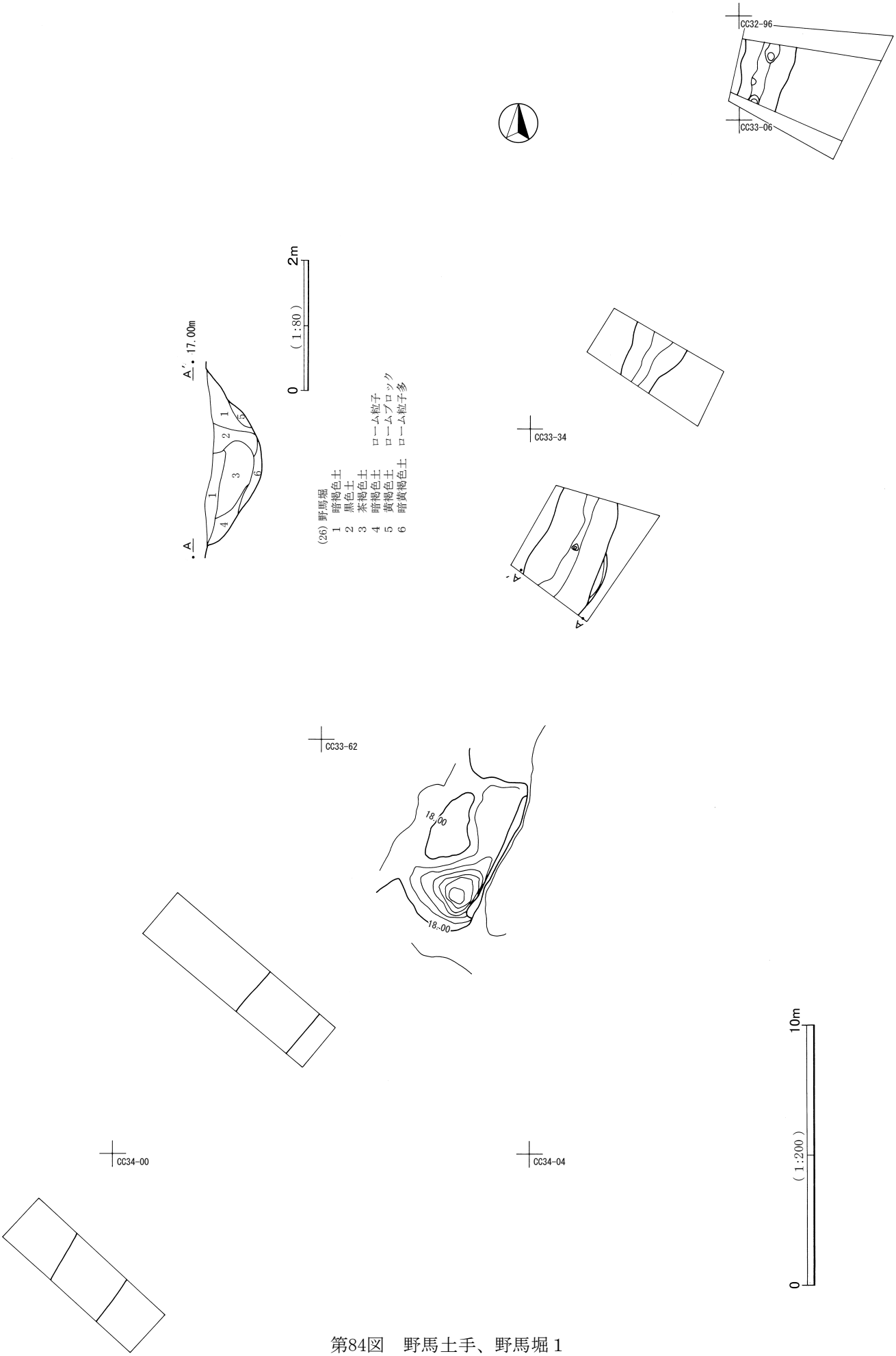
FF37－24付近からGG38－43に位置する溝状遺構である。ピット列を伴い、北西から南東方向へ延びる。小山台遺跡と境を接し、大部分は(5)SD002として調査されているため、詳細は小山台遺跡で報告する。



第82図　SD-001～ SD-005



第83図　野馬土手、野馬堀１・２



第84図　野馬土手、野馬堀１

SD－004（第82図）

FF38－28・38に位置する溝状遺構である。SD－001から南へ直線的に延び、南側は調査区外へと続く。検出された範囲での長さは５ｍ、幅0.70ｍ～1.20ｍ、深さ11㎝である。

SD－005（第82図）

GG39－92付近に位置する道路状遺構である。

野馬土手（第83・84図、図版29）

トレンチによる断続的な調査であるが、CC33－73付近からAA36－41付近へ遺跡を南北方向に縦断すると推測される。南部の（24）調査区では野馬堀２条が南側に付随する。南端で幅４ｍ前後、高さ70㎝、野馬堀との比高差は最大で３ｍ程である。

野馬堀１（第83・84図、図版29）

野馬土手の南側に付随する野馬堀で、幅2.5ｍ～2.8ｍ、深さは南部で170㎝～200㎝、北部で70㎝～110㎝である。断面形はＶ字状を呈する。

野馬堀２（第83・84図、図版29）

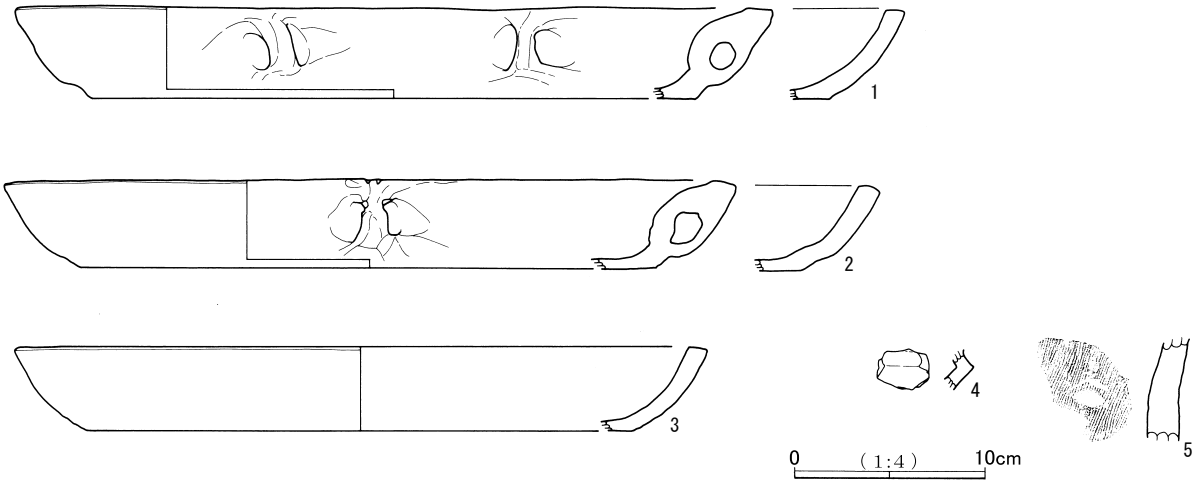
（24）調査区で野馬土手に付随する野馬堀２条のうち、南側に位置するもので、野馬堀１とは70㎝前後の間隔がある。幅0.80ｍ、深さ62㎝～92㎝で、断面は逆台形を呈する。

２　遺物（第85図、図版32）

１～３は焙烙である。１の内耳は２対１の３個になると思われる。いずれも暗褐色を呈し、胎土に雲母を含む。外面には煤が付着している。

４・５は野馬土手には関係しない時代の遺物であるが、近隣でも出土例が少ない遺物のためここに掲載した。４は古墳時代前期の土器で、Ｓ字状口縁甕の口縁部と思われる。外面は白色、内面は橙色を呈する。５は古墳時代後期の埴輪の胴部片である。外面はハケ、内面はナデが施されている。

そのほかに、寛永通寶の文銭が１点出土した。写真のみ掲載した。



第85図　中・近世遺物ほか

第６章　寺下前遺跡

第１節　遺跡の概要（第86図、図版１）

寺下前遺跡は、現利根川（古常陸川）右岸の標高約16m～18mの台地上に位置し、小山台遺跡の東側に隣接する。

今回の報告は、第3次調査の内容をまとめたものである。第３次調査区は、遺跡の西端部に位置し、大グリッドNN34・35、OO32～34に該当する。遺構は、中・近世の土坑６基、溝状遺構１条、台地整形区画１か所である。

第２節　中・近世以降

１　遺構

(3)SK－001（第87図、図版33）

NN35－18付近に位置する。北東側を撹乱によって切られるが、平面形は0.54m×0.42mの楕円形になると思われる。確認面からの深さは35cmである。

遺物は出土していない。

(3)SK－002（第87図、図版33）

NN34－59付近に位置する。中央部が水道管によって壊されているため、全体像が分かりにくいが、南北長4.5m、東西幅2.3mの地下式坑である。確認面からの深さは、最も深いところで170cmである。西壁の土層断面から、天井部が崩落し、上部に空間が残されている様子が観察できた。

遺物は出土していない。

(3)SK－003（第87図、図版33）

NN34－98に位置する。西側は調査区外のため未検出である。２基の楕円形の掘り込みが重なっており、現況の規模は1.14m×0.78m、確認面からの深さ46cmを測る。

遺物は縄文時代後期の土器片が少量出土しているが、混入品と思われる。

(3)SK－004（第88図、図版33）

NN34－78付近に位置する。長方形の地下室と竪坑からなる地下式坑である。地下室の規模は2.56m×1.80m、深さ160cmを測り、竪坑には段差がみられる。

遺物は縄文時代後期の土器片と擂鉢が１点出土している。

(3)SK－005（第87図、図版33）

NN34－59付近に位置する。ごく一部のみの遺存で、検出面での規模は1.05m×0.39m、深さは31cmである。

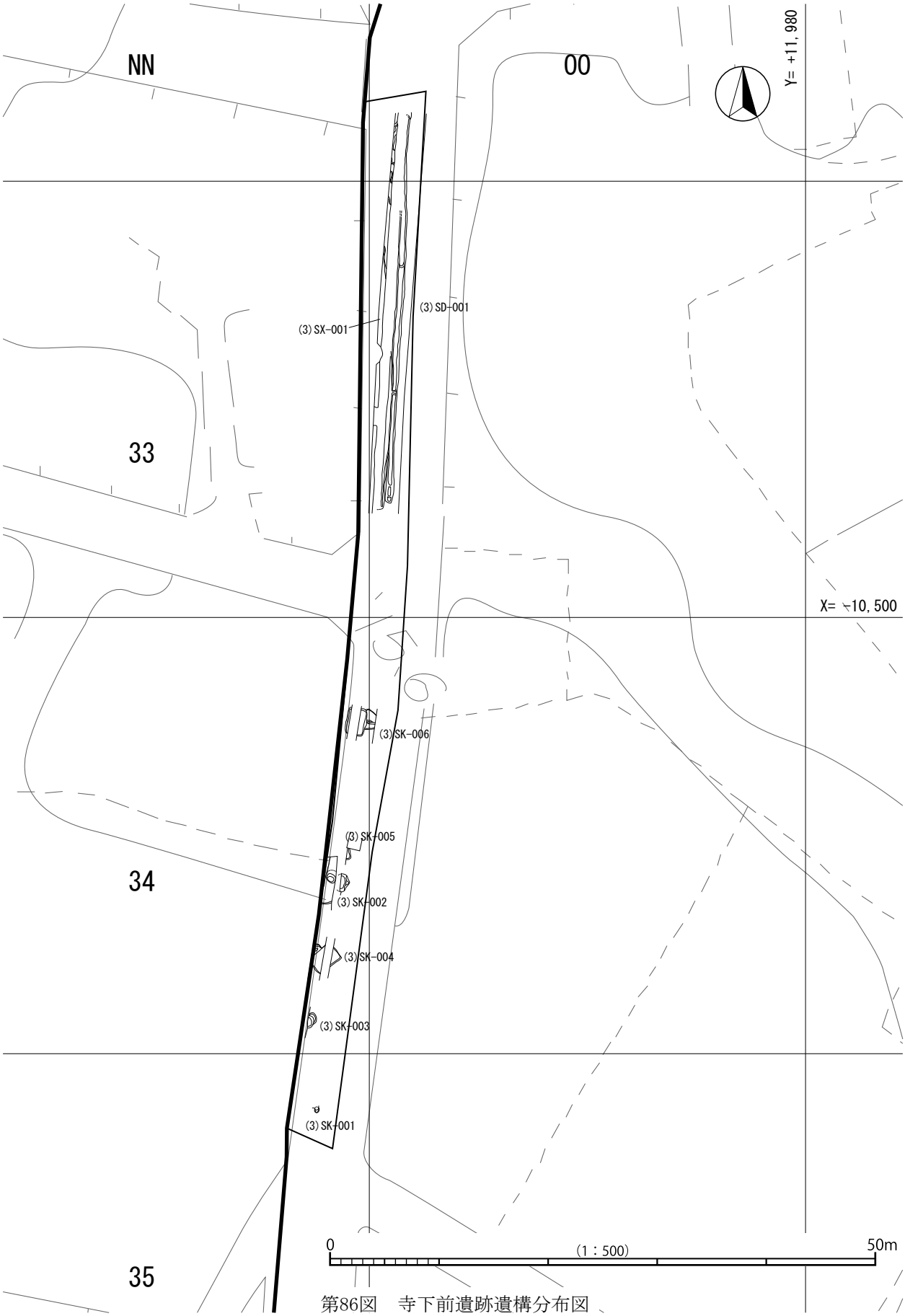
遺物は出土していない。

(3)SK－006（第87図、図版33）

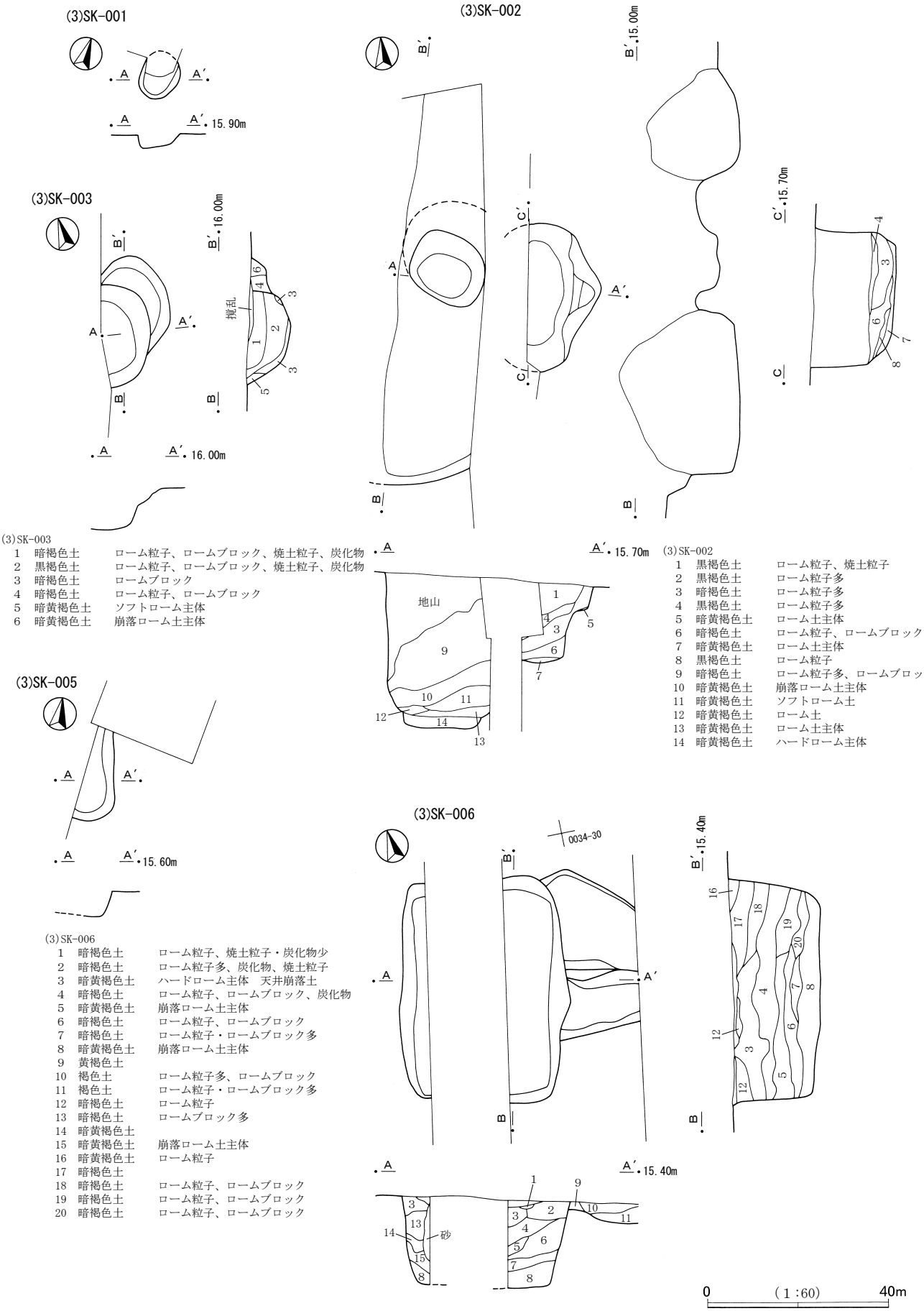
NN34－39付近に位置する。平面長方形を呈する地下式坑であるが、中央部を水道管によって壊されている。規模は2.53m×1.90m、深さは101cmである。

遺物は縄文時代後期の土器片が少量出土しているが、混入品と思われる。

(3)SD－001（第89図、図版33）



第86図　寺下前遺跡遺構分布図



(3)SK-003

1	暗褐色土	ローム粒子、ロームブロック、焼土粒子、炭化物
2	黒褐色土	ローム粒子、ロームブロック、焼土粒子、炭化物
3	暗褐色土	ロームブロック
4	暗褐色土	ローム粒子、ロームブロック
5	暗黄褐色土	ソフトローム主体
6	暗黄褐色土	崩落ローム土主体

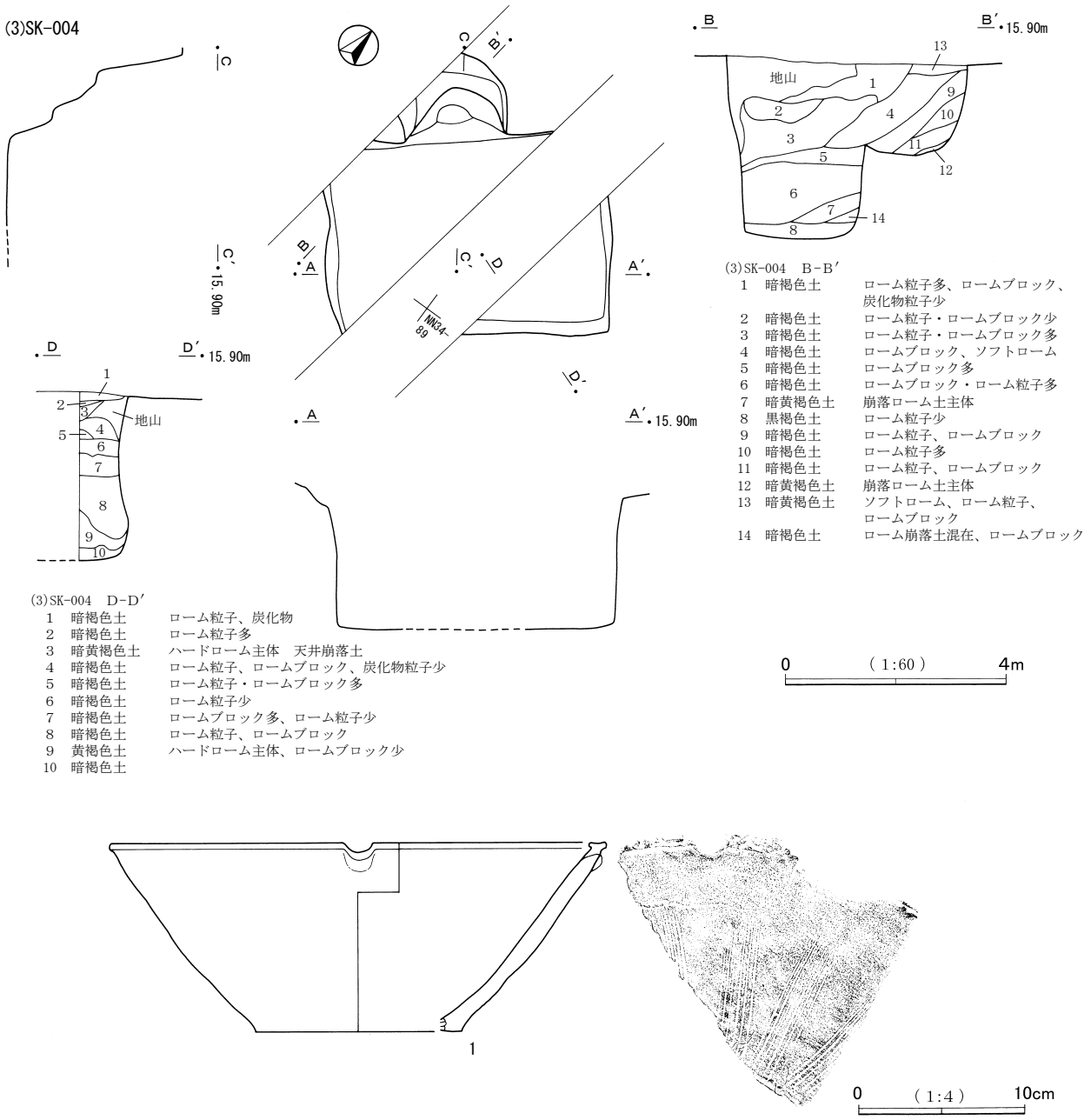
(3)SK-002

1	黒褐色土	ローム粒子、焼土粒子
2	黒褐色土	ローム粒子多
3	暗褐色土	ローム粒子多
4	黒褐色土	ローム粒子多
5	暗黄褐色土	ローム土主体
6	暗褐色土	ローム粒子、ロームブロック
7	暗黄褐色土	ローム土主体
8	黒褐色土	ローム粒子
9	暗褐色土	ローム粒子多、ロームブロック、炭化物
10	暗黄褐色土	崩落ローム土主体
11	暗黄褐色土	ソフトローム土
12	暗黄褐色土	ローム土
13	暗黄褐色土	ローム土主体
14	暗黄褐色土	ハードローム主体

(3)SK-006

1	暗褐色土	ローム粒子、焼土粒子・炭化物少
2	暗褐色土	ローム粒子多、炭化物、焼土粒子
3	暗黄褐色土	ハードローム主体　天井崩落土
4	暗褐色土	ローム粒子、ロームブロック、炭化物
5	暗黄褐色土	崩落ローム土主体
6	暗褐色土	ローム粒子、ロームブロック
7	暗褐色土	ローム粒子・ロームブロック多
8	暗黄褐色土	崩落ローム土主体
9	黄褐色土	
10	褐色土	ローム粒子多、ロームブロック
11	褐色土	ローム粒子・ロームブロック多
12	暗褐色土	ローム粒子
13	暗褐色土	ロームブロック多
14	暗黄褐色土	
15	暗黄褐色土	崩落ローム土主体
16	暗黄褐色土	ローム粒子
17	暗褐色土	
18	暗褐色土	ローム粒子、ロームブロック
19	暗褐色土	ローム粒子、ロームブロック
20	暗褐色土	ローム粒子、ロームブロック

第87図　土坑①



第88図　土坑②

OO32－80からOO33－50に位置する。南北方向に直線的に伸びる溝状遺構である。検出面での長さは18m、幅0.39m、深さは23cm～56cmである。

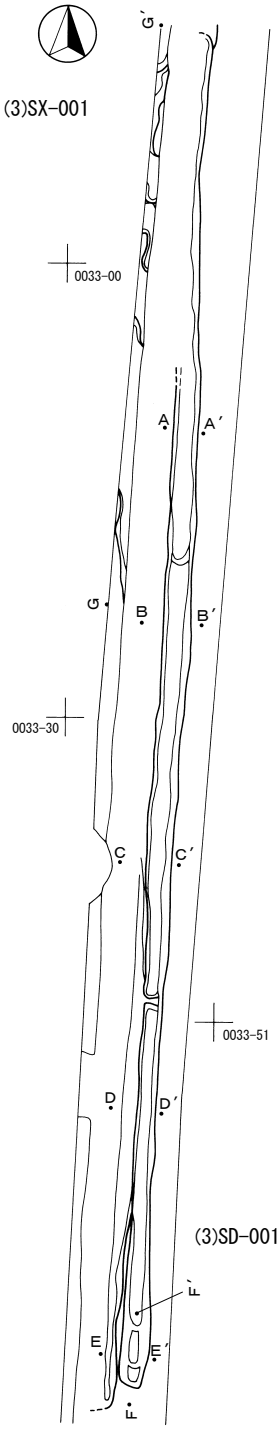
遺物は砥石や鉄製品が出土しているが、近世以降の新しい時期に帰属すると思われ、図示しなかった。

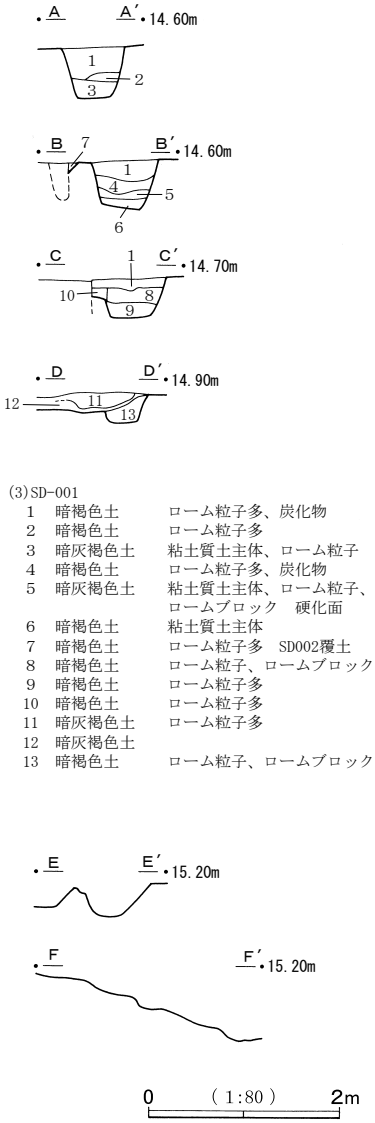
(3)SX－001（第89図、図版33）

OO32－80付近に位置する台地整形区画である。南北16mの範囲で検出された。(3)SD－001の西側に位置し、隣接する小山台遺跡に続くものと思われる。

2　遺物（第90図、図版34）

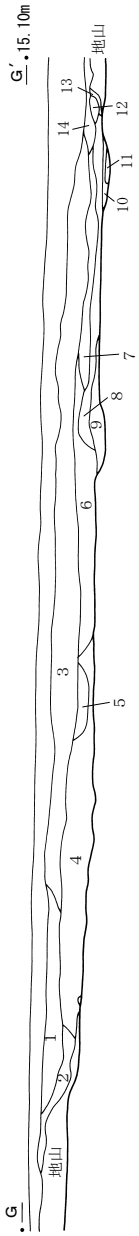
遺構に伴わない遺物を一括する。縄文時代後期の土器が主体で、僅かに中期・晩期の土器、土製品を含む。1は押引文がみられる口縁部片で、阿玉台式と思われる。2・3は胎土に雲母と白色粒子を多く含み、中峠式と思われる。2は「く」の字に屈曲する口縁部下端に沈線がみられ、3はRLを地文とし蛇行沈線が垂





(3)SD-001

1	暗褐色土	ローム粒子多、炭化物
2	暗褐色土	ローム粒子多
3	暗灰褐色土	粘土質土主体、ローム粒子
4	暗褐色土	ローム粒子多、炭化物
5	暗灰褐色土	粘土質土主体、ローム粒子、ロームブロック　硬化面
6	暗褐色土	粘土質土主体
7	暗褐色土	ローム粒子多　SD002覆土
8	暗褐色土	ローム粒子、ロームブロック　砂質土
9	暗褐色土	ローム粒子多
10	暗褐色土	ローム粒子多
11	暗灰褐色土	ローム粒子多
12	暗灰褐色土	
13	暗褐色土	ローム粒子、ロームブロック



(3)SX-001

1	暗褐色土	ロームブロック多、ローム粒子
2	暗褐色土	ローム粒子、ロームブロック
3	暗褐色土	ローム粒子多、ロームブロック少、炭化物
4	暗褐色土	ローム粒子
5	暗褐色土	ローム粒子、炭化物
6	暗褐色土	焼土、炭化物
7	暗褐色土	ローム粒子、炭化物
8	暗褐色土	炭化物少
9	暗褐色土	ローム粒子多
10	暗褐色土	ローム粒子・ロームブロック多
11	暗褐色土	ローム粒子多
12	暗灰色土	炭化物多
13	暗灰色土	ローム粒子多
14	暗灰色土	ロームブロック

0 (1:100) 5m

第89図　溝類

第90図　遺構外出土縄文土器・土製品

下する。４～10は加曽利Ｅ式で、４・５は沈線による枠状文、６は沈線以下に無節Ｌが施される。７はRLを地文とし、沈線文が加えられる。８・10は微隆起線文、９には磨消縄文がみられる。

11は沈線区画内に列点文が充填される口縁部片で、称名寺式である。12～20は堀之内式である。12は口唇部に刺突文が施され、口縁部下位に８字状貼付文が付される。13～19は縄文地に沈線文が描かれる。19は磨消縄文による重三角文で、堀之内２式と思われる。20は櫛歯状工具による条線がみられる。21～35は加曽利Ｂ式である。21は口縁部にミガキが施される。22～27は口縁部にキザミを有し、胴部に条線や磨消縄文などが施される。28は縄文LRのみ、29は無文である。30は「の」字状の区画文がみられる。31は屈曲部にキザミ、胴部に条線が施される。32は沈線で区画された無文帯を挟んでRLが施される。33～35は粗製土器である。36～40は安行２式の精製土器である。口唇部に付された貼付文を起点に沈線、キザミを伴った隆帯で区画文が描かれ、口縁部にRLが施される。41～45は安行式併行の粗製土器である。

46～50は安行3ｂ式である。46はRLを地文とし、沈線による入組み文がみられる。47～49は紐線文をもち、47・48には弧線文が施される。50は地文RLに沈線文が描かれる。

51～54は底部片である。53・54には網代痕がみられる。

55・56は土製円板である。55は加曽利Ｂ式の粗製土器を利用し、周縁部を打ち欠いて調整している。56は周縁部を研磨して調整している。57は加曽利Ｅ式の土器片を利用した土器片錘である。周縁部は摩滅している。

第４表　貝種組成表

貝種	花前Ⅰ遺跡					富士見遺跡					原畑遺跡	
	(1)SI－001	(1)SI－002	(1)SI－003	(1)SI－004	(1)SK－036	SI－121	SI－134	SI－136	SI－140	SI－141	SI－022	SI－023
時期	縄文前期黒浜	縄文前期黒浜	縄文前期黒浜	縄文前期黒浜	奈良・平安	縄文前期黒浜	縄文前期黒浜	縄文前期黒浜	縄文前期黒浜	縄文前期黒浜	縄文前期黒浜	縄文前期黒浜
採取量	17.0ℓ	19.3ℓ	16.5ℓ	20.2ℓ	7.0ℓ	81.9ℓ	1.5ℓ	0.9ℓ	2.0ℓ	0.8ℓ	93.3ℓ	0.2ℓ
分析量	3.0ℓ	3.0ℓ	3.0ℓ	3.0ℓ	3.0ℓ	81.9ℓ	1.5ℓ	0.9ℓ	2.0ℓ	0.8ℓ	16.8ℓ	0.2ℓ
イボキサゴ											1	
ウミニナ類	11		2	14		77	2				299	
ツメタガイ												
アカニシ	1	6		5		5			1			
イボニシ												
アラムシロガイ						2					1	
マガキ	81	12	14	18	1	293	26		8	4	3	1
サルボオ	91	18	1	40	2	2597	36	1	3	2	13	
ハイガイ												
ハマグリ	51	97	69	34	103	2582	28	52	66	43	1410	3
アサリ	1	12	22		1	1786		2	104		589	4
オオノガイ											2	
ヤマトシジミ						2						
オキシジミ	4		15	6	29	368	2	8			124	5
ナミマガシワ												
カガミガイ				1	1	2	1				7	
シオフキ	1		12	2		196	6	5	1	1	137	
マテガイ												
イシガイ												
ミルクガイ	2											
イタボガキ						575	1					
イチョウシラトリガイ						2						
サラガイ											1	
フジツボ			○								○	

＊分析方法―貝サンプルは３ℓの計量カップを使って３ℓの容量を、３ℓ未満の貝サンプルにおいては全量を取出し、9.52㎜・４㎜・２㎜・１㎜メッシュの試験フルイによる水洗分離を経て、選別作業を行った。貝類は４㎜メッシュ以上を選別し、二枚貝類は殻頂部の鉸歯が約半分遺存するものを左右別に集計し、多い方を最小個体とした。巻貝類は殻軸の下端が遺存するものを集計した。計測作業は計測可能個体が多い種について実施し、左殻をノギスを使って計測した。

第５表　貝類計測表

花前Ⅰ遺跡

(1)SI－001

	サルボオ	ハマグリ	オキシジミ
資料数	68	46	4
平均	34.28	30.23	36.1
標準偏差	6.06	8.99	3.46
最小	22.1	16.5	31.1
最大	50.1	53.8	38.6

(1)SI－002

	サルボオ	ハマグリ	アサリ
資料数	17	84	12
平均	39.93	36.55	29.21
標準偏差	6.49	7.45	4.63
最小	22.3	21.9	24.8
最大	51.5	63.6	41.5

(1)SI－003

	サルボオ	ハマグリ	アサリ	オキシジミ	シオフキ
資料数	1	30	6	6	3
平均	40.10	30.27	25.50	35.27	33.13
標準偏差	－	6.21	5.97	1.93	2.72
最小	40.1	18.3	19.4	32.6	30.0
最大	40.1	46.1	34.8	38.4	34.9

(1)SI－004

	サルボオ	ハマグリ	オキシジミ	シオフキ
資料数	40	20	5	2
平均	37.26	37.67	36.10	42.80
標準偏差	9.38	12.88	4.60	0.28
最小	21.9	21.3	31.7	42.6
最大	74.6	65.9	43.3	43.0

(1)SK－036

	カガミガイ	サルボオ	ハマグリ	オキシジミ
資料数	1	1	101	29
平均	48.10	40.90	40.45	38.57
標準偏差	－	－	11.27	3.67
最小	48.1	40.9	22.6	30.4
最大	48.1	40.9	68.0	44.5

富士見遺跡

SI－121

	カガミガイ	サルボオ	ハマグリ	アサリ	オキシジミ	シオフキ
資料数	1	100	100	100	100	100
平均	49.90	34.69	36.56	24.58	35.65	36.83
標準偏差	－	4.65	9.93	6.43	4.41	5.12
最小	49.9	24.3	18.8	14.8	24.3	23.7
最大	49.9	46.8	63.4	41.1	46.5	49.1

SI－134

	カガミガイ	サルボオ	ハマグリ	シオフキ
資料数	1	33	14	4
平均	48.40	26.59	31.91	31.43
標準偏差	－	3.72	9.61	4.56
最小	48.4	21.4	21.6	27.0
最大	48.4	38.8	47.5	37.8

SI－136

	ハマグリ	アサリ
資料数	8	1
平均	26.79	19.70
標準偏差	3.25	－
最小	21.7	19.7
最大	30.5	19.7

SI－141

	サルボオ	ハマグリ
資料数	2	4
平均	26.95	26.6
標準偏差	1.77	4.34
最小	25.7	20.5
最大	28.2	30.2

原畑遺跡

SI－022

	カガミガイ	サルボオ	ハマグリ	アサリ	オキシジミ	シオフキ
資料数	4	10	300	143	65	28
平均	43.98	33.32	24.06	22.38	31.56	32.01
標準偏差	14.47	8.89	8.37	5.03	6.26	4.57
最小	23.2	24.4	11.9	13.1	16.3	23.7
最大	54.8	51.2	57.7	44.8	44.9	38.6

第６表　花前Ⅰ遺跡製鉄関連遺物計測表

番号	遺構番号	遺物番号	種類	種別	重量 g
1	(1)SI－001	0134	鉄製品	角形棒状	14.81
2	(1)SI－002	0480	鉄製品	刀子	18.52
3	(1)Y2－90	0003	鉄製品	鑿か	28.36
4	(1)Y2－98	0002	鉄製品	薄板	2.54
5	(2)トレンチ1	0001	鉄製品		4.69
6	(2)トレンチ5	0005	鉄製品	角形棒状	4.93
7	(2)トレンチ6	0005	鉄製品	鑿か	19.93
8	(3)SK－001	0002	銅製品		97.00
9	(3)SK－001	0001	鉄製品	鉄板？	44.31
10	(3)SK－001	0001	鉄製品	鉄釘	13.07
11	(3)SX－001	0086	鉄製品		9.40
12	(3)SX－001	0087	鉄製品		6.77
13	(3)Z2－12	0001	鉄製品		9.57
14	(3)Z2－21	0001	鉄製品	刃釜か	48.66
15	(3)Z2－21	0001	鉄製品	鑿か	15.18
16	(3)Z2－22	0001	鉄製品		88.18
1	(1)SI－002	0001	鉄	鉄塊	13.30
2	(1)SB－001	0006	鉄	鉄塊	5.40
3	(1)SK－032	0001	鉄	鉄塊	9.00
4	(1)SB－005 P10	0001	鉄	鉄塊	33.30
5	(1)SB－005 P1	0001	鉄	鉄塊	30.10
6	(1)SB－006 P5	0001	鉄	鉄塊	18.80
7	(1)トレンチ2	0001	鉄	鉄塊	31.20
8	(1)トレンチ3	0001	鉄	鉄塊	33.50
9	(1)Y2－62	0003	鉄	鉄塊	124.30
10	(1)Y2－62	0005	鉄	鉄塊	16.90
11	(1)Y2－62	0009	鉄	鉄塊	24.30
12	(1)Y2－63	0001	鉄	鉄塊	9.20
13	(1)Y2－63	0009	鉄	鉄塊	15.70
14	(1)Y2－64	0003	鉄	鉄塊	48.80
15	(1)Y2－65	0005	鉄	鉄塊	8.40
16	(1)Y2－72	0003	鉄	鉄塊	229.40
17	(1)Y2－73	0005	鉄	鉄塊	10.30
18	(1)Y2－75	0001	鉄	鉄塊	9.40
19	(1)Y2－76	0005	鉄	鉄塊	34.50
20	(1)Y2－83	0004	鉄	鉄塊	14.60
21	(1)Y2－90	0003	鉄	鉄塊	193.30
22	(1)Y2－93	0004	鉄	鉄塊	41.80
23	(1)Y3－02	0003	鉄	鉄塊	13.00
24	(1)Y3－03	0002	鉄	鉄塊	8.00
25	(1)Y3－03	0006	鉄	鉄塊	38.70
26	(1)Y3－04	0003	鉄	鉄塊	186.00
27	(1)Y3－13	0003	鉄	鉄塊	63.90
28	(1)Y3－13	0004	鉄	鉄塊	3.70
29	(1)Y3－19	0003	鉄	鉄塊	19.50
30	(1)Y3－23	0003	鉄	鉄塊	28.50
31	(1)Z3－21	0001	鉄	鉄塊	16.90
32	(1)Z3－23	0003	鉄	鉄塊	8.00
33	(1)Z3－62	0002	鉄	鉄塊	6.80
34	(1)Z3－63	0004	鉄	鉄塊	52.70
35	(1)Z3－64	0004	鉄	鉄塊	51.90
1	(1)SI－001	0135	鉄滓	鉄塊付スラグ	10.80
2	(1)SI－001	0412	鉄滓	鉄塊付スラグ	89.50
3	(1)P－6	0005	鉄滓	鉄塊付スラグ	76.20
4	(1)SB－005 P4	0001	鉄滓	鉄塊付スラグ	24.00
5	(1)2Y－72	0003	鉄滓	鉄塊付スラグ	12.70
6	(1)3Y－01	0004	鉄滓	鉄塊付スラグ	3.80
7	(1)3Y－13	0003	鉄滓	鉄塊付スラグ	8.20
1	(1)SK－029	0001	銅	銅滓？	4.70

番号	遺構番号	遺物番号	種類	種別	重量 g
1	(1)SI－001	0126	鉄滓	炉内	80.00
2	(1)SI－001	0183	鉄滓	炉内	47.30
3	(1)SI－002	0084	鉄滓	炉内	12.40
4	(1)SI－002	0556	鉄滓	炉内	10.40
5	(1)Y2－62	0003	鉄滓	炉内	387.80
6	(1)Y2－62	0005	鉄滓	炉内	20.20
7	(1)Y2－63	0006	鉄滓	炉内	23.40
8	(1)Y2－64	0003	鉄滓	炉内	75.50
9	(1)Y2－72	0003	鉄滓	炉内	35.30
10	(1)Y2－81	0005	鉄滓	炉内	121.30
11	(1)Y2－83	0005	鉄滓	炉内	5.80
12	(1)Y2－90	0003	鉄滓	炉内	156.70
13	(1)Y2－93	0004	鉄滓	炉内	11.50
1	(1)SI－001	0001	鉄滓	再結合	26.10
2	(1)SI－001	0007	鉄滓	再結合	44.40
3	(1)SI－001	0011	鉄滓	再結合	41.60
4	(1)SI－001	0014	鉄滓	再結合	6.30
5	(1)SI－001	0014	鉄滓	再結合	2.40
6	(1)SI－001	0056	鉄滓	再結合	20.80
7	(1)SI－001	0057	鉄滓	再結合	168.80
8	(1)SI－001	0089	鉄滓	再結合	15.10
9	(1)SI－001	0104	鉄滓	再結合	54.40
10	(1)SI－001	0105	鉄滓	再結合	163.50
11	(1)SI－001	0135	鉄滓	再結合	259.80
12	(1)SI－001	0156	鉄滓	再結合	14.30
13	(1)SI－001	0222	鉄滓	再結合	20.30
14	(1)SI－001	0223	鉄滓	再結合	22.10
15	(1)SI－001	0260	鉄滓	再結合	19.20
16	(1)SI－001	0278	鉄滓	再結合	15.70
17	(1)SI－001	0279	鉄滓	再結合	23.70
18	(1)SI－001	0299	鉄滓	再結合	10.50
19	(1)SI－001	0300	鉄滓	再結合	44.50
20	(1)SI－001	0321	鉄滓	再結合	38.60
21	(1)SI－001	0368	鉄滓	再結合	24.30
22	(1)SI－001	0420	鉄滓	再結合	17.60
23	(1)SI－001	0420	鉄滓	再結合	10.80
24	(1)SI－001	0451	鉄滓	再結合	12.20
25	(1)SI－001	0469	鉄滓	再結合	20.20
26	(1)SI－001	0573	鉄滓	再結合	12.90
27	(1)SI－001	0573	鉄滓	再結合	36.30
28	(1)SI－001	0574	鉄滓	再結合	17.80
29	(1)SI－001	0576	鉄滓	再結合	31.80
30	(1)SI－001	0576	鉄滓	再結合	8.80
31	(1)SI－001	0628	鉄滓	再結合	15.60
32	(1)SI－001	0629	鉄滓	再結合	26.10
33	(1)SI－001	0630	鉄滓	再結合	18.60
34	(1)SI－002	0001C	鉄滓	再結合	137.60
35	(1)SI－002	0543	鉄滓	再結合	4.40
36	(1)SI－002	0556	鉄滓	再結合	294.60
37	(1)SB－001	0002	鉄滓	再結合	6.70
38	(1)SB－001	0005	鉄滓	再結合	10.10
39	(1)SB－001	0005	鉄滓	再結合	155.00
40	(1)SB－001	0006	鉄滓	再結合	16.00
41	(1)SB－001	0006	鉄滓	再結合	103.80
42	(1)SB－001	0007	鉄滓	再結合	161.60
43	(1)SB－001	0008	鉄滓	再結合	6.10
44	(1)SB－001	0015	鉄滓	再結合	7.80
45	(1)SB－001	0015	鉄滓	再結合	43.50
46	(1)SB－002	0001	鉄滓	再結合	13.40

番号	遺構番号	遺物番号	種類	種別	重量 g
47	(1)SK－033	0001	鉄滓	再結合	5.40
48	(1)SK－018	0001	鉄滓	再結合	6.20
49	(1)SB－005 P10	0001	鉄滓	再結合	106.40
50	(1)SB－005 P1	0001	鉄滓	再結合	31.10
51	(1)SK－024	0003	鉄滓	再結合	20.20
52	(1)SD－001東	0013	鉄滓	再結合	4.50
53	(1)SD－001東	0013	鉄滓	再結合	7.90
54	(1)SD－001西	0016	鉄滓	再結合	28.60
55	(1)SB－006 P2	0001	鉄滓	再結合	5.80
56	(1)SB－006 P2	0001	鉄滓	再結合	14.20
57	(1)SB－006 P5	0001	鉄滓	再結合	45.40
58	(1)SB－006 P4	0001	鉄滓	再結合	2.00
59	(1)SB－006 P3	0001	鉄滓	再結合	13.80
60	(1)P－15	0001	鉄滓	再結合	26.90
61	(1)SB－003 P1	0001	鉄滓	再結合	19.50
62	(1)SB－003 P1	0001	鉄滓	再結合	68.10
63	(1)SB－003 P3	0001	鉄滓	再結合	12.00
64	(1)SB－005 P4	0001	鉄滓	再結合	84.90
65	(1)SB－004 P6	0001	鉄滓	再結合	10.10
66	(1)P－23	0001	鉄滓	再結合	13.80
67	(1)P－23	0001	鉄滓	再結合	42.60
68	(1)SB－003 P6	0001	鉄滓	再結合	89.40
69	(1)SB－003 P7	0001	鉄滓	再結合	6.30
70	(1)SB－003 P8	0001	鉄滓	再結合	6.50
71	(1)P－9	0001	鉄滓	再結合	9.50
72	(1)SB－004 P10	0001	鉄滓	再結合	26.60
73	(1)SB－005 P9	0001	鉄滓	再結合	13.40
74	(1)SB－005 P9	0007	鉄滓	再結合	184.80
75	(1)SB－003 P10	0001	鉄滓	再結合	35.60
76	(1)SB－003 P10	0001	鉄滓	再結合	55.60
77	(1)SB－004 P4	0001	鉄滓	再結合	77.90
78	(1)SB－004 P5	0001	鉄滓	再結合	9.50
79	(1)SB－004 P5	0001	鉄滓	再結合	103.80
80	(1)SB－003 P2	0002	鉄滓	再結合	82.30
81	(1)Y2－72	0003	鉄滓	再結合	907.30
82	(1)Y2－73	0010	鉄滓	再結合	8.10
83	(1)Y2－75	0004	鉄滓	再結合	14.60
84	(1)Y3－04	0003	鉄滓	再結合	20.60
85	(1)Y3－13	0003	鉄滓	再結合	56.00
86	(1)Y3－13	0004	鉄滓	再結合	10.50
87	(1)Y3－13	0005	鉄滓	再結合	55.40
88	(1)Y3－23	0003	鉄滓	再結合	5.50
89	(1)Y3－24	001	鉄滓	再結合	38.20
90	(1)Y3－27	0003	鉄滓	再結合	66.60
91	(1)Y3－35	0003	鉄滓	再結合	19.00
92	(1)Y3－49	001	鉄滓	再結合	47.00
93	(1)Z2－91	0001	鉄滓	再結合	9.70
94	(1)Z3－62	0002	鉄滓	再結合	6.20
95	(1)Z3－63	0004	鉄滓	再結合	45.30

番号	遺構番号	遺物番号	種類	種別	重量 g
96	(1)Z3－72	0003	鉄滓	再結合	23.90
97	(1)トレンチ3	0001	鉄滓	再結合	6.80
98	(1)トレンチ4	0001	鉄滓	再結合	11.80
1	(2)トレンチ2	0002	鉄滓	碗形	13.80
1	(2)トレンチ1	0008	鉄滓	炉内	786.20
2	(3)SX－001	0052	鉄滓	炉内	449.50
3	(3)SX－001	0062	鉄滓	炉内	71.20
4	(3)SX－001	0079	鉄滓	炉内	14.80
5	(3)SX－001	0094	鉄滓	炉内	294.70
6	(3)Z2－21	0001	鉄滓	炉内	229.40
7	(3)Z2－31	0001	鉄滓	炉内	417.60
1	(2)トレンチ1	0002	鉄滓	再結合	12.70
2	(2)トレンチ2	0011	鉄滓	再結合	38.90
3	(2)トレンチ3	0007	鉄滓	再結合	33.60
4	(3)SD－001	0001	鉄滓	再結合	19.10
5	(3)SX－001	0114	鉄滓	再結合	14.10
6	(3)Z2－31	0001	鉄滓	再結合	17.30
7	(3)Z2－41	0001	鉄滓	再結合	12.10
8	(3)Z2－54	0001	鉄滓	再結合	19.30
1	(1)SI－001	0571	土製品	半球状	4.50
1	(1)SI－002	0001C	土製品	羽口	12.60
2	(1)SB－003 P3	0001	土製品	羽口	24.20
3	(1)SB－006 P5	0001	土製品	羽口	65.30
4	(1)Z3－63	0003	土製品	羽口	118.10
5	(1)Z3－63	0003	土製品	羽口	10.80
6	(1)Z3－63	0003	土製品	羽口	54.70
7	(1)Z3－63	0003	土製品	羽口	23.40
8	(1)Z3－63	0003	土製品	羽口	12.10
9	(1)Z3－64	0001	土製品	羽口	9.30
1	(1)SI－001	0072	土製品	炉壁	13.00
2	(1)SI－001	0259	土製品	炉壁	13.10
3	(1)SI－001	0367	土製品	炉壁	23.90
4	(1)SI－001	0575	土製品	炉壁	22.90
5	(1)SI－001	0576	土製品	炉壁	8.70
6	(1)SI－001	0577	土製品	炉壁	44.20
7	(1)SI－002	0136	土製品	炉壁	30.50
8	(1)SI－003	0395	土製品	炉壁	40.50
9	(1)SI－003	0480	土製品	炉壁	13.80
10	(1)SB－006 P5	0001	土製品	炉壁	5.00
11	(1)P－6	0004	土製品	炉壁	15.40
12	(1)SD－001	0013	土製品	炉壁	68.60
13	(1)トレンチ5	0001	土製品	炉壁	7.00
14	(1)Y2－90	0003	土製品	炉壁	22.50
15	(1)Z3－23	0006	土製品	炉壁	6.60
16	(1)Z3－64	0004	土製品	炉壁	0.90
17	(2)トレンチ1	0007	土製品	炉壁	21.30
18	(2)トレンチ2	0012	土製品	炉壁	24.20
19	(3)SX－001	0067	土製品	炉壁	14.50
20	(3)SX－001	0097	土製品	炉壁	104.10

第７表　花前Ⅰ遺跡銭貨計測表

番号	遺構番号	遺物番号	種別	外径 mm	内径 mm	内郭外径 mm	内郭内径 mm	外縁厚 mm	重量 g	備考
1	(1)SI－001	0369		24.9	21.5	9.1	6.0	1.9	3.94	
2	(2)トレンチ2	0012		23.9	18.5	8.5	5.9	1.3	2.06	
3	(3)Z2－22	0001	寛永通寶	25.0	19.7	7.5	5.7	1.3	3.31	
4	(3)Z2－47	0001		28.2	21.7	8.4	6.7	1.15	3.66	
5	(3)一括	0001		22.9	20.3	8.3	6.3	1.15	1.92	SI－003北側の撹乱

第７章　まとめ

柏北部東地区は利根川南岸、常磐自動車道の南東に広がる台地一帯にあたり、台地の標高は16m～18m、利根川低地との比高は５ｍ～10mである。利根川東遷以前は小貝川に合流していた古常陸川水系にあり、台地北側は古鬼怒湾に属する古常陸川湾の柏・我孫子低地に面していた。また、南側は地金堀と呼ばれる谷に面し、南西から入り込む奥東京湾との接点にもあたる。今回報告した花前Ｉ遺跡、駒形遺跡、富士見遺跡は柏北部東地区の北側に、原畑遺跡は柏北部東地区の南西側に、寺下前Ｉ遺跡は柏北部東地区の東側に位置する遺跡である。

花前Ｉ遺跡では、縄文時代前期の集落、平安時代の掘立柱建物、近世の鍛冶遺構、駒形遺跡・富士見遺跡では縄文時代前期の集落、原畑遺跡では縄文時代前期の集落、近世の野馬土手・溝状遺構、寺下前遺跡では中世の地下式坑、近世の溝状遺構などを発見した。これらを時代ごとに概観する。

第１節　縄文時代の集落

花前Ｉ遺跡（第91図）

常磐自動車道関連で調査した範囲を含めると、縄文時代の竪穴住居は20軒で、その内訳は黒浜式土器を主体的に伴出する竪穴住居が12軒、浮島式が６軒、堀之内式が２軒である。黒浜式期と浮島式期が集落の主体であり、今回の調査では堀之内式期の遺構は検出されなかった。黒浜式期の竪穴住居は、台地中央にまとまりをもって展開しており、今回検出された遺構もそれに続くものと思われる。浮島式期の遺構は、北側の台地縁辺部に点在しており、黒浜式期ほどのまとまりはみられない。

出土遺物を見てみると、(1)SI－001は結節沈線文や沈線文を主体とし、縄文のバリエーションも多い。黒浜式でも比較的新しい段階と思われる。(2)SI－002は斜縄文や附加条縄文、沈線文を主体とする。秩父地方産の緑色岩を石材とする乳棒状石斧の出土が特筆される。(1)SI－003も斜縄文、沈線文を主体とする。(1)SI－004は出土量が少ないが、結節沈線と葉脈文を組み合わせた文様や、地文縄文上に結節沈線を施すものがみられる。黒浜式中段階以降の可能性がある。(1)SI－001～(1)SI－004は遺構内貝層を伴っており、(1)SI－001はマガキ、サルボオが主体、(1)SI－002・(1)SI－003はハマグリ主体、(1)SI－004はハマグリよりもサルボオが多く、主体となる貝種の差は時期差と関連する可能性がある。(3)SI－001・(3)SI－002は波状貝殻文、変形爪形文などを主体とする浮島式と諸磯ｂ式を出土した。遺構内貝層は伴っていない。黒浜式にのみ遺構内貝層が伴う点は前回報告分と同様である。(3)SI－003は撹乱が著しく、遺物もほとんど出土していないことから時期は不明である。

駒形遺跡（第93図）

駒形遺跡が立地する台地は、現在、利根川から入り込む支谷により東西を挟まれた舌状を呈し、枝分かれする小支谷によって、いくつかの遺跡に分けられている。駒形遺跡は台地の東側に位置し、西側は富士見遺跡、南側は大松遺跡と呼称されるが、各遺跡が接する部分については一連の集落として捉えられる。

駒形遺跡全体で検出された縄文時代の竪穴住居は118軒で、早期鵜ガ島台式期を中心とする広義の条痕文土器群と前期初頭から末葉までを主体とした集落である。遺構の分布状況から全体をＡ地区～Ｊ地区の10地区に括って報告している。今回調査した部分は遺跡北東部のＧ地区にあたる。Ｇ地区ではこれまで草

創期～早期と考えられる陥穴５基、前期の土坑１基が報告されている。南に隣接するＡ地区では花積下層期の住居群が展開しているが、Ｇ地区にはみられない。今回検出されたSI－122は黒浜式期で、斜縄文と沈線文を主体とする。既報告の黒浜式期の竪穴住居は32軒で、多寡はあるが、ほぼすべての地区から検出されている。

富士見遺跡（第93図）

富士見遺跡全体で検出された縄文時代の竪穴住居は133軒で、各地区の内訳はＡ地区20軒、Ｂ地区20軒、Ｃ地区40軒、Ｄ地区43軒、Ｅ地区10軒である。

今回遺構を検出した調査区は富士見遺跡の北西にあたるＤ地区にあり、これまで早期の竪穴住居３軒、前期22軒、後期1軒、時期不明８軒の竪穴住居が報告されている。今回調査された９軒はいずれも前期で、黒浜式土器を出土している。器形は深鉢を主体とするが、SI－121・SI－136からは浅鉢も出土している。いずれの住居も斜縄文や附加条による菱形施文、沈線による葉脈文などが施された遺物が主体で、ほぼ同時期と思われる。SI－136は口縁部に刺突文を巡らせた波状口縁の深鉢など、後出的な要素を含む。SI－121、SI－134、SI－136、SI－140、SI－141からは遺構内貝層が検出されている。

Ｄ地区の東側は駒形遺跡Ｂ地区・Ｈ地区と接しており、黒浜式期の竪穴住居は17軒検出されている。これらの分布により該期の集落が一定のまとまりをもって形成されていることがほぼ確実となった。

原畑遺跡

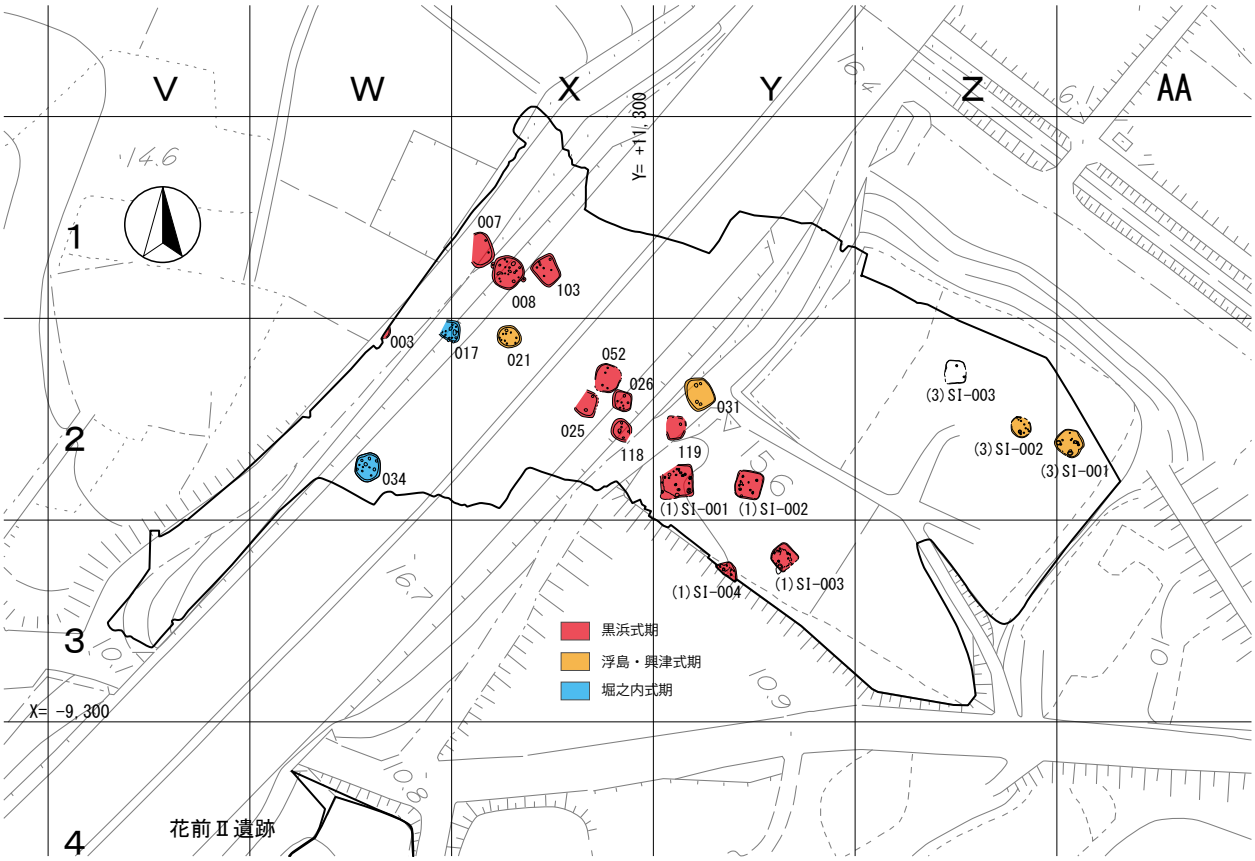
原畑遺跡全体で検出された縄文時代の竪穴住居は20軒である。いずれも黒浜式期に帰属する。駒形遺跡や富士見遺跡に比べ遺構の分布密度は散漫である。今回報告するのは１軒のみであるが、これまで報告された内容と同様の結果が得られた。

第２節　奈良・平安時代以降

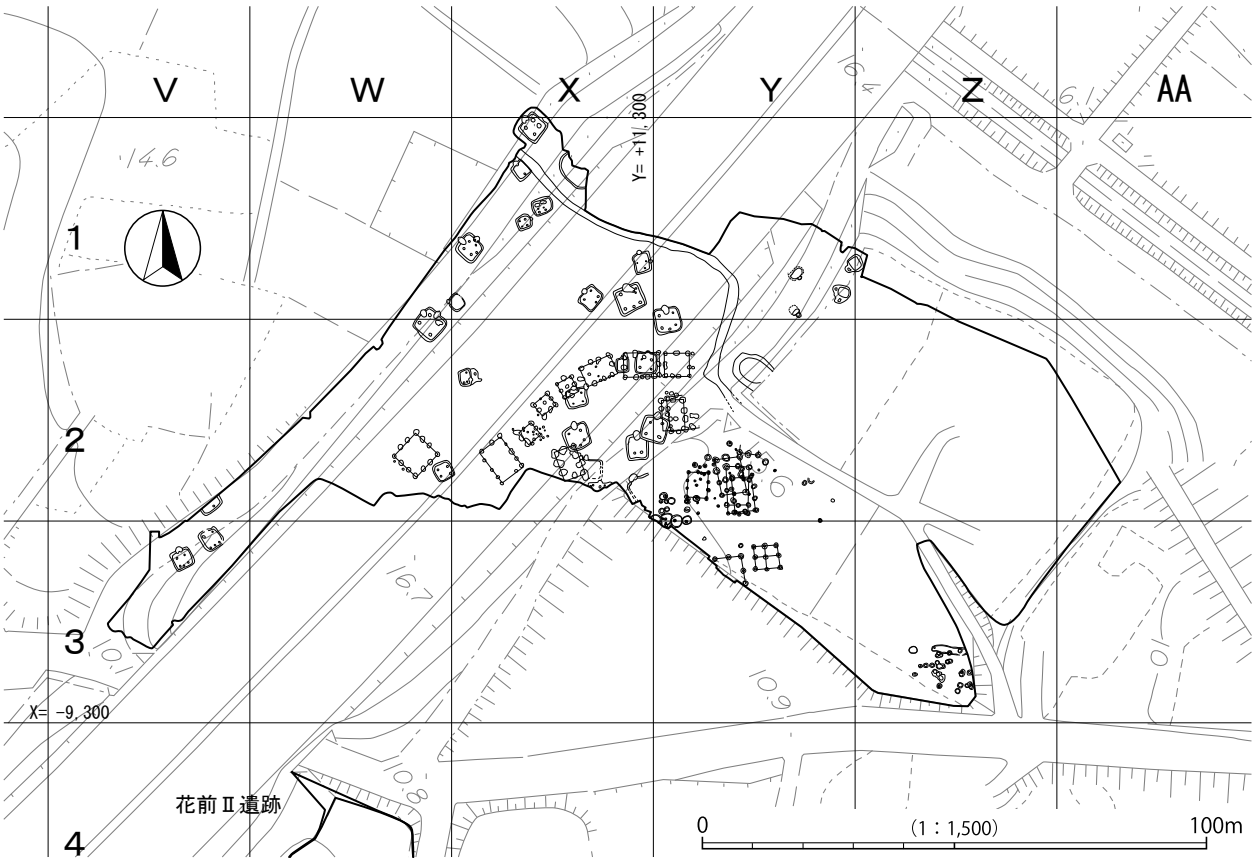
１　奈良・平安時代の遺構（第92図）

花前Ⅰ遺跡では常磐自動車道関連の調査で詳細な報告がなされている。今回の調査により掘立柱建物群と土坑群が検出され、掘立柱建物は花前Ⅰ遺跡全体で17棟となる。遺構は遺跡中央部に集中し、周辺に空白地帯が存在する。また、既調査区の北側から鍵の手に伸びる溝を境に土坑が検出されるなど、企画性をもって建物が配置されていた様子が窺える。

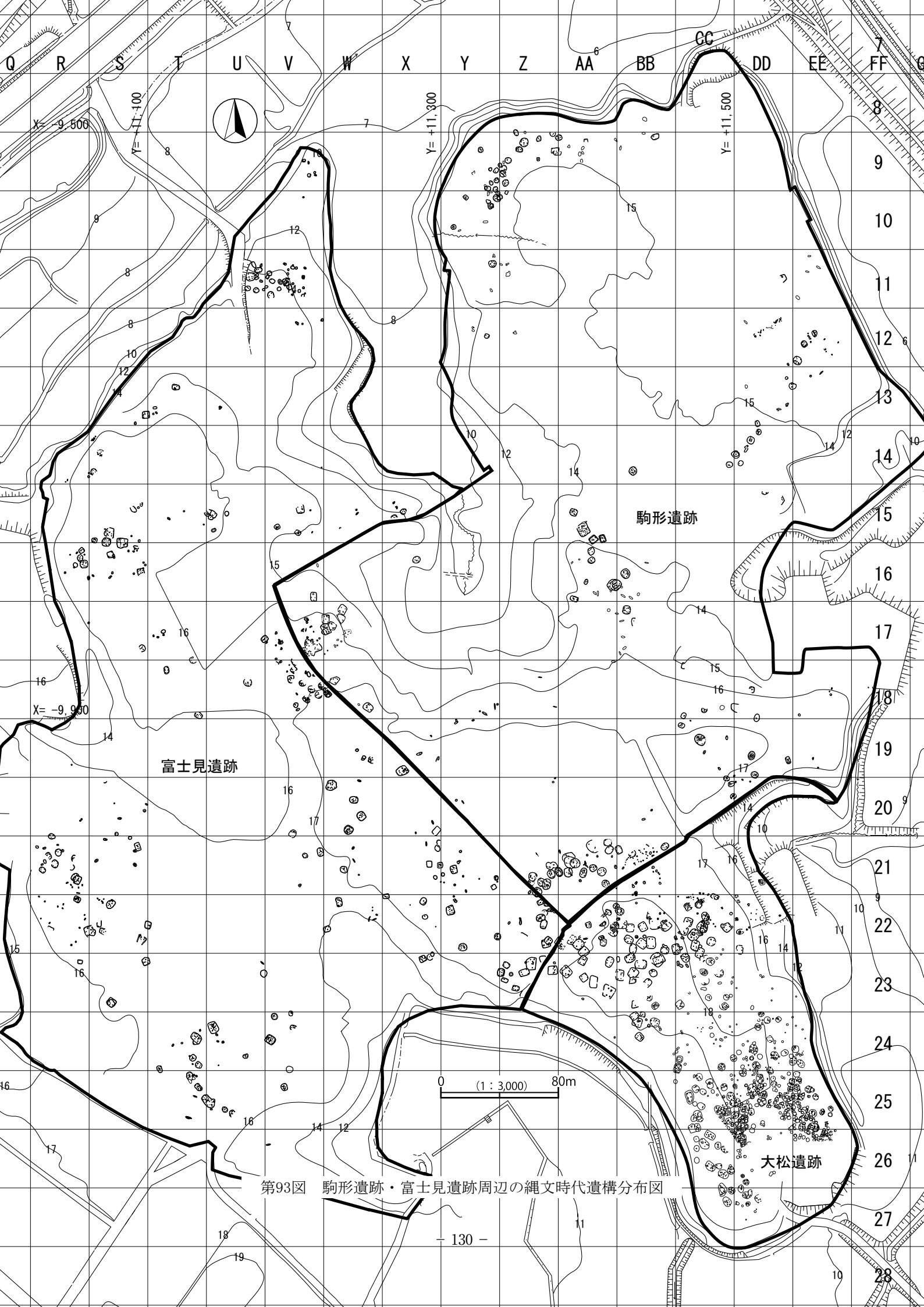
『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・中山新田Ⅲ－』では出土した遺物を基にⅠ期～Ⅵ期に細分している。Ⅰ期はカエリを有する須恵器蓋を特徴とする８世紀前半を中心とする時期、Ⅱ期は須恵器杯が急激に増加する８世紀中葉、Ⅲ期はロクロ使用の土師器杯が出現する８世紀後半から９世紀前半、Ⅳ期は回転糸切り無調整の須恵器杯が出現する９世紀中頃、Ⅴ期は本遺跡が最も盛行する段階と考えられ、土師器杯はバラエティに富み、緑釉陶器、灰釉陶器が共伴する９世紀後半から10世紀前半、Ⅵ期の10世紀後半以降11世紀にかけての年代とされる。既報告の掘立柱建物群はⅤ期の竪穴住居と切り合っているが、新旧関係が不明なため建物の存続時期は不明である。今回報告する掘立柱建物も出土した遺物が少なく、時期決定の決め手に欠けるが、最も古い(1)SB－003は須恵器高盤の脚や常陸産と思われる須恵器甑などからⅢ期の可能性がある。Ⅴ期には須恵器蓋が消滅することから、(1)SB－004・(1)SB－005はそれより以前に建てられたものであろう。出土状況から遺構外出土遺物としたものの中には、掘立柱建物に伴う遺物を含む可能性があるが、全体的に須恵器蓋や高台付杯が多く、高盤も見られる点が注意される。



第91図　花前Ⅰ遺跡縄文時代遺構分布図



第92図　花前Ⅰ遺跡奈良・平安時代遺構分布図



第93図　駒形遺跡・富士見遺跡周辺の縄文時代遺構分布図

墨書土器、朱書土器ともに文字の書かれたものはなく、大半は記号の「◎」であった。墨書は土師器に、朱書は須恵器に記すという原則は既報告と同様である。

2　中・近世の遺構

花前Ⅰ遺跡の北側の調査区から、近世の鍛冶工房と思われる遺構が検出された。遺構周辺からは花前Ⅱ－１遺跡の焙烙や灰釉の徳利などと類似した遺物が出土しており、おそらく代官屋敷と同時期に営まれていたものと思われる。また、花前Ⅱ－２遺跡で検出された近世の炭窯９基も、本遺構との関連性が窺われる。台地の北側は縄文時代以降開墾されておらず、陣屋や舟戸の渡船場にも近いことから、この地が選ばれたのかもしれない。

原畑遺跡では、遺跡中央を横断する現況の道路沿いに野馬土手および野馬堀が検出された。また、小山台遺跡と境を接する遺跡南東部からは溝状遺構、道路状遺構、野馬堀が検出されている。高田台牧関連の遺構と思われる。

寺下前遺跡では、西側で隣接する小山台遺跡と関連する中世の台地整形や地下式坑が検出された。現況道路と重なっているため撹乱が著しく、また遺構に伴う遺物が少ないことから詳細な時期は不明であるが、古くから地境として意識されていたことがわかる。

参考文献

鈴木定明・田中　豪ほか　1982『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－館林・水砂・花前Ⅱ－1－』（財）千葉県文化財センター

田中　豪・郷堀英司ほか　1984『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・中山新田Ⅲ－』（財）千葉県文化財センター

郷堀英司・田井知二ほか　1985『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－花前Ⅱ－1・花前Ⅱ－2・矢船－』（財）千葉県文化財センター

上守秀明　2009『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書２－柏市駒形遺跡－縄文時代以降編１』（財）千葉県教育振興財団

上守秀明ほか　2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書３－柏市原畑遺跡－縄文時代以降編１』（財）千葉県教育振興財団

西川博孝・西山太郎ほか　2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書４－柏市大松遺跡－縄文時代以降編１』（財）千葉県教育振興財団

上守秀明ほか　2013『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書５－柏市駒形遺跡－縄文時代以降編２』（公財）千葉県教育振興財団

大野康男ほか　2014『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書６－柏市富士見遺跡－縄文時代以降編１』（公財）千葉県教育振興財団

森本和男・山口典子ほか　2015『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書７－柏市富士見遺跡－縄文時代以降編２』（公財）千葉県教育振興財団

山口典子ほか　2016『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書９－柏市大松遺跡－縄文時代以降編２』（公財）千葉県教育振興財団

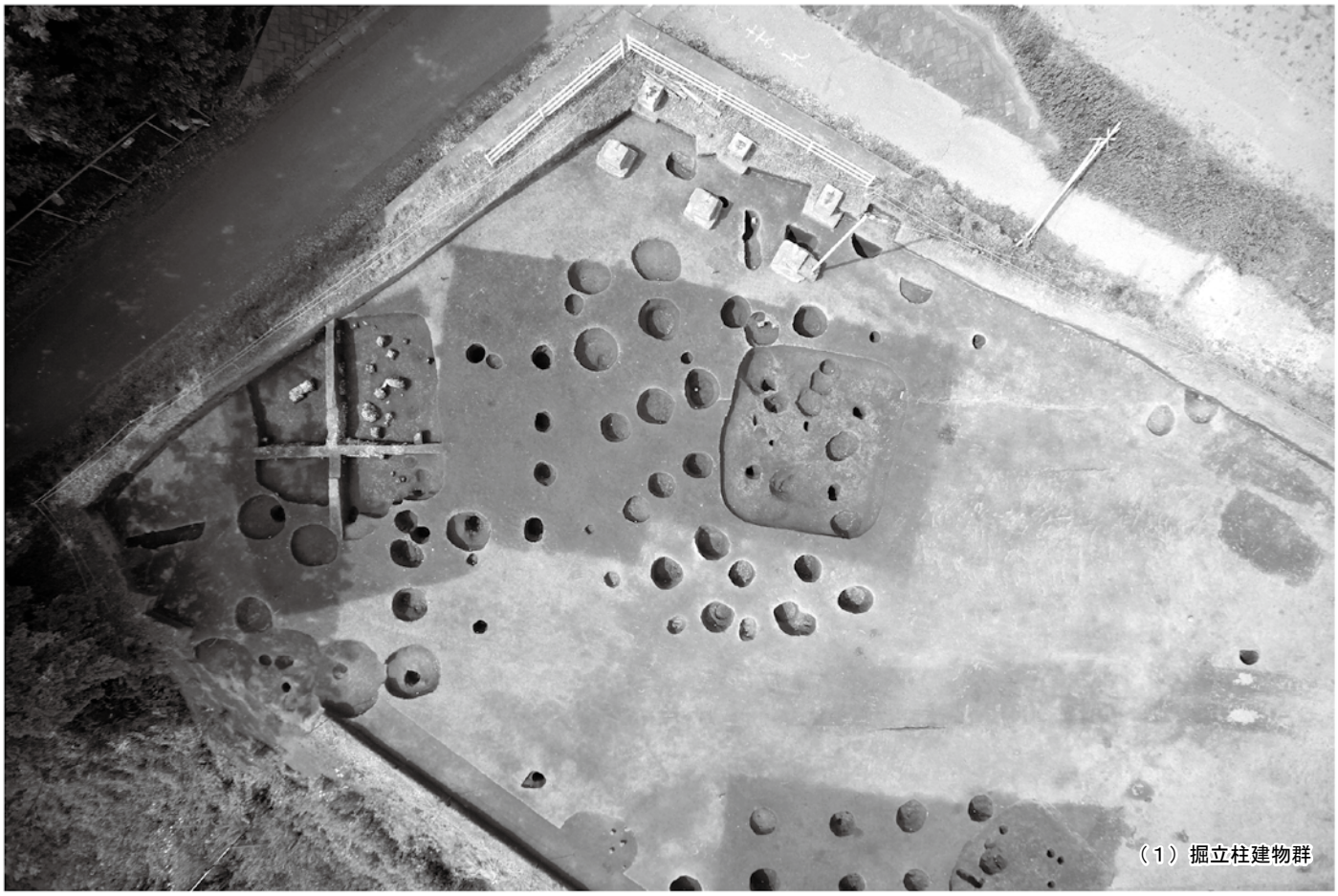
白鳥　章・山口典子ほか　2017『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書11－柏市花前Ⅱ遺跡・花前Ⅲ遺跡・矢船Ⅰ遺跡・矢船Ⅱ遺跡・館林Ⅱ遺跡・寺下前遺跡・八反目台遺跡－縄文時代以降編』（公財）千葉県教育振興財団

小林清隆・城田義友　2018『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書12－柏市小山台遺跡Ａ区－縄文時代以降編』（公財）千葉県教育振興財団

写　真　図　版

遺跡周辺航空写真

（1）調査区全景

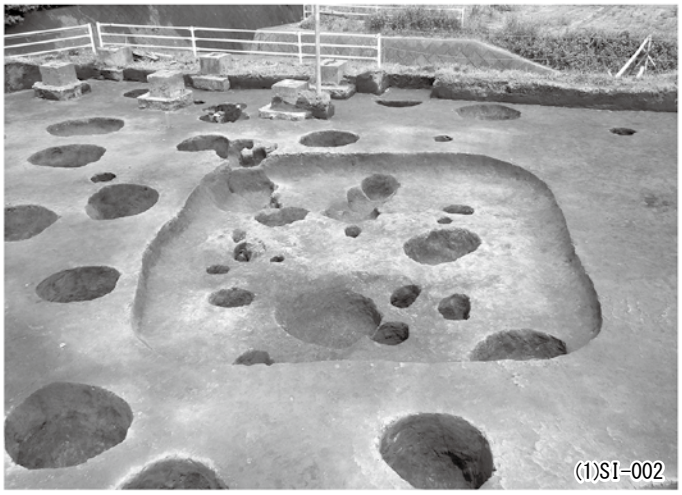

（1）掘立柱建物群

全景、掘立柱建物群

(1)SI-001遺物出土状況

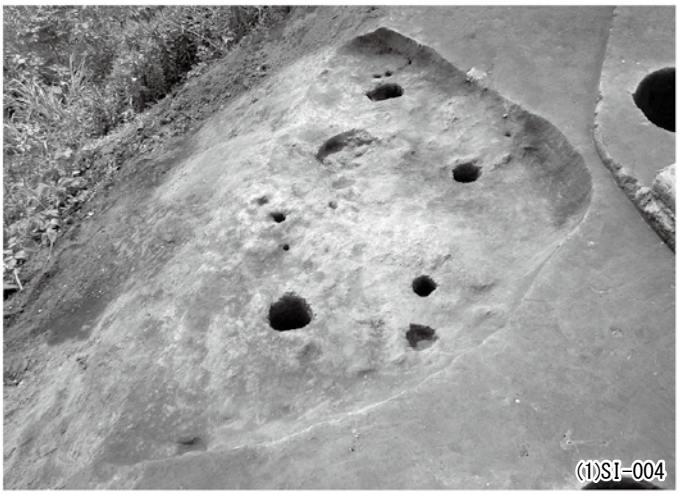
(1)SI-001

(1)SI-002遺物出土状況


(1)SI-002

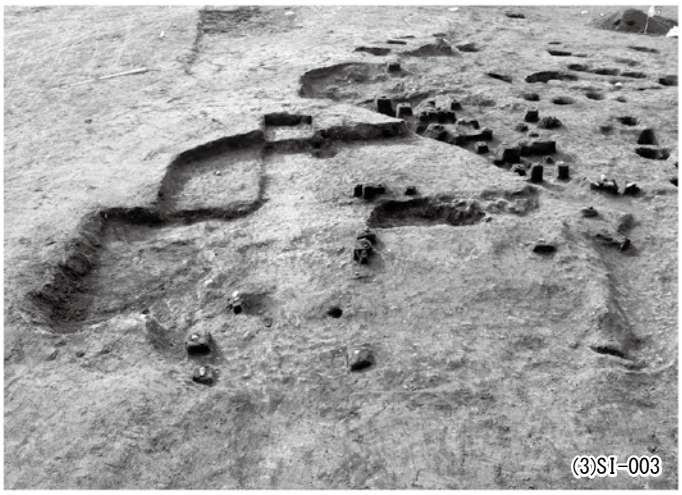
(1)SI-003

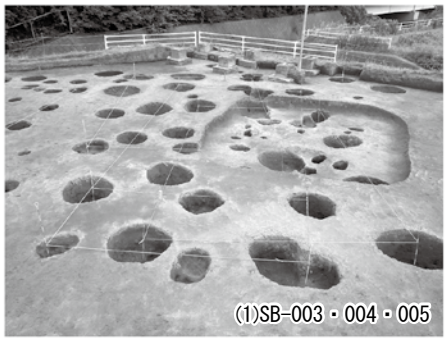
(1)SI-004遺物出土状況

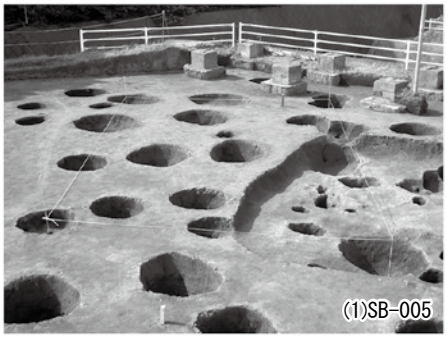

(1)SI-004

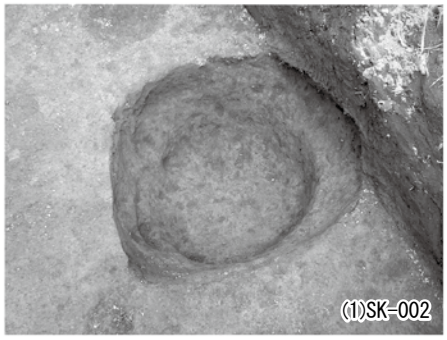
(3)SI-001

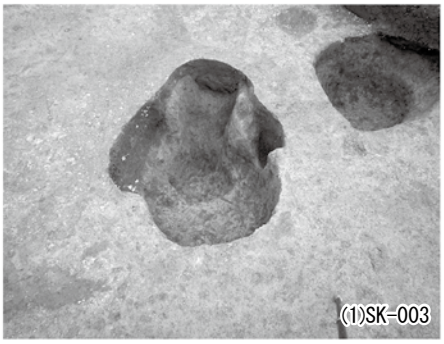
縄文時代竪穴住居（１）

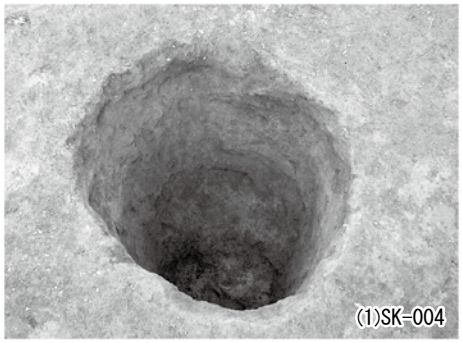


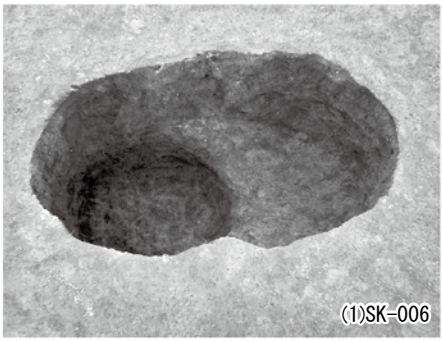


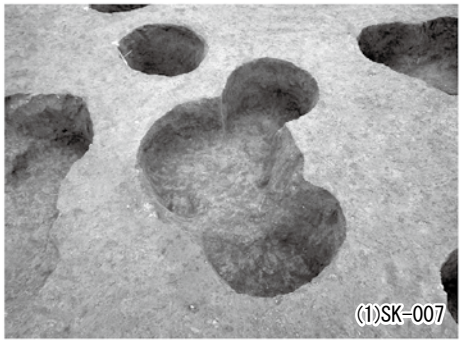


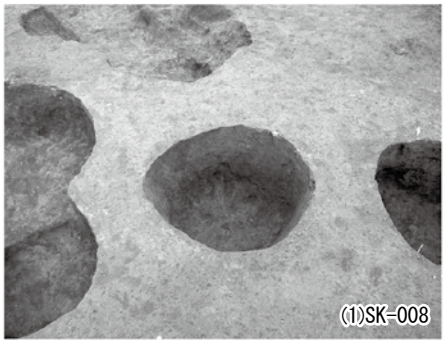




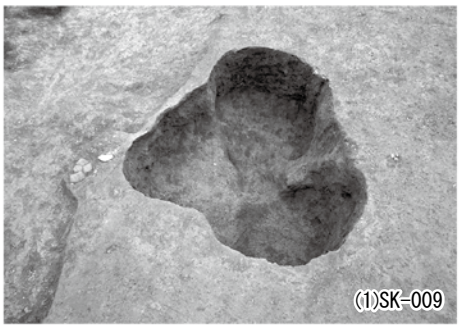


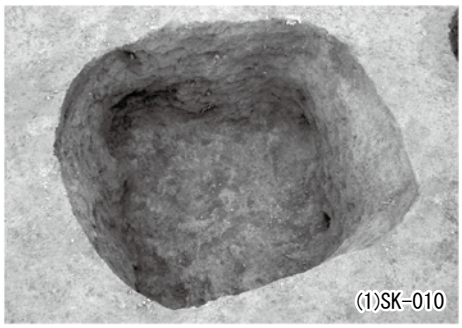


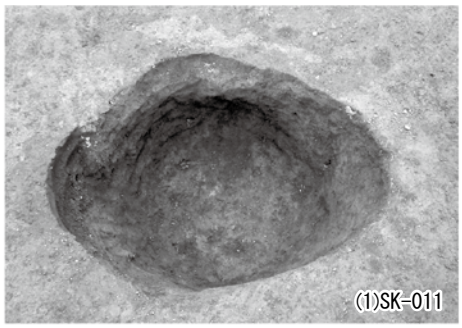


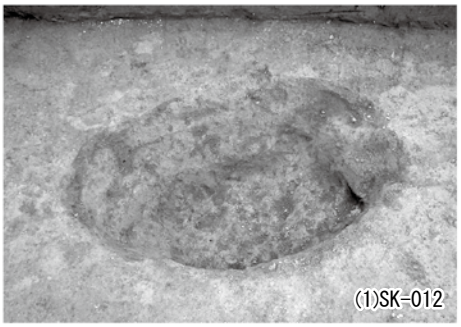


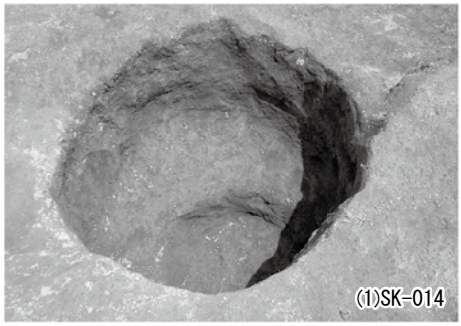
縄文時代竪穴住居（２）、平安時代掘立柱建物、土坑（１）

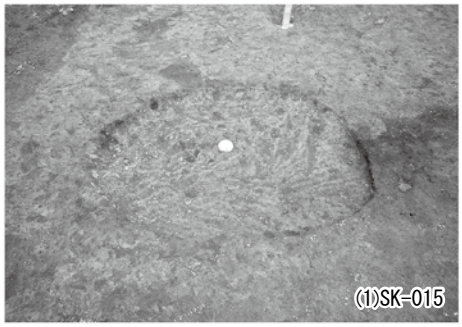

(1)SK-009

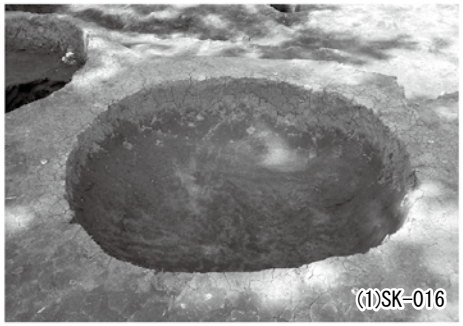

(1)SK-010

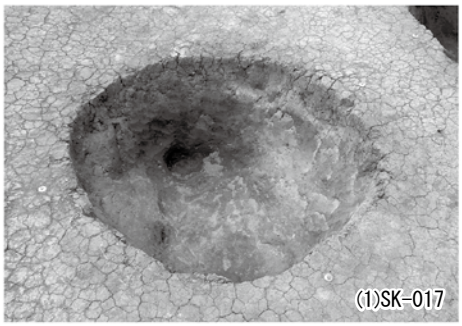

(1)SK-011

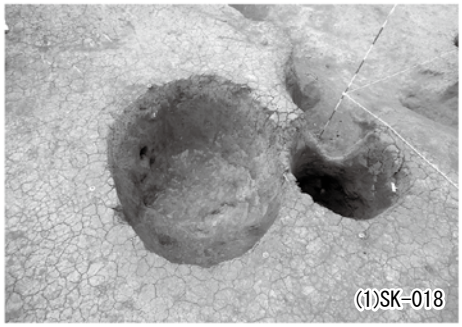

(1)SK-012

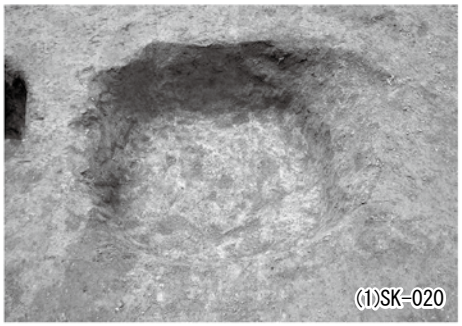

(1)SK-014

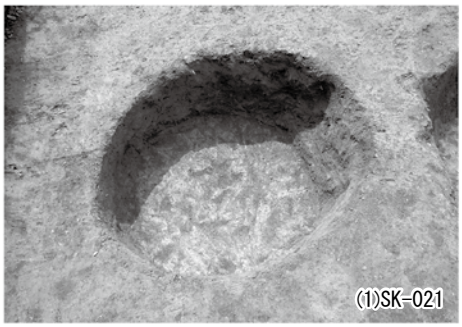

(1)SK-015

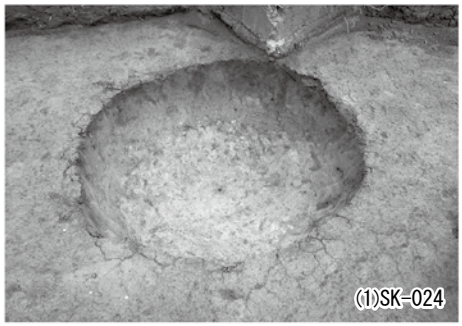

(1)SK-016

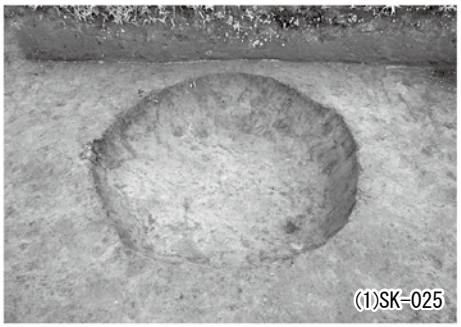

(1)SK-017

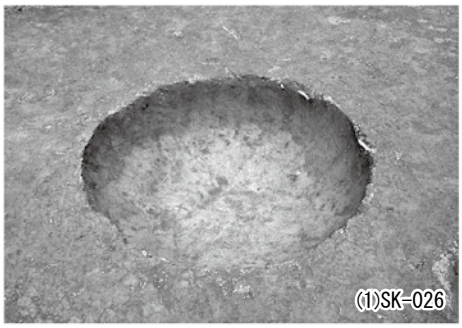

(1)SK-018

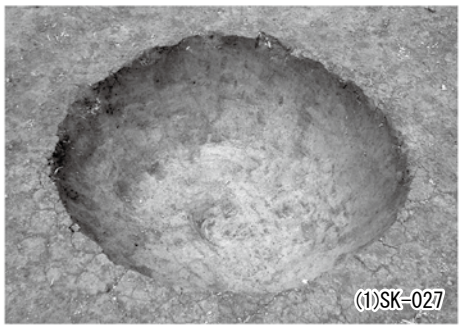

(1)SK-020


(1)SK-021

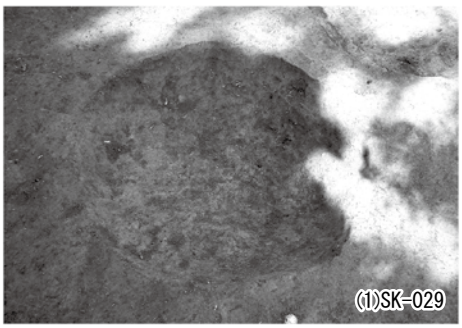

(1)SK-024

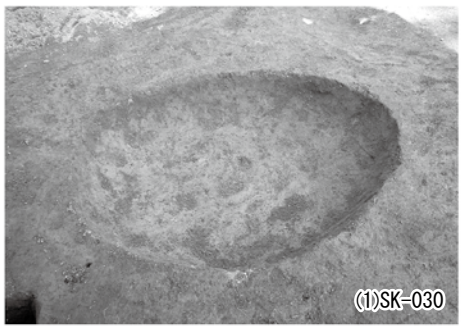

(1)SK-025


(1)SK-026


(1)SK-027

(1)SK-028

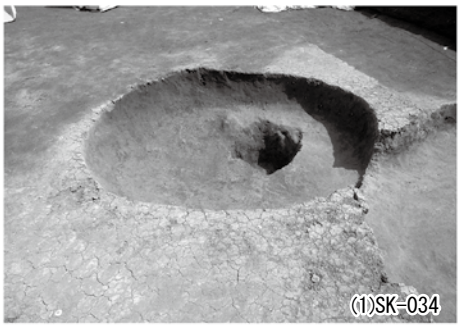

(1)SK-029


(1)SK-030

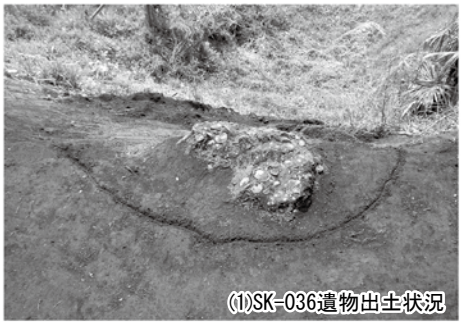
土　坑（２）

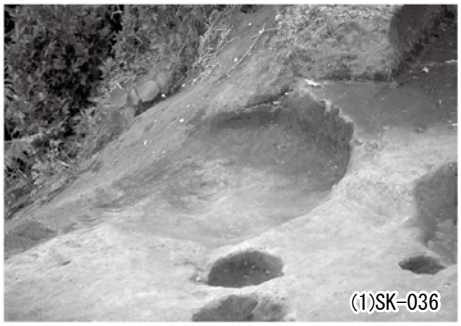
(1)SK-032

(1)SK-033


(1)SK-034

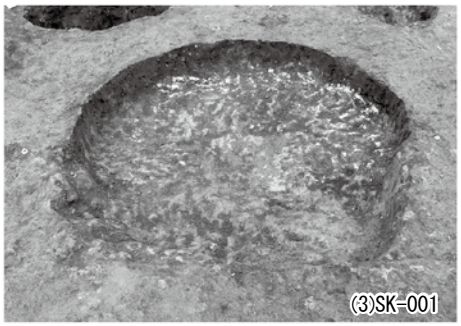
(1)SK-035


(1)SK-036遺物出土状況

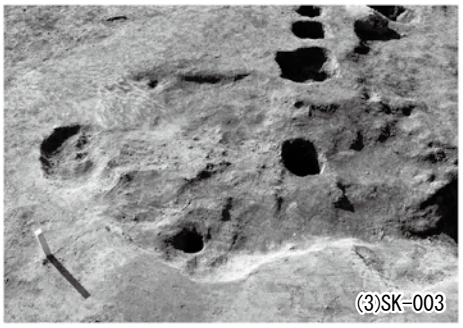

(1)SK-036

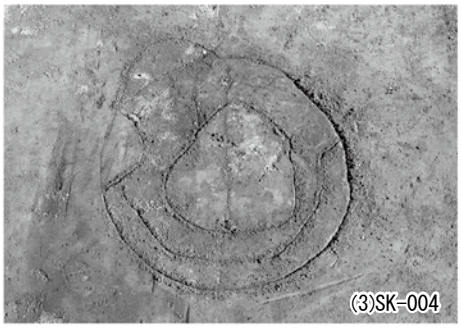
(1)SD-001

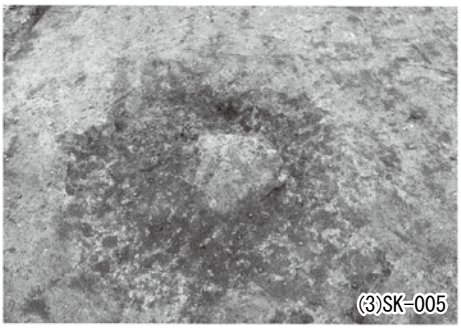
(1)SB-003 P-1

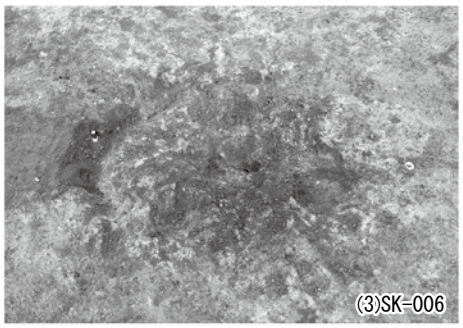

(3)SK-001

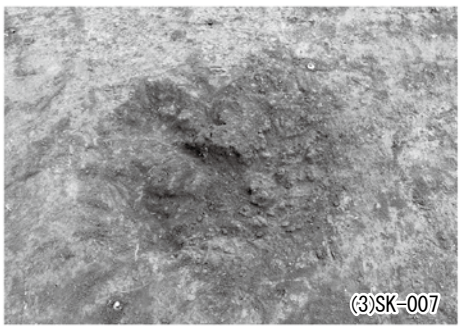
(3)SK-002

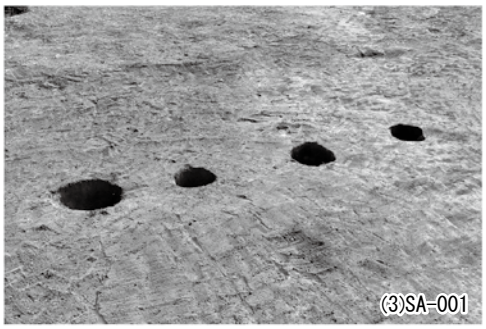

(3)SK-003


(3)SK-004


(3)SK-005


(3)SK-006

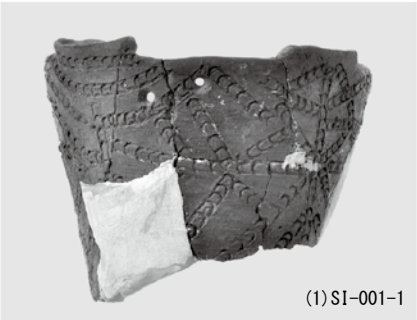

(3)SK-007

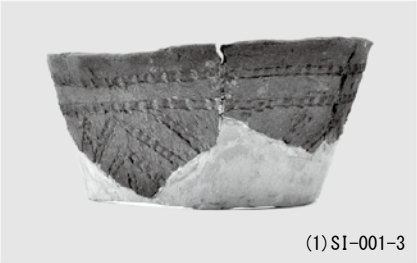

(3)SA-001

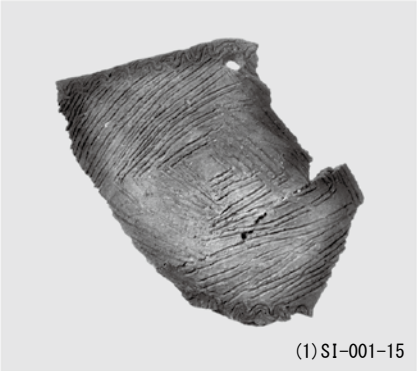
(3)SX-001

(3)SD-001

土坑（３）、近世炉跡、溝類


(1)SI-001-1


(1)SI-001-3

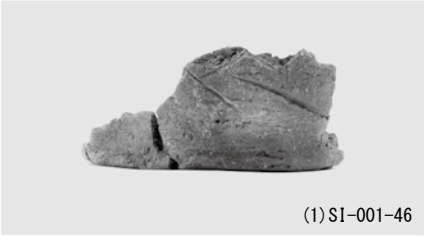

(1)SI-001-15

(1)SI-001-18

(1)SI-001-19

(1)SI-001-44

(1)SI-001-45


(1)SI-001-46

(1)SI-001-47

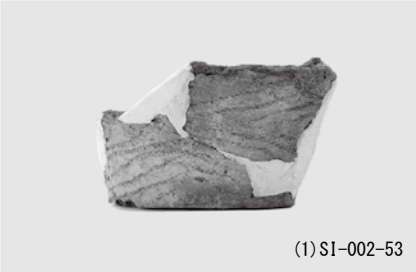
(1)SI-001-96

(1)SI-001-98

(1)SI-001-101

(1)SI-001-106

(1)SI-001-142


(1)SI-002-53

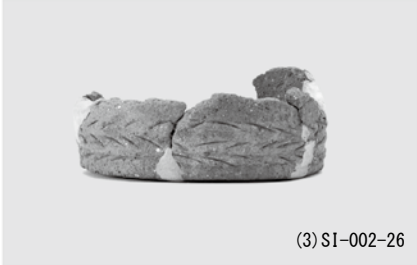
(1)SI-002-45

(1)SI-003-17

(1)SI-004-3

(1)SI-003-13

(1)SI-003-27


(3)SI-002-26

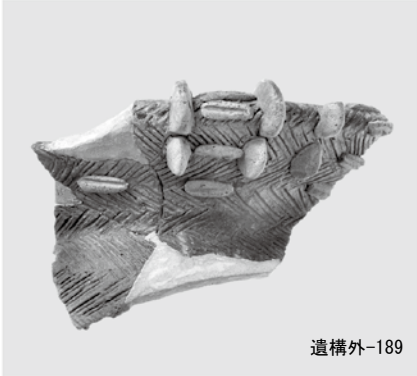
(1)SI-003-14

(1)SI-003-30

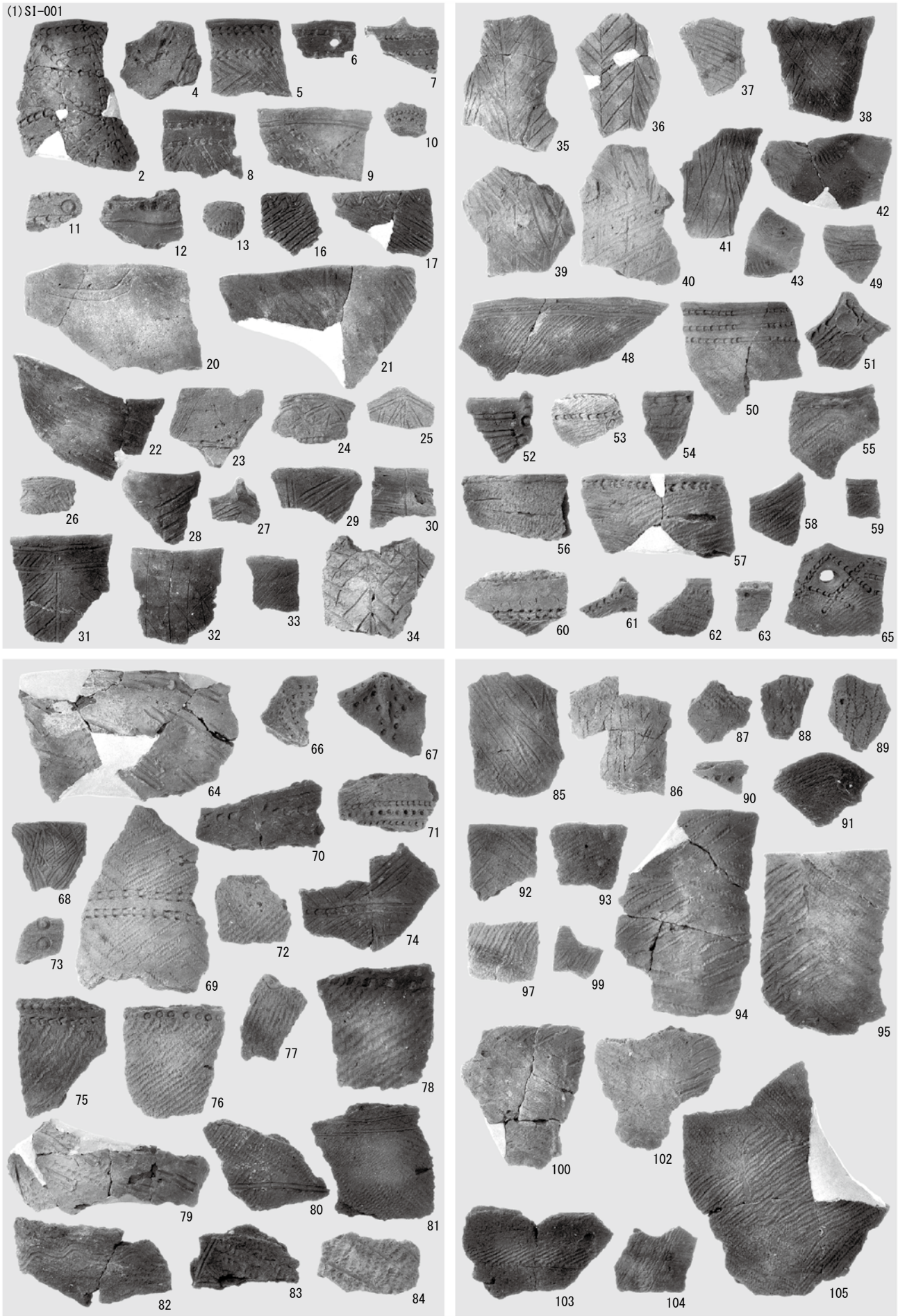
(3)SI-002-28

(1)SI-003-19

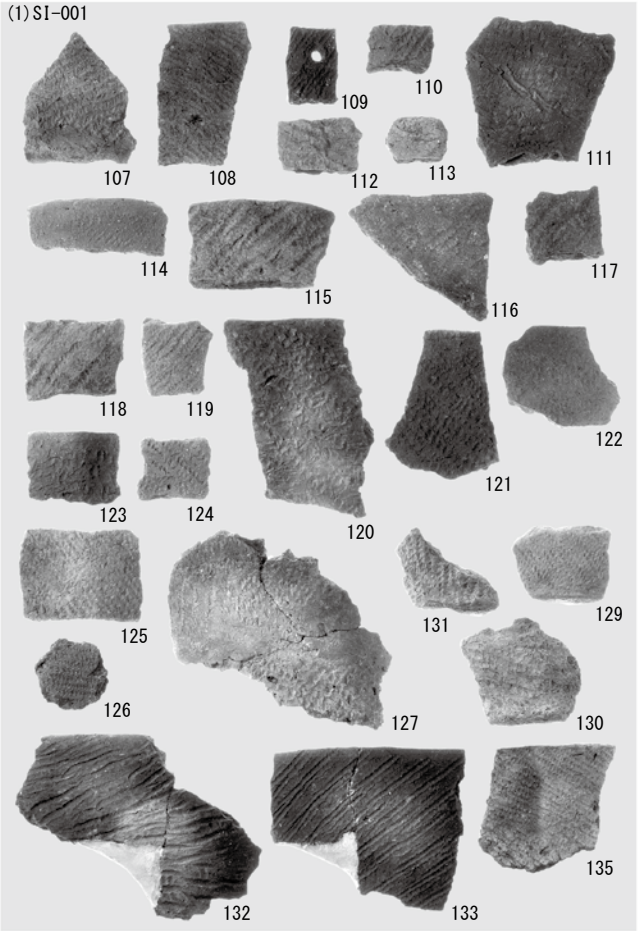
(1)SI-004-1

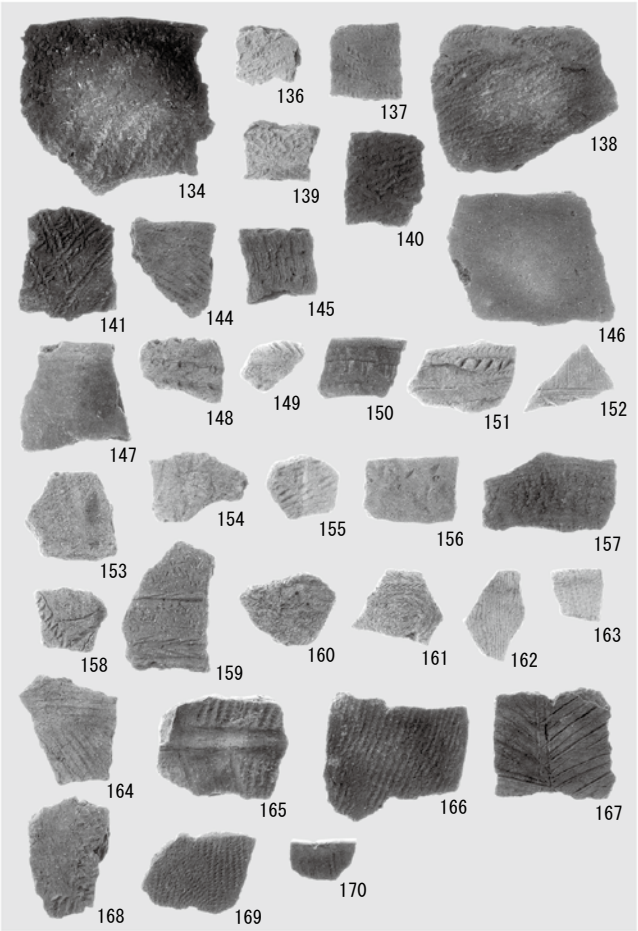

遺構外-189

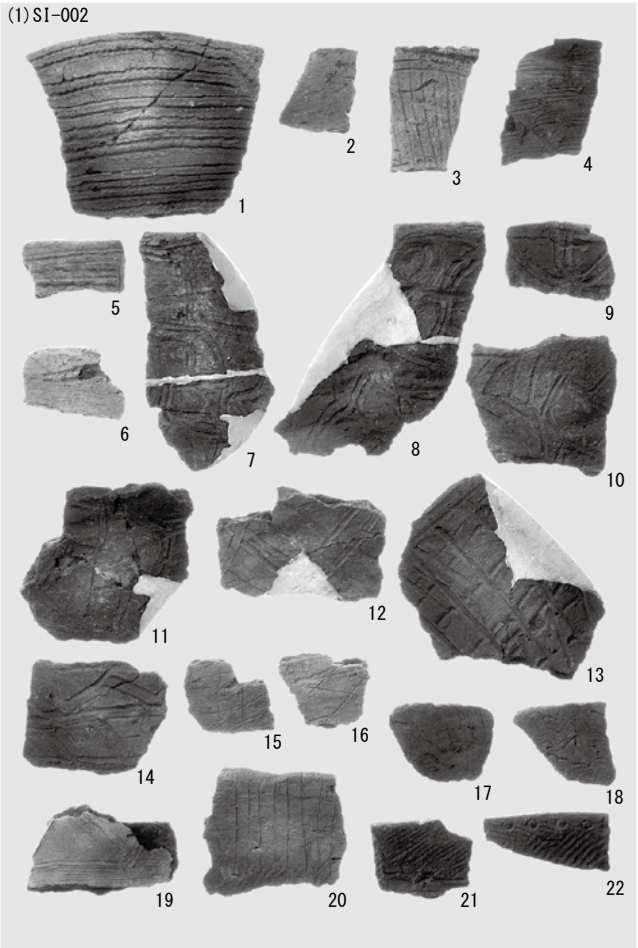
縄文土器（２）

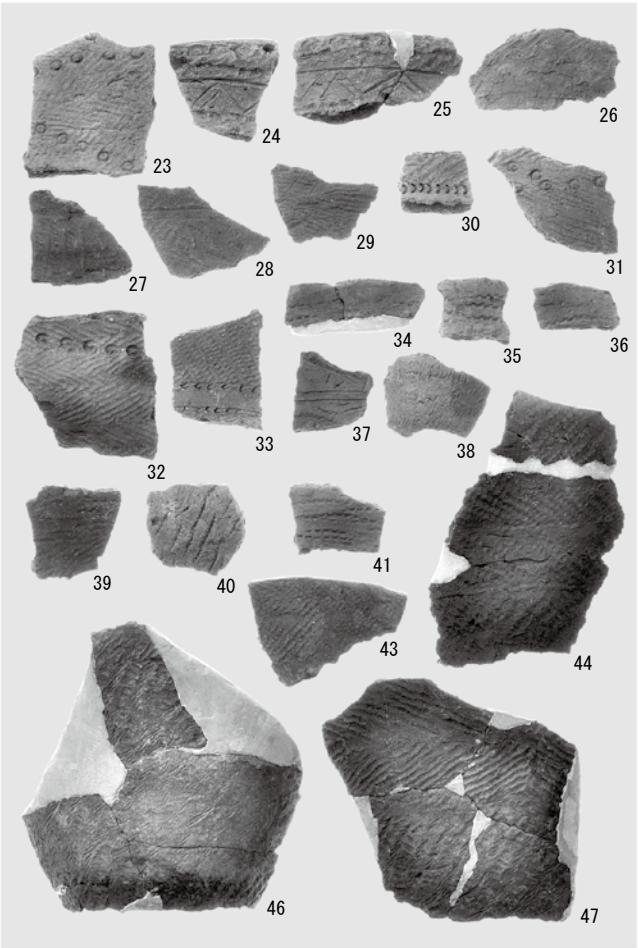


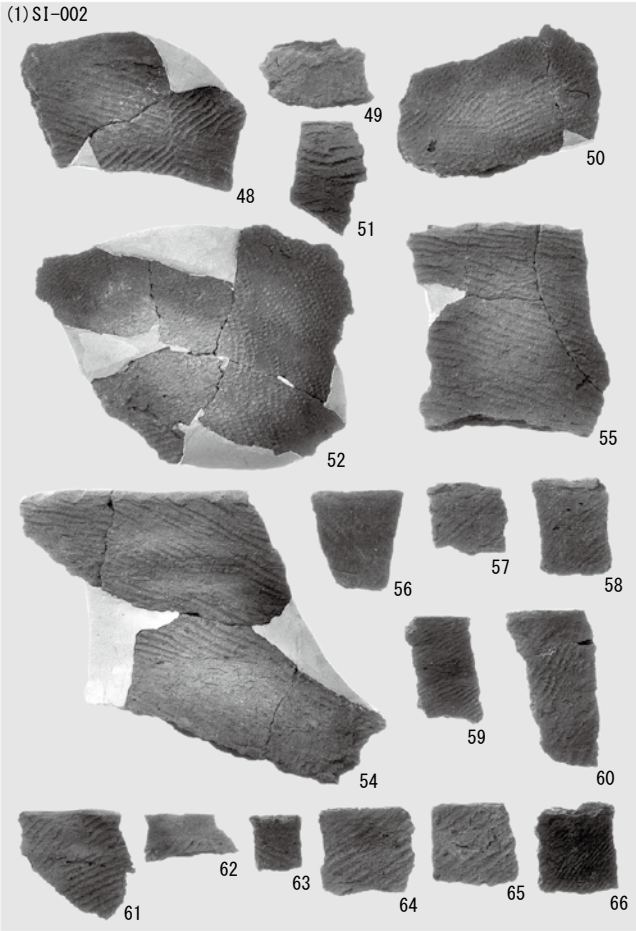
縄文土器（３）

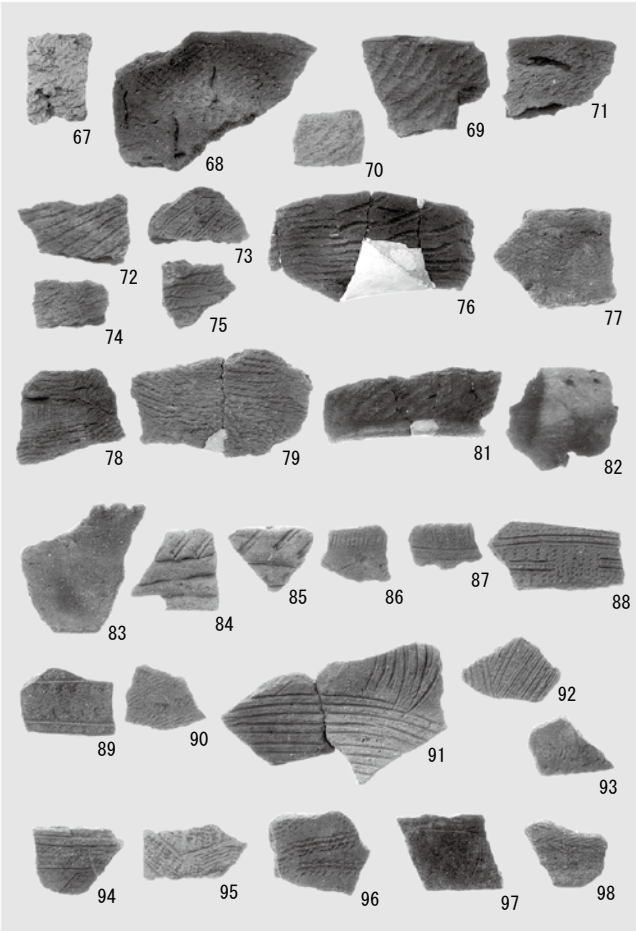

(1)SI-001
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
129
130
131
132
133
135

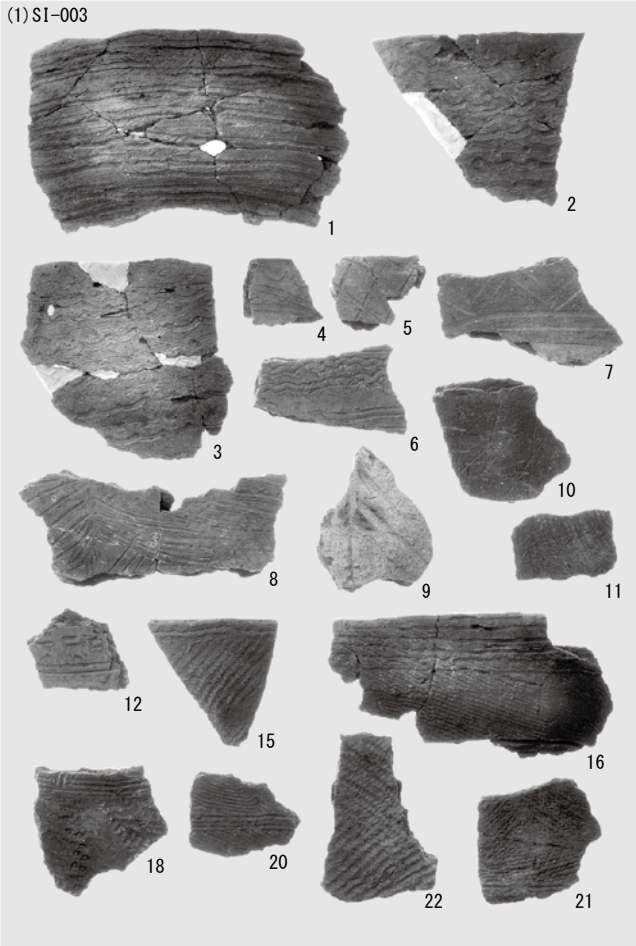

134
136
137
138
139
140
141
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170

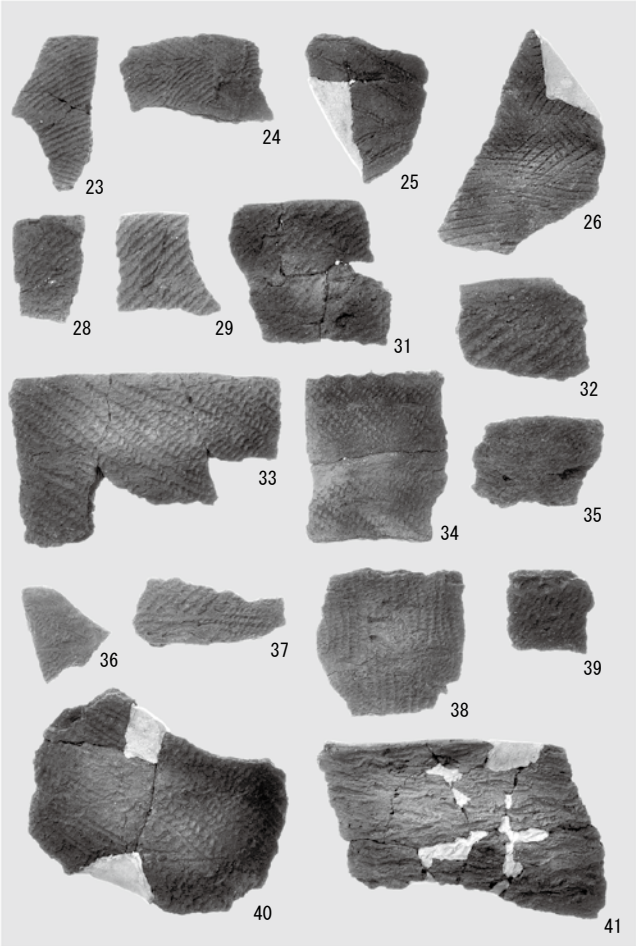

(1)SI-002
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22


23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
43
44
46
47

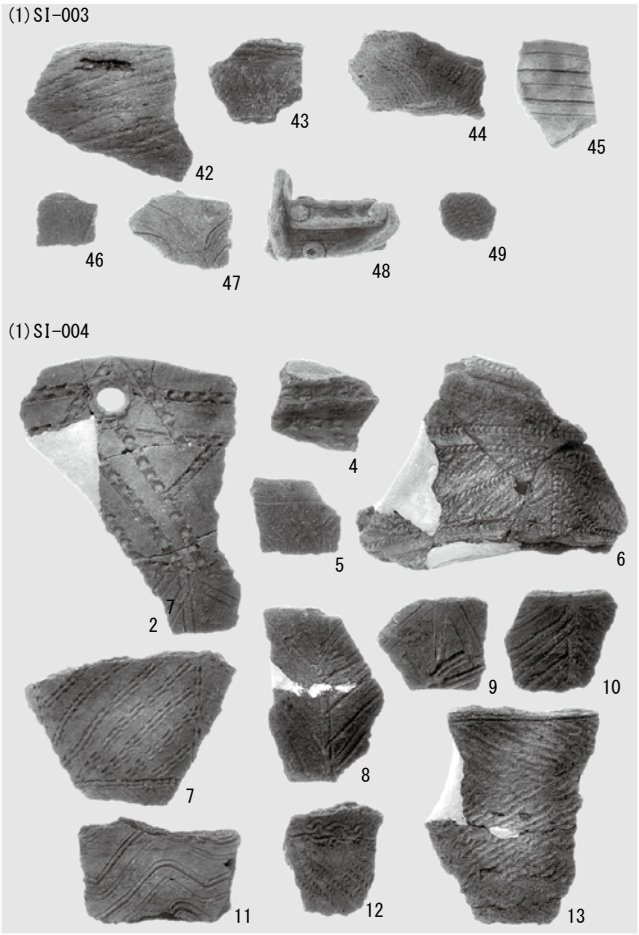

(1)SI-002
48
49
50
51
52
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66

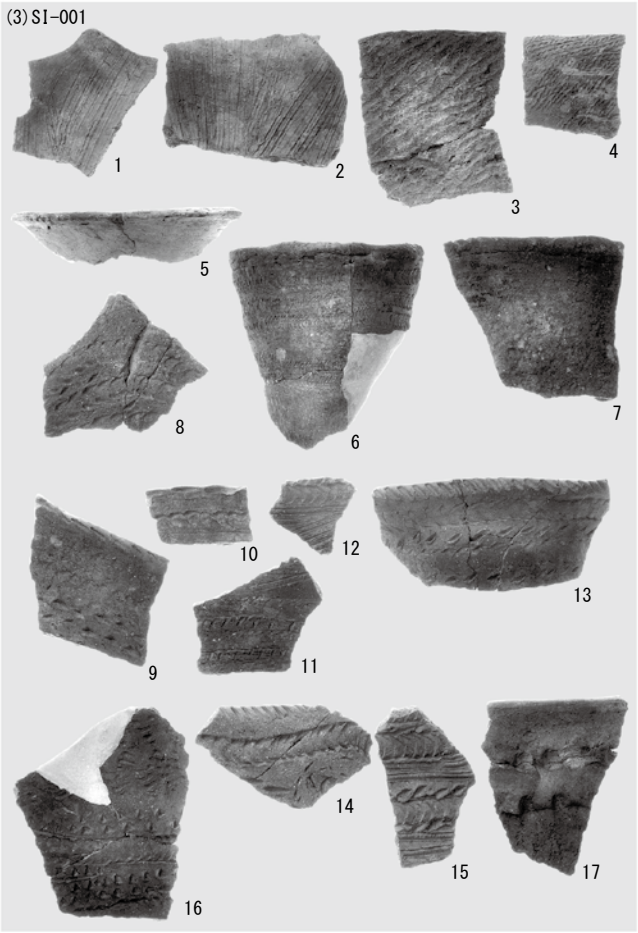

67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98

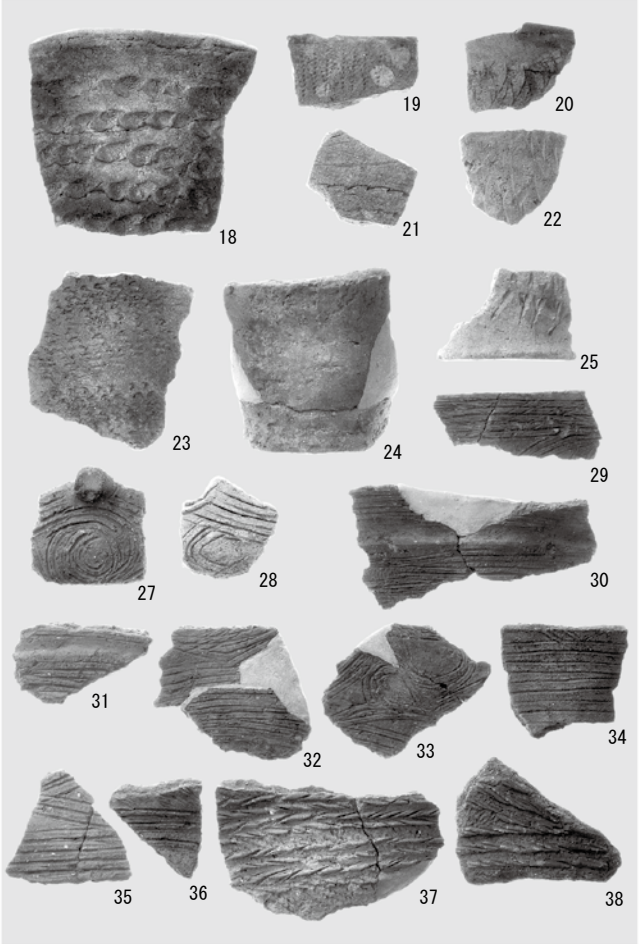

(1)SI-003
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
15
16
18
20
21
22

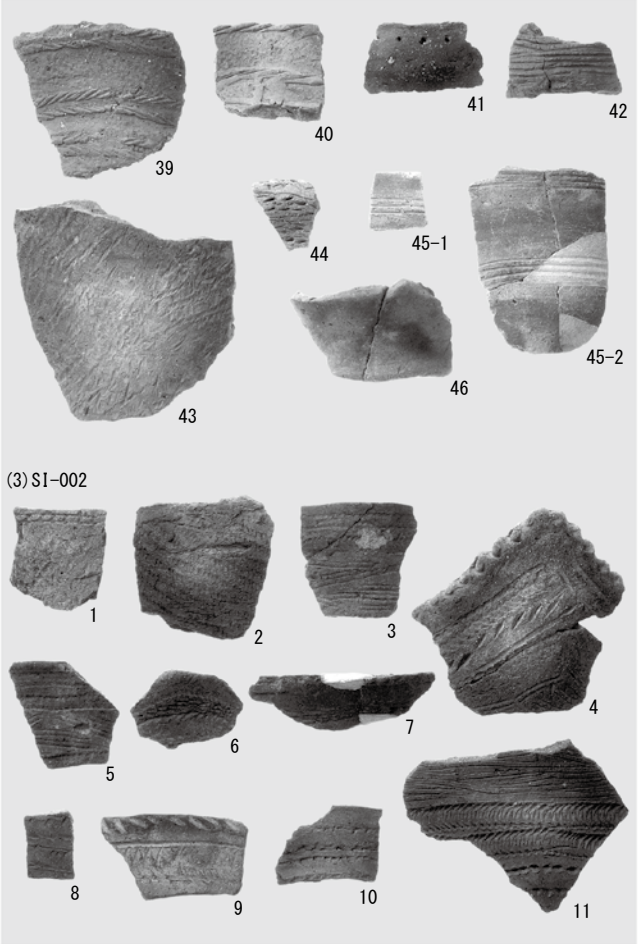

23
24
25
26
28
29
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41

縄文土器（5）

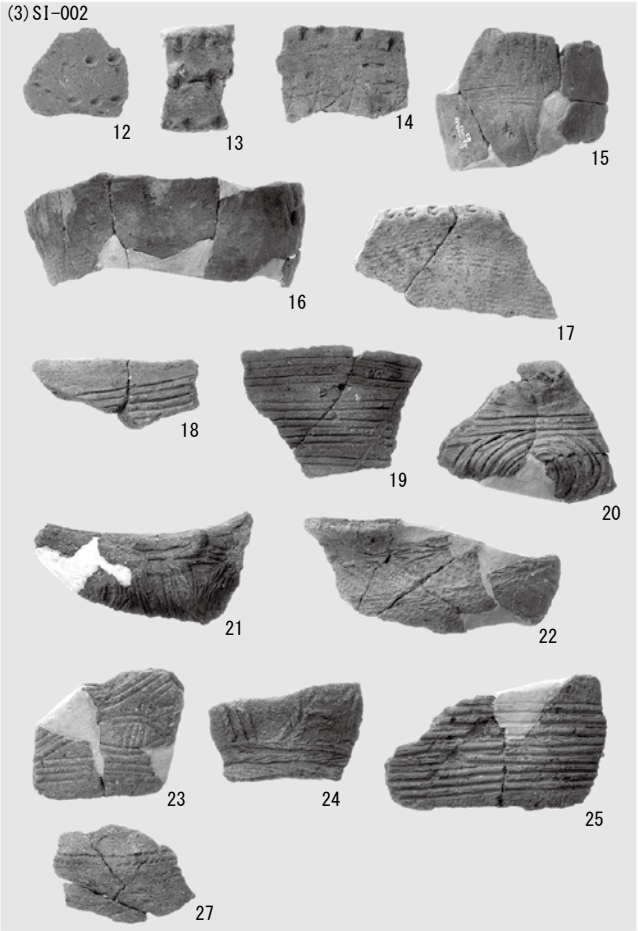

(1)SI-003
42
43
44
45
46
47
48
49
(1)SI-004
2
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13

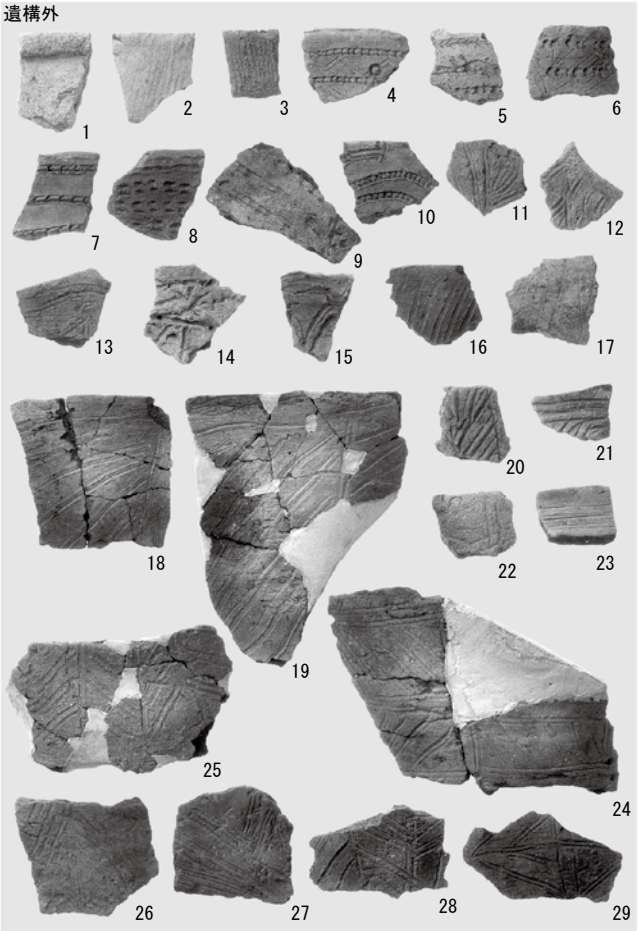

(3)SI-001
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17

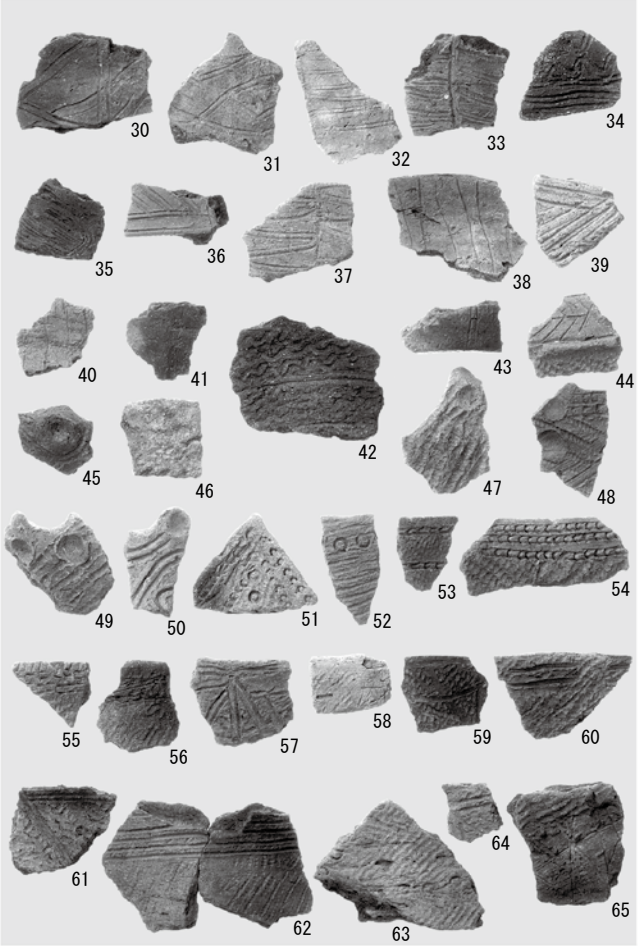

18
19
20
21
22
23
24
25
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38

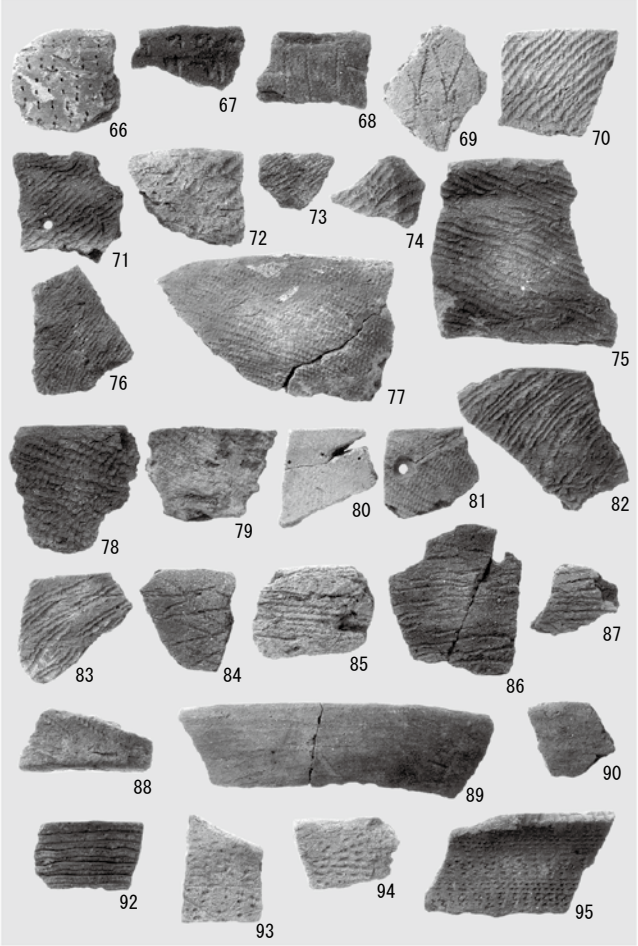

39
40
41
42
43
44
45-1
45-2
46
(3)SI-002
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11

縄文土器（6）

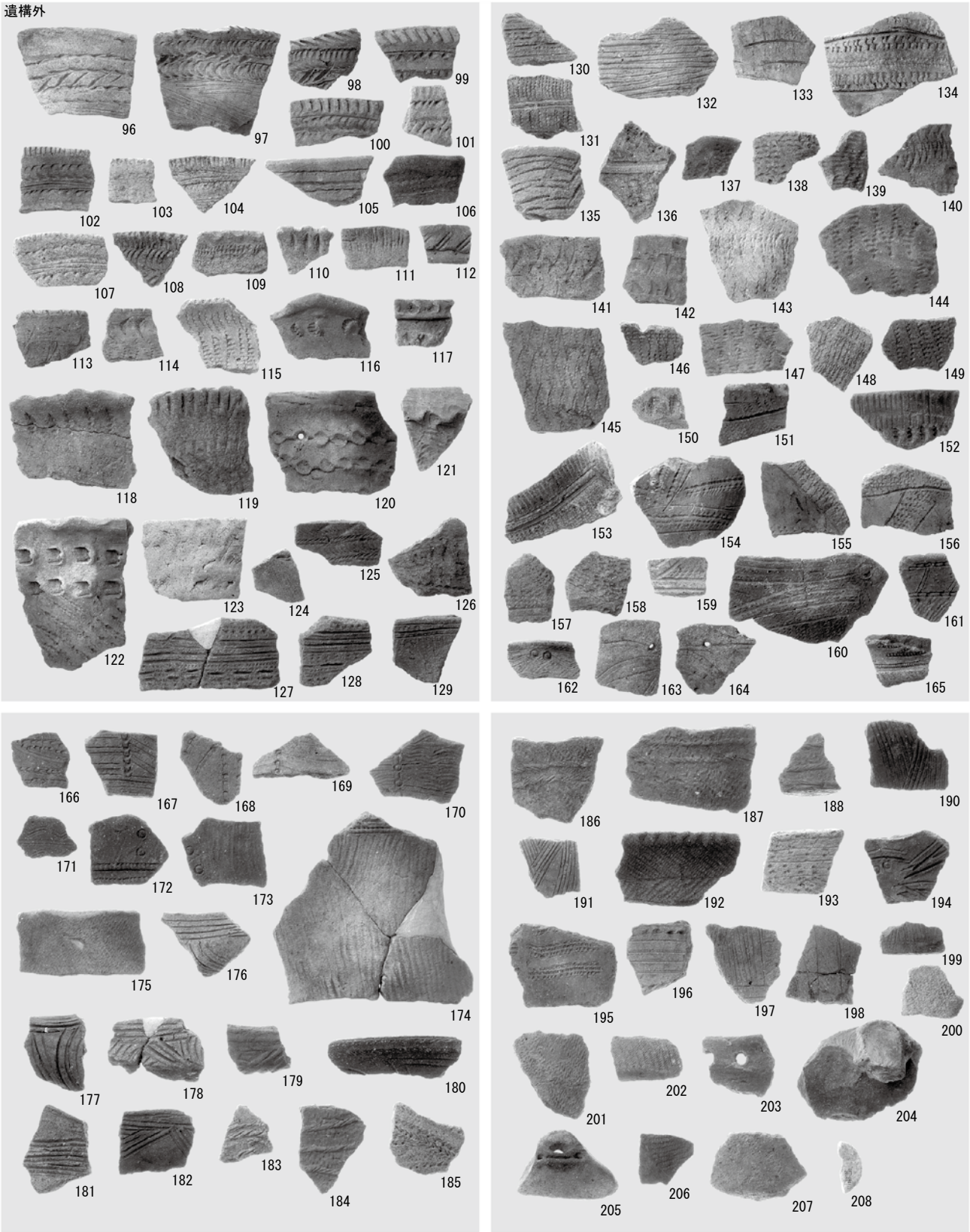

(3)SI-002
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
27


遺構外
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29

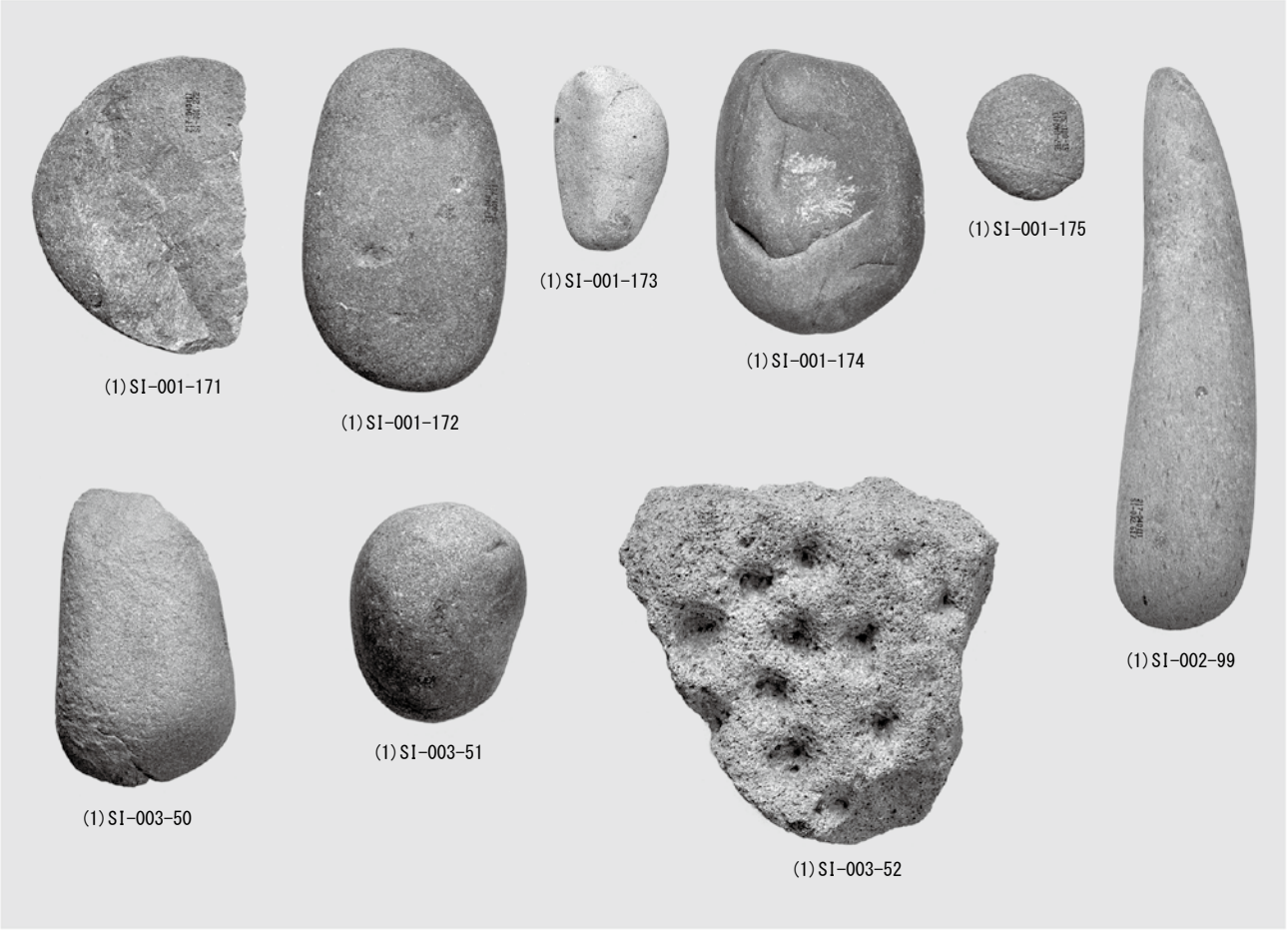

30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65


66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
92
93
94
95

縄文土器（7）

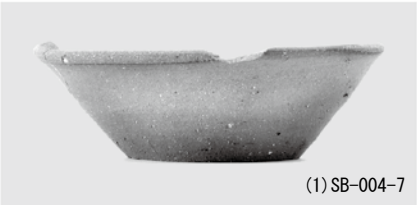

遺構外
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208

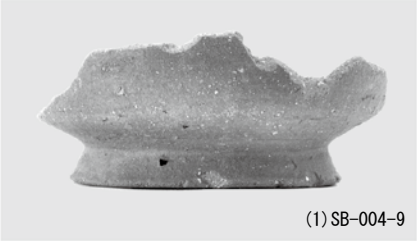
縄文土器（８）、土製品

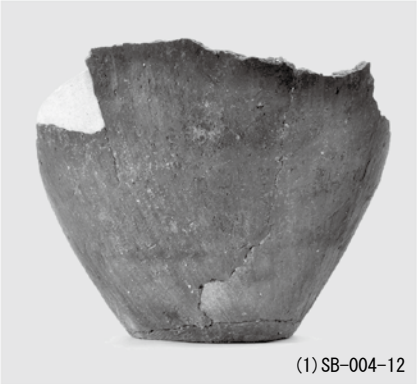

(1)SI-001-171
(1)SI-001-172
(1)SI-001-173
(1)SI-001-174
(1)SI-001-175
(1)SI-002-99
(1)SI-003-50
(1)SI-003-51
(1)SI-003-52

(1)SI-004-14
(3)SI-002-29
(3)SI-002-30
(3)SI-003-1
遺構外-209
遺構外-210
遺構外-211
遺構外-212
遺構外-213
遺構外-214
遺構外-215
遺構外-217
遺構外-218
遺構外-216

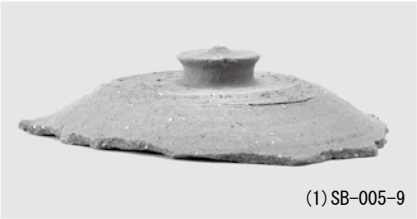
縄文時代石器

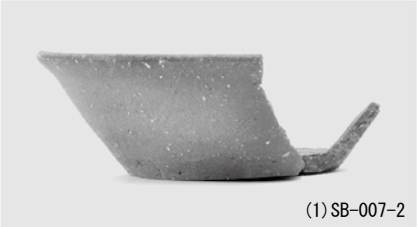

(1)SB-004-7

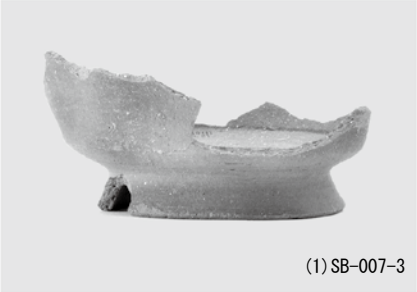

(1)SB-004-9

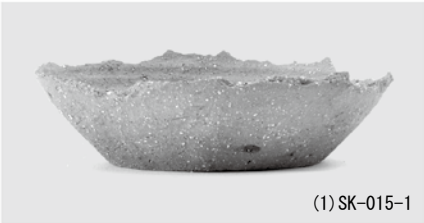

(1)SB-004-12

(1)SB-005-1

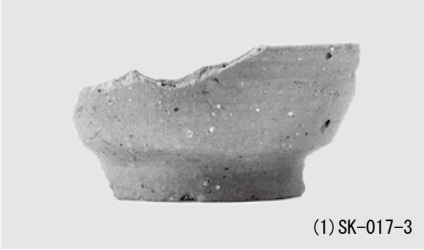

(1)SB-005-9

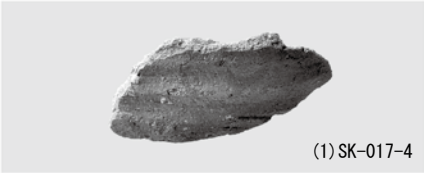

(1)SB-007-2


(1)SB-007-3

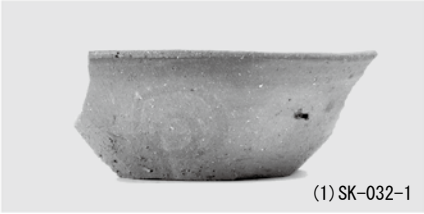

(1)SK-015-1

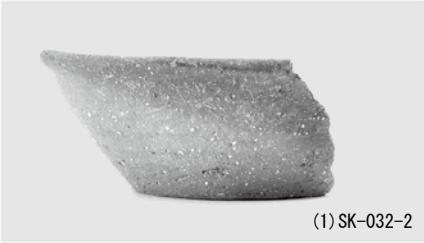
(1)SK-017-1


(1)SK-017-3


(1)SK-017-4

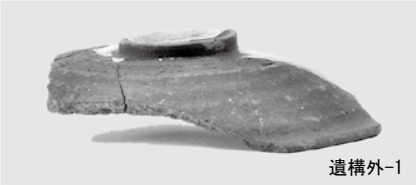
(1)SK-018-2


(1)SK-032-1

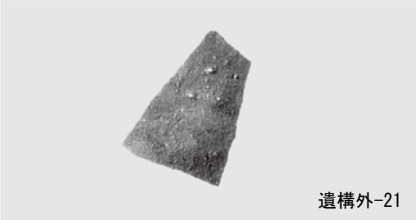

(1)SK-032-2

(1)SK-032-3

(1)SK-032-4


遺構外-1

遺構外-13


遺構外-21

遺構外-22

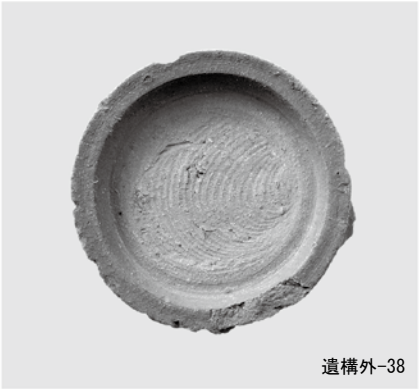
遺構外-23

遺構外-24

遺構外-26

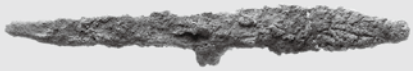
遺構外-28

遺構外-34


遺構外-38

遺構外-41

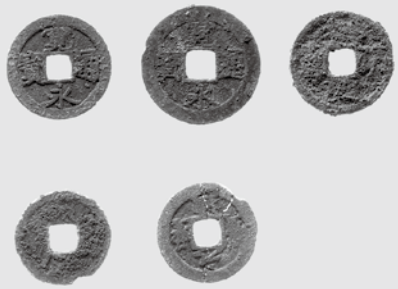
遺構外出土金属製品


遺構外-75

遺構外-76

土製品

銭貨



中・近世-2

中・近世-4

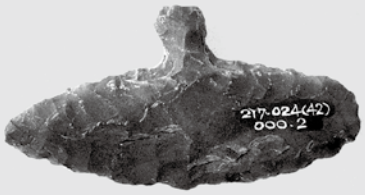
中・近世-7

中・近世-12

奈良・平安時代土器（２）、金属製品、土製品、中・近世遺物

駒形遺跡

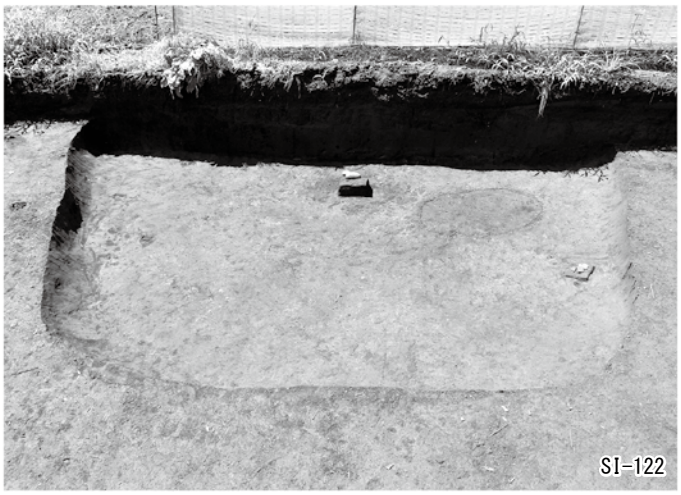
SK-173-3

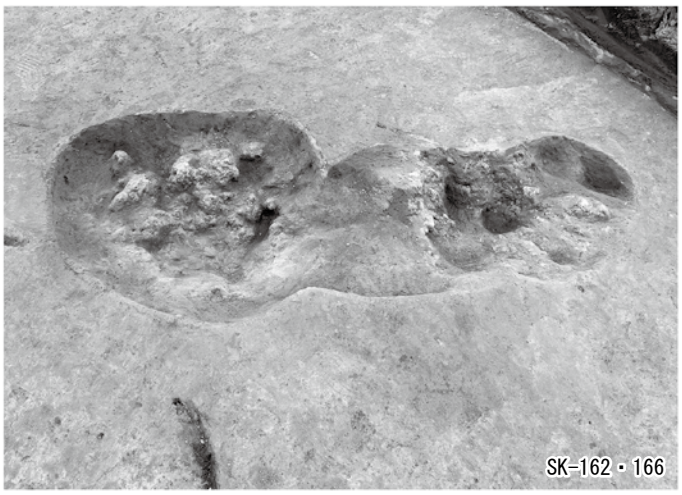


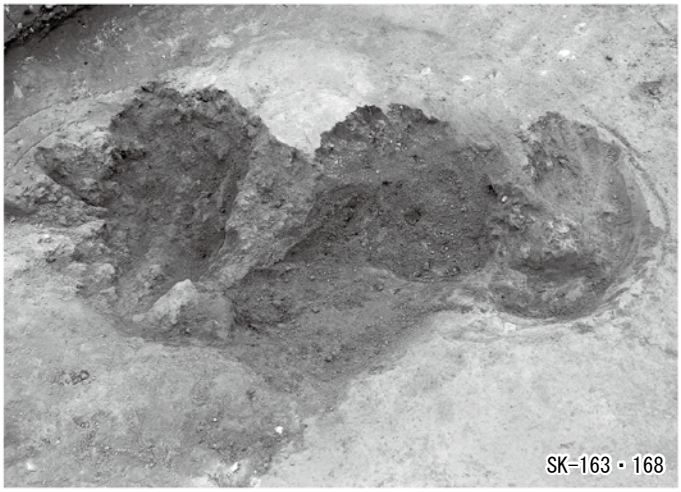
遺構外-19

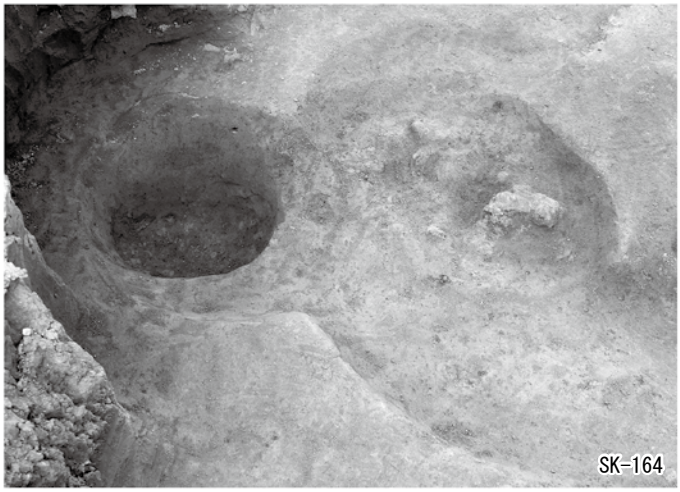
遺構外-20

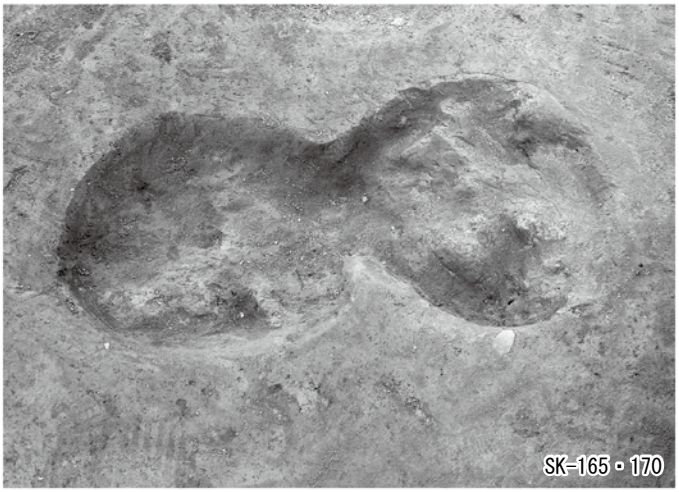
駒形遺跡　縄文時代石器



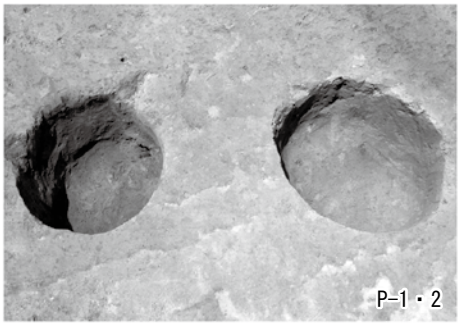


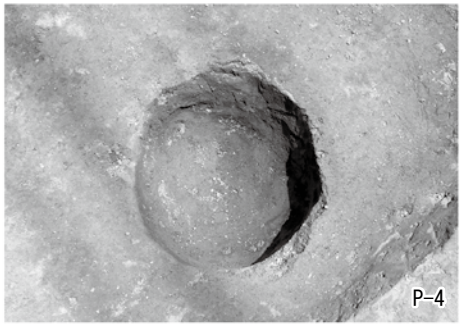


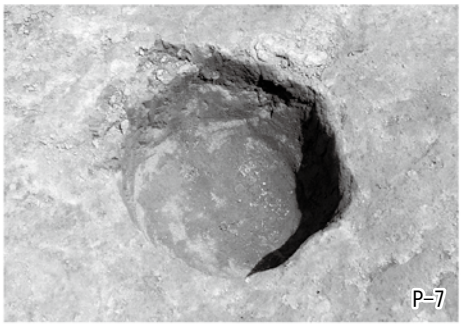


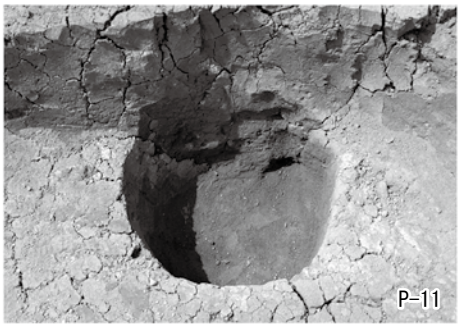


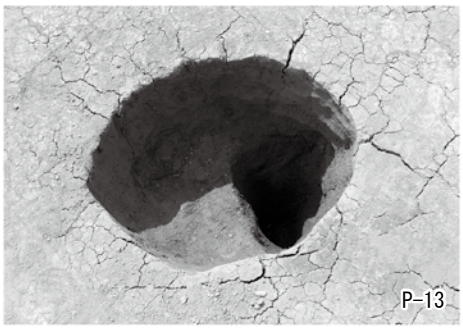
縄文時代竪穴住居、土坑（1）

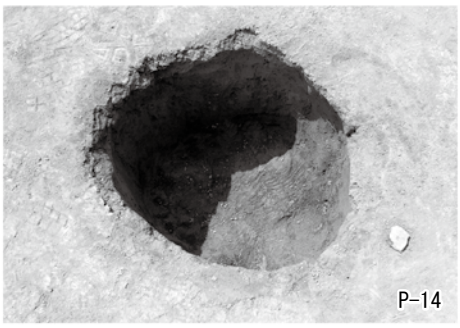




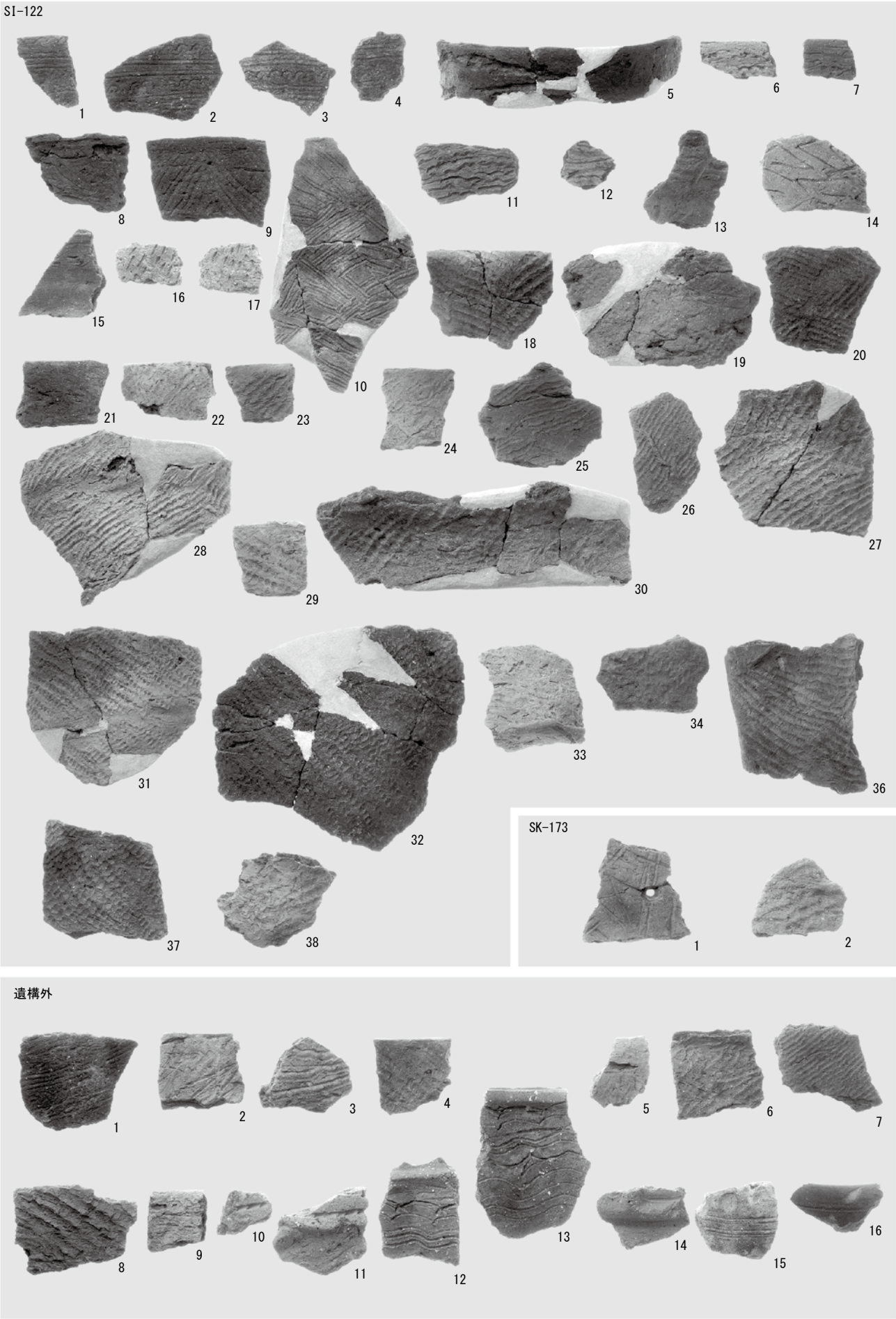




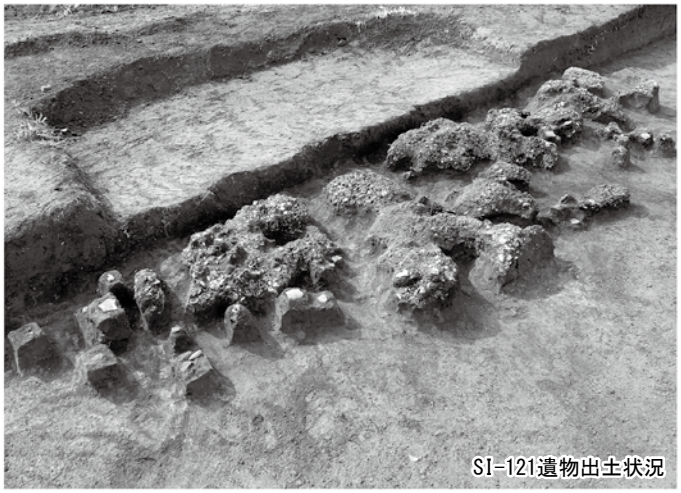


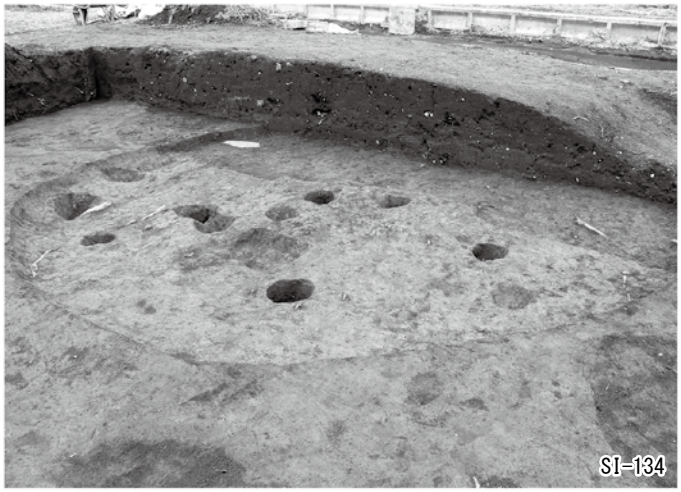


土坑（2）、ピット


SI-122
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
36
37
38
SK-173
1
2
遺構外
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16

縄文土器

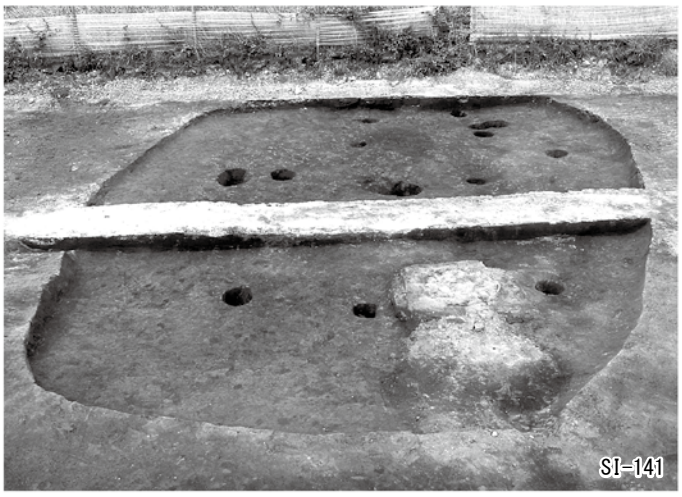




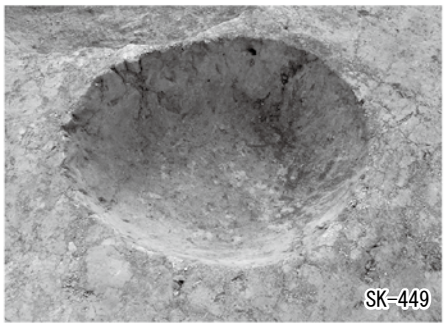
縄文時代竪穴住居（1）

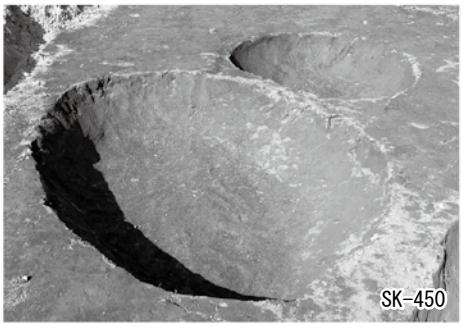
SI-140南半分

SI-140北半分

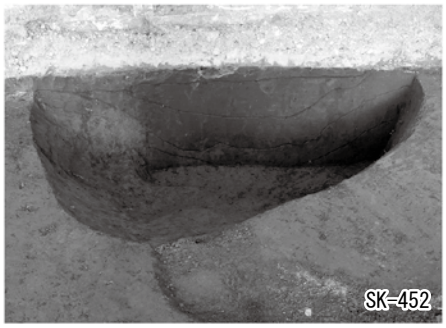

SI-141

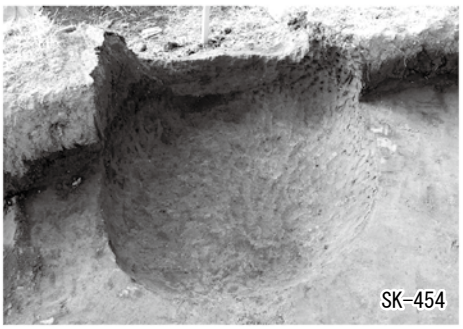
(57)遺構全景

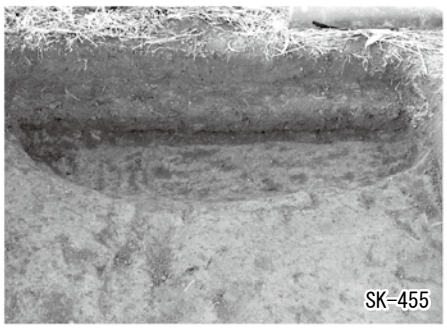

SK-449


SK-450

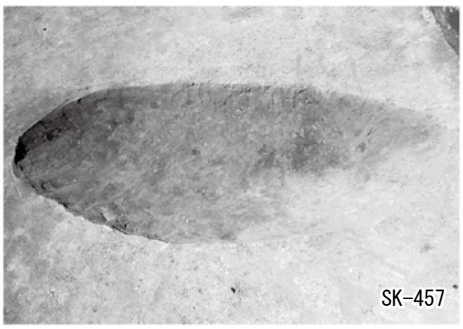
SK-451


SK-452


SK-454


SK-455

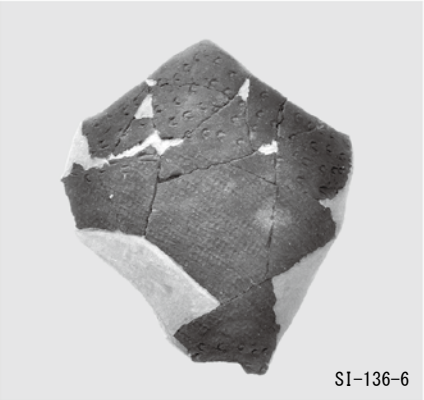
SK-456


SK-457

SD-001

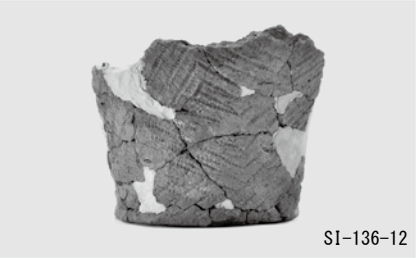
縄文時代竪穴住居（２）、土坑、道路状遺構

SI-136-1


SI-136-6

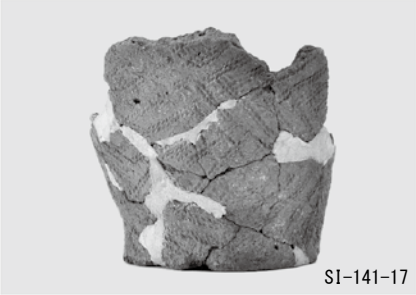
SI-138-7

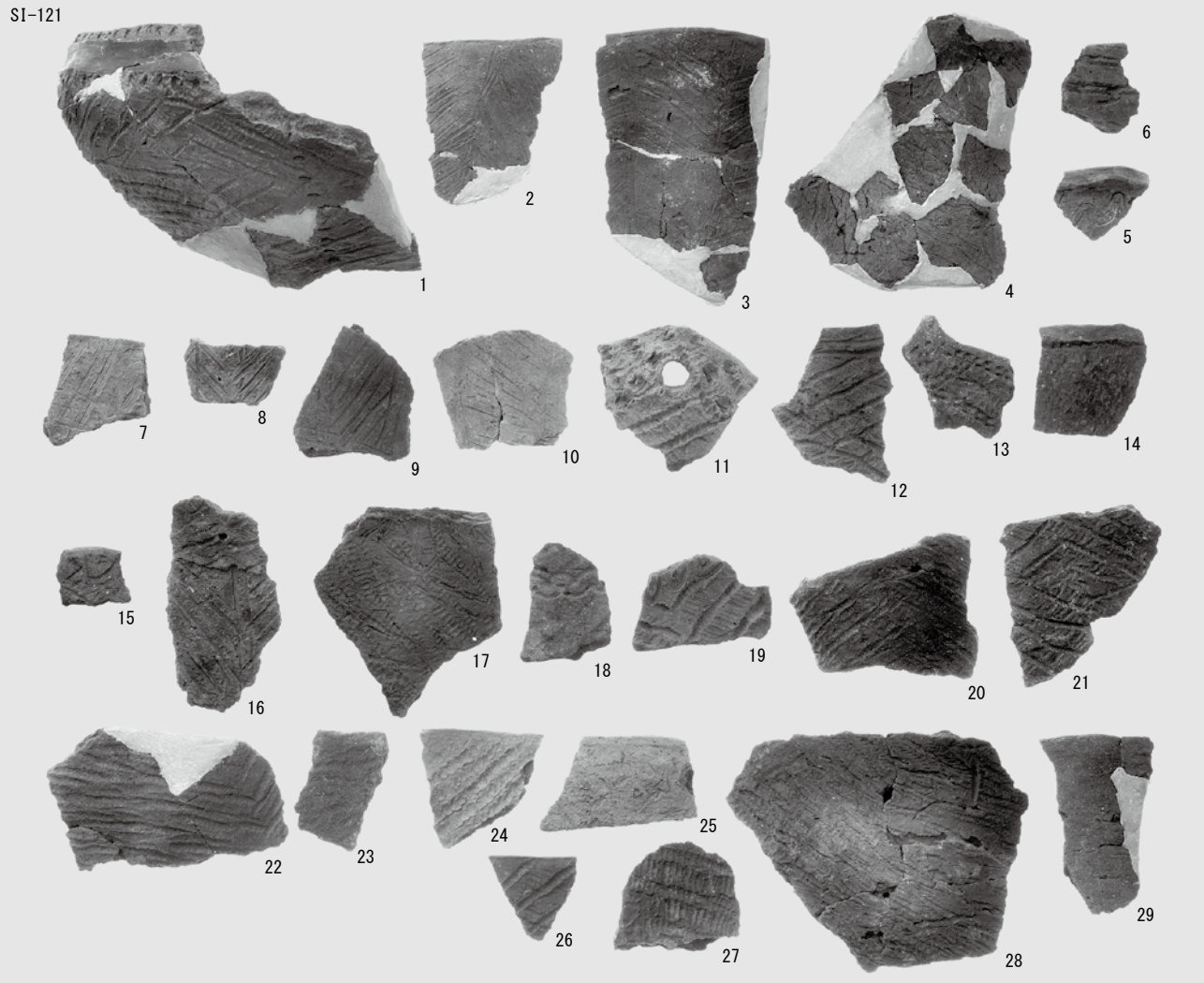
SI-141-10


SI-136-12

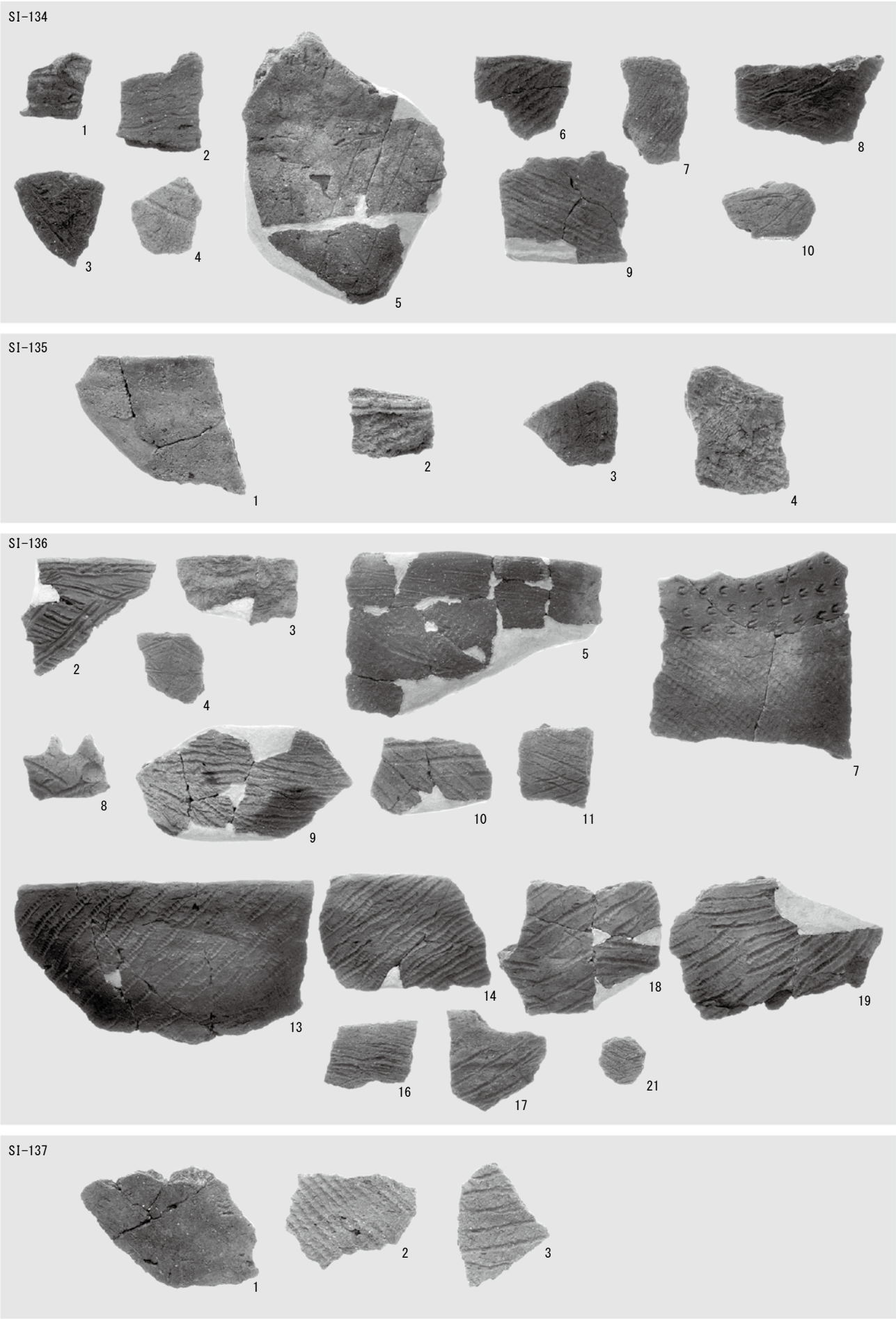
SI-139-1

SI-136-15

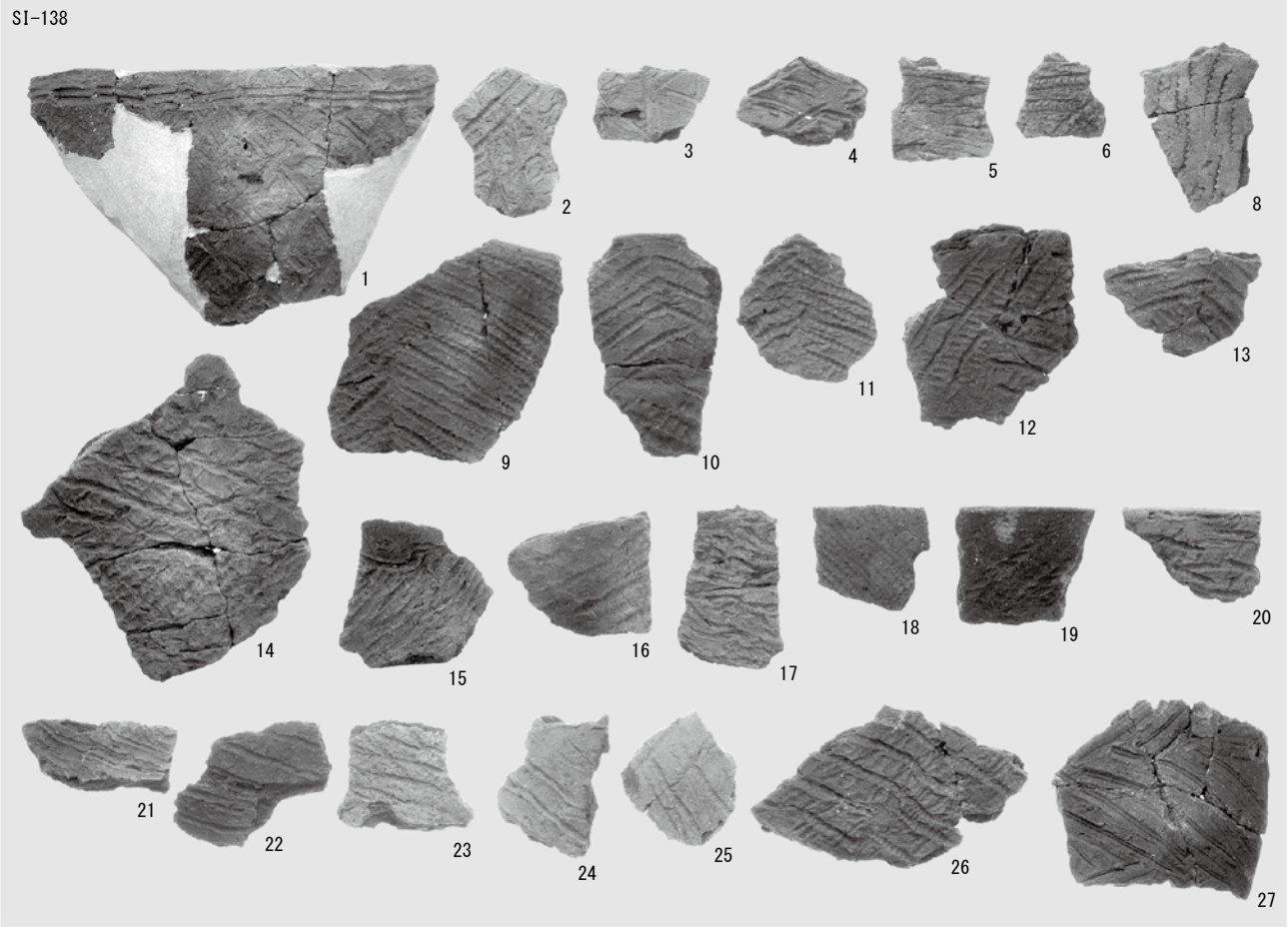

SI-141-17

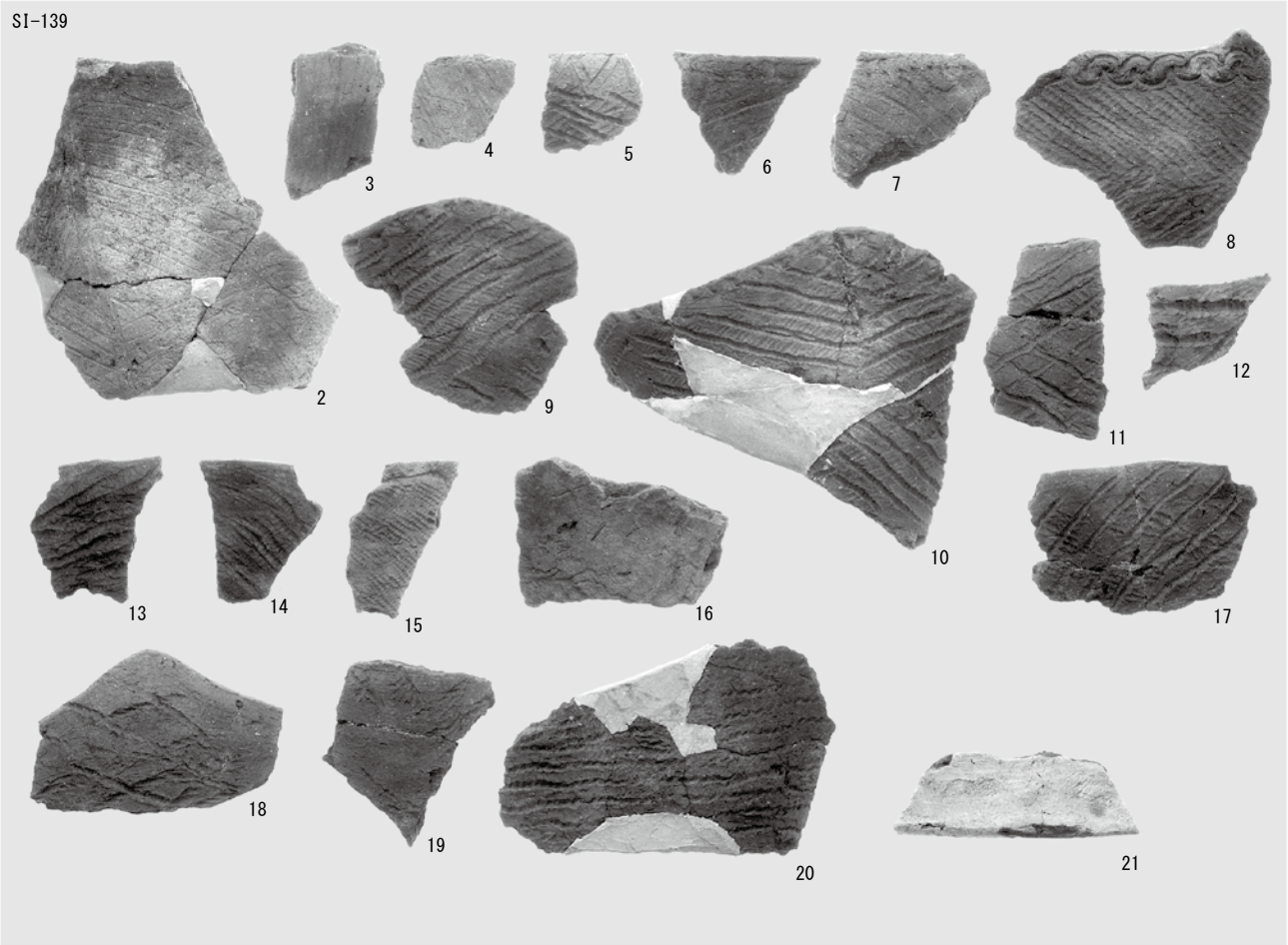

SI-121
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29

縄文土器（1）

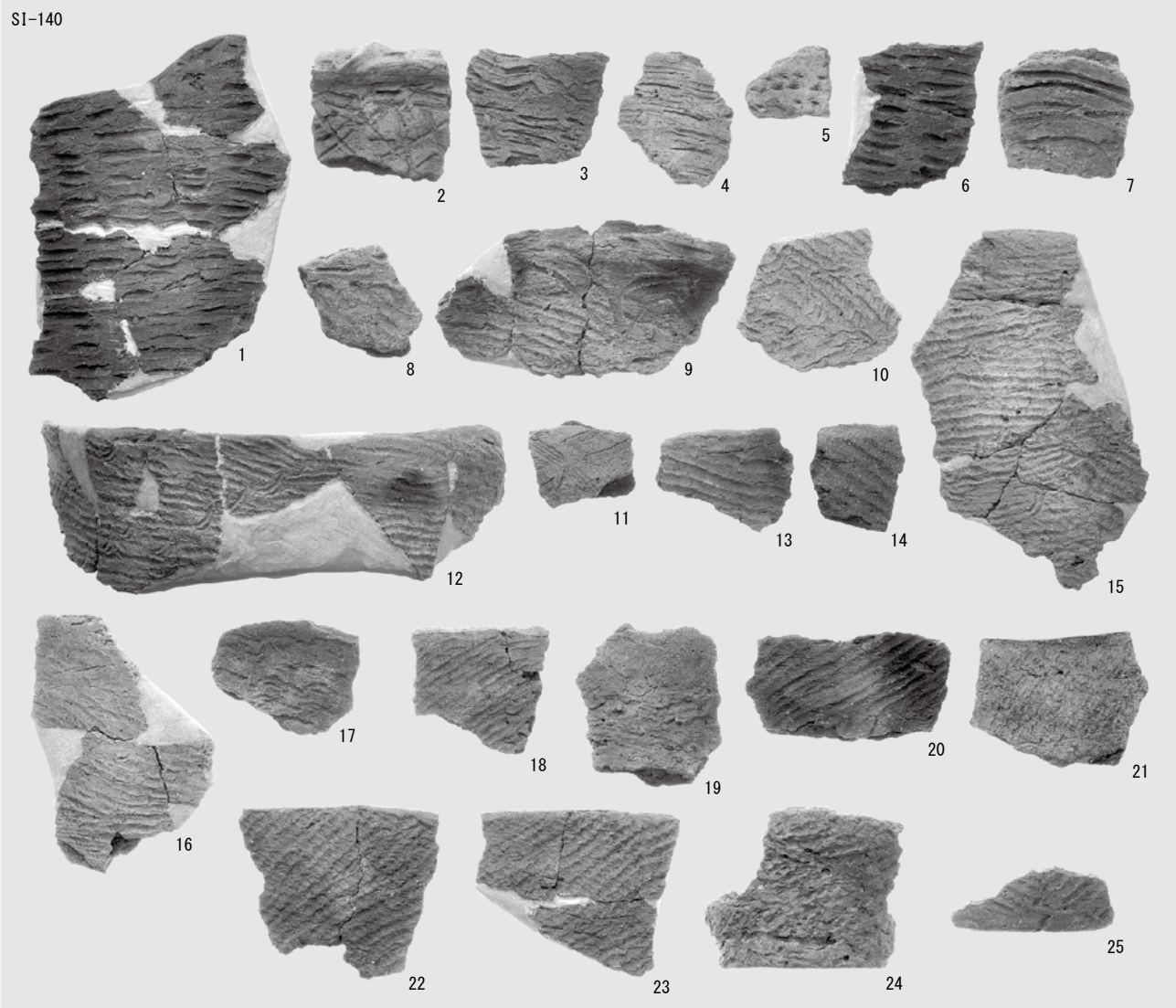

SI-134
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
SI-135
1
2
3
4
SI-136
2
3
4
5
7
8
9
10
11
13
14
16
17
18
19
21
SI-137
1
2
3

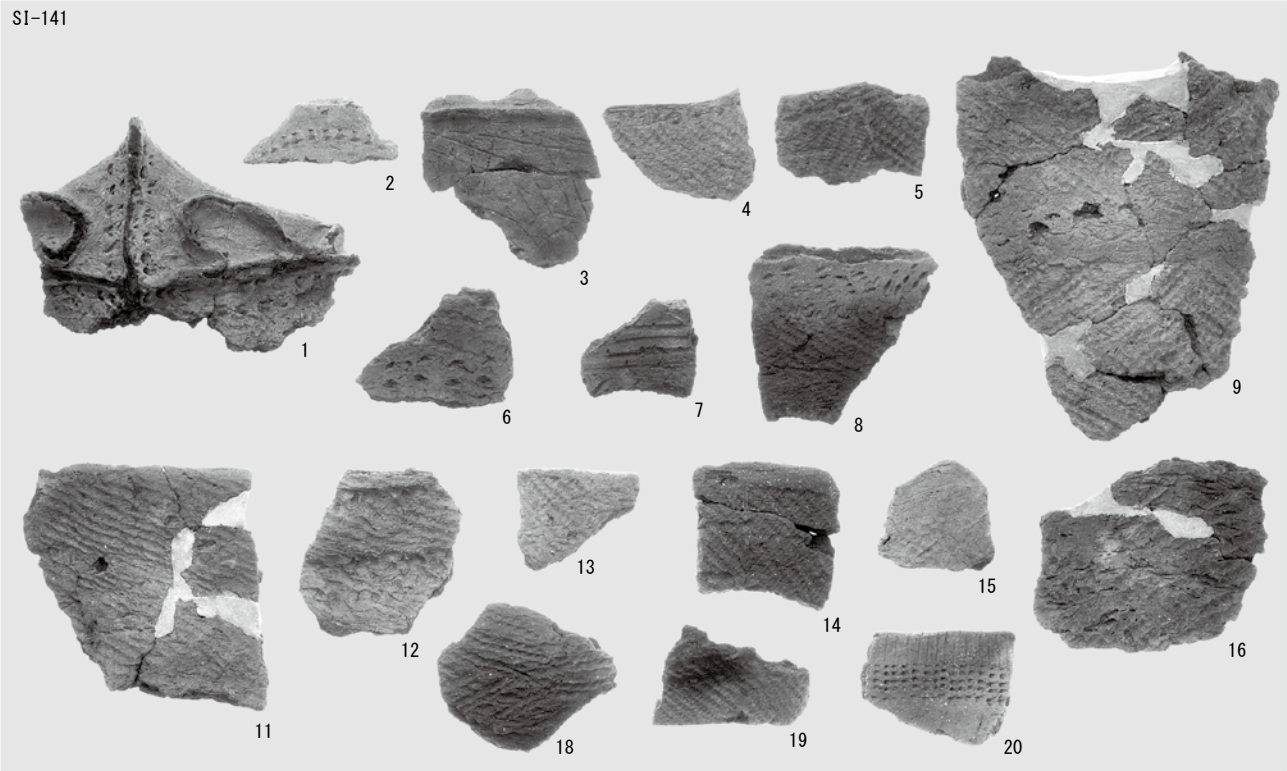
縄文土器（2）


SI-138
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27

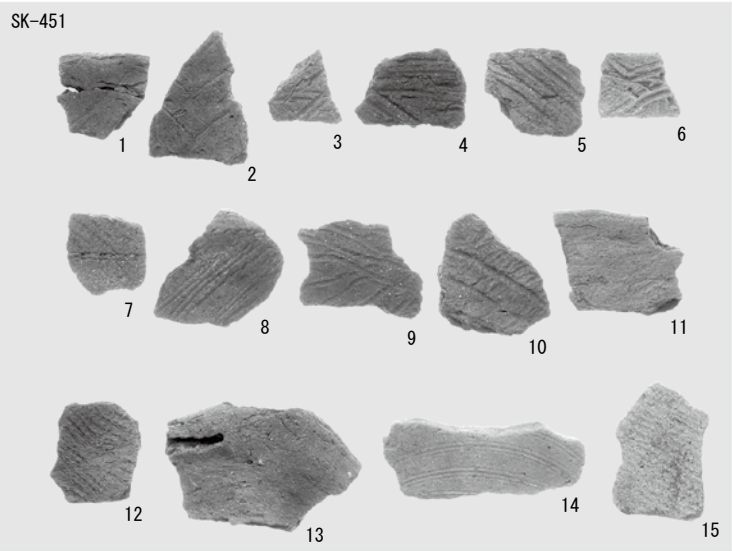

SI-139
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21

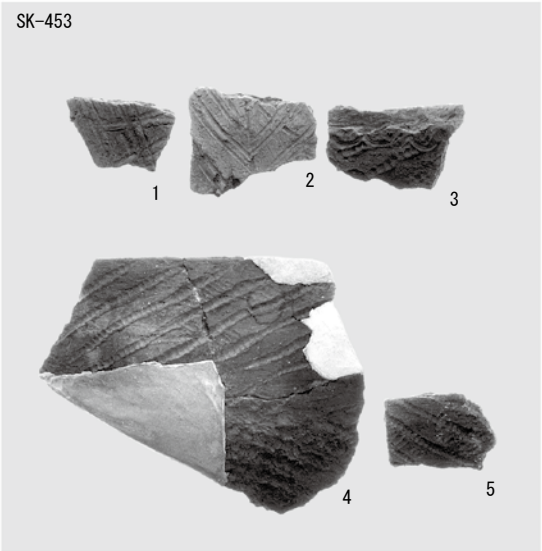
縄文土器（3）

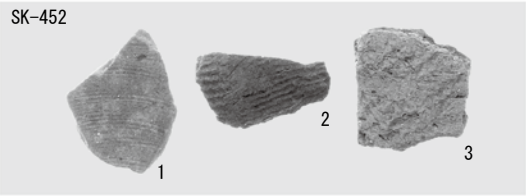

SI-140
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25

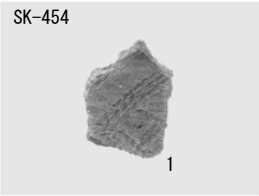

SI-141
1
2
3
4
5
6
7
8
9
11
12
13
14
15
16
18
19
20

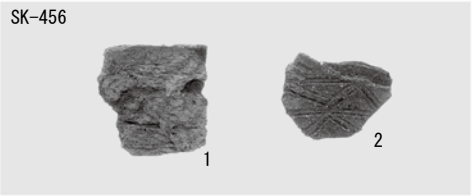
縄文土器（4）

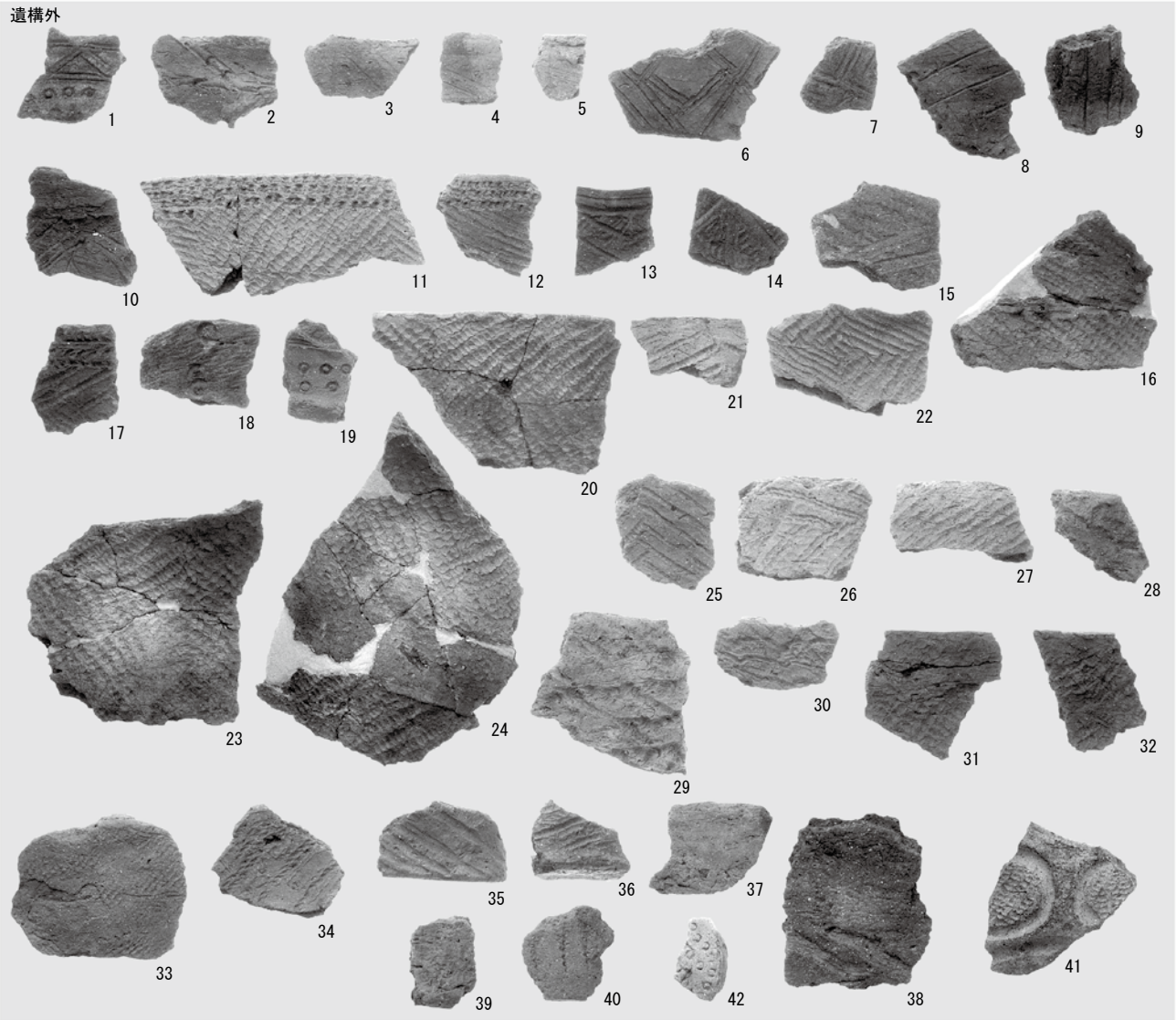

SK-451
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15


SK-453
1
2
3
4
5

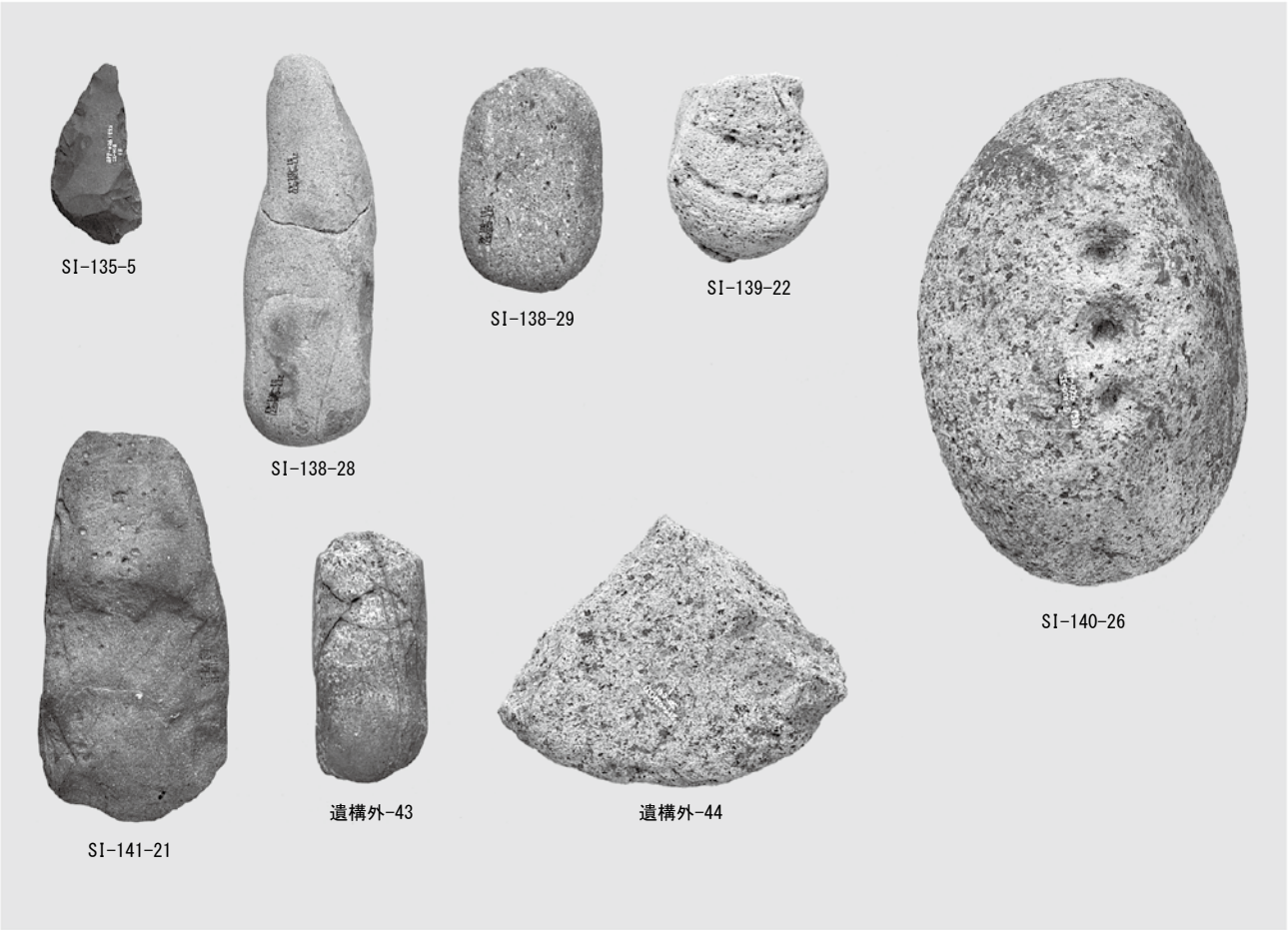

SK-452
1
2
3


SK-454
1


SK-456
1
2

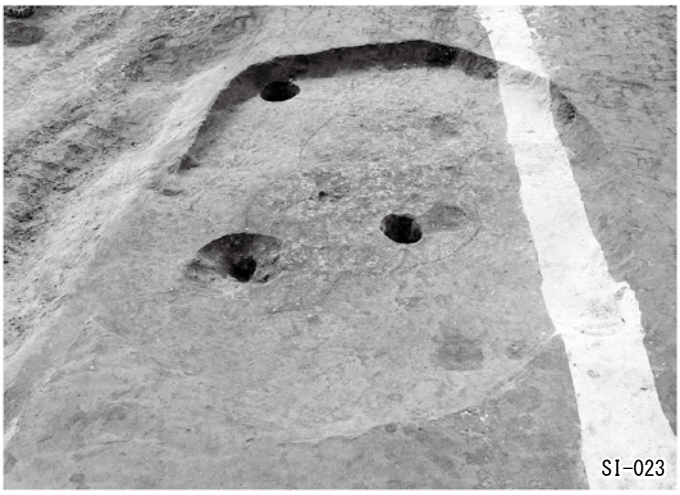

遺構外
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42

縄文土器（5）



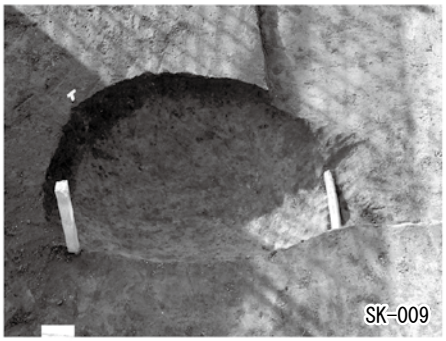
縄文時代石器、その他石器

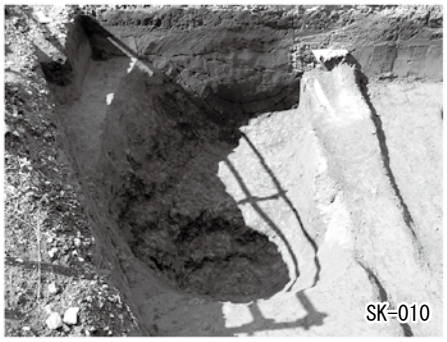
SI-022

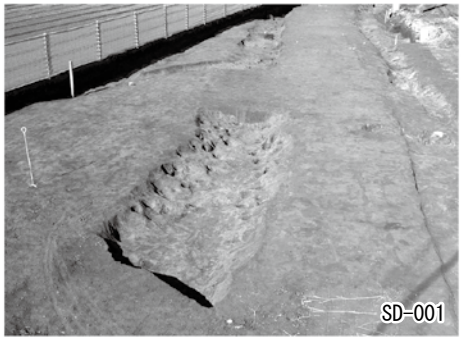

SI-023

SI-022貝検出状況

SI-022遺物出土状況

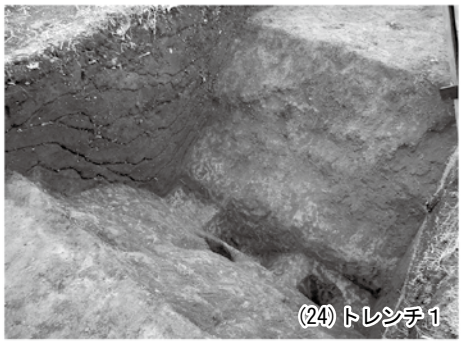

SK-009


SK-010

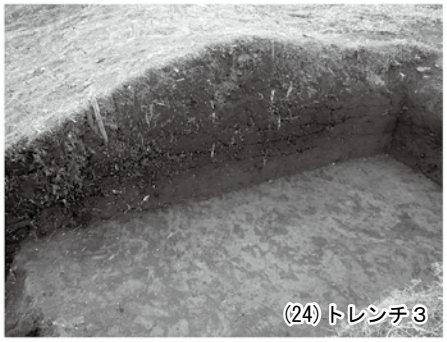

SD-001

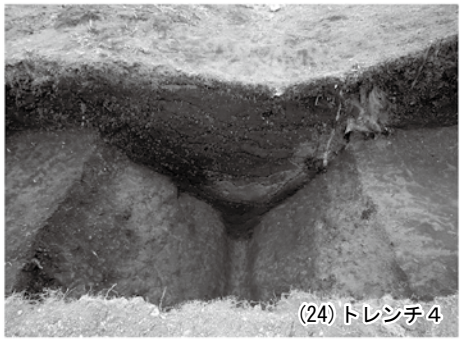
SD-002・003

(24)野馬土手


(24)トレンチ１

(24)トレンチ２


(24)トレンチ３

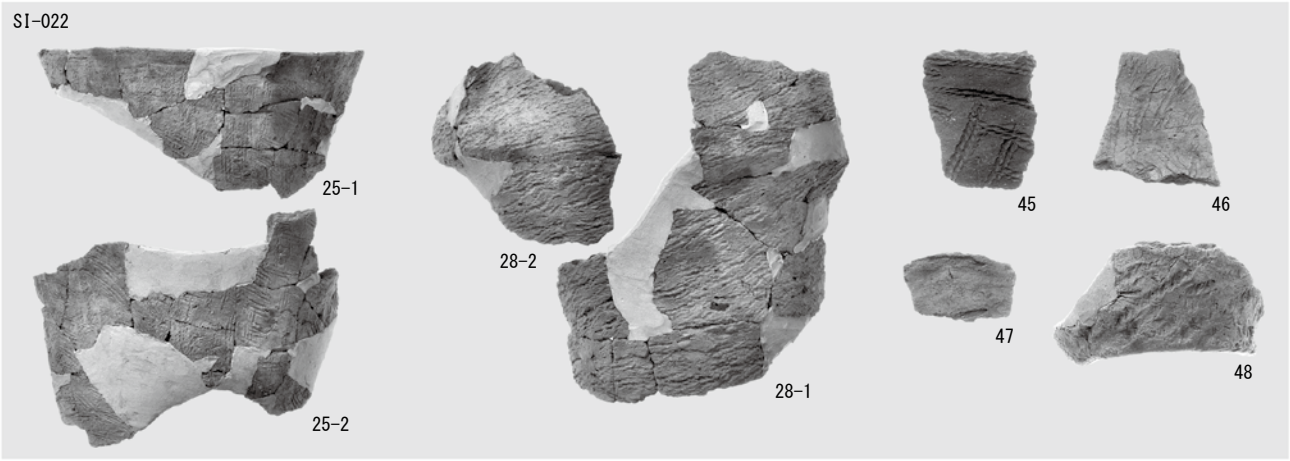

(24)トレンチ４

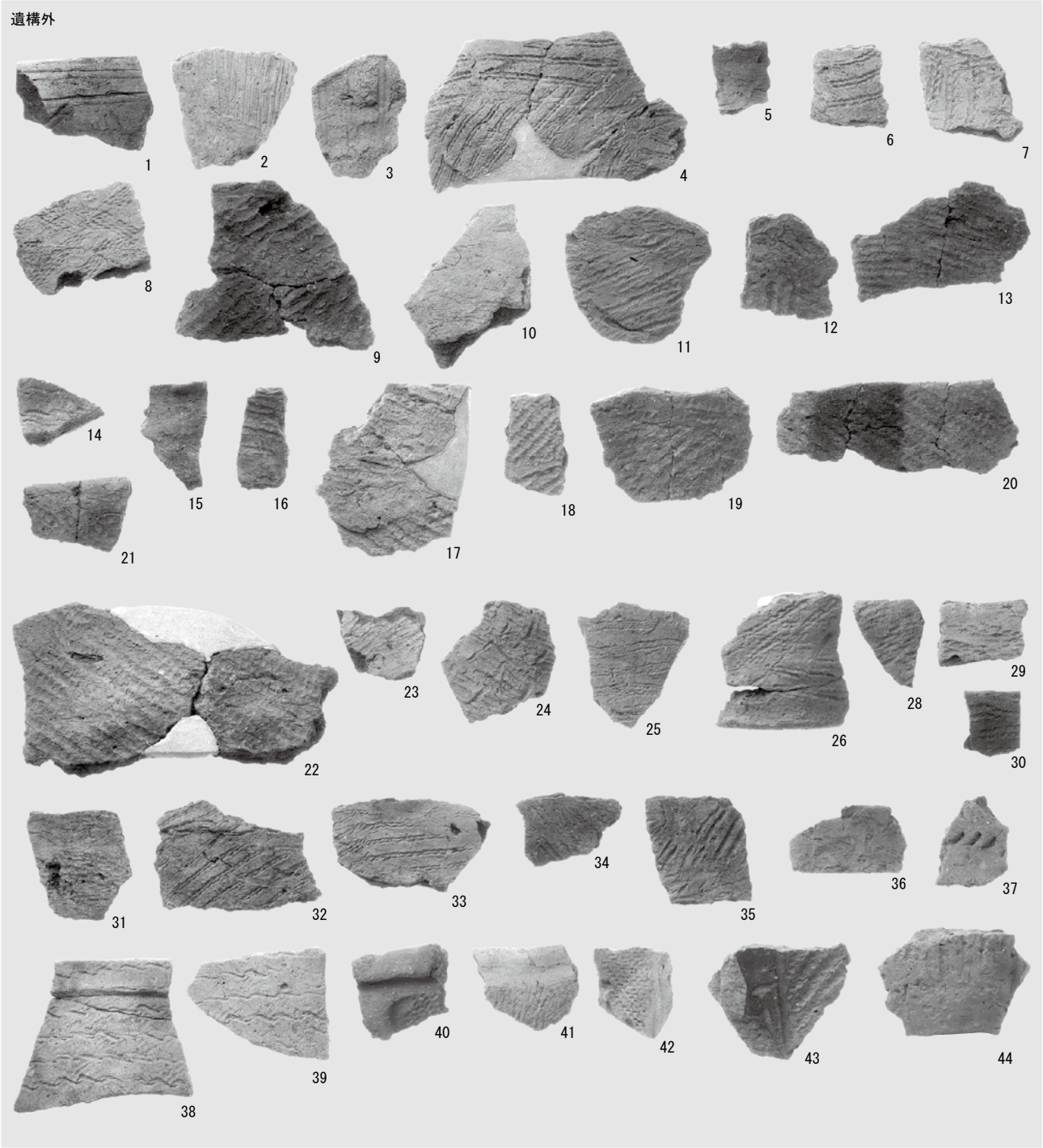
(24)全景

縄文時代竪穴住居、土坑、近世溝、野馬土手、トレンチ

SI-022
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
26
27
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

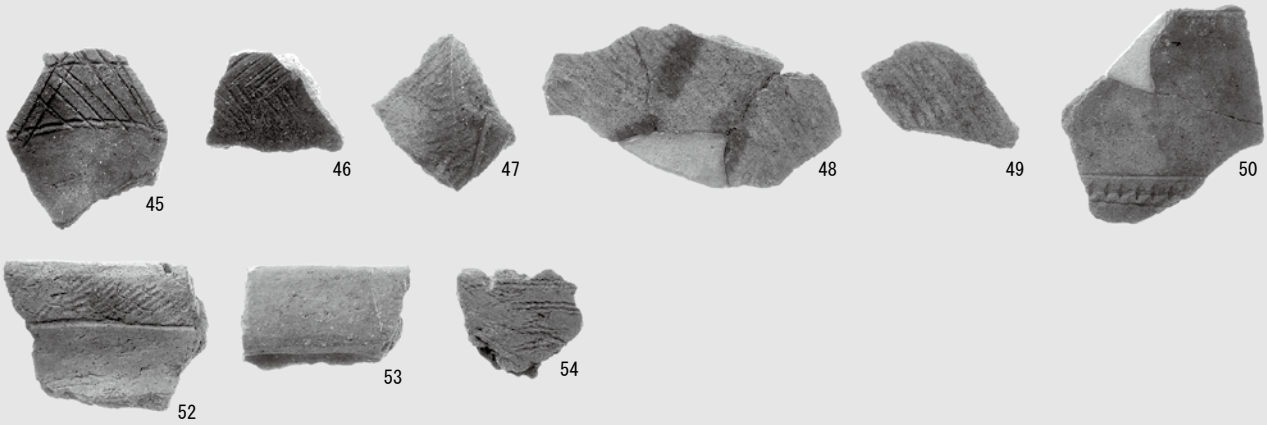
縄文土器（1）


SI-022
25-1
25-2
28-2
28-1
45
46
47
48


遺構外
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

縄文土器（2）

遺構外



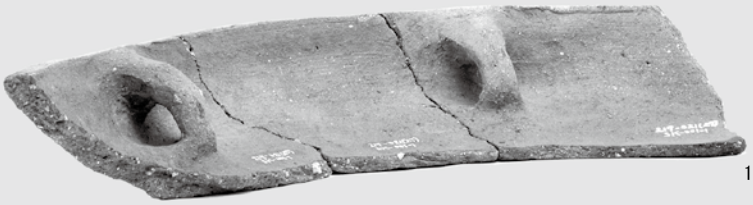
縄文時代石器

SI-022-57

遺構外-1

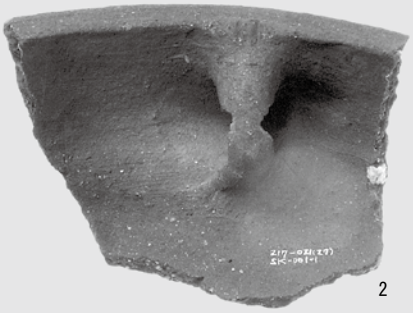
遺構外-2

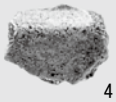
中・近世遺物

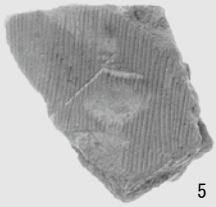

1

銭貨

3


2


4


5

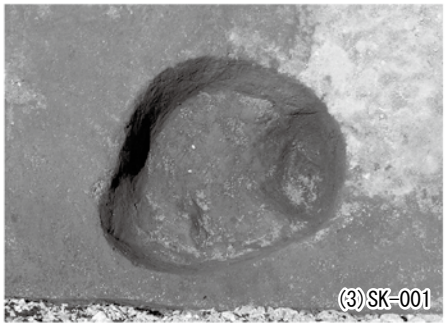
縄文土器（３）、石器、中・近世遺物

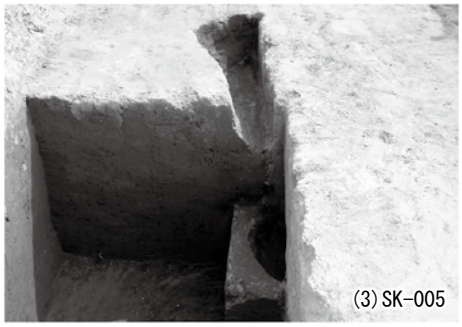
(3)SK-002

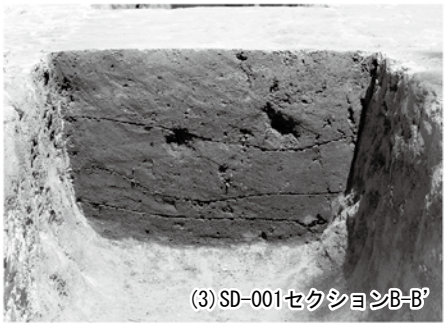
(3)SK-003

(3)SK-004

(3)SK-006


(3)SK-001


(3)SK-005


(3)SD-001セクションB-B'

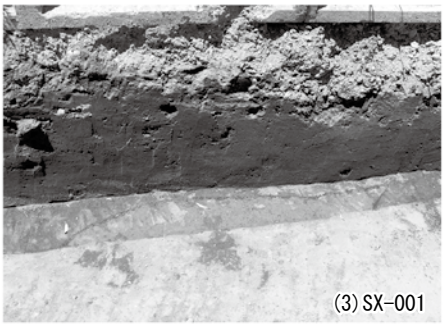
(3)SD-001セクションD-D'

(3)SD-001

(3)SD-001

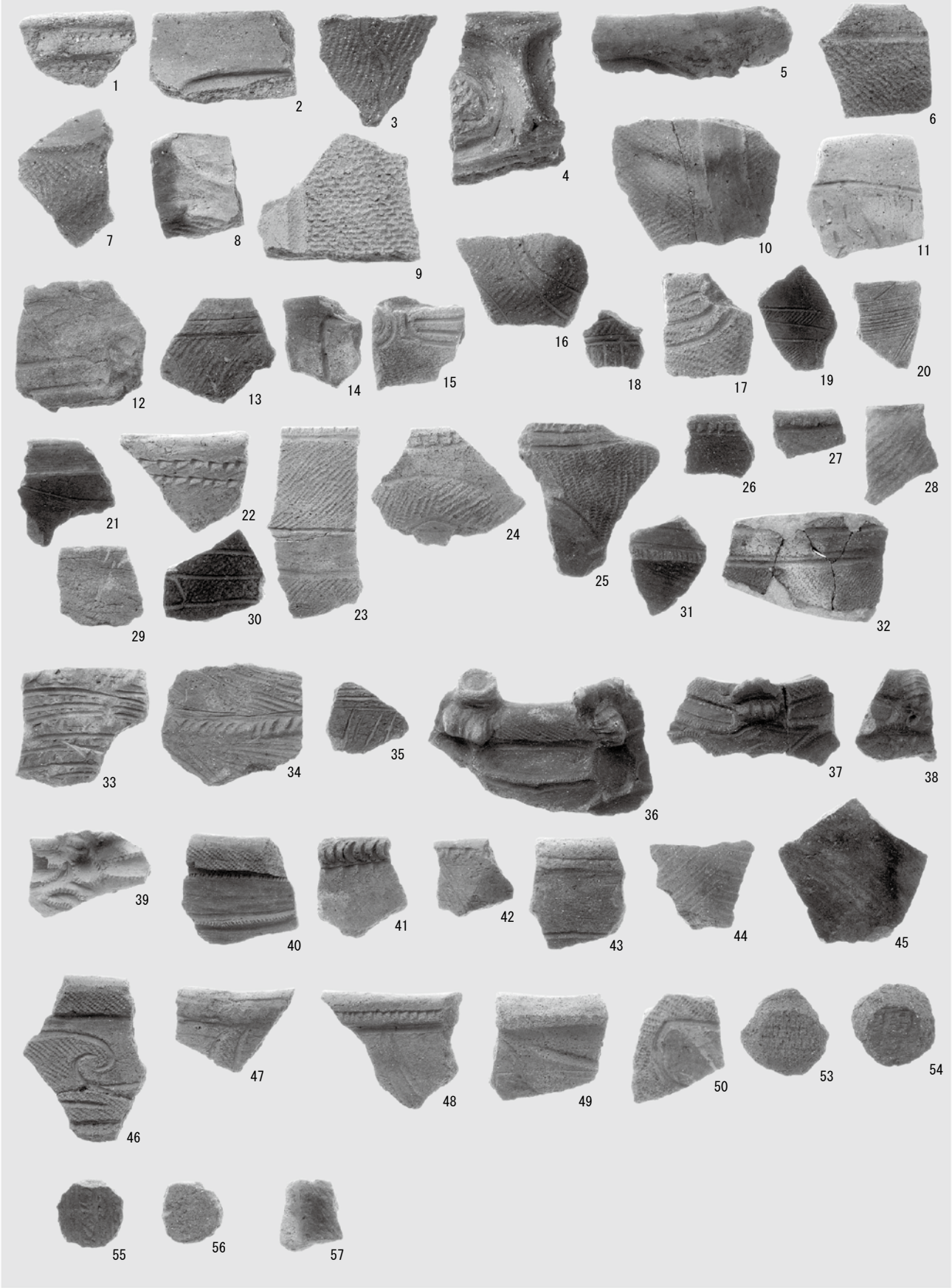
(3)SD-001遺物出土状況

(3)SX-001


(3)SX-001

土坑、環状遺構、台地整形

遺構外


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
53
54
55
56
57

出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	かしわほくぶひがしちくまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	柏市花前Ⅰ遺跡・駒形遺跡・富士見遺跡・原畑遺跡・寺下前遺跡　縄文時代以降編
巻次	14
シリーズ名	公益財団法人千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第774集
編著者名	平井真紀子・糸川道行
編集機関	公益財団法人　千葉県教育振興財団
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の２　TEL043-424-4848
発行年月日	西暦2018年11月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		経緯度 （世界測地系）		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
はなまえいちいせき 花前Ⅰ遺跡 （1）～（3）	かしわしふなどあざはなまえ 柏市船戸字花前 1219-1ほか	12217	040	35° 55′ 08″	139° 57′ 03″	20120405 ～ 20160119	4,373	柏北部東地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査
こまがたいせき 駒形遺跡 (41)～(42)	かしわしこあおたあざやま 柏市小青田字ヤゴ山 441ほか	12217	024	35° 54′ 39″	139° 57′ 28″	20140507 ～ 20160826	608	
ふじみいせき 富士見遺跡 (51)～(59)	かしわしこあおたあざたてやま 柏市小青田字立山 210-2ほか	12217	026	35° 54′ 50″	139° 57′ 08″	20110413 ～ 20160204	4,587	
はらはたいせき 原畑遺跡 (24)～(29)	かしわしおおむろ 柏市大室265-1ほか	12217	021	35° 54′ 21″	139° 57′ 29″	20120918 ～ 20160909	5,096	
てらしたまえいせき 寺下前遺跡 （3）	かしわし 柏市大室字前畑450-2 ほか	12217	022	35° 54′ 29″	139° 57′ 44″	20150626 ～ 20150820	427	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
花前Ⅰ遺跡 （1）～（3）	集落跡 包蔵地	縄文時代 古墳時代 奈良・平安時代 近世	竪穴住居７軒 掘立柱建物　７棟 土坑　36基 ピット　23基 溝状遺構　１条 鍛冶工房　１軒 土坑　１基 鍛冶炉　７基 柵列　１条 ピット　29基 道路状遺構　１条	縄文土器、土製品（土器片錘・土器片円板）、石器（石鏃・石鏃未成品・楔形石器・石匙・磨製石斧・磨石類・敲石・石皿・軽石・側面調整礫・台石・剥片） 埴輪片 土師器、須恵器、土製品（土錘）、石器（砥石）、鉄製品（刀子）、鍛冶関連遺物（鉄滓・炉壁・羽口） かわらけ、内耳鍋、徳利、鍛冶関連遺物（鉄滓）	調査対象範囲の南西側から、縄文時代前期の竪穴住居と、奈良・平安時代の掘立柱建物を検出した。 調査区北側からは近世の鍛冶工房が検出された。

駒形遺跡 (41)～(42)	集落跡 包蔵地	縄文時代	竪穴住居　　1軒 炉　　8基 土坑　　4基 ピット　　14基	縄文土器、土製品(土器片錘)、石器(石鏃未成品・石匙・打製石斧)	これまでの調査と同様縄文時代前期の遺構を確認した。
富士見遺跡 (51)～(59)	集落跡 包蔵地	旧石器時代 縄文時代	竪穴住居　　9軒 土坑　　9基 道路状遺構　　1条	ナイフ形石器 縄文土器、土製品(玦状耳飾り・土器片円板)、石器(削器・磨製石斧・磨石類・石皿・台石・軽石製品・側面調整礫)	隣接する駒形遺跡から続く縄文時代前期の集落を確認した。
原畑遺跡 (24)～(29)	集落跡 包蔵地	縄文時代 古墳時代 近世	竪穴住居　　2軒 土坑　　2基 溝状遺構　　4条 道路状遺構　　1条 野馬土手　　2条 野馬堀　　3条	縄文土器、土製品(土器片錘)、石器(有舌尖頭器・石鏃・凹石) 土師器、埴輪片 内耳鍋、銭貨	遺跡南東の竪穴住居から新潟県阿賀町小瀬が沢洞窟を標識とする小瀬ヶ沢型の有舌尖頭器が出土した。 また、遺跡中央からは近世の野馬土手と野馬堀が検出された。
寺下前遺跡 (3)	集落跡 包蔵地	縄文時代 中・近世	地下式坑　　3基 土坑　　3基 溝状遺構　　1条 台地整形　　1か所	縄文土器、土製品(土器片錘・土器片円板) 擂鉢	隣接する小山台遺跡と関連する台地整形及び地下式坑などを検出した。

要　約	柏北部東地区遺跡群は古常陸川南岸の柏・我孫子低地と手賀沼水系の地金堀に挟まれた標高16ｍ～18ｍの台地に立地する。一部の遺跡については西側に接する常磐自動車道建設に先立ち調査を行っている。 花前Ⅰ遺跡は常磐自動車道関連調査部分の東に隣接する部分で、縄文時代前期の竪穴住居、奈良・平安時代の掘立柱建物、近世の鍛冶遺構などを検出した。黒浜式期の竪穴住居は貝ブロックを伴っており、サルボオ、ハマグリを主体とした貝類を出土している。掘立柱建物の周囲からは土師器・須恵器の他、鉄滓、炉壁などの製鉄関連遺物も出土している。 駒形遺跡で確認された遺構は縄文時代前期の竪穴住居1軒のほか、炉、土坑などである。 富士見遺跡では東側の駒形遺跡と隣接する部分から縄文時代前期の集落及び遺構内貝層が検出された。 原畑遺跡では縄文時代前期の竪穴住居1軒、遺跡中央から高田台牧関連の野馬土手・野馬堀、遺跡東端で小山台遺跡から続く近世の道路状遺構を検出した。 寺下前遺跡では現況の道路下部分から中世の地下式坑、台地整形、近世の溝状遺構などを検出した。

千葉県教育振興財団調査報告第 774 集

柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書 14

－柏市花前Ⅰ遺跡・駒形遺跡・富士見遺跡
原畑遺跡・寺下前遺跡－

縄文時代以降編

平成 30 年 11 月 15 日発行

編　　集　　公益財団法人　千 葉 県 教 育 振 興 財 団

発　　行　　独立行政法人　都　市　再　生　機　構
首都圏ニュータウン本部
東京都新宿区西新宿 6－ 5－ 1

公益財団法人　千 葉 県 教 育 振 興 財 団
四街道市鹿渡 809 番地の 2

印　　刷　　株 式 会 社　エリート情報社[印刷出版局]
成田市東和田 415 － 10